

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XXV

中部北遺跡

桜林遺跡Ⅱ

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 XXV

ちゅう ぶ きた
中 部 北 遺 跡

さくら ばやし
桜 林 遺 跡 II

2008

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

日本海沿岸東北自動車道は、新潟市の新潟空港インターチェンジから日本海に沿って北上し、山形県を経て秋田自動車道と接続し、青森県に至る高規格幹線道路です。新潟県内では、胎内市の中条インターチェンジまでが平成14年度に完成しています。

高速自動車道建設を取り巻く状況は厳しいものがありますが、平成15年末の国土開発幹線自動車道建設会議（国幹会議）において、日本海沿岸東北自動車道の中条－朝日間は、旧日本道路公団が有料道路として建設を進めることになりました。その後、公団の分割・民営化に伴い、平成17年10月に設立された東日本高速道路株式会社に引き継がれましたが、平成18年2月の国幹会議において、荒川－朝日間については国土交通省が新直轄道路として建設することになりました。日本海沿岸東北自動車道は、この地域内外の経済的な交通・流通を促すだけでなく、救急患者の搬送・災害時の緊急輸送などの「命の高速道」としての役割も期待されており、早期の開通が望まれています。

本書は、この日本海沿岸東北自動車道建設に先立って発掘調査を実施した「中部北遺跡」および「桜林遺跡」の報告書です。中部北遺跡は、縄文時代中期から後期の遺跡です。縄文土器や石器・石錘などが出土しましたが、定住的な痕跡は少なく、狩りや漁などの短期的な活動の場として注目されます。一方の桜林遺跡は、室町時代を中心とする遺跡です。井戸や掘立柱建物などの遺構や、曲物・臼・漆器といった木製品が見つかり、当時の集落の様子を伝える貴重な資料として期待されます。

今回の発掘調査が、考古学研究者はもとより、地域の歴史を知り、学ぼうとする多くの方々に活用されることを願っております。

最後に、この調査に参加された地元の方々や区長並びに神林村教育委員会、荒川町教育委員会には多大なる御協力と御援助をいただきました。また、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所、東日本高速道路株式会社新潟管理局村上工事事務所、荒川沿岸土地改良区には、調査に際して格別のご配慮をいただきました。ここに厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例　　言

- 1 本書は、新潟県岩船郡神林村大字牛屋字中部 1048 ほかに所在する中部北遺跡、同 荒川町大字金屋字桜林 1372 ほかに所在する桜林遺跡の発掘調査記録である。
- 2 発掘調査は日本海沿岸東北自動車道の建設に伴い、新潟県教育委員会（以下、県教委とする）が国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から受託したものである。
- 3 発掘調査は県教委が調査主体となり、財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団とする）に調査を依頼した。埋文事業団は発掘調査作業および開拓工事を株式会社吉田建設（以下、吉田建設とする）に委託し、埋文事業団の管理・監督のもと平成 18 年 4 月 3 日～8 月 24 日（中部北遺跡）、平成 18 年 8 月 25 日～11 月 16 日（桜林遺跡）にかけて吉田建設が発掘調査を実施した。発掘調査面積は中部北遺跡が 3,620 m²、桜林遺跡が 3,263 m²である。
- 4 整理および報告書作成に係る作業は埋文事業団の指導のもと、平成 18 年 6 月～平成 19 年 3 月の間に吉田建設が行った。
- 5 出土遺物および記録類は、県教委が新潟県埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。遺物の注記番号は、遺跡名の前に調査年度を付し、「06 中ブ」（中部北遺跡）、「06 サクラ」（桜林遺跡）とした。また、出土地点および層位などを併記した。
- 6 引用文献は、著者および発行年（西暦）を中心に〔 〕で示し、巻末に掲載した。
- 7 本書に掲載した遺物番号は、すべて遺跡毎に通し番号とし、本文・図面・写真・観察表の番号は一致している。
- 8 本書の方針はすべて真北である。ただし、ここでいう「真北」とは日本平面国家座標の X 軸方向を示す。
- 9 自然科学分析（第Ⅲ章 4・第Ⅳ章 4）は、パリノ・サーヴェイ株式会社に分析・原稿を依頼した。
- 10 航空写真撮影は、J・T 空撮に委託した。
- 11 中部北遺跡で出土した石器については、実測の一部を株式会社みくに考古学研究所に委託した。また、石器のデジタルトレースは、すべて有限会社アルケーリサーチに委託した。
- 12 道構・遺物の各種図版作成に関しては以下のとおりである。道構図は C A D ・ Adobe 社 Illustrator で作成・EPS 化し、遺物写真是デジタルカメラ（キヤノン EOSKissDigitalN・ニコン D100）で撮影したデータを用いた。道構写真是、モノクローム新潟がデジタル化したものを使用した。
- 13 平成 17 年度以前に刊行した報告書には、法定路線名の日本海沿岸東北自動車道（略称、日沿道）と東日本高速道路株式会社の官営路線名である日本海東北自動車道（略称、日東道）が事業者の意向により使用され、結果として両路線名称が一冊の報告書に混在していた。しかし、平成 17 年度末に高速自動車国道法第 6 条により荒川インターチェンジの北側については新直轄方式を導入し国土交通省の建設区間となったことから、この区間の路線名称は日本海沿岸東北自動車道（略称、日沿道）に統一することとした。
- 14 本書の執筆は、石川智紀（埋文事業団調査課日沿道担当班長）、確 実・松井 智・山本友紀（以上、吉田建設調査員）、パリノ・サーヴェイ株式会社がこれにあたり、編集は石川の指導のもと誰が行った。執筆分担は以下のとおりである。
第Ⅰ章 1～石川智紀 第Ⅱ章 2 第Ⅲ章 1・2A・2B①・5・3B・5C、第Ⅳ章 1・2A・2B・2C①～7・3・5・確 実
第Ⅲ章 2B①～4・3A②・5B、第Ⅳ章 2C①～5・松井 智 第Ⅲ章 2B①・3A①・5A、第Ⅳ章 2C①～3・3B②・山本友紀
第Ⅲ章 4・第Ⅳ章 4 は千葉博俊の管理のもと、伊藤良水・金井慎司・齊藤崇人・高橋 敏・松元美由紀・馬場健司（以上、パリノ・サーヴェイ株式会社）が分担して執筆した。
- 15 下記の方々・機関から多くのご教示とご協力を頂いた。記してここに厚く御礼を申し上げる。（五十音順、敬称略）
青木 学 金子 拓男 作田 一耕 宗谷富貴子 関 雅之 田代 郁夫 田中 繁作 田辺 早苗
長澤 昇生 高濱 信行 中島 栄一 野田 豊文 浜野 浩美 前川 雅夫 水落 雅明 水澤 幸一
山田 昌久 湯原 勝美 吉井 雅勇

目 次

第Ⅰ章 序 説

| | |
|------------------|---|
| 1 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 調査の方法と経過 | 2 |
| A 中部北遺跡 | 2 |
| 1) 試掘確認調査 | 2 |
| 2) 本調査 | 2 |
| B 桜林遺跡 | 4 |
| 1) 試掘確認調査 | 4 |
| 2) 本調査 | 5 |
| C 調査・整理体制 | 7 |

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

| | |
|---------------|----|
| 1 地理的環境 | 8 |
| 2 歴史的環境 | 10 |

第Ⅲ章 中部北遺跡

| | |
|--------------------------|----|
| 1 調査の概要 | 13 |
| A グリッドの設定 | 13 |
| B 基本層序 | 13 |
| 2 遺構 | 15 |
| A 遺構の概要と記述の方法 | 15 |
| B 各説 | 16 |
| 1) 土 塚 | 16 |
| 2) 黒化物集中 | 17 |
| 3) ピット | 17 |
| 4) 穴 | 17 |
| 5) 自然流路 | 17 |
| 3 遺物 | 18 |
| A 繩文時代の遺物 | 18 |
| 1) 土 器 | 18 |
| 2) 石 器・石製品 | 23 |
| B 古代の遺物 | 28 |
| 4 自然科学分析 | 29 |
| A はじめに | 29 |
| B 試料 | 29 |
| C 分析方法 | 29 |
| D 結果 | 29 |
| 1) 放射性炭素年代測定 | 29 |
| 2) 粘土分析 | 30 |
| 3) 花粉分析 | 31 |
| 4) 植物珪酸体分析 | 31 |
| 5) 種実分析 | 32 |
| 6) 樹種同定 | 32 |
| E 考 察 | 32 |
| 1) 古環境変遷 | 32 |
| 2) 植物資源利用 | 33 |
| 5 まとめ -縄文時代を中心として- | |
| A 土 器 | 35 |
| 1) 總 概 | 35 |
| 2) 大木9~10式土器について | 35 |
| 3) 円形刺突文を有する土器について | 36 |
| B 石 器 | 39 |
| 1) 石器組成 | 39 |
| 2) 石器組成からみた遺跡の性格 | 39 |

第IV章 桜林遺跡

| | | |
|---------------------|---------------------|----|
| 1 調査の概要 | 41 | |
| A グリッドの設定 | 41 | |
| B 基本層序 | 41 | |
| 2 遺構 | 42 | |
| A 概要 | 42 | |
| B 記述の方法 | 42 | |
| C 各説 | 43 | |
| 1) 振立柱建物 | 43 2) 井戸 | 44 |
| 3) 土坑 | 47 4) 槽 | 48 |
| 5) ピット | 50 6) 性格不明遺構 | 50 |
| 7) 近世墓 | 50 | |
| 3 遺物 | 51 | |
| A 概要 | 51 | |
| B 各説 | 51 | |
| 1) 土器・陶磁器類 | 51 2) 木製品 | 52 |
| 3) 石製品 | 53 4) 金屬製品 | 53 |
| 5) 銭貨 | 53 | |
| 4 自然科学分析 | 54 | |
| A はじめに | 54 | |
| B 試料 | 54 | |
| C 分析方法 | 54 | |
| D 結果 | 54 | |
| 1) 放射性炭素年代測定 | 54 2) 樹種同定 | 55 |
| 3) 種実分析 | 55 4) 動物遺存体分析 | 57 |
| E 考察 | 57 | |
| 1) 動・植物利用 | 57 2) 木製品 | 59 |
| 5まとめ | 61 | |
| A 遺跡の時期 | 61 | |
| B 中世における遺跡の性格 | 61 | |
| C 近世墓について | 61 | |
| 《要約》 | 63 | |
| 《参考・引用文献》 | 64 | |
| 《観察表》 | 69 | |

挿図目次

| | | | | |
|------|--------------------------|------|-----------------|----|
| 第1図 | 試掘確認調査トレンドと 本発掘調査実施範囲 | 第13図 | 石器分類図 | 24 |
| 第2図 | 層序確認ベルトと遺跡内容 | 第14図 | 石器分布図 | 25 |
| | 確認トレンド | 第15図 | 花粉群集の層位分布 | 31 |
| 第3図 | 試掘確認調査トレンドと 本発掘調査実施範囲 | 第16図 | 植物珪酸体含量の層位の変化 | 31 |
| 第4図 | 層序確認ベルトと遺跡内容 | 第17図 | 中部北遺跡の花粉 | 34 |
| | 確認トレンド | 第18図 | 中部北遺跡の植物珪酸体・珪藻 | |
| 第5図 | 遺跡周辺の地形分類図 | 第19図 | 層位遺体 | 34 |
| 第6図 | 下越地方の莊園・国領領分布図 | 第20図 | 中部北遺跡の木材・炭化材 | 34 |
| 第7図 | 瀬波郡絵図に描かれた集落と境界 | 第21図 | 39と県内出土土器 | 38 |
| 第8図 | 遺跡周辺の縄文時代・中世 遺跡分布図 | 第22図 | グリッドの設定と基本土層堆積図 | 41 |
| 第9図 | グリッドの設定と基本土層堆積図 | 第23図 | 遺構分類図 | 42 |
| 第10図 | 土器部位名称 | 第24図 | 桜林遺跡の木材(1) | 59 |
| 第11図 | 土器出土分布図 | 第25図 | 桜林遺跡の木材(2) | 59 |
| 第12図 | 主な器種の並べ方及び部位 名称と計測基準 | 第26図 | 桜林遺跡の種実(栽培植物) | 59 |
| | | 第27図 | 桜林遺跡の種実(木本・草本) | 59 |
| | | 第28図 | 桜林遺跡の種実(草本) | 59 |
| | | 第29図 | 桜林遺跡の出土骨 | 59 |
| | | | 新潟県における中世の木棺墓 | 62 |

表目次

| | | | | | |
|-----|--------------------------|----|------|--------------------|----|
| 第1表 | 石器組成と縮尺率 | 25 | 第10表 | 39と各土器型式の要素対照表 | 37 |
| 第2表 | 放射性炭素年代測定結果 | 29 | 第11表 | 縄文時代中～後期の県内遺跡石器組成表 | 39 |
| 第3表 | 暦年校正結果 | 29 | 第12表 | 放射性炭素年代測定結果 | 54 |
| 第4表 | 珪藻分析結果 | 30 | 第13表 | 暦年校正結果 | 54 |
| 第5表 | 花粉分析結果 | 30 | 第14表 | 樹種同定結果 | 55 |
| 第6表 | 植物珪酸体含量 | 31 | 第15表 | 種実分析結果 | 56 |
| 第7表 | 種実分析結果 | 32 | 第16表 | 検出分類群一覧 | 57 |
| 第8表 | 樹種同定結果 | 32 | 第17表 | 骨同定結果 | 57 |
| 第9表 | 中部北遺跡の土器型式と周辺 遺跡幅年対応表 | 35 | 第18表 | 多摩丘陵の遺跡における埋葬形態の変遷 | 62 |

図面図版目次

中部北遺跡

- 図版 1 遺構全体図
 図版 2 遺構分割図(1)
 図版 3 遺構分割図(2)
 図版 4 疎野I・2
 図版 5 遺構個別図 杭1・SK1・SK2・SK3・SK4・SK9・SK10・SK16・SC101
 図版 6 遺物実測図(1) 縄文時代の土器(1)
 図版 7 遺物実測図(2) 縄文時代の土器(2)
 図版 8 遺物実測図(3) 縄文時代の土器(3)
 　・古代の土器
 図版 9 遺物実測図(4) 縄文時代の石器(1)
 図版 10 遺物実測図(5) 縄文時代の石器(2)
 図版 11 遺物実測図(6) 縄文時代の石器(3)

桜林遺跡

- 図版 12 遺構全体図
 図版 13 遺構分割図(1)
 図版 14 遺構分割図(2)
 図版 15 遺構分割図(3)
 図版 16 遺構個別図(1) SB1・SB2・SX203
 図版 17 遺構個別図(2) SB3・SB4・SX207
 図版 18 遺構個別図(3) SB5・SB6・SD2・SD148・SD178・SD204・SD205・SD208・SD209
 図版 19 遺構個別図(4) SE3・SE4・SE26・SE41・SE66
 図版 20 遺構個別図(5) SE102・SE103・SE127・SE130・SE141

| | | | |
|-------|---|-------|---|
| 図版 21 | 遺構個別図 (6) SE142・SE161・SE162・SE 168・SE169 | 図版 24 | 遺構個別図 (9) 近世墓 (SK131)・P45・P51・ P53・P84・P87・P158・P174 |
| 図版 22 | 遺構個別図 (7) SE145・SE149・SE167・SE 189・SE191 | 図版 25 | 遺物実測図 (1) 陶磁器・土器類 |
| 図版 23 | 遺構個別図 (8) SD1・SD31・SKI3・SK128・ SK129・SK132・SKI33・SKI34・SK144・SK 180・SK210 | 図版 26 | 遺物実測図 (2) 木製品 (1) |
| | | 図版 27 | 遺物実測図 (3) 木製品 (2) |
| | | 図版 28 | 遺物実測図 (4) 木製品 (3) |

写真図版目次

| | | | |
|-------|-----------------------------------|-------|--------------------|
| 中部北遺跡 | | | |
| 図版 29 | 遺跡近景 | 図版 43 | 基本層序・遺構 (1) 振立柱建物 |
| 図版 30 | 基本層序・杭・遺構 (1) 土坑 | 図版 44 | 遺構 (2) 振立柱建物 |
| 図版 31 | 遺構 (2) 土坑 | 図版 45 | 遺構 (3) 井戸 |
| 図版 32 | 遺構 (3) 炭化物集中・流路 1 | 図版 46 | 遺構 (4) 井戸 |
| 図版 33 | 流路 1・流路 2 | 図版 47 | 遺構 (5) 井戸 |
| 図版 34 | 流路 2 | 図版 48 | 遺構 (6) 井戸・土坑 |
| 図版 35 | 縄文時代の土器 (1) | 図版 49 | 遺構 (7) 土坑 |
| 図版 36 | 縄文時代の土器 (2) | 図版 50 | 遺構 (8) 土坑・溝 |
| 図版 37 | 縄文時代の土器 (3)・古代の土器・縄文時代 の石器 (1) | 図版 51 | 遺構 (9) 溝 |
| 図版 38 | 縄文時代の石器 (2) | 図版 52 | 遺構 (10) 溝・ビット |
| 図版 39 | 縄文時代の石器 (3) | 図版 53 | 遺構 (11) ビット・性格不明遺構 |
| 図版 40 | 縄文時代の石器 (4) | 図版 54 | 遺構 (12) 近世墓 |
| 桜林遺跡 | | 図版 55 | 陶磁器・土器類 |
| 図版 41 | 遺跡近景 | 図版 56 | 木製品 (1) |
| 図版 42 | 遺跡全景・遺跡近景 | 図版 57 | 木製品 (2) |
| | | 図版 58 | 木製品 (3) |

第一章 序 説

1 調査に至る経緯

法定路線名「日本海沿岸東北自動車道（以下、「日沿道」）」は、新潟市の新潟空港インターチェンジ（以下、「IC」）を起点に、日本海に沿って北上し、山形県、秋田県を経て青森市に至る高規格幹線道路である。日本海側の縦貫軸として、沿線地域の相互交流、発展、活性化が期待されている。また新潟中央ジャンクション（以下、「JCT」）～秋田県河辺JCT 間は、営業路線名「日本海東北自動車道（以下、「日東道」）とも呼称される。日沿道の新潟～朝日間における基本計画は、平成元年2月に新潟～村上間、平成3年12月に村上～朝日間が決定した。中条IC以北は第13次区間にあたり、平成10年4月に中条～荒川間、同年12月に荒川～朝日間の施工命令が出された。これを受けて、日本道路公团（以下、「道路公团」）と新潟県教育委員会（以下、「県教委」）との間で、道路法線内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議が本格化した。

中条IC～朝日IC間の分布調査は、県教委から委託を受けた財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、「埋文事業団」）が平成11年度に実施した。分布調査の結果、道路法線上には8か所の周知遺跡と27か所の遺跡推定地が存在し、これらについて試掘確認調査が必要である旨を県教委に報告した。

中部北遺跡に係る試掘確認調査は、「周知遺跡1」として平成14年10月から11月にかけて実施した。周知範囲から離れて、新たに绳文・弥生時代の遺物が良好な状態で出土したため、中部北遺跡として新規登録した。桜林遺跡に係る範囲は、「推定地10」として平成14年8月と11月に調査した。古代の遺物と当該期の可能性がある遺構を検出したことから、小字名から桜林遺跡として新規登録した。この時点で推定された本発掘調査面積は、中部北遺跡が6,000 m²、桜林遺跡が10,200 m²である。

試掘確認調査終了後、平成14年12月18日の道路公团、県教委及び埋文事業団との協議で、日沿道早期開通のため、当面は暫定二車線分に調査範囲を限定することを決定した（以下、「限定期協議」）。その結果、今期の本発掘調査対象面積を中部北遺跡3,620 m²、桜林遺跡2,670 m²とした。

平成16年1月8日の国土開発幹線自動車道建設会議（以下、「国幹会議」）が終了後、民営化を控えた道路公团から、膨大な調査量を短期間に終了することが要望された。それに応じるために、県教委と埋文事業団は調査体制などの協議を行い、日沿道建設に限り、平成16年度以降の調査を埋文事業団職員の管理・監督の下に民間調査機関に全部委託することとした。その後、日沿道の事業は、道路公团の分割民営化に伴い、平成17年10月1日に設立された東日本高速道路株式会社（以下、「東日本高速道路」）に引き継がれた。また平成18年2月7日の国幹会議により、荒川IC以南は東日本高速道路が「有料道路方式」で、荒川IC以北は国土交通省（以下、「国交省」）が「新直轄方式」で整備することになった。

平成18年度の本発掘調査か所は、最終的に平成18年3月3日の国交省、県教委、埋文事業団による協議で決定した。また平成14年12月の限定期協議内容も、国交省に引継がれることが確認された。調査対象は神林村・村上市内の中7遺跡、調査面積約54,240 m²である。中部北遺跡はこの協議に基づき、4月3日から調査を開始した。同年5月、荒川町内の一部に追越し区間を設けて四車線とする計画変更が示され、桜林遺跡が追加調査対象となった。年度内調査が可能か検討し、中部北遺跡が8月で終了する目途が立ったことから、調査着手を決定した。調査面積を3,340 m²に変更し、同年8月25日から調査を開始した。

2 調査の方法と経過

A 中部北遺跡

1) 試掘確認調査

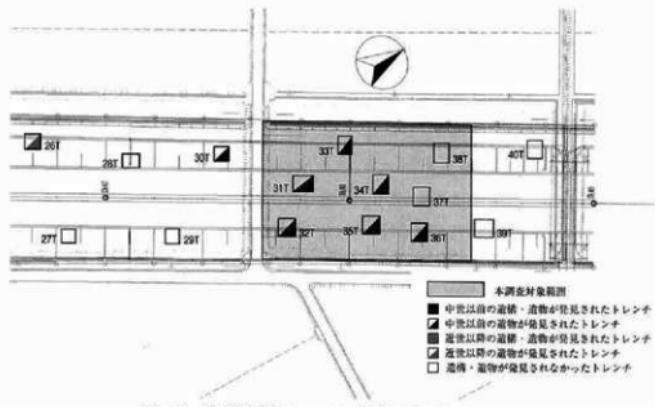
試掘確認調査は「周知遺跡1（西部遺跡）」の隣接地として、道路法線センター杭STA.412からSTA.422の間の約75,000 m²を対象に平成14年10月15日～11月15日の期間で実施した。調査範囲内に任意にトレンチを設定し、重機（バック・ホー（以下、固有名称省略））及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。掘削は3mを目途に行ったが、上層での遺構の検出状況や湧水の状況により、3mに達しなくても掘削を取りやめたトレンチがある。

本遺跡周辺では、中世以前の遺物は7か所のトレンチ（以下、「T.J」）から出土している。このうち、31～36Tから縄文土器をはじめ、石器、鐵入器などが現地表下1～15mに堆積するVI層（本調査のVIb・VIc層）から出土した。遺構は検出できなかったが、炭化物が多く検出される部分が存在することから、より詳細な調査により遺構が発見される可能性が高いと考えた。一方、30・32Tでは現地表下約50cmに堆積するIII層からは中世・古代の土器が散発的に出土している。しかし、III層の土質は未分解の植物遺体を比較的多く含む粘土であり、湿地的な環境で堆積したものと考えられることから、この時期の遺跡の存在を示すものではないと判断した。

以上の調査結果から、中部北遺跡については約6,000 m²に対して本発掘調査が必要であることを県教委に報告した。その後、平成14年12月18日に東日本高速道路、県教委、埋文事業団の三者で工事内容による調査範囲の限定協議がもたれ、中部北遺跡の本発掘調査面積は約3,620 m²と決定した。

2) 本 調 査

本調査は4月3日に着手した。調査対象となる縄文時代の遺物包含層（VI層）は現地表下約1～15m

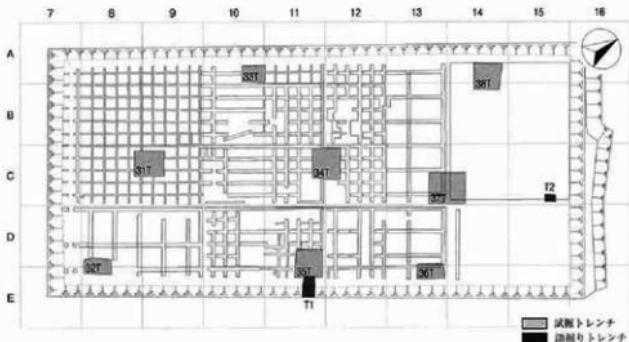


第1図 試掘確認調査トレンチと本発掘調査実施範囲 (S=1/2,000)

と深い所に存在し、そこまでの堆積土は重機を用いて除去する計画であったため、まず、重機による表土掘削から開始した。掘削範囲については、調査区南端付近(6・7グリッド)を横断する農道部分が柵刈り後まで掘削に着手できることから、当初の表土掘削は農道以北を対象に行うこととした。重機掘削については、現地表(標高約3m)から中世・古代の遺物包含層であるⅢ層上(標高約2.5m)までの堆積土除去を一次掘削、そこからⅥ層上5cmまでの堆積土除去を二次掘削と作業工程を分けて行った。試掘確認調査の結果から、遺構・遺物が希薄と予想される北側部分については、包含層掘削も重機で行うこととし、14A～14Cグリッド・15A～15Cグリッド約500m²をこの対象範囲とした。また、遺跡は沖積地であることに加えて調査対象となる土層が深く、相当量の湧水が予想されることから、一次掘削と同時併行で暗渠の設置も行った。これらの作業には、およそ一ヶ月程度の期間が必要なことから、人力掘削は5月15日からとすることをこの時点で決定した。4月13日には建物(プレハブ3棟)、駐車場の設営が終了し、あわせて備品の搬入も行った。

表土掘削作業は試掘確認調査で中世・古代の土器が出土した調査区南端部から開始した。開始直後、7C1グリッドで杭1本を検出したが、周囲から遺物が出土せず、また、単独の杭であったことから、速やかに平面・写真等を記録し、取り上げた。5月12日までに重機掘削は大半が終了し、予定通り5月15日から発掘作業員40名を投入し、本格的な調査を開始した。なお、中世・古代の遺構は、前述の杭1本のみであり、遺物も8グリッドで破片が数点出土しただけにとどまった。

調査はまず、土層確認用ベルトとトレーニチの整形・掘削から開始した。ベルトは南北方向はDラインの1本のみ、東西方向は8ラインを振り出しに20m間隔で4本設定し、土層観察面は南北ベルトでは東面、東西ベルトでは南面に設定した。さらに純文時代の基盤層であるⅦ層の観察と、調査区の排水を兼ねた幅60cmのトレーニチを土層観察面に沿って掘削した。5月17日からは前述の作業に加え、Ⅶ層の掘削及び遺構確認作業も開始した。調査は7～11グリッドを当初の範囲とし、10ラインを境に南北2分割して調査員と作業員を振り分け、併行して調査を進めた。10ライン以降では地震による液状化現象の痕跡である噴砂が多数確認され、Ⅶ層の土質もこの付近では粘性が非常に強く、しまりにやや欠けていた。遺物は希薄であり、遺構も平面的な検出が困難な状況であったため、途中(5月25日)から平面的な調査方法を、遺構・遺物確認トレーニチにより断面から遺構や遺物の検出・分布状況の確認を行う方法に転換した。



第2図 層序確認ベルトと遺跡内容確認トレーニチ (S=1/800)

すなわち、試掘確認調査で遺物が出土した31T周辺（7～9 A・B・Cグリッド）は2m方眼で幅20cmのトレンチを、7～9 D・Eグリッドでは4m方眼で幅50cmのトレンチをそれぞれ設定し、遺構や遺物が検出された部分のみ面的な調査を行うこととした。結果として、10ライン以南では土坑2基（9Dグリッド）を検出したにとどまり、遺物についても8B4、8C14グリッドで小規模な集中がみられたほかは散発的な出土にとどまった。

一方、10グリッド以北では、10グリッドで調査区を東西に横断する自然流路を検出し、流路北岸の10～13グリッドにかけて縄文時代中～後期の土器、石器、鐵入磚などが多く出土した。遺物はVIa・VIb層を中心にⅥ層直上まで出土がみられ、自然堤防上ということもあって多数の遺構の検出が期待されたが、遺物の密集により平面での検出が困難であった。10グリッド以南同様、遺物の分布が密な部分は2m方眼、散発的な部分では4m方眼で幅50cmのトレンチを設定し、断面観察から遺構の検出を試みた。その結果、土坑6基、ピット6基、溝1基、炭化物集中1か所を検出したが、住居等は検出できなかった。

自然流路は当初、遺物を最も多く含むVIb層が堆積する段階に形成され、VIa層が堆積する段階で埋没してしまった一過性の流路と認識していたが、調査中に流路をはずれた南側で河床堆積物と思われる腐植物層が新たに確認され、さらに層中からは縄文土器片も出土したため、全景写真撮影後に流路を再調査することとした。全景写真は遺構や遺物の検出が一段落ついた7月31日より準備を開始し、8月2日に撮影した。撮影にあたっては調査区外にローリング・タワーを4段組で設営し、タワーを移動させながら遺跡を4方向から撮影した。その後、遺構・遺物の計測、取り上げなどをを行い、8月7日から本格的に自然流路の調査に着手した。遺物が河床付近にしかみられないことや、掘削前にあたって多量の残土が発生することなどから、河床部分を除く堆積土は重機により除去した。調査の結果、流路は遺跡が営まれた縄文時代中期の段階では、当初検出した流路のおよそ2倍の川幅を有し、その後、南側から大量に灰色粘質土が流入して急速に幅が狭まり、遺跡の終焉と前後する時期に埋没したことが判明した。流路はさらに古い段階のものも確認されたが、遺跡が出現する以前のものであり、本格的な調査は行わなかった。

以上のように、本遺跡では自然流路の北側周辺以外では遺構・遺物ともに希薄であった。そのため、当初、調査を予定していた農道（7グリッド）以南は調査を中止、また、14グリッド以北は重機による包含層掘削で遺物が検出できなかったことから、人力による包含層掘削を予定していた14D・E、15D・Eグリッドについても本格調査は行わなかった。最後に、11Eグリッドと15Cグリッドで縄文時代以前の堆積環境を探るため、重機で約4m（標高0m）前後まで掘り下げたが、遺構・遺物とも確認されなかった。深掘部分は堆積土層を記録した後、埋め戻し、8月2日に県教委が終了確認を行った。8月24日には国土交通省に引き渡して調査を終了した。

B 桜林遺跡

1) 試掘確認調査

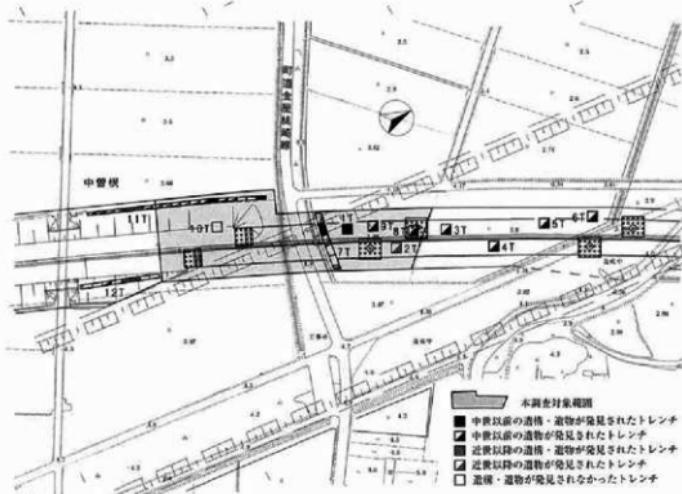
試掘確認調査は「推定地10」として平成14年8月1日～8月9日、同年11月18日～11月21日の期間で実施した。調査方法は、調査範囲内に任意でトレンチを設定し、重機及び人力による掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。その後、土層堆積状況、トレンチ位置、遺構・遺物の検出状況等を図面・写真等に記録した。掘削は3mを目途に行ったが、上層での遺構の検出状況や湧水の状況により、3m以下でも掘削を取りやめたトレンチがある。

調査の結果、1Tでピット6基、7Tで井戸1基、11Tで溝4条、12Tで溝1条、土坑1基などを検出した。1・7Tの溝と11T北側の溝は出土遺物から古代の所産、このほかの溝は近世以降とされたが、それ以外はこの段階では時期不明であった。また、今回の調査範囲の北側では、水田面が60~80cmも低いだけでなく、その水田耕作土自体も調査区側から土を取って盛土したものであることが予想された。すなわち、これによって遺跡地は古代の包含層と造構の一部が削平され、当該期の包含層や造構の一部が失われている可能性が高いと推察された。しかしながら、残存する造構も多く、造構・遺物の性格から対象地は居住域と考えられることから、桜林遺跡については約10,200m²に対して本発掘調査が必要であることを県教委に報告した。その後、平成14年12月18日に東日本高速道路、県教委、埋文事業団の三者で協議がもたれ、桜林遺跡の本発掘調査面積は約2,670m²と決定した。

2) 本 調 査

試掘確認調査の成果に基づき、本調査は町道金屋桃崎線を挟んで南北2か所にまたがる調査範囲を対象に実施した。桜林遺跡では、平成17年度にも同じ日沿道の建設に伴って2,000m²を対象とした調査が行われ、時期不明の溝2条・ピット1基、近世以降の陶磁器・窓水通販などを検出している〔小村ほか2006〕。今回の調査はその北側隣接地にある。当初の調査面積は、町道の南側部分（以後、南区）813m²、同北側部分（以後、北区）2,450m²、合計3,263m²である。

調査は平成18年8月25日から着手した。まず、試掘確認調査で確認された古代および中世の造構確認面上に堆積する耕作土（I・II層）を、造構確認面上約5cmまで重機を用いて除去した。Dグリッドライン、13・15・17グリッドラインには土層確認用ベルトを設定、60cm幅で堆積土を振り残した。8月29日には建物（プレハブ2棟）を設営し、あわせて調査機材も搬入した。重機による表土掘削もほぼ終了したの

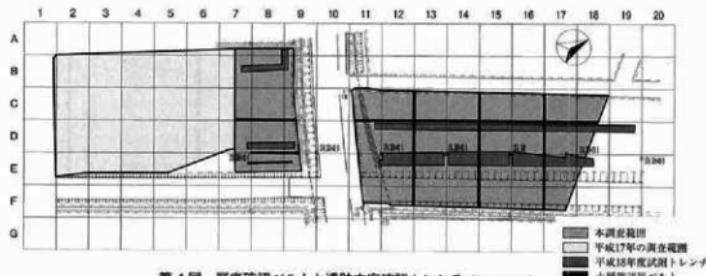


第3図 試掘確認調査トレントンと本発掘調査実施範囲 (S=1/3,000)

で、翌日、グリッド杭を打設した。翌、8月30日から作業員40名を投入し、排水溝の掘削、ベルト・コンペアやトイレの配置といった環境整備から作業を開始した。排水施設については、南北各調査区ごとに幅50cm、深さ50cmの開渠を周囲に巡らし、既存の排水溝が敷設されている部分についてはこれを利用した。8月31日から人力による耕作土の除去および造構確認作業、土層確認用ベルトの整形などの作業を北区南端から開始した。土層観察面は南北ベルトでは東西、東西ベルトでは南面に設定し、それに沿って排水を兼ねた幅30cm、深さ30cmのトレーニングを掘削することで造構確認面下の土層確認にあてた。なお、作業道具は、トレーニングや耕作土の掘削についてはホソを、造構確認については大ジョレン・両刃鎌を主に用いて行った。造構発掘には移植ゴテ・竹べら・両刃鎌・ホソなどを併用した。また、調査に伴い発生した堆土については、北区ではベルト・コンペアを、南区では一輪車を用いて調査区外に排出した。

北区では、作業開始早々から造構を多数検出したが、同時に12グリッドをはじめとする調査区各所に後世の擾乱も検出した。擾乱部分についてはその下に造構が残存する可能性が考えられたので、造構確認面から30cm前後の深さまで人力で擾乱を除去した。9月15日には造構確認や擾乱土の除去が終了し、造構分布状況の把握も兼ねてローリング・タワー上から写真撮影を行った。

造構の調査は9月19日から開始した。本遺跡では造構覆土の認識が比較的容易であっても基盤層との境が不明瞭なものが多く、造構はすべて半裁前にトレーニングによる断面観察を行い、正確な形状把握に努めた。14グリッドでは、検出当初、土坑と認識していたものの大半が井戸であることが判明し、深さ1mを越えるものについては段階的に掘削を行うという調査方法を探った。しかしながら、基盤層が脆弱なため造構壁が崩落しやすく、作業員の安全確保と造構の保護に注意しながらの作業となった。25日には11Eグリッドで近世墓(SK131)を検出した。検出当初は時期不明であったが、後に寛永通寶を主とする銭貨が6枚出土し、近世墓と判明した。10月に入ると北区の調査も一段落し、13日から南区の表土掘削に着手した。南区は北区以上にⅠ・Ⅱ層の堆積が薄く、中央部は表面の草を剥ぐ程度で造構確認面が露呈するといった状況であったので、重機掘削はよりいっそう慎重に行った。造構確認の結果、西壁と北壁沿いで溝4条が検出され、23日から造構調査を開始した。北区・南区とも調査は10月中旬には終了し、11月1日にはラジコン・ヘリコプターによる航空写真撮影を行った。5日の日曜日に現地説明会を実施し、近隣住民を中心に多数の見学者が訪れた。その後、井戸底の再確認、造構図面の測量など残務を行い、11月15日に県教委が終了確認を行った。翌16日には国土交通省に現地を引き渡し、調査を終了した。



第4図 層序確認ベルトと道路内容確認トレーニチ (S=1/1,500)

C 調査・整理体制

試掘確認調査と本調査および整理作業は、以下のような期日と体制で行った。

【試掘確認調査】

調査期間 中部北遺跡 平成14年10月15日～11月15日

桜林遺跡 平成14年8月1日～8月9日、11月18日～11月21日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越 順一）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越 順一）

管 理 黒井 幸一（同 専務理事・事務局長）

長谷川司郎（同 総務課長）

岡本 郁栄（同 調査課長）

庶 務 高野 正司（同 総務課班長）

調査指導 寺崎 裕助（同 調査課長代理）

調査担当 中部北遺跡 沢田 敦（同 調査課班長）

桜林遺跡 石川 智紀（同 調査課班長）

調査職員 中部北遺跡 佐藤 優一（同 調査課主任調査員）

後藤 孝（同 調査課主任調査員）

阿部 友晴（同 調査課文化財調査員）

桜林遺跡 片岡 千恵（同 調査課嘱託員）

【本調査・整理作業】

調査期間 本発掘調査 中部北遺跡 平成18年4月3日～平成18年8月24日

桜林遺跡 平成18年8月25日～平成18年11月16日

整 理 作 業 中部北遺跡 平成18年6月8日～平成19年3月31日

桜林遺跡 平成18年11月17日～平成19年3月31日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調 査 財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 武藤 克己）

管 理 波多 俊二（同 事務局長）

斎藤 栄（同 総務課長）

藤巻 正信（同 調査課長）

監 督 鈴木 俊成（同 調査課課長代理）

石川 智紀（同 調査課班長）

杉田 和宏（同 調査課主任調査員）

庶 務 長谷川 靖（同 総務課班長）

調査組織 株式会社吉田建設

現場代理人 潤戸 一之（株式会社吉田建設土木部）

調査担当 雑 実（同 埋蔵文化財調査部調査員）

調査員 松井 智（同 埋蔵文化財調査部調査員）

山本 友紀（同 埋蔵文化財調査部調査員）

調査補助員 大川原 忍 長沼 直美 佐々木美紀 桜井 克志（以上、株式会社吉田建設埋

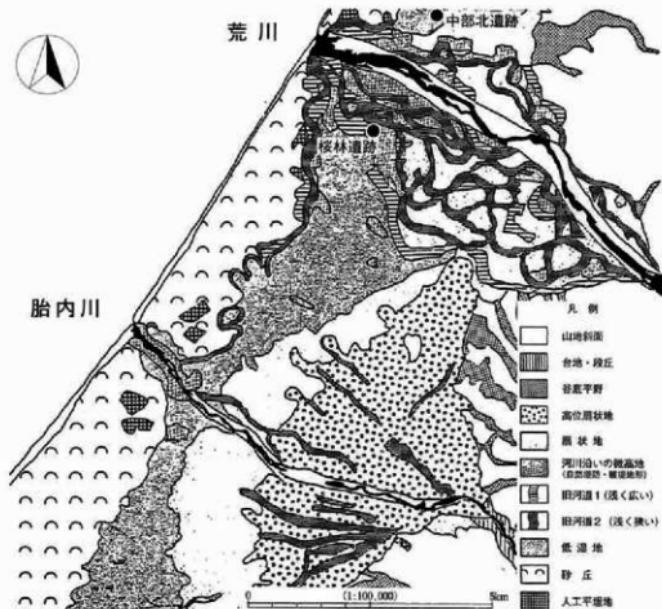
蔵文化財調査部補助員）

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

1 地理的環境

中部北遺跡は岩船郡神林村、桜林遺跡は岩船郡荒川町に所在する。山形県との県境にある大朝日岳に源を発する荒川を隔てて神林村と荒川町は隣り合い、北は村上市と、南は胎内市と接する。このあたりは、西に新潟砂丘、東に朝日山地、飯豊山地、櫛形山脈、岩船丘陵といった山地や丘陵、中央に沖積低地という3つの異なる地形が南北に平行し、変化に富んだ景観を作り出している。

遺跡の立地する沖積低地は越後平野の北端部にあたる。越後平野は完新世以降の堆積土によって形成された沖積平野で〔岡本 1986〕、北は岩船丘陵の南側から南は長岡市と小千谷市の市境に至る、面積約2,000km²に及ぶ北陸地方最大の平野である。新潟平野は海岸沿いに長大な砂丘が形成されるため、河川の海への円滑な流出が妨げられる事に加え、勾配が緩い地形や日本海の潮汐変動の少なさなどの条件が重なって慢性的な排水不良が生じ、ほぼ全域が低湿地帯となっている〔岡安 2005〕。遺跡の周辺でも、山地部から流れ出る大小さまざまな河川は砂丘により行き場を失い、網の目のように乱流を繰り返し、さらに



第5図 遺跡周辺の地形分類図 [寄藤・大矢 1988] 神林に一部加筆

は潟湖などとも連結しながら、阿賀野川や荒川からようやく日本海へと注いでいた様子が正保2(1645)年に描かれた越後国絵図にみえる。近世以降は潟の干拓や人工流路の開削といった治水事業が精力的に進められ、岩船潟は天明年間(1781~1788年)に、紫雲寺潟(塩津潟)は享保18(1733)年に干拓【鈴木2004】、それまで砂丘の手前で北上し、荒川と合流していた胎内川も明治22(1888)年には現在の河口が開削され、地盤の安定化が図られた。

こうした内陸からの流水を運んでいた砂丘は、新潟砂丘と呼ばれている。南は旧巻町の角田山麓から北は岩船に至る総延長約76kmにわたって海岸沿いに形成されるこの砂丘は、表面に形成された腐植土層の厚さと砂丘砂の風化の程度をもとに、内陸側から新砂丘I(I-1~I-4の4細分)、新砂丘II(II-1、II-2の2細分)、新砂丘III(III-1、III-2の2細分)と3群に大別されており【新潟古砂丘グループ1974】、その形成時期については、新砂丘Iが縄文時代前期、新砂丘IIが縄文時代後期、新砂丘IIIは縄文時代晩期~現代というように考えられている【新潟古砂丘グループ1996;中条町2004】。これらの砂丘は最も砂丘が成長する越後平野中央部では列状に分布し、新潟東港付近では10列を数えるが、北に行くにつれて収斂し、遺跡の周辺では上下に重なる形で形成され、岩船港のあたりで浦田山丘陵に遮られて止まる。

遺跡の東側には山地や丘陵が連なる。朝日山地、飯豊山地といった山地部には2,000m級の起伏の大きい急峻な山々が連なり、県境を越えて山形県や福島県側に広がる。山地と沖積低地の間には、櫛形山脈、岩船丘陵といった標高1,000m以下の比較的の起伏が小さい丘陵が連なる。

次に遺跡周辺の微地形についてみてみよう。中部北遺跡は沖積低地に立地し、現地標高約3m、縄文時代の遺物包含層であるVI層上の標高は1.7~22m(層厚は30~60cm)、基盤層となるV層上の標高は1.0~1.8mを測る。包含層、基盤層共に調査区中央の自然流路の北岸(VIグリッド列)が最も高く、そこから南北に向かって緩斜面となっている。VI層の厚さもこの部分が最も薄く、この時期には自然堤防が形成されていた事がわかる。この付近の土質は砂質の強い粘土であり、乾きやすい性質をもっていたが、流路の南側や14グリッド以北では同じVI層でも粘土質が強い上に湧水も多く、ぬかるんだ状態が長く続いた。この部分の堆積土は荒川をはじめとする周辺河川の氾濫によって堆積したものとみられ、不安定な地盤の状況が窺える。

荒川は朝日山地の大朝日岳(標高1,870m)を源とする河川で、飯豊山地に源を発する横川、玉川などの支流を合わせて胎内市桃崎浜で日本海へ流れ出る。河口付近では砂丘線辺を南西から流れてくる乙大日川が合流するが、これは胎内川旧流路の名残である。流路が山地部を抜けて新潟平野に出たあたりを扇頂として、下流側には扇状地が形成されるが、整った扇形に形成された胎内川扇状地と比べ、荒川扇状地は扇形が不明瞭で狭く、規模も小さい。この狭い扇状地の扇端部に中部北・桜林遺跡が位置する。桜林遺跡も中部北遺跡同様、沖積低地に立地し、現地標高約3.7m、構造確認面の標高は約3.5mを測る。調査区は現地表、旧地表共に概ね平坦地であるが、調査区のすぐ北側は60~80cmほど低くなってしまっており、荒川の旧河道の一部にあたるものと思われる。荒川流域の地形分類図をみると【寄藤・大矢1988】、胎内川の右岸には乙大日川以外に目立った旧河道跡がないのに比べ、荒川左岸には網目状に幾筋もの旧河道跡が形成みられる。慶長2(1597)年に描かれたとされる「瀬波郡絵図」(米沢市市立上杉博物館所蔵)【村上市史編纂委員会2000】には、川の合間や川沿いに点々と島状に集落が営まれている様子が描かれているが、こうした流路の状況によって微高地は島状に分断されてしまうのであろう。

2 歴史的環境（周辺の縄文時代・中世遺跡分布）

この一帯では縄文時代以降、多くの遺跡が営まれてきた。縄文時代には山地や丘陵部に、弥生時代以降は沖積地や砂丘を中心に多くの遺跡が発見されている。ここでは今回調査した遺跡の主体的な時期である縄文時代と中世の遺跡について概観する。

縄文時代

これまでに確認された神林村における縄文時代の遺跡数は 60 を超える。このうち、これまでに中部北遺跡を含め 7 遺跡で調査成果が報告されている。城田遺跡（6）【田辺 2001】は谷内の沖積地に位置する中期後葉～後期後半の遺跡で、三十種場式・南三十種場式土器を含む土器捨て場、加曾利 B 2～B 3 式土器を作り住居跡 11 軒をはじめとした遺構群が検出されている。樋渡・堀下遺跡（160）【田辺・大賀 2003】は城田遺跡と同じ谷の開口部に位置する遺跡で、中期前葉の土器捨て場をはじめ、後期や晩期の土坑や溝などが検出されている。飯岡山崎遺跡（83）【田辺・近江屋 1998】は沖積地に面した丘陵裾部に位置する遺跡で、フ拉斯コ状土坑、土坑、小ピットなどが検出されている。遺構に伴う遺物の出土がなく、詳細時期は不明である。水口沢遺跡（194）【田辺・大賀 2002】は小支谷開口部に位置する遺跡で、丘陵上から流れ込んだとみられる前期前半の土器が溝から出土している。八幡山遺跡（88）【田辺 1994】は谷を見下ろす尾根上に位置する遺跡で、前期末（大木 6 式併行）～中期前葉（北陸系上山田古式 I 式併行）のフ拉斯コ状土坑・円形土坑・堅穴状遺構などが検出されている。報告書では稻葉下遺跡（101）、大型寺遺跡（1）にも触れ、八幡山遺跡は前期末、稻葉下遺跡は中期前半、大聖寺遺跡は中期中葉～後葉にそれぞれ集落規模が最大になると推測している。長松遺跡（97）【田辺 1991】では沖積地に面する砂丘縁辺部から 1 点だけではあるが晩期の注口土器が報告されている。一方、荒川町ではこれまでに 18 遺跡が確認されており、このうち 14 遺跡が荒川扇状地の扇頂付近の丘陵部や扇状地に面する河岸段丘に立地する。残る 4 遺跡は低地部に位置し、その一つに桜林遺跡がある。

以上のように、本格的な調査が実施された遺跡は数少なく、縄文時代各期における遺跡分布の変遷を追う事は難しいが、少なくとも中期の段階には中部北遺跡のみならず、城田遺跡や樋渡・堀下遺跡といった集落の存在が窺われる遺跡も沖積地に出現し、低地を舞台にした活動が本格的に開始されるものとみられる。

中世－荒川保を中心として

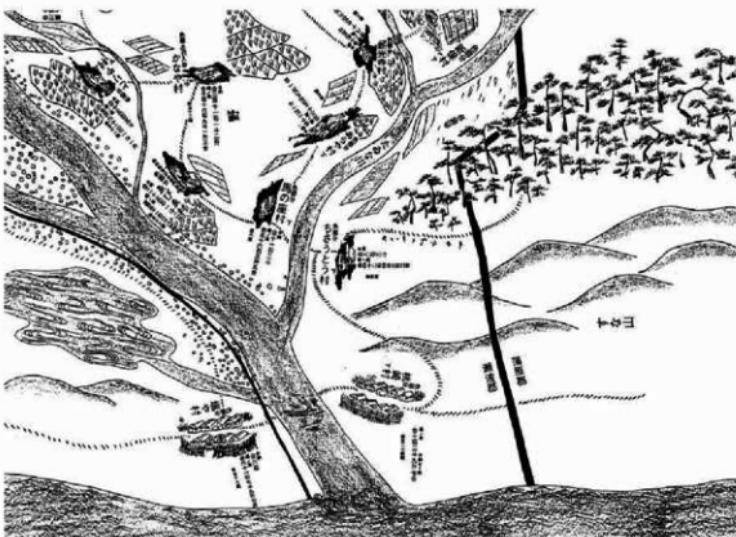
平安時代末期には、全国的に荘園が増加した事によって、それまでの国・都制による地方支配にかわって、荘園や国衙領の郷・保などが支配単位となる荘園公領制へと変わっていった。越後の荘園の大部分は 11 世紀後半から 12 世紀にかけて成立したと考えられている【田村 1987】。この時期の荒川町周辺は越後最北の国衙領である荒川保、荒川以北は皇室領小泉荘の領域となっており、荒川保の南側には摂關領奥山荘が成立していた。鎌倉時代に入ると、荒川保は地頭に任じられた河村氏が領有するが、新田氏に組した河村氏は新田氏が足利氏に敗れると次第に勢力を失い、遂に



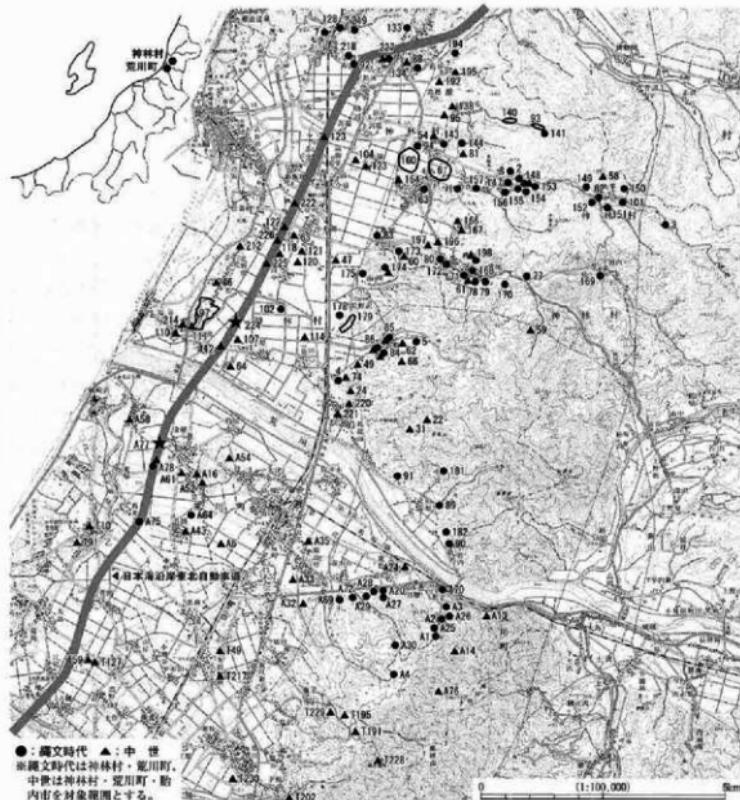
第 6 図 下越地方の荘園・国衙領分布図
(中条町史通史編より転載 一部抜粋)

は陸奥国（岩手県）へ移る。これ以降、荒川保は奥山荘の和田・小泉荘の色部・本庄といった近隣の地頭に交錯支配される事となる〔山本 1974〕。慶長 2（1597）年に描かれたとされる「瀬波郡絵図」には、瀬波郡（岩船郡）と蒲原郡の境界も記されているが、荒川を超えた桃崎浜の南で境界が引かれており、当時、荒川左岸一帯が色部氏の領域となっていた事が知れる。また、これをもとに桃崎浜とその南方にある荒井浜の間を荒川保と奥山荘の境とする見解もある〔青山 2004〕。

荒川町では、これまでに桜林遺跡を含め 7 遺跡、中世の遺跡が調査されている。馬場館跡（16）〔吉井 1998：2003：2004〕は奥山荘北条黒川氏の家臣の居館と推定される遺跡で、これまで 3 回にわたって調査が行われている。堀や郭内が調査され、出土した陶磁器類から 15 世紀～16 世紀初頭の居館跡である事が判明した。また、調査者は館の構造が奥山荘江上館跡や古館館跡などと同じく主郭と副郭で構成されていると推測している。赤井遺跡（61）〔吉井 1994〕では、15 世紀末～16 世紀末の井戸・掘立柱建物・溝などが検出されている。馬場館遺跡との位置関係から、調査者は馬場館との関連が高い集落と想定している。星敷添遺跡（58）〔吉井 1998〕は乙大日川沿いの微高地に位置する遺跡で、調査では堀の可能性がある遺構や 14 世紀前半～16 世紀前半の遺物が出土している。坂町宮ノ腰遺跡群（43）では C 遺跡〔吉井 2003〕、D 遺跡〔吉井 2000：2006〕で中世の遺構・遺物が検出され、12 世紀後半から中世集落が形成され、土塁や堀をもつ居館も登場する事が報告されている。田屋遺跡（6）〔吉井 2003〕では中世の遺構・遺物が確認されている。これらの遺跡は現在の坂町・金屋・海老江集落の縁辺に位置しており、中世の段階には荒川左岸に点々と形成された微高地に集落や館が営まれている事が窺える。



第7図 瀬波郡絵図に描かれた集落と境界（村上市史 別編より転載）



| | | | | | |
|-----------|---------------|------------|--------------|-------------|------------|
| 22 神林村 | 78 大隅平道跡 | 120 水下道跡 | 167 元千穂寺跡 | 225 鶴田道跡 | 58 星敷道跡 |
| 23 中部北道跡 | 79 繩道跡 | 121 水下道跡 | 168 芥地山道跡 | 226 公良道跡 | 61 赤井谷道跡 |
| 1 大曾根道跡 | 80 小曾根道跡 | 122 田原道跡 | 169 内曾根ノ道跡 | 227 八太郎道跡 | 64 名古谷地道跡 |
| 2 伊勢道跡 | 81 引佐道跡 | 123 田原道跡 | 170 田原道跡 | 228 伊勢道跡 | 66 伊勢道跡 |
| 3 丹波道跡 | 82 大東大寺の街道跡 | 124 大坂道跡 | 171 古川道跡 | 229 丹波道跡 | 67 丹波道跡 |
| 4 神上山道跡 | 83 板岡山の道路 | 125 丸山道跡 | 172 稲ノ山道跡 | 1 大山八道跡 | 70 稲ノ山道跡 |
| 5 萩野路 | 84 寺田道跡 | 126 内御堂ノ道跡 | 173 丸山の二道跡 | 2 大山八道跡 | 71 萩ノ山道跡 |
| 6 城田道跡 | 85 鮎瀬道跡 | 128 内御堂ノ道跡 | 174 鮎瀬谷B道跡 | 3 花立道跡 | 72 春日山道跡 |
| 7 山崎道跡 | 86 下山崎道跡 | 140 関キ道跡 | 175 鮎瀬谷A道跡 | 4 白山道跡 | 74 田島道跡 |
| 8 大門道跡 | 88 八山道跡 | 141 カゲバ道跡 | 176 黒川山道跡 | 6 田山道跡 | 75 道高森道跡 |
| 22 丹波道跡 | 89 丹波道跡 | 142 木原木山道跡 | 177 丹波道跡 | 76 丹波道跡 | 76 丹波道跡 |
| 34 小山川道跡 | 90 小山川(内河内)道跡 | 144 宮ノ山道跡 | 178 丹波道跡 | 13 丹波城跡 | 78 中曾根道跡 |
| 31 平林道跡 | 91 高ノ沢(若ノ上)道跡 | 145 丹波道跡 | 179 丹波道跡 | 14 丹波城跡 | 79 加内山道跡 |
| 46 正所加所 | 92 志田平道跡 | 147 八百石道跡 | 182 下山道跡 | 16 馬場御跡 | 10 乙宝寺 |
| 47 中州道跡 | 93 里木庄道跡 | 148 大原木山道跡 | 192 フカ道跡 | 20 発見道跡 | 49 佐原木山噴霑 |
| 49 下谷地西道跡 | 94 烏山道跡 | 149 逢尾道跡 | 194 水下川道跡 | 24 犬山御跡 | 59 古賀御跡 |
| 53 玉川道跡 | 95 内御堂道跡 | 150 佐原道跡 | 195 大坂道跡 | 25 大山C道跡 | 127 古賀御室 |
| 54 しら山道 | 96 佐原道跡 | 151 霧の里道跡 | 196 石坂道跡 | 26 花立崩山道跡 | 191 錦王御室 |
| 58 南大寺道跡 | 97 佐原道跡 | 152 逢尾道跡 | 197 早川道跡 | 27 丹波崩山A道跡 | 195 錦王御室絆跡 |
| 99 旗川道跡 | 101 佐原下道跡 | 153 佐原の道跡 | 198 早川道跡 | 28 丹波崩山B道跡 | 212 丹波御跡 |
| 60 旗岡城跡 | 102 衣羽道跡 | 154 木原木山道跡 | 212 在之村道跡 | 29 丹波崩山C道跡 | 213 明臣御跡 |
| 107 旗川道跡 | 104 千竹寺道跡 | 155 木原木山道跡 | 213 在之村道跡 | 30 田山道跡 | 228 錦玉御跡 |
| 62 旗川道跡 | 105 中原道跡 | 156 木原木山道跡 | 214 福田山古跡馬主地 | 32 梅下道跡 | 229 犀玉御跡 |
| 63 旗川道跡 | 110 真三郎山道跡 | 157 大堂寺II | 218 上ノ川道跡 | 33 甘利道跡 | 230 荒川南箭跡 |
| 64 牛足道跡 | 111 十字山道跡 | 159 佛渡道跡 | 219 大坂B道跡 | 35 四輪載道跡 | |
| 66 古川道跡 | 112 西部道跡 | 163 清山道跡 | 220 大坂町ノ櫻藏跡D | 43 和町宮ノ櫻藏跡D | |
| 68 佐久間津 | 114 荘子大通跡 | 164 畠下道跡 | 221 平野道跡 | 52 第一理道跡 | |
| 77 過分道跡 | 118 水下道跡 | 165 北山道跡 | 222 畠田道跡 | 54 行徳日道跡 | |

第8図 道跡周辺の構文時代・中世道跡分布図

(国土地理院発行 平成10年「村上」平成15年「塙町」「中条」「小国」1:50,000原図)

道跡番号の重複をさける
ため、荒川町はA、船内町
はBと付けています。

第Ⅲ章 中部北遺跡

1 調査の概要

A グリッドの設定

グリッドの設定は、日沿道路法線センター杭 STA417 (X = 239812618m・Y = 82297248m) と STA419 (X = 23942028m・Y = 82192363m) を結んだラインを南北方向の基線として 10 m 方眼で設定した（ちなみに 8B グリッドの座標値は X=239363.046 m・Y=82495.277m 以上、座標値は世界測地系）。この 10 m四方がグリッドの基本単位となるが（大グリッド）、遺構や遺物の位置把握の利便性などを考え、大グリッドを更に 2 m 方眼で 25 分割させて小グリッドを設定した。なお、基線の方位は真北から 31° 46' 41" 東偏する。

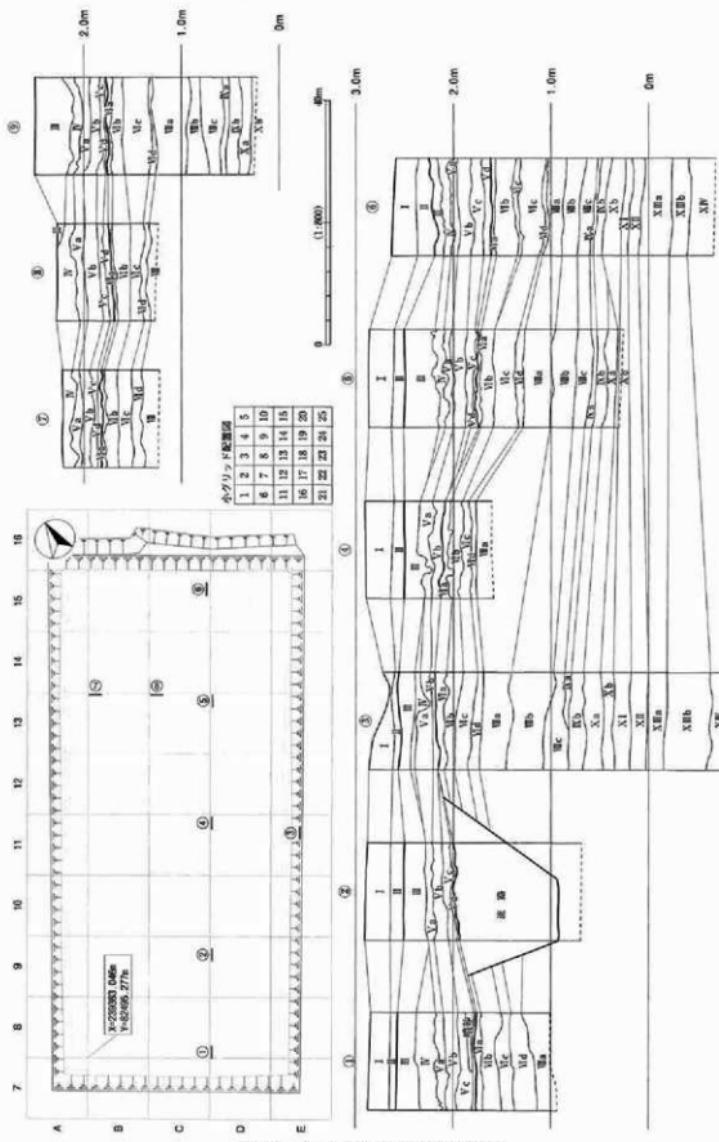
グリッドの名称については、南北ラインには算用数字、東西ラインにはアルファベットを用い、両者の組み合わせで「7D」というように表した。また、小グリッドの名称については 1 ~ 25 の番号を用いた（第9図）。

B 基本層序

基本層序は試掘確認調査で確認されたものと相違ないため、分層及びその名称は試掘確認調査のものを踏襲し、本調査で細分したものについては土層名称にアルファベットを付加して表した。また、調査の最後に調査区中央 (11E 区) と北端 (15C 区) でトレンチによる深掘りを行い縄文時代以前の堆積土を確認したが、その際、新たに確認された土層については X ~ XIV の名称を付した。以下、基本層序を記す。なお、調査区内で存在を確認できなかった層は欠番となる。

- I : 灰色粘土 (5Y6/1) I 層表面が現在の田面とはほぼ同じ標高である。旧耕作土。
- II : 灰色粘土 (5Y6/1) しまり、粘性共に強。炭化物粒子を少量含む。
- III : 褐灰色シルト質粘土 (10YR6/1) しまり、粘性共に強。古代の遺構確認面。
- IV : 灰褐色粘土 (10YR5/2) しまりやや強、粘性強。
- V a : 暗灰色粘土 (N3/) しまりやや強、粘性強。灰褐色粘土を基本とし、炭化物や暗灰色粘土が多量に混入する。
- V b : 灰褐色粘土 (5YR4/2) しまりやや弱、粘性強。腐植物を多く含む。炭化物粒子を少量含む。
- V c : 暗赤褐色腐植土 (5YR2/2) しまり弱、粘性やや強。腐植物層。
- V d : 灰褐色粘土 (5YR4/2) しまりやや弱、粘性強。V c 層を基本とし、暗灰色粘土がブロック状に多く混入する。
- VI a : 灰色粘土 (5Y5/1) しまりやや強、粘性強。有機質に富み、土色は黒みがかる。炭化物粒子をやや多く含む。炭化物の少ない部分もある (VI a')。縄文時代の遺物包含層。
- VI b : 灰色粘土 (5Y6/1) しまりやや強、粘性強。部分的に直径 5mm 以下の炭化物細粒を少量含む。縄文時代の遺物包含層 / 遺構確認面。
- VI c : 灰色粘土 (5Y6/1) しまりやや強、粘性強。VI b 層と比べわざかに粘土分強く鉄分の含有も多い。15 グリッド以北では本層上有機質に富んだ暗灰色土層が形成される。縄文時代の遺物包含層。
- VI d : 灰色弱シルト質粘土 (5Y6/1) しまりやや弱、粘性強。VI 層と VI 層の漸移層的な土質である。縄文

1 調査の概要



第9図 グリッドの設定と基本土層堆積図

時代の遺物包含層。

Ⅶ：調査区内では該当する土層なし。

Ⅷ a：灰色砂質シルト (5Y6/1) 部分的に砂分少ない。しまり強、粘性やや強。直径 1mm 大の炭化物をわずかに含む。縄文時代の基盤層。

Ⅷ b：灰色シルト (5Y6/1) Ⅷ a 層より粘土分強い。しまり、粘性共に強。

Ⅸ c：灰色弱シルト質粘土 (5Y6/1) しまり、粘性共に強。灰白色微粒子を少量含む。

Ⅹ a：褐色灰色弱シルト質粘土 (10YR4/1) しまりやや弱、粘性強。直径 1mm 大の炭化物を少量含む。

Ⅹ b：黒褐色粘土 (10YR3/1) 有機質に富む土層。しまりやや弱、粘性強。直径 1mm 大の炭化物を少量含む。

X a：灰色砂 (5Y6/1) 中～細粒砂。しまり、粘性共に弱。

X b：灰色砂質粘土 (5Y5/1) X a の粘土分強い土層。しまりやや強、粘性強。層表に直径 3mm 大の炭化物をやや多く含む。

X I : 黑褐色粘土 (10YR3/1) しまり弱、粘性強。ブロック状の X b 層をわずかに含む。直径 1mm 大の炭化物粒子を少量含む。

X II : 灰色粘土 (5Y5/1) を基本に直径 5mm 大の炭化物粒子を多量含む土層。しまりやや弱、粘性強。

X III a : 黑褐色粘土 (10YR3/1) しまりやや強、粘性強。直径 5mm 大の炭化物を含む。灰色粘土とのラミナ層。

X III b : 黑褐色粘土 (10YR3/1) X III a 層と比べ、ラミナが不明瞭となる。

X IV : 灰色シルト質粘土 (5Y5/1) しまりやや弱、粘性やや強。腐植物含む。

2 遺構

A 遺構の概要と記述の方法

検出した遺構は古代の杭 1 本、縄文時代の土坑 7 基、炭化物集中 1 か所、ピット 4 基で、古代の杭はⅢ層、縄文時代のものはすべて VI b 層で検出した。縄文時代の遺構では SK 1 と SK16 で土器片が数点出土したが細片であり、時期の詳細は不明である。遺構はすべて自然流路北岸に形成された自然堤防上に設けられている。

遺構番号は、現地調査で付したものそのまま使った。効率よく調査を進めるために調査区を 2 つに分け、併行して調査を行ったため、担当した調査員がそれぞれ個別に連番を付した事 (001 ~ 101 ~) と、現地調査終了後に再検討を加え、自然の起伏と判断したものは除外した事から、遺構番号には欠番が生じている。遺構種別の表記についてはアルファベットの略号、すなわち、土坑 : SK、炭化物集中 : SC、ピット : P というように、一般的に用いられている遺構略号を用いて表記した。また、本文及び遺構一覧表の記載に際しては、和泉 A 遺跡 [荒川他 1999] の分類に準拠して平面・断面形態の表記を行った (第Ⅳ章 2B 参照)。

B 各 説

1) 土 坑

7基検出した。SK16以外は非常に浅く、性格は不明である。SK16はV層が遺構に落ち込む事から、追跡廻絶時には埋没しきっていなかった事がわかる。遺物はSK 1・SK16から土器細片が数点出土したが、時期的な詳細は不明である。

SK 1 (図版3・5・30)

11B区に位置し、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径87cm、短径30cm、深さ9cmを測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-23°-Eを指す。覆土は炭化物を少量含む灰色粘質土である。2層に分層し、1層には腐植物が含まれる。遺物は純文土器細片が数点出土したが、図版に掲載し得るものではない。

SK 2 (図版3・5・30)

11A・B区に位置し、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈する。長径74cm、短径56cm、深さ9cmを測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-62°-Wを指す。覆土は2層に分層した。炭化物を少量含む灰色粘質土がレンズ状に堆積する。遺物は出土していない。

SK 3 (図版3・5・30)

11A区に位置し、平面形は不整形、断面形は弧状を呈する。長径40cm、短径30cm、深さ8cmを測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-58°-Eを指す。覆土は2層に分層した。いずれも炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK 4 (図版3・5・31)

11A区に位置し、平面形は方形、断面形は弧状を呈する。長径32cm、短径24cm、深さ4cmを測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-48°-Wを指す。覆土は単層である。遺物は出土していない。

SK 9 (図版3・5・31)

11B区に位置し、平面形は円形、断面形は弧状を呈するが、全体的に壁面には起伏がみられる。長径84cm、短径82cm、深さ8cmを測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-84°-Eを指す。覆土は2層に分層され、いずれも炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK 10 (図版3・5・31)

11B区に位置し、平面形は楕円形、断面形は弧状を呈するが、壁面には全体的に起伏がみられる。長径64cm、短径54cm、深さ11cmを測り、緩やかに立ち上がる。長軸方向はN-45°-Wを指す。覆土は2層に分層され、1層には腐植物や炭化物が少量含まれる。遺物は出土していない。

SK 16 (図版3・5・31)

11C区に位置し、平面形は楕円形、断面形は長軸方向は弧状、短軸方向は緩やかな台形状を呈する。長径3.45m、短径1.86m、深さ45cmを測り、西壁以外は急激に立ち上がる。長軸方向はN-55°-Wを指す。覆土は炭化物を少量含むシルト質粘質土単層である。遺物は1層から土器細片数点が出土しているが、図版に掲載し得るものはない。

2) 炭化物集中

S C 1 O 1 (図版3・5・31)

13C 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は凸凹した弧状を呈する。東端は擾乱により失われる。長径 158m 以上、短径 144m、深さ 0.13m を測り、立ち上がりは緩やかである。長軸方向は N - 59° - W を指す。覆土はシルト質粘土で 2 層に分層され、1 層は全体的に直径 3 ~ 10mm 大の炭化物粒子が多く含み、特に下方には直径 20mm 前後の炭化物塊が多くみられる。覆土中からは骨片や炭化した種子が出土し、自然科学分析を行ったが（第Ⅲ章4参照）、遺構の性格を決定づけるような所見は得られなかった。

3) ピット

調査区西端の 11 A 区で 3 基 (P3 ~ P7)、11 B 区で 1 基 (P8) 検出した。深さはいずれも 5cm 前後と浅く、断面形も弧状やそれに類するもので占められており、建物の柱穴の可能性は低い。平面形は円形もしくは隅丸方形を呈し、直径は 10 ~ 30cm を測る。覆土は VI b 層を基本とし、粒子状炭化物や小ブロック状の粘土が混入する。P 5 ~ P 8 では覆土全体が酸化してやや黄色がかる。遺物は出土していない。

4) 杠 (図版2・5・30)

一次掘削中に 8C 区で検出した唯一の古代の遺構（杭 1）である。直径 20cm、全長約 50cm で樹皮のついた丸太材が用いられている。周辺に杭やピットは検出できなかった事から、建物に伴うものではなかろう。材は水を含んで脆弱であり、取り上げられなかった。

5) 自然流路 (図版1 ~ 4・32 ~ 34)

9 ~ 10・A ~ E 区に位置する東西方向の流路である。新旧 2 本の重複した流路を検出したが、当初、古い方の流路（流路 2）は識別が困難で、VI 層と認識していた。土器の年代や土層堆積状況などからみて、遺跡が営まれていた時期（VI b・VI c 層堆積過程）を通して流路 2 は序々に埋まっていき、流路 1 は遺跡の癡絶前後に形成されたものと考える。なお、更に古い流路もこれらの下で確認したが、誰層堆積以前のものであり、調査は行わなかった。こちらは砂や砂利が堆積し、湧水也非常に多い事から、現在も地下流路として機能していると考えられる。

流路 1 (図版2・3・5・32・33)

流路 2 の埋没後に再形成された流路である。VI a 層堆積段階には埋没し、V 層堆積時には消滅する。川幅は調査区東端が最も狭く 2.9m を測る。10B 区付近で最も広くなり (5.8 m)、調査区西端では約 4 m と少し狭まって調査区外に延伸する。深さは調査区東端で約 110cm (川底標高 0.8 m)、D グリッドライン上で約 120cm (川底標高 0.8 m)、調査区西端で約 80cm (川底標高 1.1 m) と、海岸に近い方が川底がやや高くなっている。断面形は調査区東端では弧状、D グリッドライン上では台形状を呈し、川底は約 2 m 幅の平坦面を形成するようになる。この付近で断面形態は最もはっきりするが、西へ向かうにつれ川底が上昇し相対的に浅くなると同時に川幅も 5.8 m と広くなり、断面形は浅い窪み状のまま調査区外に延伸する。C グリッド以西では川底は約 4 m と狭まるが、断面形に変化はなく、浅い窪み状のまま調査区外に延伸する。調査区西端では川幅は約 4 m と狭まるが、断面形に変化はなく、浅い窪み状のまま調査区外に延伸する。

遺物は縄文時代中～後期の土器片數十点と石錐2点、不定形石器1点、自然礫9点が出土した。土器は11Dの川底から北岸立ち上がりにかけて(7層)集中するが、10Bの川底中央部でも若干、まとまって出土した。周辺の遺物分布からみて、これらは北岸から廃棄されたか流れ込んだものであろう。前者は流路2の北岸立ち上がり付近で出土したものとの関連が窺え、流路1と2が一部、北岸を共有する可能性が高い。1～6は11Dから、6・7は10Bから出土している。石錐(78・89)は10Bの川底中央部から、不定形石器(70)は11D 21の川底際から出土している。

流 路 2 (図版2・3・5・32～34)

流路1調査中に川底から南側に腐植物の薄層(8層)が伸びているのが確認され、流路である事が判明した。川底の遺物出土状況から、北岸の一部は流路1と共有する可能性がある。湧水量は非常に多く、當時3～4台のポンプを稼働させても追いつかない状況であり、遺物も流路1との重複部分に限定される事が判明したため、堆積土の除去は大半を重視で行い、川底と重複部分のみ人力で行うという調査方法を採った。

流路2の川幅は調査区東端で12.4mを測る。前述の状況からみて川幅はおおよそ12m程度で一定していたものと推測する。深さは調査区東端で約150cm(川底標高0.5m)、Dグリッドライン上で約140cm(川底標高0.6m)、調査区西端で約160cm(川底標高0.4m)と、西に向かって若干深くなる。断面形は基本的に弧状を呈するが、川底は幅の広い平坦面(幅約5.5m～7.2m)を形成する。南側は川底から50～60cmほど立ち上がって一度棚状に平坦面を形成し、そこから緩やかに南岸に向けて立ち上がる。

堆積土ははじめに述べたとおりVI層と酷似する灰色粘土を基本とし、下層～川底には腐植物が多量に混入する。中～上層の粘土は南側から流入して流路を埋めており、調査区の南側に大規模な氾濫を繰り返す河川の存在が予想される。

遺物は流路1との重複部分、特に10C・10D付近(10層)に大半が集中する。これらは前述したように北岸から廃棄されたか流れ込んだものであろう。縄文時代中～後期の土器片が大半を占めるが、細片が多く、図示し得たものは図版6～4・8～22と少ない。土器以外では、石錐1点(57)、敲石2点(95・96)、不定形石器(65・69)2点、軽石1点、自然礫27点、トチ・クルミなどの種子類がある。

3 遺 物

遺物は古代の土師器・須恵器・杭、縄文時代の土器・石器で、そのほかに自然礫・植物種子などが出土した。遺物の総量はコンテナ15箱分である。自然礫は流路を中心に、包含層からも出土しているが、被熱や人為的な使用痕は確認できず、基本的には流路によって遺跡にもたらされたものと考えた。植物種子にはトチ・クルミなどがあるが、これらについても人為的な痕跡は窺えない。以下、遺物の主体を占める縄文時代の土器・石器、古代の土器・木製品の順に説明をする。

A 縄文時代の遺物

1) 土 器 (図版6～8・35～37)

概 要

土器は、包含層(VI層)を中心に、流路1・2からもまとめて出土している。時期的には中期前葉、中期後葉～後期中葉に比定されるものであるが、主体を占めるのは後者で、土器型式的には大木9式新

段階～加曾利B1式期に概ね収まりそうである。

出土した土器は小破片が大半を占め、器形全体が把握できるまでに復元できたものは、わずか2個体のみであった(15・38)。個体数が算出しがやすい底部片だけを見ると、図化していないものも合わせ、28個体分を数える。縄文原体はRL(R)がほとんどを占めた。なお、遺構に伴うものはわずかな細片のみであり、遺構の時期判別に有効なものはない。

分布状況

概して、土器の大半は自然流路の北側である

10～12グリッド(特に11グリッド)に集中し、流路の南側(7～9グリッド)にはわずかしか存在しない。そのほか、13グリッドには遺物が少量出土したが、14グリッド以北では遺物は確認できなかった。次に垂直分布についてみてみると(第10図)、VIb・VIc層の境付近に集中する傾向がある。また、下記のように上下幅をもって接合する例もあるが(38)、時期的に古い土器が下位にまとまって位置している。

土器の接合状況についてみてみると、各々がまとまった範囲で出土しており、原位置がほぼ保たれているものと判断する。特に38に関しては、平面的にまとまるだけでなく、垂直分布に30cmほどの上下幅がある。38の周辺は土層中に炭化物が混じる状況であったが、壁の立ち上がりは確認できず、調査時には遺構と認定しなかった。しかし、このような分布状況からみると、遺構が存在した可能性は否定し得ない。

記述の方法

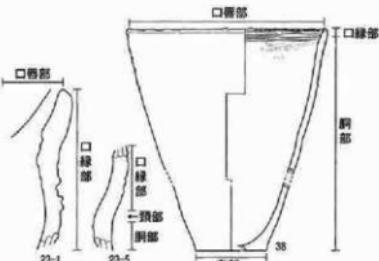
記述に際しては、自然流路、包含層の順に記述する。報告番号の付与については、個体ごとに報告番号を付し、個々の破片に関しては枝番号を追加して表した。また、包含層出土土器に関しては、土器型式をもとに3時期に分けて記載し(中期前葉、中期後葉～中期末葉、後期前葉～後期中葉)、最後に時期細別不能なものを載せた。土器の分類については資料数が少ないとなどを勘案し、本稿では器形及び型式による分類項目を設けず、詳細は第Ⅳ章5で述べることとする。土器の部位名称については「北野遺跡Ⅱ(上層)本文編」[高橋保雄ほか2005]の「第18図 土器計測基準及び部位名称」を参考に、本遺跡における名称図(第10図)を作成した。なお、土器観察表に関しては、個体ごとに一つの観察結果を掲載し、報告番号は枝番号を省略して整理した。「残存率」に関しては、破片が大半で割り出しが困難であるため、確実に分かるもののみ記載することとする。

各 説

流路 1(1～7)

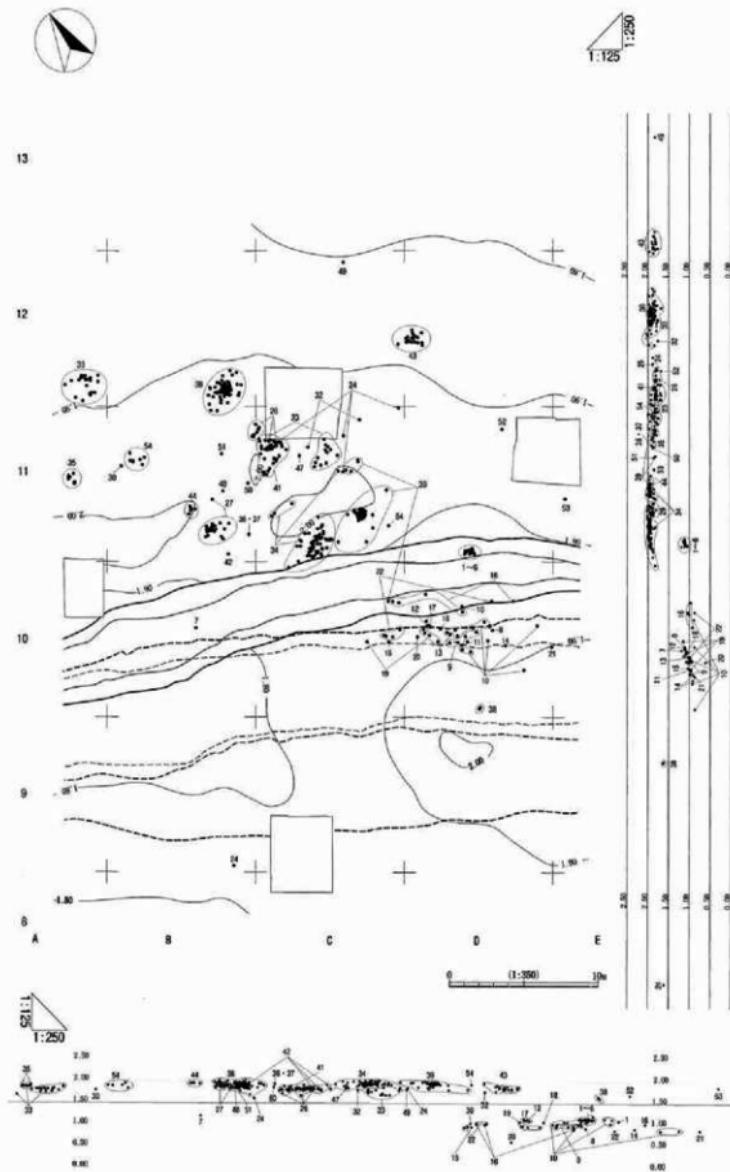
流路1では、主に11D11(北岸斜面部)より土器が出土したが、小破片が多く、図化できたものは口縁部や比較的の施文が分かりやすいものにとどまった。いずれも最下層である7層からの出土である。主に中期後葉(大木9～10式併行期)～後期前葉(三十桶場式併行期)の土器が出土した。

1～6は大木9～10式土器の小破片で、11D11より出土した。1は深鉢片で、口縁部(1-1)は外反気味に開き、縁部は丸くおさまる。脇部施文は、弧状の沈線区画内に縄文RLを施す。後述する11・12と同一個体の可能性がある。2～4はそれぞれ沈線区画内の縄文が充填された部分であろう。区画の形状にそって縄文原体を転がしているため、縄文は異方向に施文される。5の口縁部は内湾気味におさまる。



第10図 土器部位名称

【高橋ほか2005を一部改訂】



第 11 図 土器出土分布図

破片下部には沈線が付く。7は三十幅場式の可能性が高い深鉢底部片である。底部外面は剥落しているが、後述する33-5のような台付きの底部と考える。施文は爪形状刺突文が施され、その下部はヨコナデされる。外面のみスヌが付着する。

流路2(8~22)

流路1の南側に位置し、若干古い流れになる。流路1と同時期の遺物が混在しており、流路1と2は北岸部分を共有している可能性がある。土器は、自然流路1と2の重複する付近、特に10D中央付近に多く出土した。出土層位はいずれも最下層である10層(底植物層)からの出土である。主に中期後業(大木9~10式併行)~後期前業(南三十幅場式併行)の土器が出土した。

8~14は大木9~10式の深鉢破片である。8・9は同一個体の可能性がある。残存部位より推測すると、胴部で膨らみ、頭部が緩く括れ、口縁部はやや外反する器形である。文様モチーフは沈線による渦巻文や横位のJ字状文であり、その中を縦文RLで充填する。外面共に磨かれ、器壁が薄く硬質である。大木9式新段階。10は胴部片である。10D8・9・13・18より出土した。下方に向かって器壁が厚くなり、かつ内傾する様子から推測すると、胴部中位から下半にかけての破片である。地文は縦文LRで、磨消や沈線により文様を区画している。外面にはコゲ状の炭化物がこびりつく。11・12は外反気味に聞く大木式の深鉢口縁部である。11は弧状の沈線区画内に縦文LRが施され、1と同一個体の可能性がある。14は口縁部付近の胴部片で、弧状の沈線区画内に縦文RLで充填する。後述する24と同一個体か。15は沈線文系の深鉢である。10C22からつぶれた状態でまとめて出土したが、底部付近を欠く。口縁部には4単位のC字状の貼付文が付され、その頂部が口縁部にいたって波状口縁の形態を成す。さらに、口縁部に沿って1条の横位沈線をめぐらせ、口縁部無文帯を作り出している。その横位沈線直下から、胴部には斜行沈線による格子目文が描かれる。小さめの底部から内湾気味に立ち上がり、胴部上半がやや膨らんで口縁部にいたり、そのまま内湾気味におさまる。三十幅場式新段階(網取II式併行)に比定されようか。内外面ともに炭化物の付着が顕著で、とくに口縁部にはコゲ状の炭化物が厚くこびりつく。16は南三十幅場式最新段階の深鉢片である。口縁部(16-1)には扁平な円形突起が付され、比較的緩やかな波状口縁を呈する。更に口縁部に沿って1条の横位沈線がめぐり、その両脇には縦位の短沈線による刻みが施される。胴部片(16-3-4)には細密な集合沈線が描かれ、空白部には不整円形刺突文が充填されることから、専用で判然としないが、これと同じ施文が16-1・2にもされていたと考えたい。いずれも内面には炭化物が付着する。

17~19は粗製の深鉢片である。17の地文は縦文RLで、緩やかな波状口縁を呈する。19は器壁が厚く、比較的大きな深鉢であろう。20~22は底部片である。

包含層(23~54)

中期前業(23)

23は大木7b式の深鉢である。本遺跡出土土器中、最古相を呈する土器で、中期前業に位置づけられる。この時期の土器は当該資料のみである。11C14からまとめて出土したが、口縁~胴部上半の破片のみで下半部を欠く。周囲からは石器の剥片も多く出土した。口縁部は4単位の大波状口縁を呈し、波頭部のモチーフは少なくとも2種類ある(23-1・2)。胴部から口頭部にかけては緩やかに屈曲し(23-5)、口縁部は内湾しながら開くが口縫部は短く外反する(23-1~3)。横位の隆起線に沿う2条の側面圧痕文によって、口縁部上方に無文帯が区画される。これより下位には、大枠を隆起線が縁取り、それに沿って側面圧痕文を施した円形か半円形などのモチーフが描かれ、胴部には縦文RLが施される。ほかには、極

小さな破片が数点出土したのみである。

中期後葉～中期末葉（24～32）

いずれも大木9～10式に比定される。24～26は、それぞれ口縁部及び口縁部付近の破片である。24は浅鉢の可能性がある。口縁部は内湾しておさまり、平面形は楕円形を呈する。二重の楕円形区画の内側には、縄文RLが充填される。半径2.5m圏内に破片が散在していた。25は口縁部に1条の沈線をめぐらせ、口縁部無文帯を作り出し、楕円形の沈線区画内には縄文RLを充填する。26は波状を呈する口縁部で弧状の沈線区画内を縄文RLで充填する。24～26はいずれも内外面ミガキが施される。破片のため全体の文様モチーフには言及し難いが、大木9式新段階のものと考える（第IV章5で詳述）。27～30は充填縄文の胴部片である。いずれも内外面にミガキが施され薄手で硬質な土器片である。27は同一個体の破片が20点近く、11C6よりまとめて出土した。29・30は自然流路2出土の9と同一個体の可能性があるか。31・32はともに大木式の粗製土器である。31は単位縄文LRが施された深鉢の胴部片で、9 D 5（流路2南側）からの出土である。32は口縁～胴部にかけて、大波状口縁を呈し、地文には縄文RLが施される。口縁部は丸みを帯びながら内湾し、口唇部はナデが施され丸くおさまる。

後期前葉～後期中葉（35～40）

33は、三十編場式最新段階に比定される深鉢片である。「く」の字状に屈曲した口縁部（33-1）には、口唇部および口縁部縁辺に沿って器面に対し斜め前面から施文具を入れた（場合によっては起こして粘土を隆起させたような）、横位の爪形状刺突文が施される。胴部（33-2～4）は、棒状具で施文された円形刺突文と、前述した爪形状刺突文、沈線で構成される。縦位沈線間は、円形刺突や爪形状刺突が充填される。底部（33-5）は台付で、立ち上がってまもなく、円形刺突文と爪形状刺突文が施される。圓化したほかにも破片が出土しており、それらの多くは爪形状刺突文であることから、同文様が主体の土器であったと推察する。内外面ともにミガキが施され、炭化物が付着する。器壁は薄いが硬質である。36は三十編場式の口縁部突起、37は同深鉢の柄状把手である。34は、多条沈線文系の南三十編場式新段階の深鉢である。口縁部には円形突起に上から刺突を入れるもの（34-1）と、波頂部（扁平化した円形突起）に上から穿孔するもの（34-2）があり、いずれも直下は小さく穿孔される。16同様、口縁部に沿って突起と突起をつなぐ様な1条の横位沈線が配される。頭部は横位の多条沈線で区画され（34-4）、その上部には円形刺突文が付くが、これはアチャ平造跡上段【富樫16-2002】出土の2029の南三十編場式新段階の土器などに類例がある。頭部で区画された口縁部・及び胴部文様帶には5～8条の横位多条沈線文が描かれ、空白部には縄文RLが充填される。内外面とも炭化物が付着する。35は、地文のRを縦位の結束縄文で区画する深鉢胴～底部片である。調査区東端付近の11A18より単独で出土した。後期前葉に比定できよう。38は図上復元した平行沈線文系の深鉢で、粗製の加曾利B1式土器（もしくは同型式併行期）に比定されようか。主に12B16-21を中心まとめて出土した。器形は、底部からほほ直線的に開いて口縁部にいたり、口唇部でやや内湾しておさまる。口縁部には4単位のごく小さなつまみ上げによる突起が不均等に配され、小波状口縁を呈する。さらに、口唇部内面には棒状具による押捺が不規則に施され、その下には2条の太い横位沈線が巡る。口縁～胴部上半にかけては、2条1単位の平行沈線が2単位巡り、空白部は櫛齒状沈線文で充填される。これより下位は無文帶となる。2単位の平行沈線には難ぎ目があるが、規則性はない。底部外側には網代压痕が認められる。内外面ともにミガキが施され、上半には炭化物が付着し、補修孔が1対ある。他に胴部無文帶部分の破片が出土したが復元には至らず、上半部と下半部で図上復元をするにとどまった。

細別時期不明 (39~54)

39は、棒状具による不整形で細かい円形刺突文が施された土器である。口縁部は緩やかな波状を呈し(39~8)、頸部で屈曲して膨らんだ胴部へ至る。口縁部には口唇部に沿って2列の刺突列が配され、波頂部からは継位の刺突列が垂下し、ちょうど胴部の膨らんだ辺りで横位の刺突列と合流、またはそのまま連続して横位に刺突を施す。横位の刺突列は、口縁部の形状(波状)に合わせて施文されているように見受けられる。この横位の刺突列直下から、さらに継位の刺突列が垂下する。底部(39~1)付近にも刺突文が付くが、モチーフは判断しかねる。ほかにも同破片が出土しているが、いずれも小破片である。この39に関しては第IV章5で詳述するが、三十種式新段階~南三十種式に類する土器であろうと考える。40は中期中葉の馬高式系の胴部小片であると考えた。7B15と調査区南端から単発的に出土した。41は地文に繩文RLが施された同一個体の粗製深鉢底~胴部片で、器面はざらつき磨耗する。42と同一個体の可能性がある。43は小波状を呈する口縁部(43~1)を有し、細密な横位集合沈線が施された深鉢口縁~底部片であり、外面ミガキが施される。底部には網代状圧痕が付く。44は内済した口縁部片と底部片で、地文には繩文LRが施されるが、全体的に磨耗しているため判然としない。45~46は、自然流路の南側から出土した数少ない遺物の一部である。45は8B20出土の深鉢胴~底部で、胴部には押圧繩文後、下端にナデが施される。46は8C14出土の底部片である。同一個体と推測した胴部の破片が100点近く出土したが、いずれも無文で小破片であり、復元が困難であったため図化しなかった。47~54は底部片であり、52~54の外底面には網代状圧痕が付く。特筆すべきは49であり、底面の形態が少々特殊である。底部に用いる粘土板を2つに折り曲げるようにして下方に反らし、その後両端をつまんで持ち上げている。その結果、底面は周縁部の一部だけが地面に接するような形態になる。類例を知らず、こうした造作を底部に加えた要因は不明である。設置した際の安定を図ったものか。12C15から単独で出土した。

2) 石器・石製品(図版9~11・38~40)

調査で得られた石器・搬入窓は遺物収納用コンテナ約6箱分である。これらのうち、石器は134点である。

記述の方法

資料の提示方法

資料の提示は実測図・写真・観察表を行い、本文で分析を加えた。土器同様、出土層位や出土位置による細別時期の特定が不可能であるため、器種毎に図化・掲載した。法量・重量・石材といった個々の基本的な諸属性は、巻末の遺物観察表に詳しいので、基本的に本文中では触れていない。

実測図の表現

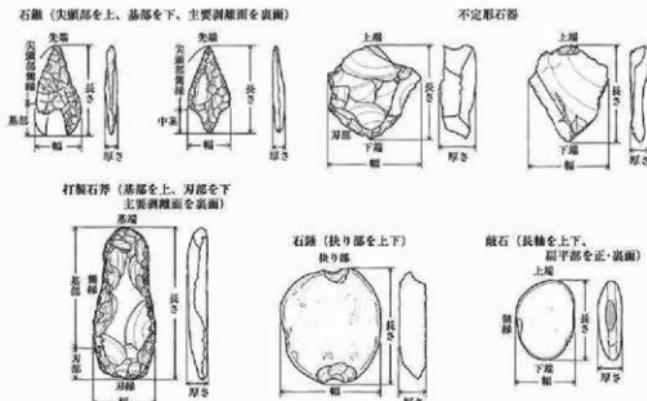
実測図における付着物や使用痕については以下の表現を用いた。石礫は、アスファルトと考えた黒色付着物の範囲をドットで示した。不定形石器は、刃部の範囲や使用部位を←→で示した。敲石は、敲打範囲をスクリーントーンで示した。打製石斧は、使用痕をスクリーントーンで示した。

縮尺率

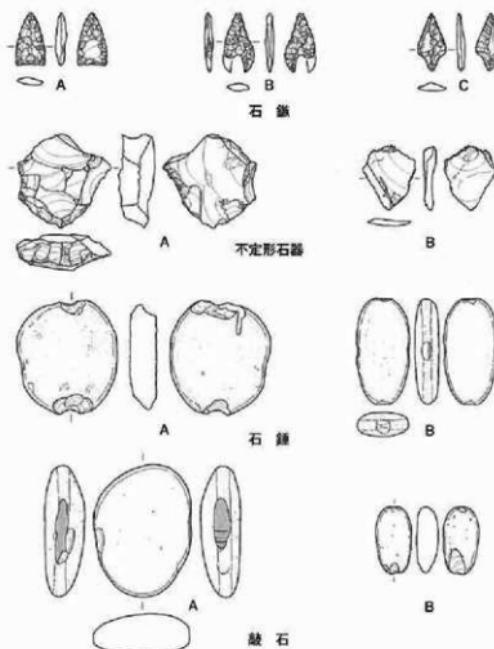
第1表のとおり、器種毎に統一した。また、図版にはスケールを付け、縮尺も記入した。

観察表の記載

石器・石製品の属性や諸特徴を記入した表である。観察表の記載項目は、掲載No.、出土地点・遺構名、層位、分類、計測値、石材、遺存状態、備考などである。



第12回 主な器種の並べ方及び部位名称と計測基準



第13回 石器分類図

分布状況

石器の大半は土器同様、自然流路北側の10～12グリッドに集中して出土した。流路南側の7～9グリッドはわずか4点であり、そのうち2点が石錐である。出土数の少ない流路南側からの石錐の出土は、その性格を表しているといえよう。自然流路とその北側近傍からは石錐が出土しており、漁労との関わりを示唆している。

剥片は11・12CDグリッドに集中して出土しており、接合資料もみられた。その分布状況から石材を選び込み、石器を製作していたことが推測される。第14図はこれらの出土位置を示すもので、接合資料は点数が多いため図を更に拡大した。

各 説

石器・石製品134点のうち、剥片以外はすべて図化し、剥片については接合資料を図化した。石器点数は多いとは言えず、あらかじめ頂立てして分類基準の全容を示すことはせず、各説の冒頭に分類基準を示すことをとする。

石 錐 (57～64)

尖頭状の狩猟具のひとつで、尖頭部・側縁部・基部(脚部)が作出され、左右がほぼ対称のものを石錐とした。包含層および流路から8点出土しており、その内訳は、円基が1点、平基が2点、凹基が1点、有茎が4点である〔鈴木1981〕。

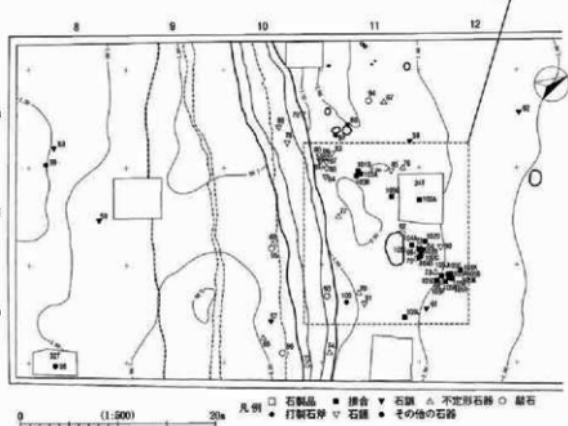
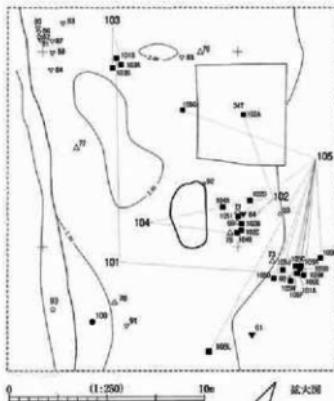
A類 (57～59)：基部が平らで中茎の無い平基無茎錐である。側縁が内

湾気味に膨らむもの (57・58) と尖頭が半円状で側縁が直線的なもの (59) がある。基部はやや抉れるもの (58) とはほぼ直線的なものの (57・59) がある。

B類 (60)：基部に抉りがあり、中茎の無い凹基無茎錐である。抉りが深く、側縁形状もやや膨らむ。

| 器種 | 石 | 不 | 石 | 錐 | 打 | そ | 剥 | 後 | 合 |
|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|
| | 定 | 形 | 錐 | 石 | 製 | の | 片 | 片 | 計 |
| 名 | 基 | 形 | 錐 | 石 | 石 | の | 片 | 片 | 計 |
| 点数 | 8 | 13 | 14 | 5 | 1 | 3 | 85 | 5 | 134 |
| 平均 | 2/3 | 1/2 | 1/4 | 1/4 | 1/8 | 1/4 | - | 1/3 | - |

第1表 石器組成と縮尺率



第14図 石器分布図

C類(61～64)：中基のある有茎鐵である。側縁が直線的なもの(61・62)と、尖頭部が緩やかな半円状で側縁が直線的なもの(63)、側縁が平行し五角形となるもの(64)がある。

出土位置は、57が流路2、59・63が流路南側、58・60～62・64が流路北側の包含層中である。包含層出土のものは、VIa～VIc層から出土している。

法量・重量の平均は、A類が長さ22.2mm、幅13.3mm、厚さ15mm、重量1.13g、C類は特大の64を除き、長さ25.2mm、幅13.7mm、厚さ5mm、重量0.97gである。石材は、57が溶結凝灰岩、58が凝灰岩、59がチャートで、60～64は珪質頁岩である。

アスファルトと考える黒色ないし茶褐色の付着物は6点で確認した。58・60・62・64は、表・裏面とも二等辺三角形状に付着がみられる。

不定形石器(65～77)

調片を素材とし、刃部と思われる部分に二次調整や使用痕をもつものである。13点出土した。刃部の形状で分類した。

A類(65～69)：厚手の調片を素材とし、刃部に急角度の二次加工を施し、鋸歯縁状とするもの。

65は急角度の剥離を右側縁部の下位に施し、刃部を作出する。刃部は二次加工によりL字状を呈する。66は急角度の剥離を連続的に施し、刃部を作出する。右側縁部は正面に大きめの剥離を施した後、裏面に浅角度の繊かな剥離を施している。右側縁部の下位から左側縁部にかけては比較的大きな剥離を片面(正面側)に施し、刃部ラインを外湾状にしている。67は急角度の剥離を連続的に施し、刃部を作出する。右側縁部の上位は比較的大きめの剥離により、弧状に刃部ラインを作成している。左側縁部には階段状の剥離が見られ、刃部ラインを锯齒状にしている。68は下位に急角度の剥離を施し、锯歯縁状の刃部を作出する。刃部ラインは外湾状を呈する。69は急角度の剥離を裏面右側縁部に施し、比較的などらかな锯歯縁を上半に、凸凹の明瞭な锯歯縁を下半に作出する。刃部ラインはほぼ直線状を呈する。

B類(70～77)：比較的薄手の調片を素材とし、刃部に小型ないし微細な剥離がみられるもの。

70は右側縁部に細かな二次加工が付く。上半は正面から裏面側へ、下半は裏面から剥離される。71は右側縁部の下位に、使用による微細剥離がみられる。左側縁部の上位裏面と右側縁部の中位には微細剥離がみられる。72は右側縁部に正・裏面とともに使用による微細剥離がみられる。左側縁部の上位には微細剥離がみられる。73は左側縁部に裏面から正面へ二次加工を施す。74は下端部に二次加工を施し、その部位が使用により光沢を帯びる。右側縁部の裏面には微細剥離がみられる。75の右側縁部の上位には急角度の剥離を施し、更に小さめの二次加工が付く。左側縁部の上位には微細剥離が付き刃部としている。76は、右側縁部の中位と左側縁部に微細な二次加工を施し、その部位の裏面は使用により光沢を帯びる。77の右側縁部には微細剥離が確認できる。石材はすべて珪質頁岩である。

出土位置は、70が流路1、65・69が流路2で、そのほかはすべて流路北側の包含層中からの出土である。出土層位は石錐同様、VIa～VIc層から出土している。

石錐(78～91)

円形・梢円形の扁平疊に抉りを付けたものである。抉りの位置によって分類した。

A類(78～88)：扁平な円疊を素材とし、長軸上の両端部に正・裏面から打撃を加え、抉りを付けたもので11点出土している。

B類(89～91)：円形ないし長梢円形の扁平疊を素材とし、上下端と両側縁部に小さな抉りを付けたもので3点出土している。抉りは敲打により作出されている。敲打したか所は内湾状にくぼむものが多いこ

とから、敲石の92～94の敲打痕と区別した。敲打によりくぼみを作り出し、この部分を縄掛けとする石錘と考えた。

出土位置は、78・89が流路1の底から、79が川岸から、91が11D8、80～84・86～88は10B25付近と、大半は流路の近辺からであるが、85は流路1から8m離れた11C4から、90は流路1から11m離れた12C22から出土した。出土層位はやはりVI a'～VI c層にまたがる。

法量・重量の平均は、A類が長さ95.3mm、幅85.1mm、厚さ23.9mm、重量282.6g、B類が長さ90.3mm、幅60.6mm、厚さ28mm、重量259.2gである。

石材は、花崗岩・斑レイ岩・緑泥片岩・閃綠岩・凝灰岩など様々である。石材に拘らず、その目的にかかった手頃な素材を選んでいるといえよう。

敲 石 (92～96)

片手ないしは両手で把持できる大きさの砾の表面に、使用の結果付いたと推測する敲打痕をもつ石器である。5点出土している。使用痕の位置をもとに分類した。

A類(92～94)：長梢円形の扁平礫を素材とし、上下端部もしくは側縁部に広い範囲の敲打痕が付く。92の両端部にある敲打痕は、端部だけに留まらず、側縁にまで達している。また、内済状に小さな抉りが付く。93は両側縁部に敲打痕が付き、左側縁部の敲打範囲外縁は敲打時の衝撃により、一部剥離している。右側縁部の敲打範囲下位には横位の線条痕が付く。94は右側縁部に敲打痕が付く。敲打面は大きく2面存在する。

B類(95・96)：長梢円形の扁平礫を素材とし、上下端部に敲打痕が付く。敲打の衝撃が大きく、大小の剥離も見られる。パンチとしての使用を推測する。

出土位置は95・96が流路2で出土したほかは、すべて流路北側の包含層中から出土している。出土層位はVI a'～VI c層にまたがる。

完形品を対象とした法量・重量の平均は、A類が100.5mm、幅59.5mm、厚さ34.5mm、重量317.9g、B類が長さ72mm、幅35.5mm、厚さ21mm、重量91.2gである。概して、A類がB類に対して大きく重い傾向にある。石材は、92～94は安山岩、95は花崗岩、96は泥岩である。

打製石斧 (97)

流路北側の包含層中から1点のみ出土している。大きさに対して比較的薄手であり、刃部幅が広く、基部幅が狭い。刃部から基部への側縁ラインはゆるやかな内湾状を呈し、いわゆる「短冊形」となる。石材は頁岩である。正・裏面に一部自然面が残る。剥片を素材とせず、手頃な大きさの石を選んで加工したものである。二次加工は両面に施され、側縁部は大まかに形を整えた後、細かい剥離を加えている。正・裏面の二次加工は浅角度で、基部断面形はほぼ菱形を呈する。刃部は正・裏面からの剥離により両刃を成しており、両面は使用によって摩耗している。

その他の石器 (98～100)

98は試掘確認調査時に出土した細粒軟質凝灰岩である。上端に1か所大きな剥離が付くが、ほかは未加工である。正面中央に、長さ2.5cmほどの条痕が横位に付く。99の石材は斑レイ岩である。梢円形の扁平礫を素材とする。正・裏面とも風化が激しく不明瞭であるが、下端部は正・裏面から剥離されている。100の石材は斑レイ岩である。長梢円形の扁平礫を素材とする。99同様、風化が著しく不明瞭であるが、左側縁部に正・裏面から剥離されている。

接合資料(101～105)

包含層出土石器群では5例の接合資料が得られた。接合した石器の总数は23点である。すべて図化した。各接合資料の枝番は図版11、105について展開面を図版11に、作業段階を図版40に提示した。

101は剥片2点で構成される接合資料である。図の上面が打面で同一方向に101-2、101-1の順に横長剥片を剥離している。102は剥片4点で構成される接合資料である。右側面から小型の剥片102-1・2・3を剥離した後、打面を90°転移し102-4を剥離している。なお、102-4の剥離前には打面に調整剥離が施される。103は石核1点と剥片1点で構成される接合資料である。節理面を持つ礫を素材とする。103-1は打面を転移して様々な方向から小型の剥片を剥離した石核で、103-2は右側縁部の下位の剥離作業を行った際に、打面作出のため剥ぎ取った剥片と考えられる。103-2の剥離後下面に数回の剥離を行った後、これ以上の剥離を止めている。104は剥片2点で構成される接合資料である。節理面を持つ礫を素材とする。左側縁部を打面として節理面に覆われた104-1の横長剥片を剥離する。その後上面に打面を転移し縦長剥片を剥離した後、104-2の縦長剥片を剥離している。105は節理面をもつ亜角礫を素材とする接合資料で、剥片12点が残核1点に接合した。①～④の段階は石核調整の段階と考える。105-1の正面には、E面方向からの先行する剥離痕が見られ、石核打面を作出する前の調整剥離と考える。105-1と105-2は直接の切り合い関係はない。105-1は、礫表皮を剥ぎ取った資料である。105-2は石核下端部からの剥離で、正面の一部に礫表皮が残り、先行する剥離痕が付いている。この先行する剥離痕は、105-1同様打面位置のE面とは90°の関係にある。105-4は2点が接合するが、剥離方向は90°方向で、先行する正面の剥離痕も90°方向である。105-5も同様に90°方向からの剥離で、以上、これらの剥離は目的とする剥片の剥ぎ取り部位を調整するため礫表皮を剥ぎ取った行為といえるであろう。次の⑤～⑧の段階は、いよいよ目的とする剥片の剥ぎ取りである。剥離の順番は、105-6と8に切り合がなく、その後105-10と105-11が剥離される。105-6～11とも平坦な打面(E面)から縦長の剥片を剥ぎ取ろうとしているが、その多くは端部が大きく反り返り、打面から3cmほどで剥離が止まっている。唯一105-11のみうまく力が抜け、長い剥片を得ることができた。

このように目的とする剥片の多くが、当初目論んだ長さを得られなかつたことから、大幅な打面の変更を次の段階で行っている。105-6・8・10の剥離端部付近に新たな打面を作成すべく、打面再生を試みた。その後、A面に対し、新打面から複数の剥片を剥離するものの縦位置2cmで階段剥離てしまい、この段階でも想定した剥片が得られなかつたのであろう。これ以上の剥離を断念している。105-12は新断面に対する調整剥離であろう。いずれも石器を製作する上で必要な剥片を作出するために発生した、兩次的な剥片である。石材はすべて珪質頁岩である。これらの接合した剥片は5例であり、遺跡から出土した剥片も少数であった。またその形状は小型で反り返るものも存在していることから、良好な剥片が得られなかつたことが窺える。

B 古代の遺物(図版8・37)

Ⅲ層上面から土師器杯1点(56)と杭1点が出土した。杭については遺存状態が悪く取り上げる事ができなかった。試掘確認調査時にも若干の土器片が出土しているが、図示したのは30Tから出土した須恵器杯の小片1点(55)のみである。55は無台杯と考えた小片で、復元口径は15.0cmである。56は無台杯で、復元底径は5.6cmである。胎土は粉質で表面は摩耗しており、調整痕は確認できない。法量や体部側面観からみて、9世紀後半～10世紀代のものと考える。

4 自然科学分析

A はじめに

本稿では、発掘調査成果から課題とされた、1) 古環境及び土層の年代観、2) 植物利用、の2点を検証するため自然科学分析調査を実施する。

B 試 料

試料は、9B5・10D4・11D8 グリッド、T1 などから採取された土壌 38 点及び流路 2 覆土 8 層から採取された土壌 1 点、遺構 (SK16・SC101) 覆土の水洗選別 (細い目 1mm・3mm・5mm) で抽出・分類された微細遺物からなる。なお、14B グリッド (1 地点) のⅣ～Ⅴ層及び 11D グリッド (2 地点) のⅣ～Ⅴ層を対象に土層観察及び試料採取を行っており、後述する考察にはこれらの観察所見も併せて示す。

C 分析方法

放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析、種実分析、樹種同定の分析方法等については、当社の定法に従い実施している。各分析の詳細は、既存の調査報告書（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社 2004・2005a・2005b など）を参照されたい。

D 結 果

1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果（第2表）は、Vc 層植物遺体は $2,740 \pm 30$ BP、自然流路 2 覆土 8 層トノキ（種皮）は $3,980 \pm 30$ BP を示す。これらの試料の暦年較正結果（第3表、測定誤差 σ ）は、

第2表 放射性炭素年代測定結果

| 地點名 | 層名 | 種類 | 補正年代 BP | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 測定年代 BP | Code No. | 測定機関番号 |
|---------------|-----------|----------------|-------------------|------------------------------|------------|----------|------------|
| 1(1地点) Vc層 | 植物遺体 (木質) | $2,740 \pm 30$ | -25.52 ± 0.63 | $2,750 \pm 30$ | 9392-4 | | JAEA-62094 |
| 流路2 覆土 | トノキ（種皮） | $3,980 \pm 30$ | -27.44 ± 0.62 | $4,020 \pm 30$ | 9392-5 | | JAEA-62541 |

1)年代測定の算出には、Libby の半減期 5698 年を使用。

2)仰年年代は、1,950 年を基準として何年齢であるかを示す。

3)付記した誤差は、測定誤差 σ (測定の 68% が入る範囲) を年代値に換算した値。

第3表 暦年較正結果

| 地點名 | 層名 | 補正年代 (BP) | 暦年較正年代 (cal) | | | | 相対比 | Code No. |
|--------------|----|----------------|--------------|--------------|----------------|--------------|---------|----------|
| | | | σ | cal BC 905 | - cal BC 859 | cal BP | | |
| (1地点) Vc層 | | $2,738 \pm 31$ | 2σ | cal BC 971 | - cal BC 960 | cal BP 2,921 | - 2,910 | 0.997 |
| | | | 2σ | cal BC 958 | - cal BC 851 | cal BP 2,938 | - 2,918 | 0.977 |
| | | | σ | cal BC 2,555 | - cal BC 2,552 | cal BP 3,515 | - 4,482 | 0.567 |
| 流路2 8層 | | $3,906 \pm 31$ | 2σ | cal BC 2,195 | - cal BC 2,468 | cal BP 4,445 | - 4,418 | 0.093 |
| | | | σ | cal BC 2,577 | - cal BC 2,455 | cal BP 4,527 | - 4,405 | 0.971 |
| | | | 2σ | cal BC 2,418 | - cal BC 2,407 | cal BP 4,368 | - 4,357 | 0.012 |
| | | | σ | cal BC 2,375 | - cal BC 2,367 | cal BP 4,334 | - 4,317 | 0.006 |
| | | | 2σ | cal BC 2,364 | - cal BC 2,352 | cal BP 4,314 | - 4,302 | 0.011 |

1)計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB RENG.02 (Copyright 1986-2005 M Staiver and PJ Reimer) を使用

2)計算には表に示した丸める前の値を使用している。

3)1層目を丸めるのが慣例だが、前年較正結果や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、1層目を丸めていない。

4)統計的に真的値が入る確率は σ は 68%、 2σ は 95% である

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれをとした場合、確率的に真的値が存在する比率を相対的に示したものである。

第4表 珪藻分析結果

| 種類 | 生息性 | | | 環境指標種 | 東壁 | | | |
|---|---------|-------|------|----------|----|------|--------|--------|
| | 藻分 | pH | 底水 | | V層 | Vla層 | VIIla層 | VIIlb層 |
| Centric Diatoms (中心型珪藻類) | Euh | | | | 1 | - | 1 | 1 |
| Cocconeis spp. | Ogh-unk | unk | unk | | - | - | 1 | - |
| Araphid Pennate Diatoms (無縫瓣羽状珪藻類) | | | | | | | | |
| Synedra spp. | Ogh-unk | unk | unk | | 1 | - | - | - |
| Biraphid Pennate Diatoms (双縫瓣羽状珪藻類) | Ogh-unk | unk | unk | | 1 | - | - | - |
| Cymbella spp. | Ogh-unk | unk | unk | | 1 | - | - | - |
| Pinnularia spp. | Ogh-unk | unk | unk | | 1 | - | - | - |
| 短縫瓣類 | | | | | | | | |
| <i>Eunotus praeputia var. bident</i> (Ehren) Grunow | Ogh-hob | ac-il | j-ph | BB, O, T | 1 | - | - | - |
| 海水生種 | | | | | 1 | 0 | 1 | 1 |
| 海水～汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 淡水～汽水生種 | | | | | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 淡水生種 | | | | | 3 | 0 | 1 | 0 |
| 珪藻總数 | | | | | 4 | 0 | 2 | 1 |

凡例

ILR : 塩分濃度に対する適応性 pH : 水素イオン濃度に対する適応性 C.R. : 流水に対する適応性

Euh : 海水生種 ac-il : 好酸性種

Ogh-hob : 良好嫌塩性種 unk : pH不明種

Ogh-unk : 貧塩不明種

C.R. : 流水生種

S:好汽性種, E:広適性種, T:好淡水性種(Arai and Watanabe, 1996)

R:陸生植物(AR-AIP, BB-BEP, RJ:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

偏光顕微鏡

0:沿岸混生帶若生種(安藤, 1990)

S:好汽性種, E:広適性種, T:好淡水性種(Arai and Watanabe, 1996)

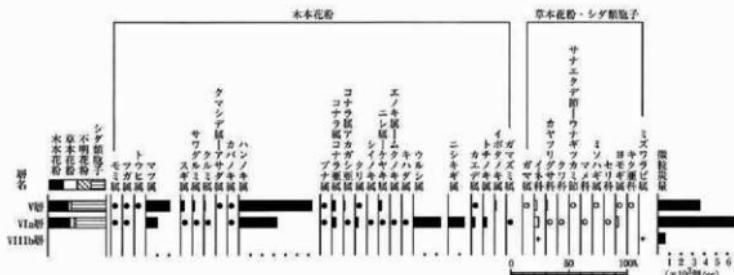
R:陸生植物(AR-AIP, BB-BEP, RJ:未区分, 伊藤・堀内, 1991)

第5表 花粉分析結果

| 種類 | 試料番号 | V層 | Vla層 | VIIla層 |
|-----------------|------|------|------|--------|
| 木本花粉 | | | | |
| モクノ属 | | 1 | 1 | - |
| クスノキ属 | | 1 | 1 | - |
| トリノキ属 | | 1 | - | - |
| マツノ属 | | 13 | 5 | - |
| マツノ属(不明) | | 48 | 15 | - |
| スギ属 | | 8 | 2 | - |
| ベニシダ属 | | - | 1 | - |
| サワダリ属 | | 5 | 1 | - |
| タケミ属 | | 3 | 1 | - |
| タマシダ属-アサダ属 | | 2 | - | - |
| カバノキ属 | | 1 | 1 | - |
| ハシノキ属 | | 187 | 67 | - |
| ブナ属 | | 2 | 2 | - |
| コナラ属コナラ属 | | 8 | 7 | - |
| コナラ属アカガシ属 | | 3 | 2 | - |
| クヌキ属 | | 1 | 5 | - |
| クヌキ属 | | - | 1 | - |
| ニレノキ-セヤキ属 | | 8 | 2 | - |
| エキノキ-ムクノキ属 | | 1 | - | - |
| フジ属 | | - | 1 | - |
| キハダ属 | | - | 48 | - |
| ウルシ属 | | - | 28 | - |
| ニシキギ属 | | 2 | 6 | - |
| カニクイ属 | | - | 6 | - |
| トチノキ属 | | 3 | - | - |
| イボガキ属 | | - | 1 | - |
| ガマズミ属 | | - | - | - |
| 草本花粉 | | | | |
| ゲンカイ属 | | 1 | - | - |
| イネ科 | | 18 | 20 | 1 |
| カラマツリダ科 | | 12 | 2 | - |
| タマリ科 | | - | 2 | - |
| サンエタナダ第一ウナギフカミ属 | | 4 | - | - |
| マメ科 | | 1 | - | - |
| ミツハギ属 | | - | 3 | - |
| セリ科 | | 5 | 12 | - |
| ヨモギ属 | | 1 | - | - |
| クスノキ属 | | 5 | 19 | - |
| シダ類 | | - | - | - |
| シダ類孢子 | | - | - | - |
| ミズワラビ属 | | 513 | 286 | 8 |
| 他のシダ類孢子 | | - | - | - |
| 合計 | | 298 | 205 | 0 |
| 水生植物 | | 42 | 40 | 1 |
| 淡水植物 | | 5 | 19 | 0 |
| 不明植物 | | 518 | 286 | 9 |
| シダ類孢子 | | 883 | 531 | 10 |
| 総計 | | 3500 | 6760 | 600 |

結果を第4表に示す。珪藻の産出頻度はい

て、既報既往については、10の位を四捨五入して100単位に丸めている



第15図 花粉群集の層位分布
出現率は、木本花粉は木本花粉化石部未溝、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、○は1%未溝、△は木本花粉100個体未溝の試料について検出した種類を示す。
また、微細原生菌は、植物1ccあたりに含まれる割合で示す。

それの試料も非常に少なく1~4個体産出するのみで、VIIa層からは1個体も検出されない。

3) 花粉分析

| 結果を第5表、第15図に示す。图表中で複数の種類をハイフンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉总数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が重曲する恐れがあることから、出現した種類を+で表示するに留めている。VIIIb層は、花粉の産出状況が悪く、わずかにイネ科が1個体検出されたのみである。VIIa層はVIIa層と比較すると花粉の保存状態は良好で、木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉ではハンノキ属が最も多く産出し、ウルシ属・ニシキギ属・マツ属なども多くの認められる。そのほかではコナラ属・コナラ亜属・クリ属・カエデ属・トチノキ属などが検出される。草本花粉では、少ないながらもイネ科・ヨモギ属などが産出する。V層の花粉の保存状態はVIIa層と同程度であり、群集も同様に木本花粉とシダ類胞子が多産する。木本花粉ではハンノキ属が優占し、マツ属などが多いと認められる。このほかに、スギ属・サワダルミ属・クルミ属・コナラ亜属・ニレ属・ケヤキ属などを伴い、VIIa層で多産したウルシ属・ニシキギ属は1個体も認められない。一方、草本花粉も同様に少なく、イネ科・カヤツリグサ科・サナエタデ節-ウナギツカミ節・ヨモギ属などが検出されるのみである。微粒炭量は、VIIIb層は約600個/cc、VIIa層は約6700個/cc、V層は約2600個/ccである。 | | | |
|--|--------|-------|--------|
| 第6表 植物珪酸體含量 (μg/g) | | | |
| 試料分類 | 重量 | | |
| | V層 | VIIa層 | VIIIb層 |
| イネ科花粉 | | | |
| タケノコ属 | 100 | 800 | 100 |
| クサヒム属 | 700 | 500 | 100 |
| リスイ属 | 8,600 | 800 | - |
| 不確ナキビ | 200 | - | - |
| ヒレゲシバ属 | 300 | <100 | - |
| ホウズクジラ属 | - | <100 | - |
| イネ科花粉混生植物珪酸體 | | | |
| タケノコ属クマツササ属 | 200 | 1,500 | 500 |
| タケモ属 | 100 | 100 | <100 |
| リスイ属 | 2,500 | 500 | - |
| 不明 | 500 | 200 | - |
| 合 計 | 9,900 | 2,200 | 200 |
| イネ科花粉粗細胞壁珪酸體 | 3,300 | 2,300 | 500 |
| イネ科花粉混生植物珪酸體 | 13,200 | 4,500 | 700 |
| 1) 合計は、100個の粒で求めている(100単位とする) | | | |
| 2) <100の単位を示す | | | |
| 3) 合計は各分群の丸めない数字を合算した後に丸めている | | | |
| 細胞壁珪酸體 細胞膜珪酸體 | | | |
| 植物物質の あらわし方の 個数 | | | |
| タケノコ属 | 不明 | タケノコ属 | 不明 |
| クサヒム属 | タケモ属 | タケモ属 | タケモ属 |
| リスイ属 | リスイ属 | リスイ属 | リスイ属 |
| 不確ナキビ | タケモ属 | タケモ属 | タケモ属 |
| ヒレゲシバ属 | ヨモギ属 | ヨモギ属 | ヨモギ属 |
| ホウズクジラ属 | 不明 | 不明 | 不明 |
| 群名 | | | |

4) 植物硅酸体分析

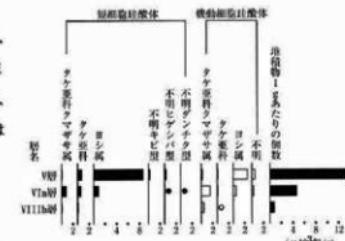
結果を第6表、第16図に示す。各試料から植物珪酸体が検出されるが、表面に多数の小孔（泡食痕）が認

| 第6表 植物珪酸体含量 (μg/g) | | | |
|-----------------------|------------------|------------------|--------------------|
| 種 科 属 种 | 実験 | | |
| | VII _a | VII _b | VII _b 回 |
| イネ科 稲属 芒穀類 | | | |
| タケモ科 マツサ属 | 100 | 800 | 100 |
| タケモ属 | 700 | 500 | 100 |
| ミシ属 | 8,600 | 800 | - |
| 不明キビ属 | 200 | - | - |
| 不明ヒゲバヒ属 | 300 | <100 | - |
| 不明ダンナク属 | - | <100 | - |
| イネ科 稲属 芒穀類 | | | |
| タケモ科 マツサ属 | 200 | 1,500 | 500 |
| タケモ属 | 100 | 100 | <100 |
| ミシ属 | 2,600 | 500 | - |
| 不明 | 500 | 200 | - |
| イネ科 稲属 芒穀類 | | | |
| イネ科 稲属 芒穀類 | 9,900 | 2,200 | 200 |
| イネ科 稲属 芒穀類 | 3,200 | 2,200 | 200 |

總計 13,200 4,500 700

1) 合成は、どの位で見めている(100単位にする)
2) 1000:100個体を選

3) 食事は各部類別のためない数字を合算した後にためてている



第16図 植物珪酸体含量の層位的変化
■植物1gあたりに換算した個数を示す。●○は
100mg/m²基準を示す。

められるなど保存状態は不良である。植物珪酸体含量は、VIIIb 層は約 700 個/g、VIa 層は約 4500 個/g、V 層は約 13,200 個/g であり、上位に向かい増加し、検出される分類群の産状も層位的に変化する。VIIIb 層は、クマザサ属を含むタケア科などが僅かに認められるのみである。VIa 層は、クマザサ属を含むタケア科の産出が目立ち、ヨシ属も認められる。V 層ではヨシ属の多産し、クマザサ属を含むタケア科なども認められる。

5) 種実分析

結果を第7表に示す。木本 5 分類群（アカメガシワ・ブドウ科・タラノキ・エゴノキ属）35 個、草本 1 分類群（カナムグラ）3 個の種実が検出された。

6) 樹種同定

結果を第8表に示す。炭化材は落葉広葉樹 2 種類（クスノキ科・サクラ属）に同定された。

E 考 察

1) 古環境変遷

放射性炭素年代測定の結果、流路 2 覆土 8 層（トチノキ 種皮）は calBC 2,565 ~ calBC 2,468、Vc 層（不明植物遺体）は calBC 905 ~ calBC 839 を示した。これらの分析結果を参考とすると、VI 層は約 4,500 ~ 3,000 年前頃の堆積層と考えられる。

放射性炭素年代測定結果から約 4,500 年前以前の堆積物と考えられる VIII 層は、調査所見によれば灰色のシルト～砂質シルトとされており、2 地点の土層観察では、シルト～極細粒へと上方粗粒化する状況が観察された。VIIIb 層では、珪藻・花粉・植物珪酸体の検出状況が悪かった。このことから、堆積環境や古植生の検証は困難である。なお、珪藻殻と類似した化学組成を持つ植物珪酸体は、土壤の風化によって溶解する可能性が指摘されている〔近藤 1988〕。同試料において検出された植物珪酸体は保存状態が悪く、溶食痕が認められる状況であったことから、堆積後の土壤化作用などにより珪藻が溶解したことが考えられる。また、遺跡が荒川左岸の沖積低地に立地し、河川の氾濫などによって堆積したことが予想されることから、堆積速度が速く堆積物中に含まれる珪藻が希釈された可能性もある。花粉についても、土層中に取り込まれにくかった、あるいは堆積後の経年変化により消失したことが想定される。

約 4,500 ~ 3,000 年前に形成されたと考えられる VI 層は縄文時代の包含層であり、灰色のシルト～粘土からなる。1 地点の土層観察では、VId ~ a 層は塊状をなす灰色粘土であり、上部はやや土壤化する状況が認められた。VI 層最上部に相当する VIa 層では、木本類ではハンノキ属・ウルシ属・ニシキギ属・マツ属などの花粉が多く検出され、このほかに、コナラ属コナラアヤ属・クリ属・カエデ属・トチノキ属などが認められた。また、同層上面から検出された遺構からは、針葉樹のヒノキ科の木片や落葉広葉樹のサク

第7表 種実分析結果

| 分類群 | 木本 | | | | 草本 | |
|-------------|----------------|--------------|------------------|------------------|-------------------|----|
| | アカ メガ シワ | ブ ドウ 科 | タ ラ ノ キ | エ ゴ ノ キ | カ ナ ム グラ | |
| 部位 | 種子 | 種子 | 種子 | 種子 | 種子 | 種子 |
| 遺構名 層名 | 1mm | - | 20 | 1 | - | - |
| SC10I VIa 層 | 3mm | 1 | 4 | - | - | 3 |
| SK16 VIIb 層 | 1mm | - | 4 | - | 1 | - |

第8表 樹種同定結果

| 遺構名 | 層名 | 薄い目 | 点数 | 状態 | 樹種 |
|-------|-------|-----|----|-----|----------|
| SC10I | | 3mm | 10 | 炭化材 | サクラ属(10) |
| | | 5mm | 10 | 炭化材 | サクラ属(10) |
| | VIa 層 | 5mm | 1 | 炭化材 | クスノキ科(1) |

ラ属とクスノキ科の炭化材・アカメガシワやエゴノキ属・タラノキ・ニワトコ・ブドウ科などの種実が検出された。このうち、ハンノキ属・トチノキ属は、河畔や湿地に林分を形成する種類を含む分類群である。アカメガシワ属・ウルシ属・ニシキギ属は、伐採跡地や崩壊地、林縁などの明るいところに生育する分類群であり、炭化材に認められたサクラ属・クスノキ科も林内や林縁に生育する分類群である。また、検出されたマツ属のうち亞属まで同定されたものは、いずれも複雑管束亞属であった。マツ属複雑管束亞属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸沿いなどほかの広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能な種類であり、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。以上のことから、VIIa層形成時や造構機能時の遺跡周辺には、ハンノキ属などからなる河畔・湿地林が存在し、周辺の森林林縁部などにはサクラ属・アカメガシワ属・ウルシ属・ニシキギ属などが生育していたと推測される。また、低地部にはコナラ属アカガシ亞属・シイノキ属・クスノキ科などの常緑広葉樹、海岸砂丘上や低地部・林縁部などには海岸植生・二次林としてのマツ属の生育が窺われる。なお、花粉を広域に散布しないウルシ属やニシキギ属が顕著に認められたことから、これらは局地的な要素を反映していると考えられ、遺跡の極近傍に生育していた樹木に由来する可能性もある。

草本類では、クマザサ属を含むタケア科などのイネ科の植物珪酸体や、カナムグラ・ヨモギ属などの花粉・種実が検出された。いずれも開けた場所に生育する分類群であることから、遺跡周辺の草地や林縁などの開けた場所に生育していたものに由来すると考えられる。なお、タケア科の植物珪酸体はほかのイネ科と比較して風化に強く、また生産量の多い点がこれまでの研究から指摘されており【近藤 1982；杉山・藤原 1986】、ほかの種類よりも残留しやすい。日本海側の多雪地域は、自然状態ではブナを中心とした森林植生となり、ブナの林床にチシマザサ（クマザサ属の一種）が発達する【宮脇 1985】。このことから、今回検出されたクマザサ属の中には、碎剤物とともに運ばれてきたものも含まれている可能性がある。

約3000年前頃の堆積層と考えられるV層は、1地点における観察所見では、最下部は植物遺体が混じる黒灰～暗灰色を呈する粘土（Vd～Vc層）、下～中部は植物遺体や炭化物の薄層が挟在する褐～灰白を呈するシルトの互層（Vb層）、上部は塊状で植物遺体や炭化物が混じる暗灰色を呈する粘土（Va層）からなり、上部はやや土壤化する状況が認められた。Vc層の花粉群集は、木本類ではハンノキ属の優占が認められた。次いでマツ属が検出され、このほかに、スギ属・サワグルミ属・クルミ属・コナラ亞属・ニレ属・ケヤキ属などが検出された。ハンノキ属が優占し、河畔林・湿地林の構成要素であるサワグルミ属・ニレ属・ケヤキ属などが検出されたことから、この頃になると、周辺にはハンノキ属を主体とする河畔林・湿地林が拡大した可能性がある。草本類においても、ガマ属やヨシ属など水湿地に生育する種類が検出され、特にヨシ属の植物珪酸体の産出が顕著となることから、VIIa～V層にかけて調査区内が湿润な環境へ変化したことが推測される。

微粒炭量は、VIIIb層では約600個/ccであるのに対し、VIIa層は約6,700個/ccと多産し、上位のV層は約3,600個/ccと変化する。微粒炭は人間活動と密接に関係しているとされ、その微粒炭量の増加から火入れなどの人為活動が推測されている【安田 1987；松井・近藤 1992など】。VIIa層が縄文時代の遺構検出面及び遺物包含層とされていることを考慮すると、VIIa層における微粒炭の多産は、人為的活動を反映している可能性がある。

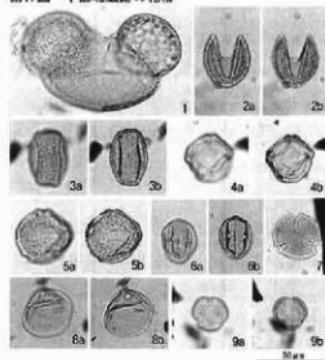
2) 植物資源利用

SC101から出土した炭化材には、落葉広葉樹のサクラ属とクスノキ科の2種類が認められ、サクラ属が

主体となる傾向が認められた。なお、対象とした炭化材は細片であったことから、同一の樹種に由来する個体が碎片化した状態を反映している可能性もある。

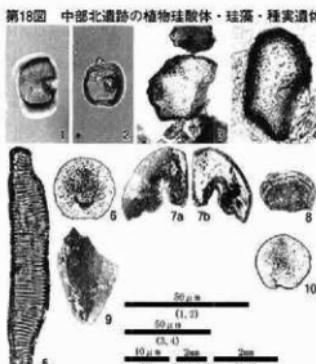
サクラ属とクスノキ科は、绳文時代後期の江添遺跡（肱内市）や晩期の青田遺跡（新潟市）の柱根や炭化材、自然木などに認められており〔鈴木ほか2004；パリノ・サーヴェイ株式会社2005c〕、遺跡の立地などを考慮すると、周辺に生育していた種類を利用していたことが推測される。

第17図 中部北遺跡の花粉



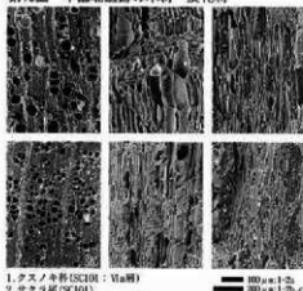
1. マツ属(東壁: V層)
2. スギ属(東壁: V層)
3. コナラ属コナラ属(東壁: V層)
4. ハンノク属(東壁: V層)
5. ニレ属ニレヤマ属(東壁: V層)
6. ウルシ属(東壁: V層)
7. ニシキギ属(東壁: V層)
8. イネ科(東壁: V層)
9. ヨモギ属(東壁: V層)

第18図 中部北遺跡の植物硅酸体・珪藻・種実遺体



1. クマザサ属根茎硅酸体(東壁: V1a層)
2. ヨシ属根茎硅酸体(東壁: V層)
3. クマザサ属根茎硅酸体(東壁: V1b層)
4. ヨシ属根茎硅酸体(東壁: V層)
5. *Baccharis gracilis* var. *bidentata* Griseb.
6. アカメガツクサ種子(SC101)
7. ブドウ科種子(SC101)
8. タクノキ種子(SC101)
9. エゴノキ属種子(SC101; Ma層)
10. カチムクサ種子(SC101)

第19図 中部北遺跡の木材・炭化材



1. クスノキ科(SC101; V1a層)
2. サクラ属(SC101)
- a: 木L1, b: 茎組織, c: 板目

5 まとめ - 繩文時代を中心として -

中部北遺跡の主体は繩文時代中期前葉～後期中葉にあり、狩猟・漁労による食糧獲得場として機能していたことが石器からわかる。ここでは、繩文時代の土器・石器について若干の考察を行い、まとめとしたい。

A 土 器

1) 概 観 (第9表)

本遺跡からは、繩文時代中期前葉～後期中葉の土器が出土した。確認できた土器型式は中期前葉の大木7b式(23)、同後葉～末葉の大木9～10式(1～6、8～14、24～32)、後期前葉～中葉の三十種場式新段階(7、33、36、37)、南三十種場式新段階(34)・南三十種場式最新段階(16)、加曾利B1式(38)などがある。中期のものとしては、大木7b式に比定される土器は1個体のみであり、大木9～10式で占められる後葉の土器群が主体をなす。中期後葉の土器群が東北系の大木9～10式のみで占められるといった様相は、神林村城田遺跡【田辺ほか2001】や朝日村下クガ遺跡【富樫1991】でもみられる。事実、阿賀北地方は、荒川や阿賀野川水系を介し、山形県・福島県など、東北地方との関係が強い地域である。本遺跡においてもその事象が追認でき、さらに突き詰めるならば、本遺跡の大木9～10式土器は前述の2遺跡やアチヤ平遺跡上段【富樫ほか2002】同様、山形県の影響が強いものと考えたい。

後期のものとしては、前葉の三十種場式、南三十種場式が主体をなす。三十種場式土器は、「信濃川・阿賀野川水系に分布の中心を持つため、新潟県と福島県会津地方を主たる分布圏(内圏)【田中1991】とし、南三十種場遺跡と共に、長岡市三十種場遺跡を標識遺跡とする土器である。つまり、本遺跡は後期段階に入ると、それまでの東北地方の土器で占められていた状況から一変して、中越地方から北上してきた土器の分布圏に組み込まれるのである。

2) 大木9～10式土器について

ここでは、本遺跡で出土した大木9～10式土器の細分比定を試みる。大木9～10式土器を細分する際には、全体的な文様構成を把握することが望ましいが、本遺跡においては、そのように全体的な文様構成を把握できる個体資料は出土しなかった。しかしながら、全体的な文様構成を推測する事が可能な破片も出土しており、これらをもとに、少しでも大木9～10式間ににおける細別時期変遷が油ればと考える。

まず論を進めるにあたり、大木9～10式の細分について簡略に述べる。大木式土器は、1927・1928年

| 遺跡 | 大木7b | 大木8 a・b | 大木9 新 | 大木9 古 | 大木10 中 | 大木10 新 | 三十種場 古 | 三十種場新 南三十種場古 | 南三十種場 新 | 南三十種場 最新 | 加曾利B1 併行 |
|------|------|------------|----------|----------|-----------|-----------|-----------|-----------------|------------|-------------|-------------|
| 中部北 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |
| 下クガ | — | — | A類 | B類 | B類 | C類 | — | — | — | — | — |
| アチヤ平 | — | — | — | — | — | — | 1期 | 2期 | 3期 | 4期 | 5期 |
| 元原遺 | — | — | — | — | — | — | — | — | 1期 | 2期 | 3期 |
| 江添 | — | — | — | — | — | — | — | 1期 | — | 3期 | 4期 |
| 城田 | — | — | — | — | — | — | — | 2期 | — | — | — |
| 勝渡 | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — | — |

第9表 中部北遺跡の土器型式と周辺遺跡編年対応表

に層位的な発掘調査が行われた宮城県大木圓貝塚の出土資料をもとに、(陸前)地方における前・中期の土器型式として山内清男によって提唱され、その際、中期の土器型式として大木7~10式土器が設定された。その後、1936~1937年にa·b式の細別が同氏によって明確に示されている〔丹羽1991〕。近年では、資料の増加とともに、調査報告や論文などで、より整理された細分案が提示されている。大木9~10式が層位的に出土した宮城県大梁川遺跡〔相原1988〕では、それぞれの型式を前半と後半の2段階に分けており、それらは良好な資料として注目されている。本遺跡が所在する阿賀北地域では、下クボ遺跡で大木9式を古・新の2段階、大木10式を古・中・新の3段階に分け、アチャヤ平遺跡では大梁川遺跡の事例とも照合させながら、下クボ遺跡の大木10式中・新段階において若干の修正が加えられている。本項では、これら下クボ・アチャヤ平遺跡の細分案に準じ、先学も考慮しながら比定を試みる。

24(以下、文中の番号は報告番号を指す)は口縁部周辺のみが残存しており、現状では二重指円形区画の上部のみが確認できる程度である。そこに続くモチーフは、「U」字状か「C」字状の区画文が考えられようか。そうすると、上半部の二重指円形区画は、「U」字状か「C」字状のモチーフの先端を、満巻状に巻き込んだ部分であると考えられる。これは、大木9式新段階に比定されている下クボ遺跡A類に相当する。大木9式新段階はこのようなモチーフのはか、「J」字状文、「O」字状文、指円文、人面状文や、「部分的に座帶を貼り付けて浮き彫り状にしたりする」〔菅原1999〕手法などを用いて、縱方向の文様を展開させる。本遺跡では8・9・14・25・26がこれに相当すると思われ、特に25・26は24に類似した文様構成を有すると考える。10は太い2本の沈線で縱長に区画された中に繩文が施文されているのが確認できる程度であるが、よく観察すると沈線の下端がすぼまっている様子が確認でき、「O」か「U」字状文、あるいはこの両者を交互に配置するような文様構成が推測できる。これは大木10式古段階に比定されている下クボ遺跡B1類の「胴上部から下部を貫いて文様の描かれるもの」に相当する¹⁾。本遺跡では10以外、この類型に相当するものはないと思われる。このほか、大木9~10式と考えた土器には、1~6・12・13や27~30がある(粗製の大木式は含んでいない)が、いずれもさらなる細分を行えるほどの情報は持ち合わせておらず、これらは大木9~10式という大枠にとどめることとする。

以上、本遺跡には大木9式新段階と大木10式古段階に比定できるであろう土器が存在することが分かった。観察した限りでは、大木9式古段階にみられる座帶による満巻文や、大木10式中・新段階などにみられる縦線や無文帶の切り合いによる施文、撲糸文といったものは見受けられないようである。このことから、本遺跡における大木9~10式の土器は、9式新~10式古段階に限定されるものと考える。

3) 円形刺突文を有する土器について

10C24・11C17で出土した円形刺突文を有する土器(39)は、文様モチーフを円形連続刺突文のみで描くこと、胴部の膨らみ方が小さいながらも極端であることを大きな特徴としている(器形や文様概要は第Ⅲ章3に詳述)。筆者はこのような特徴を備えた土器の類例を知らず、調査当初から注目していたところではあったが、残念ながら現段階においても、同類の資料に行き当たることができなかった。しかしながら、部位ごとの特徴的な要素を抽出し、他型式と比較することによって、およその系統は把握し得るのではと考えた。ここでは39の性格を少しでも明らかにすることを目的とし、比較検討を行う。

1) 大木10式の成立には「体部の中位による沈線による波状の区画線文が描かれる」〔菅原1999〕ことや(下クボ遺跡B2類に相当)、「大木9c式(大木9式新)では開拓されたままであった胴下部の帶繩文が、これを外側にいた沈線の連繩によって囲じられ、上にあげたようなモチーフを描く」〔池谷1988〕ことなどを指標とするものがある。

| 部位 | 39 | 三十桶場 古 | 39 | 三十桶場 新 | 39 | 南三十桶場 古 | 39 | 南三十桶場 新 | 39 | 南三十桶場 品新 | 39 | 加曾利B (粗製) | 39 |
|----|---------------------------------------|--|----------------------------|--|----------------------------|--|----------------------------|-----------------------------------|----------------------------|---|----------------------------|---------------------------------------|----|
| 器形 | 口縁 縦 横 腹 底 内→外→内 上窪 | 縦やかな波状 直受状 横状把手 強く屈れる 横幅に膨らむ 底状など | × △ △ △ △ × | 極く大きな単位の 波状の 「く」の字状 にくれる 底状 自然に開く | △ △ △ △ △ × | 円形突起 波状・平 極く屈れる 縦やかに膨らむ 縦やかに膨らむ 自然に開く | ○ ○ ○ △ × × | (山伏) 突起 波状 △ △ △ △ | ○ ○ △ △ △ △ | 扁平化した 縦やかな波状 やや縦く屈れる 縦やかに膨らむ 自然に開く △ | ○ △ △ △ △ ○ | 3段波状 平 直線が主 × × × ○ | |
| | 鉢状工具による 不規則円形刷 毛刷突文 | ヘラ状工具による よるいわゆる 形刷突文 | △ △ | 鉢状工具による 繊維な丸波状刷 突文・円形刺突 | △ △ | 圓文底に大小混 雜文 唐泊・光堅嗣文 円形刺突文充填 | △ △ | 細い集合沈痕 唐泊・光堅嗣文 円形刺突文充填 | △ △ | 細い集合沈痕 唐泊・光堅嗣文 圓文底に大小混 雜文 | △ △ | 多条細文 (圓周狀) 崩落刷文 | |
| | 口縁 縦 横 底 内→外→内 上窪 | 無文帶 2 列の横文 底状垂下文 | × | 無文帶 △ △ | × | 口引立い崩み目 斜面文 | × | 口引立い崩み目 斜面文 口縁に沿う沈痕 | ○ ○ | 口引立い崩み目 斜面文 口縫に沿う沈痕 | △ ○ | 口唇裏に沈痕 △ | |
| | 区画文有 | 区画文有 | △ | 区画文有 | △ | 区画文有 | ○ | 区画文有 | ○ | 区画文有 | ○ | 区画文無 | |
| | 全刺突 底状垂下文 | 下半部側面刷向 区画文・全面刺突 | × | 全区側面刷向 区画文 | × | 根柢に横開 U字状文など | △ | 底状垂下文 (集束傾向) | ○ | 底状垂下文 (集束傾向) | ○ | 平行横文 崩落刷文 | |
| | 底状垂下文 | | | | | | | | | | | | |

第10表 39と各土器型式の要素対照表

比較する土器型式については、39が胎土やつくりなどから後期前葉～中葉の土器である可能性が高いという教示をいただいたことから¹⁾、当該期における本遺跡出土型式を中心に6型式を対象とした。第10表は、その6型式における特徴的な要素を部位ごとに抽出し、39と比較したもの、第20図は、類似した要素を持つと判断した県内資料を集成した中から、より近いものを具体的に掲げた図である。各型式の要素の抽出に際しては、主に『新潟県の考古学』[新潟県考古学会 1991]の記述に準拠した。まず、第10表をもとに器形・施文形態・文様構成の3項目において比較検討を行い、その後、第17図の集成を用いながら論を進める。なお、本項の執筆にあたっては、当初、東北地方、特に山形県や福島県の影響も考慮に入れ、後期前葉に東北南部に分布圖を持つ南鏡式との比較も試みたが、類似項はほとんど見出せず、この型式からの影響は極めて低いと判断して対象から除外した²⁾。

はじめに、器形について検討する。39と同等とはいかないまでも、縦やかな波状を呈する口縁部は南三十桶場式の全段階にわたって類似し、さらに新段階では頭部の括れが比較的強いことも類似している。三十桶場式も波状口縁を呈するといえるが、頭部に付される横状把手や添付文が口唇部に至って波状をなしているのであり、39の波状口縁とは意味が異なる。加曾利B 1式の波状口縁は、39と比較すると少々大きすぎるか。頭部については、39の大きな特徴のひとつでもある「小さいが極端な膨らみ」を呈する器形は、残念ながら該当するものがなかった。あえてあげるならば、三十桶場式にみられる球形の脣部があげられようか。一方、底部から波打つように立ち上がる脣部下半形態から考えると、加曾利B 1式の深鉢に近い器形ともいえる(第20図7)。

次に、施文形態について検討する。39は全文様を、棒状工具による細かい連続(重複)した円形刺突文で描いている。刺突文を多用するのは三十桶場式で、特に新段階は、古段階のヘラ状工具によるいわゆる爪形刺突文に代わり、棒状工具による円形刺突文で施文する例が多くみられる。

最後に、文様構成について検討する。39は籠状垂下文をモチーフとする施文がなされるが、これは南三十桶場新段階～最新段階に多用されるものである。特に南三十桶場式新段階は、口縁部の形態に沿った

1) 新発田市教育委員会 田中耕作氏よりご教示を受けた。

2) 南鏡式と併行関係にある網取1式・門前式であるが、南鏡式を含めたこれら三者は「同じ大本10b式から成立していること(中略)文様要素を共有する点」[池谷前岡]より南鏡式と同様の結果が予測されるため、比較検討を行っていない。



沈線文、波頂部から垂下する簾状垂下文、横位の頭部区画文、胴部の簾状垂下文という文様構成が39と類似している点が注目される。

以上、39と任意の6型式における比較を試みた。施文形態においては三十稻場式新段階が、器形と文様構成においては南三十稻場新段階が、39と類似する要素を持つ事がわかった。前者の具体例として、第20図1・2・4・5をあげる。1は鉢で、棒状工具による縱位の円形刺突列で胴部を施した例である。縱方向を意識した施文は、39により近いといえようか。2は、隆起線上に円形刺突文を施した例である。4・5は蓋であり、4は細かい円形刺突文、5は連続（重複）した円形刺突文を施す点が類似するといえる。このように、三十稻場式新段階の蓋には、（細かい）円形刺突文が多用されている。後者の例としては、同図6をあげる。本来ならば沈線で描かれるべき波頂部からの簾状垂下文が、円形刺突文に置き換えられている点が注目される。また突起のない部分の口縁部の形状も、39により近い要素といえる。これら二型式以外で細分型式不明な土器ではあるが、同図3についても触れておきたい。3は「文様モチーフが三十稻場式とは異なる、あるいは判別が困難なもの」【富樫2002】とされ、アチヤ平2・3期（三十稻場式古、三十稻場式新・南三十稻場式古段階併行）に比定されている土器である。口縁部から円形刺突列が垂下し、頭部と思われる括れ付近で横方向に施文を変えるというような文様構成を、39も呈している。こうした点から、39は三十稻場式新段階・南三十稻場式新段階いずれとも関係が強い土器といえそうである。三十稻場式新段階と南三十稻場式古段階の共伴事例があることは、近年の調査成果において明らかとなりつつある。「型式の境目の土器は、土器を構成する要素の一部欠落や置換が往々にしてみられる」【田中前掲】とあるように、三十稻場式新段階と南三十稻場式新段階の要素を併せ持つ漸移的な土器の存在を想定してもよいだろう。そういう土器のひとつとして、39が位置づけられるのではと考える。しかしこの結論は文様構成・施文形態の類似性に拠ったものであり、器形の上から見ると、このような膨らみをもつ胴部上半から加曾利B1式との類似性を窺わせる胴部下半へのつながりが解明できず、この点において、現段階では他型式との類似性は不明とせざるを得ない。今後は県内にとどまらず、より広い地域における資料にも目を向け、より妥当性のある結論が見出せればと思う。

B 石 器

1) 石器組成

本遺跡で出土した石器の時期や出土層位との関連について、結論を先に述べれば、土器と同じく縄文時代中～後期のものが出土し、また、堆積土層との関連においても、やはりVI a'層とVI b・c層出土の剥片が接合したケースがあり、堆積層位と無関係という点でも土器の状況と一致する。出土した石器について、形態的特徴から所属時期が追えるものを具体的に挙げると、まず、VI a・b層から出土した後期中葉に比定される有茎縛(61～64)〔鈴木1983〕が挙げられる。次に、VI c層から出土した平基縛(59)は小型で剥離面を残しており、調整は若干粗雑という、中・後期の特徴とも言える属性を有する〔前掲〕。これ以外に、個体の特徴から細別時期を追えるものは存在しないが、上に掲げた石器の時期と、土器の時期からみて、ほかの石器や石製品もおおよそ当該期のものとみて差し支えなかろう。

2) 石器組成からみた遺跡の性格

ここでは本遺跡の所属時期である縄文時代中～後期における県内遺跡の石器組成を整理することで、遺跡の位置づけを試みたい。石器の器種分類は以下の様に清水上II遺跡〔鈴木1996〕に拠った。

A 狩猟・漁労具

石鏸・尖頭器・石錐

B 採取・加工具

石錐・打製石斧・磨製石斧・籠状石器・三脚石器・板状石器

C 調理具

磨石類・石皿・石匙

本遺跡では、石鏸・不定形石器・石錐・敲石・打製石斧が出土しているが、上記の器種に分類した場合、A 石鏸・石錐、B 打製石斧、C 敲石が該当する。なお、不定形石器については比較検討するだけの資料数が少ないので、除外した。

| 遺 跡 名 | バターン | 用 量 率 (点数) | | | 用 量 率 (%) | | | 市 司 村 名 | 主な時期 |
|----------------|------|------------|------|------|-----------|--------|--------|------------|-----------|
| | | 骨質・魚骨性 | 灰岩性 | 加石性 | 調理具 | 骨鏸・魚骨性 | 灰岩・加工具 | | |
| 中部北遺跡 | 1 | 22 | 1 | 3 | 78 | 4 | 18 | 御前村 | 中期後葉～後期中葉 |
| 八反田遺跡 | 1 | 83 | 16 | 30 | 32 | 14 | 23 | 新治町 (日高町) | 中期後葉～後期中葉 |
| 浮舟遺跡 | 1 | 116 | 16 | 81 | 54 | 6 | 26 | 名古屋 (日高町) | 後期後葉 |
| 大山遺跡 | 1 | 108 | 6 | 4 | 89 | 3 | 6 | 御前村 | 後期中葉 |
| 飛鳥大山遺跡 | 1 | 114 | 30 | 40 | 82 | 16 | 22 | 御前村 | 後期後葉 |
| アツミ遺跡 (底面点) | 2 | 2 | 9 | 20 | 6 | 29 | 65 | 御前村 | 後期中葉 |
| アツギ遺跡 | 2 | 12 | 17 | 170 | 6 | 9 | 85 | 御前村 | 中期後葉 |
| アツギ遺跡上段 | 2 | 847 | 2466 | 4865 | 10 | 30 | 60 | 御前村 | 中期後葉～後期後葉 |
| 森ノ足遺跡上段 | 2 | 27 | 212 | 222 | 6 | 46 | 48 | 御前村 | 中期中葉 |
| 万株中野遺跡 | 2 | 41 | 275 | 722 | 4 | 25 | 70 | 新治町 (日高町) | 中期後葉～後期後葉 |
| 羽根島遺跡 | 2 | 14 | 22 | 15 | 13 | 20 | 67 | 御前村 | 中期後葉 |
| 下ノ原遺跡 | 2 | 16 | 125 | 765 | 2 | 12 | 85 | 角田町 (日高町) | 中期後葉 |
| 木下遺跡 (第二アツマ) | 2 | 23 | 37 | 161 | 9 | 15 | 76 | 角田町 (日高町) | 中後葉～後期後葉 |
| 大丸遺跡 | 2 | 4 | 42 | 104 | 3 | 28 | 69 | 妙高町 (日高町) | 中後葉 |
| 吉古御前下原小遺跡 | 2 | 21 | 99 | 382 | 4 | 20 | 76 | 角田町 (日高町) | 後期後葉 |
| 江口御前下原小遺跡 | 3 | 15 | 8 | 90 | 21 | 7 | 72 | 御前村 (日高町) | 後期後葉～中期 |
| 大穴遺跡 (底面点) | 3 | 15 | 7 | 58 | 19 | 9 | 72 | 御前村 (日高町) | 後期後葉 |
| 豊原遺跡 (I-II c層) | 3 | 33 | 7 | 55 | 26 | 7 | 58 | 新治町 (日高町) | 中期後葉 |
| 城之越遺跡 | 3 | 691 | 617 | 3016 | 19 | 17 | 64 | 小千谷市 | 中期後葉～後期後葉 |
| 元和食文化跡 II (上段) | 4 | 630 | 2046 | 1228 | 16 | 32 | 24 | 御前村 | 中期後葉～後期後葉 |
| 御前村遺跡 | 4 | 5 | 21 | 8 | 11 | 48 | 41 | 御前村 | 中期後葉～後期後葉 |
| 御前村遺跡 | 4 | 22 | 283 | 128 | 5 | 66 | 29 | 御前村 | 中期後葉～後葉 |
| 八反田遺跡 (中層) | 4 | 21 | 150 | 39 | 10 | 71 | 19 | 津南町 | 中期中葉～後葉 |
| 浮舟遺跡 | 4 | 108 | 1266 | 889 | 5 | 56 | 29 | 津南町 | 中期後葉～後期後葉 |
| 喜良口遺跡 | 4 | 31 | 434 | 254 | 4 | 61 | 35 | 十日町市 (日高町) | 中期後葉 |
| 荒川口遺跡 | 4 | 63 | 105 | 88 | 26 | 41 | 34 | 津南町 | 中期後葉 |
| 豪佐遺跡 | 4 | 16 | 37 | 31 | 19 | 44 | 37 | 妙高町 (日高町) | 中期後葉～後期後葉 |
| 八反田遺跡 (後期) | 4 | 44 | 91 | 66 | 24 | 50 | 26 | 津南町 | 後期後葉 |

第11表 縄文時代中～後期の県内遺跡石器組成表

次に、この器種分類をもとにした出土比率からみた石器組成を遺跡毎に見てみたい（第10表）。遺跡毎にそれぞれ特徴があるが、およそ、以下の4パターンに分かれる。

1 狩猟・漁労具>調理具>採取・加工具

本遺跡や上ノ原遺跡〔前山1994〕、芹沢遺跡〔中村・中島1975〕、小丸山遺跡・刈羽大平遺跡〔伊藤1985〕がこれに該当する。内陸部の芹沢遺跡を除けば全てが海岸に近い遺跡である。

2 調理具>採取・加工具>狩猟・漁労具

下ノリ遺跡（B地点）〔富樫1990〕、下クボ遺跡〔富樫1991〕、アチャヤ平遺跡上段〔阿部・高橋2002〕、柳古新田下原A遺跡〔池田1987〕、沖ノ原遺跡〔小沢・長谷川1977〕、万條寺林遺跡〔池田1988〕、羽黒遺跡〔齊藤1982〕、宮下原遺跡〔池田1981〕、水上遺跡（第3ブロック）〔池田・細矢1990〕、大貝遺跡〔岡本1997〕などが該当する。いずれも山間部に立地する遺跡である。

3 調理具>狩猟・漁労具>採取・加工具

江添遺跡〔小林2005〕、大沢遺跡（B地区）〔前山1990〕、豊原遺跡（I～IIc層）〔前山1988〕、城之腰遺跡〔田中1991〕などが該当する。

4 採取・加工具>調理具>狩猟・漁労具

元屋敷遺跡Ⅱ（上段）〔高橋2002〕、城田遺跡〔田辺・大賀・長谷川2001〕、八反田遺跡（中・後期）〔齊藤1984〕、南原遺跡〔駒形1994〕、笠山遺跡〔菅沼1998〕、森上遺跡〔齊藤・高橋1974〕、反里田遺跡〔齊藤1977〕、兼俣遺跡〔本間1976〕などが該当する。

本遺跡は1のパターンに該当し、海岸に近い場所に位置する遺跡とは同じ、狩猟・漁労具が卓越する傾向をもつ事がわかる。この傾向は中期における佐渡・越後平野および緑辺丘陵部とは同じ〔鈴木1999〕であり、後期においても同じ傾向が維持されているといえる。一方、山間部の遺跡でも、狩猟・漁労具の占める割合が少ないという中期の傾向を継承・発展し、「調理具>採取・加工具>狩猟・漁労具」という石器組成の傾向にさほどの変化を来していない〔鈴木1999〕。このように、山間部では（植物の）採取、海岸に近い場所では（動物・鳥類・魚類の）狩猟・漁労が主たる食糧獲得手段であり、それは中～後期にわたって維持されている事が石器の組成からわかる。また、本間信昭は、「平野部の遺跡が山地や丘陵に比べ極端に少なく、「遺跡の規模も小さく、本格的な集落跡はほとんどない」とし、「石礫が散点とか、土器片が數十点発見されただけの遺跡」であり、「狩猟を中心とするキャンプ地のような場所と考えられる」と指摘しており〔本間1995〕、これは本遺跡の調査成果とも一致する。また、接合資料から、原石の大きさがおよそ10～15cmほどと推定する。これは平行し得るサイズであり、原石を搬入して石器製作を行っており、定住ではないことが推測される。

以上の事柄を総合的にみると、少なくとも中～後期の段階では、集落の主体は山地や丘陵部（＝山間部）にあり、平野（や低地）はもっぱら食糧獲得の場であった可能性がある。本遺跡で出土した石器はこうした縄文人の生活や行動の一端を具象化する、大変貴重な資料と考える。

中期まで山間部・丘陵部に生活の基盤を置いていた縄文人が、後期の縄文海退以降に平野部や沖積地へと進出した背景には、河川・潟湖・湿地に豊富な食料を見いだした状況が想起される。その対象は、鳥類や小動物、中・大型の渡り鳥の群や魚類であり、鈴木俊成は「調理具もある程度の出土を見ることから、植物食の基盤は維持していた」〔鈴木1996〕として、これらが石器組成に表出したと考えられる。このように、本遺跡は、本拠地とする集落と密接な関わりをもちつつ、狩猟・漁労をメインとした遺跡であったと推測される。

第IV章 桜林遺跡

1 調査の概要

A グリッドの設定

グリッドの設定については、平成17年度の調査で設定されたものを踏襲した。すなわち、日沿道路法線センター杭STA388 ($X = 237193.216m \cdot Y = 80644.082m$) と STA389 ($X = 237283.440m \cdot Y = 80687.194m$ を結んだラインを南北方向の基線(真北から $25^{\circ} 32' 26''$ 東偏)として、10m四方を一単位とする大グリッドを設定し、その中を更に2m方眼で25分割させて小グリッドを設定した。ちなみに12Dグリッド起点の座標値は $X=236902.524m \cdot Y=80943.785m$ (以上、座標値はすべて世界測地系)となる。

グリッドの名称については、南北ラインには算用数字、東西ラインにはアルファベットを用い、両者の組み合わせで「7D」というように表した。また、小グリッドの名称については1~25の番号を用いた(第14回)。なお、グリッドの名称についても平成17年度調査と一致させている。

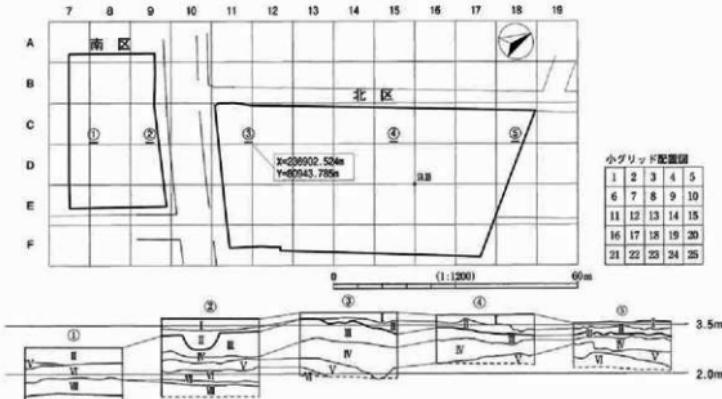
B 基本層序

遺跡内の土層堆積状況はほぼ水平で、土質は基本的に砂質シルトである。北区はやや砂質が強く、そのため北区の堆積土はいずれも水はけがよく乾燥し、土色も酸化して黄色がかる。一方、南区ではやや粘土質が強く、水はけも悪い。土色についても北区ほど黄色味は強くない。IV層はIII層に近似する土層でやや砂質に富む。両層の境界は不明瞭であり、14グリッド付近では分層できなかった。以下、基本層序を記す。

I層：現代の耕作土。

II層：褐色砂質シルト(10YR5/1) しまりやや強、粘性弱。灰色砂、直径1cm以下のIII層ブロックを含む。

鉄分に富む。近世以降の耕作土。



第21図 グリッドの設定と基本土層堆積図

- III層：浅黄色弱砂質シルト (25Y7/3) しまり、粘性共やや強。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑が多くみられる。古代～近世の遺構確認面
- IV層：黄褐色砂質シルト (25Y6/4) しまり、粘性共やや弱。III層に近似し、砂を少量含む。II層に比べ、マンガン粒子・酸化鉄斑は減少する。
- V層：黄褐色弱シルト質砂 (25Y6/4) しまり、粘性共やや弱。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑が少量みられる。直径5mm大の浅黄色砂質シルトブロックを少量含む。
- VI層：黄褐色粘土質シルト (25Y6/4) しまりやや弱。粘性やや強。直径1mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑が少量みられる。直径5mm大の浅黄色砂質シルトブロックを少量含む。所により砂が混入する。
- VII層：黄褐色シルト質粘土 (25Y6/4) しまり、粘性共やや強。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑がわずかにみられる。砂を少量含む。VI層に近似するが、本層は粘土質が強い。
- VIII層：灰黄色シルト質砂 (25Y7/3) しまり、粘性共やや弱。直径1～2mm大のマンガン粒子や酸化鉄斑がわずかにみられる。砂を少量含む。VII層に近似するが、本層は粘土質が強い。

2 遺構

A 概要

検出し、調査した遺構は掘立柱建物6棟、井戸20基、土坑10基、溝10条、ピット142基、性格不明遺構2基、近世墓1基である。本遺跡では、遺構確認面直上まで近～現代の耕作土が堆積しており、掘り込みの浅い遺構が失われている可能性がある。南区でそれは顕著であり、また、北区に於いても12グリッドでは旧町道が走っていた影響で東西方向に帶状の擾乱が深くまで及んでいた。

B 記述の方法

検出した遺構は、現地調査で付した遺構番号をそのまま踏襲した。そのため、整理作業段階で検討を加えた結果、遺構と認められず除外したものがあるため、この遺構番号は欠番にした。遺構種別の表記についてはアルファベットの略号、すなわち、掘立柱建物：SB、井戸：SE、土坑：SK、溝：SD、ピット：P、性格不明遺構：SX、炭化物集中：SCというように、一般的に用いられている遺構略号を用いて表記した。また、本文及び遺構一覧表の記載に際しては、和泉A遺跡〔荒川ほか1999〕の分類に準拠して平面・断面形態の表記を行った（以下、参照）。



第22図 遺構分類図
〔荒川ほか1999を一部改訂〕

断面形態

- 台形状：底部に平坦面を持ち、穏やか～急角度に立ち上がるもの
- 箱 状：底部に平坦面を持ち、ほぼ垂直に立ち上がるもの
- 弧 状：底部に平坦面を持たない、皿状で穏やかに立ち上がるもの
- 半円状：底部に平坦面を持たない、椀状で急角度に立ち上がるもの
- U字状：確認面の長径よりも深さの値が大きく、ほぼ垂直に立ち上がるもの
- V字状：点的な底部を持ち、急角度に立ち上がるもの
- 漏斗状：下部がU字状、上部がV字状の二段構造からなるもの
- 階段状：階段状の立ち上がりを持つもの

C 各 説**1) 掘立柱建物**

合計6棟を検出した。すべて南北方向に桁行を取るが、建物の方向はまちまちである。建物構造としては、3.5m～6m以上の桁行に対して基本的に間柱が存在せず、ピットの間隔が非常に広いという特徴を共有する。SB1～SB3は周辺にあまり遺構がなく、立て替えの痕跡が見えないので対し、SB4～SB6はほぼ同じ場所に重複し、建て替えの可能性がある。また、後者は周辺に井戸が多数設けられており、ほかの建物とは異なる性格のものと推測する。このほかにも11E・F区でピットを多数検出しており、建物が存在する可能性は非常に高いが、規模や覆土が近似するピットがあり多いこと、ピット群が調査区外に延伸する事などから、抽出には至らなかった。

SB1 (図版15・16・42・43)

17E・F区に位置する桁行1間×梁間1間の倒柱建物である。方位はN-39°-E、床面積は12.2m²を測る。柱間寸法は桁行が西4.8m・東5.4m、梁間が北2.4m・南2.45mである。桁行は西側が60cmほど短く、平面形は台形を呈する。柱は残存せず、遺物も出土していない。

SB2 (図版14・16・42・43)

11D・E区に位置する桁行1間×梁間1間の倒柱建物である。方位はN-14°-E、床面積は11.2m²を測る。柱間寸法は桁行が西5.04m・東4.9m、梁間が北2.22m・南2.28mである。桁行は東側がわずか(14cm)に短く、平面形は台形を呈する。柱は残存せず、遺物も出土していない。

SB3 (図版15・17・42・43)

16・17D区に位置する桁行2間×梁間1間の倒柱建物である。方位はN-29°-E、床面積は18.6m²を測る。柱間寸法は桁行が西2.44/3.68m・東6.12m、梁間が北2.96m・南3.12mと、桁行・梁間共ばらつきがある。また、桁・梁は直交せず、平面形は平行四辺形を呈する。北側の桁行には間柱が1本設けられており、ほかの建物にはみられない特徴となっている。柱は残存せず、遺物は出土していない。

SB4 (図版15・17・42・44)

14C・D区に位置する桁行1間×梁間1間の倒柱建物である。方位はN-38°-E、床面積は10.1m²を測る。柱間寸法は桁行が西3.76m・東3.70m、梁間が北2.70m・南2.71mを測り、平面形は長方形を呈する。柱は残存していないが、P123・P181では柱痕を確認した。遺物は出土していない。

S B 5 (図版 15・18・42・44)

14C・D 区に位置する桁行 1 間 × 柱間 1 間の個柱建物である。方位は N - 49° - E、床面積は 11.2 m² を測る。柱間寸法は桁行が西 4.56m・東 4.80m、梁間が北 2.43m・南 2.35m を測り、平面形は長方形を呈する。柱は残存していないが、P17・P140 では柱痕を確認した。遺物は出土していない。

S B 6 (図版 15・18・42・44)

13C・14C・D 区に位置する 1 間 × 1 間の個柱建物である。方位は N - 15° - E、床面積は 12.1 m² を測る。柱間寸法は桁行が西 3.70m・東 3.88m、梁間は南北共 3.20m を測る。平面形は正方形に近い。柱は残存していないが、P125 では断面に柱痕を確認した。遺物は出土していない。

2) 井 戸

20 基検出したうち、14 基が 14 グリッドラインに位置し、さらに 6 基は S B 4 ~ S B 6 の西側に集中する。本遺跡の場合、基盤層がシルトや砂といった崩れやすい地盤であり、実際、調査中に小規模の崩落をおこした井戸が数基存在した。このような地質条件や、井戸から出土した遺物にほとんど時期差がない状況を考え合わせると、6 基の集中は崩落をおこして頻繁に掘り直しが行われた結果なのかもしれない。井戸の構造については井戸桶や裏込めの存在は確認できず、前述の事柄も含めると、素掘りであった可能性が高いものと考える。

覆土の堆積状況は、表面近くに薄層が何枚か堆積し、それ以下では層厚の薄い土層が数枚、水平堆積を示すものが大半を占める (SE26・41・66・102・162 に顕著)。統じて基盤のⅢ~Ⅵ 層がブロックや粒状に混入しており、下層には有機質に富んだ土色の黒ずんだ覆土が堆積する例が多い。こうした状況からみて、検出された井戸は廃絶に際し、人為的に埋め戻された可能性が高いと考える。また、下層の有機質に富む土層の堆積は、使用中に落ち葉やゴミといったものが搔き出される事なく溜まっていた様子を示すものと推察する。

覆土中には炭層を挟在する例 (SE3・SE4・SE66・SE103・SE142・SE145・SE167・SE168・SE189)、10cm 大のきれいな円錐を井戸底や覆土中に敷く例 (SE191)、覆土中に焼窯を伴う例 (SE102・SE103・SE168・SE189) などもみられる。覆土中に窯を多量に伴う例は井戸の廃絶に伴う儀礼行為のひとつとして捉える見解もあり【加藤ほか 2006】注目される事例である。埋納儀礼という点では SE149 から木製白と磁石のような大型の窯の出土があげられる。両者とも被熱の痕跡があり、火事などで焼け出されたものが廃棄された可能性は否定できないが、窯を多量に伴う SE191 と SE149 は井戸の造作が丁寧であり、井戸自体の性格がほかと異なる可能性も考慮する必要がある。以下、個別に概略を述べる。

S E 3 (図版 14・19・45)

13F 区に位置し、平面形は梢円形、断面形は底部の平坦な U 字状を呈する。規模は長径 1.36m、短径 1.21m、深さ 1.86m (底面標高約 1.6 m) で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 19 層に分けた。覆土には数枚の炭化物層が挟在する (5・8・10・12 層)。遺物は 1 層から白磁碗 (11)、2 層から珠洲焼の擂鉢 (20)、16 層から青磁罐反碗 (15) が出土した。このほかにも、須恵器杯・木製品などの小片や種子が覆土下層を中心に少量出土している。

S E 4 (図版 14・19・45)

13D 区に位置し、平面形は梢円形、断面形は U 字状を呈するが下半部は横に張り出す。規模は長径 1.31m、短径 1.14m、深さ 2.6m (底面標高約 0.9 m) で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 17 層に分けた。

下半部の張り出しについては滴水を得るための造作とも考えられるが、この部分は壁がシルト質砂であり、脆弱地盤により壁が崩落した可能性が高いものと考える。また、覆土中位には腐植物・炭・黒褐色土などが挟在する(7・9~11層)。遺物は3層から珠洲焼壺(29)・覆土下層から曲物材(34・35)・不明部材、底面上からガルの一部と思われる木製品(58)が出土した。このほかには漆器碗の小片が1点出土している。

S E 2 6 (図版15・19・45)

14C区に位置し、平面形は梢円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径は1.35m、短径は1.2m、深さ1.61m(底面標高約1.9m)で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は15層に分けた。上位の壁際は垂直方向の堆積である。遺物は出土していない。

S E 4 1 (図版14・19・45)

11F区に位置し、U字溝敷設のため北半は失われている。規模は長径0.94m以上、深さ1.58m(底面標高約1.9m)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は6層に分けた。遺物は6層から須恵器片が1点出土したのみである。周囲の遺構の所属時期からみて古代の遺構である可能性は低く、混入遺物であろう。

S E 6 6 (図版14・19・45)

11F区に位置し、平面形は梢円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.16m、短径0.9cm、深さ1.86m(底面標高約1.7m)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は8層に分けた。6層以下は炭化物や黒色土を多量に含む。特に6層は米をはじめとする栽培植物の炭化種子、魚類やカエルの焼骨など動植物遺体を豊富に含む(第V章4参照)。このほかは、4層から青磁罐反腕が1点(16)出土したのみである。

S E 1 0 2 (図版15・20・46)

13・14F区に位置し、平面形は梢円形、断面形はU字またはV字状を呈する。長径1.09m、短径0.74m、深さ1.35m(底面標高約2.1m)を測り、急角度に立ち上がる。覆土は7層に分けた。5層は被熱した小穀を少量含む。出土遺物は5層から出土した珠洲焼壺(26・27)と、2層から出土した須恵器片の合計3点である。

S E 1 0 3 (図版15・20・46)

14E区に位置し、平面形は梢円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径1.22m、短径1.02m、深さ1.26m(底面標高約2.2m)で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は13層に分けた。2層は炭化物を多く含む。11層以下は被熱を多く含み、そのほとんどは被熱している。遺物は覆土上層から須恵器杯(1)・壺(6)・漆器碗・刀子と思われる鉄製品が出土した。

S E 1 2 7 (図版15・20・46)

14C区に位置し、平面形は円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長径1.87m、短径1.7m、深さ1.63m(底面標高約1.9m)で、壁は底面から中位まではほぼ垂直に立ち上がり、上位は緩やかに立ち上がる。覆土は10層に分けた。1~6層は大きく乱れる。遺物は6~8層を中心に須恵器杯・壺・珠洲焼壺(28)・漆器などの破片が出土した。

S E 1 3 0 (図版15・20・46)

13・14C区に位置し、平面形は梢円形、断面形は台形状を呈する。規模は長径1.72m、短径1.44m、深さ1.24m(底面標高約2.2m)で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は8層に分けた。遺物は出土していない。

S E 1 4 1 (図版15・20・46)

14C区に位置し、P30に切られる。平面形は梢円形、断面形は漏斗状を呈する。規模は長径1.65m、短径1.45m、深さ2.12m(底面標高約1.3m)である。壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり、中位で外側に屈曲

して再びほぼ垂直に立ち上がる。覆土は19層に分けた。壁沿いには炭化鉄の薄層が形成される。遺物は16層から厚板状の切材(47)が1点、3層から瀬戸製品の小片が1点と少ない。

S E 1 4 2 (国版14・21・46)

12D区に位置し、擾乱のため北半は失われている。断面形はU字状を呈する。規模は長径0.9m以上、深さ1.39m(底面標高約2.0m)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は12層に分けた。8・10層は炭化物・木質腐植物を多く含む。遺物は8層から中世の土師質土器(10)が1点出土したのみである。

S E 1 4 5 (国版15・22・47)

14C区に位置し、SE167に切られる。平面形は梢円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.85m、短径1.65m、深さ1.95m(底面標高約1.5m)である。壁は基本的にほぼ垂直に立ち上がるが、SE167と切り合う部分は壁が崩落し、緩やかな立ち上がりとなっていた。覆土は23層に分けた。19層に関しては炭、腐植物、砂、灰などが多量に混じり、薄い板材が散在する。遺物は本遺跡としては多く、曲物材(37-38)・曲物側板の可能性がある薄板状木製品(44-45)・厚板状軸用材(46)・棒状木製品(43)・鉄錠などが19層から、土師器杯・須恵器杯の小片が数点、覆土上層から出土した。

S E 1 4 9 (国版14・22・47)

11D区に位置し、南半は上位がU字溝敷設によって失われる。断面形はU字状を呈する。規模は直径0.68m、深さ1.52m(底面標高約1.75m)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は16層に分けた。13層上からは木製の臼(50)が、6層上からは礫石のような直径約30cmの礫が出土した。臼は部分的に、礫は片面に被熱によるコゲやススが付着する。出土した遺物のすべてにコゲやススの付着が確認できる。臼の年代は放射性炭素年代測定では、 710 ± 30 、曆年較正結果AD1,268-1,294という年代が算出されている(第IV章4参照)。このほかにも、12層から陽物状木製品(51)・棒状木製品が1点ずつ出土している。

S E 1 6 1 (国版15・21・47)

17C・D区に位置し、平面形は円形、断面形は北側に中端を伴う袋状を呈するが、この部分は崩落によるものであろう。長径1.66m、短径1.6m、深さ1.41m(底面標高約2.0m)を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は11層に分けた。中位の9層が有機質に富む事と、10層以下がシルト化したⅢ-V層である事から、北壁の一部が崩落した後、掘り直す事なく使われ続けた可能性が窺える。出土遺物は須恵器杯片5点・堀片1点と、少ないながらも古代遺物である。

S E 1 6 2 (国版15・21・47)

14D区に位置し、平面形は円形、断面形は底面の平坦なU字状を呈する。長径1.3m、短径1.25m、深さ1.5m(底面標高約2.0m)を測り、ほぼ垂直に立ち上がる。覆土は8層に分けた。出土遺物は青磁罐反碗1点(14)のみである。

S E 1 6 7 (国版15・22・47・48)

14Cに位置し、SE145を切る。平面形は梢円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.74m、短径1.45m、深さ1.49m(底面標高約2.0m)である。壁は基本的にほぼ垂直に立ち上がるが、SE145と切り合う部分は緩やかに立ち上がる。覆土は16層に分けた。中位には炭化物の薄層が挟在する(11層)。遺物は刀子の破片が1点、4層から出土した。

S E 1 6 8 (国版15・21・48)

14Dに位置し、P196・P197に切られる。平面形は梢円形、断面形は底部の平坦なU字状を基本とする。下半部は外側に張り出しが、25層がVI層を基本とする堆積土で構成される事から崩落によるものと考え

た。本来は壁が底面からほぼ垂直に立ち上がっていたであろう。規模は長径1.72m、短径1.51m、深さ2.5m(底面標高約0.9m)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は25層に分けた。中位の21層には炭の混入が顕著である。また、10~12層・20~23層からは拳大~人頭大ほどの自然礫や焼礫が数点出土しており、その中に敲磨石が1点ある(61)。遺物はこのほかにも覆土上層から珠洲焼鉢(22)・須恵器甕が、下層から曲物・板状木製品・不明木材などが出土しており、本遺跡としては出土量が多い。

S E 1 6 9 (図版15・21・48)

14Dに位置し、平面形は円形、断面形は崩れたU字状を呈する。規模は長径1.2m、短径1.1m、深さ1.0m(底面標高約2.4m)と浅い。壁は崩落したのか、凹凸しながら立ち上がる。覆土は10層に分けた。遺物は7層から出土した珠洲焼鉢(21)と、10層から青磁碗(17)の2点と少ない。

S E 1 8 9 (図版15・22・48)

14E区に位置し、平面形は梢円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.05m、短径0.83m、深さ1.4m(底面標高約1.8m)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は12層に分けた。下位の8・9層には多量の炭化物や被熱礫を伴う。遺物は4層から須恵器甕数点と、9・10層から瓦片(9)が1点出土した。

S E 1 9 1 (図版14・22・48)

12E区に位置し、平面形は梢円形、断面形はU字状を呈する。規模は長径1.37m、短径0.8m、深さ2.25m以上(底面標高約0.9m以下)で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は7層に分けた。3層中には直径10cm前後の円礫が約30cmの厚さで礫層が存在する。また、最下層(7層)は直径10cm前後の礫と砂が30cm以上堆積するが、湧水が激しく井戸底は検出できなかった。遺物は、3層中に存在する礫層の上から曲物や桶などの縦縫に用いられる樹皮(42)・自然木などが出土した。

3) 土 坑

合計9基検出し、おおよそ井戸と同じ分布状況を呈する。平面形はすべて円形を基本とするが、断面形は弧状または半円状を呈するもの(SK13・SK128・SK129・SK180)、箱状を呈するもの(SK132・SK133・SK134・SK210)、深いU字状を呈するもの(SK144)がある。覆土はSK129以外、井戸と同じく基盤層のⅢ層ブロックを含む均質な土層が堆積しており、人為的に埋め戻された可能性が高い。また、比較・検討し得る遺物が出土しなかったものの、箱状断面を持つもののうち、SK132~SK134は後述する近世前期の墓(SK131)に近い形態をもち、SK132・SK133は覆土の性質や堆積状況もSK131と近似する点を特徴として挙げておく。以下、個別に概略を述べる。

S K 1 3 (図版14・23・48)

12D区に位置し、平面形は不定形、断面形は弧状を呈する。長軸方位はN-23°-Wを指す。規模は長径0.65m、短径0.33m、深さ7cmで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰黄褐色シルトの単層である。遺物は出土していない。

S K 1 2 8 (図版15・23・48)

13C区に位置し、平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長径は1.21m、短径は1.15m、深さ0.38mで、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は黄褐色シルトで6層に分けた。底面には南北に1基ずつピットが設けられている。北側のものは直径40cm、底面からの深さ30cm、南側のものは直径20cm、底面からの深さ15cmを測る。5層が覆土となっていたのでSK128の内部施設と考えた。遺物は出土していない。

S K 1 2 9 (図版 15・23・49)

17F に位置し、平面形は楕円形、断面形は半円状を呈する。長軸方位は N - 14° - E を指す。規模は長径 1.48m、短径 1m、深さ 0.45m で、壁は南側は急斜面に、そのほかは緩やかに立ち上がる。覆土は砂を多く含む黄橙色シルトで 3 層に分け、2 層はラミナ状の堆積を示す。遺物は須恵器杯の小片が数点と、砾石と思われる石製品が 1 点 (60)、2 層から出土した。

S K 1 3 2 (図版 15・23・49)

14F に位置し、平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径 0.85m、短径 0.76m、深さ 0.39m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 6 層に分けた。遺物は出土していない。

S K 1 3 3 (図版 15・23・49)

15D 区に位置し、平面形は円形、断面形は箱状を呈する。規模は直径 81cm、深さ 54cm で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 12 層に分けた。上部ではまず東半を埋め、次に西半を埋めた様子がよく看得できる。遺物は覆土上層から須恵器杯 (2)・甕 (7) の小片がわずかに出土した。

S K 1 3 4 (図版 15・23・49)

14D・E 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径 1.05m、短径 0.92m、深さ 0.43m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 7 層に分層した。7 層は木炭を多量に含む。遺物は青磁碗の小片が 2 点、2 層から出土した。

S K 1 4 4 (図版 15・23・50)

14C・D 区に位置し、北東を P139 に切られる。平面形は楕円形、断面形は U 字状を呈する。規模は長径 0.8m、短径 0.71m、深さ 0.74m (底面標高 2.67m) で、壁は基本的にはほぼ垂直に立ち上がるが、北壁の一部は崩落によるものか、えぐれたように外側に広がる。覆土は 8 層に分けた。1～3 層は黄橙色砂質シルトを、4～8 層は灰黄褐色砂質シルトを基調とし、いずれの層にもⅢ層土ブロックが混入する。遺物は出土していない。

S K 1 8 0 (図版 15・23・50)

13D 区に位置し、SE 4 に切られる。平面形は円形、断面形は弧状を呈する。規模は長径 0.8m、短径 0.7m、深さは 3cm と浅い。覆土は褐灰色シルト質粘土の単層である。遺物は出土していない。

S K 2 1 0 (図版 15・23・50)

13・14E 区に位置し、平面形は楕円形、断面形は箱状を呈する。規模は長径 0.73m、短径 0.61m、深さ 0.46m で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。覆土は 4 層に分けた。遺物は出土していない。

4) 溝

北区で 5 条、南区で 5 条検出した。遺構方位をみると、西北西あるいは東北東方向を指向するものが 6 条 (SD1・SD2・SD31・SD178・SD205) あり、これは金屋と海老江の集落を結ぶ線とおおよそ一致する。SD212 はこれらに直交する。断面形では弧状または半円状を呈するものが 6 条 (SD1・SD2・SD31・SD148・SD208・SD209)、箱状を呈するもの 2 条 (SD178・SD205)、台形状を呈するものが 1 条 (SD204) ある。溝の機能については、SD1・SD31・SD204 は壁面や覆土の様子から排水や用水、SD148・SD178・SD205 は溝底が平坦で凹凸もほとんどみられないことから区画のための溝と考えた。以下、個別に概略を述べる。

S D 1・S D 3 1 (図版 14・23・50)

12C～F 区に位置し、遺構方位は N - 69° - W を指す。擾乱により断裂するが、ややうねりながらも

東西方向に直線的に延びる溝である。SD31とはほぼ同位置で重複し、SD1はSD31の作り替えと考えた。SD31は12Dグリッドで完全にSD1と重複し消滅する。SD1の規模は最大幅1.5m、深さ23cmを測る。SD31は深さ14cmとやや浅い。断面形は両者とも半円状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。溝底標高は調査区東端で3.35m、西端で3.05mと西に向かって下降する。覆土は両者とも灰黄褐色シルトでSD1は2層に分けた。SD1からは須恵器杯小片が2点(4)出土したほか、覆土中位に小蝶が列をなして出土している。SD31からは遺物は出土していない。

SD2(図版14・18・50)

13E・F区に位置し、造構方位はN-65°-Wを指す。断面形は凹凸状を呈する。全長1.57m、最大幅0.38m、深さ9cmと、溝というよりは土坑的な性格のものであろう。覆土は灰色シルトの単層である。遺物は出土していない。

SD148(図版14・18・51)

11D区に位置し、造構方位はN-76°-Wを指す。断面形は弧状を呈する。規模は全長5.8m、最大幅0.42m、深さは4cmと浅く、壁は緩やかに立ち上がる。溝底標高は調査区東端で3.48m、西端で3.39mと西に向かって下降する。覆土は褐灰色シルト質粘土の単層である。遺物は出土していない。

SD178(図版15・18・51)

17D・F区に位置し、造構方位はN-69°-Wを指す。断面形は箱状を呈する。規模は全長19.74m、最大幅0.61m、深さ0.34mで、壁はほぼ垂直に立ち上がる。溝底標高は調査区東端で3.11m、西端で3.33mと、東に向かって下降する。覆土は7層と、薄層が交互に堆積する。遺物は1層から青磁碗が1点(18)出土した。

SD204(図版13・18・51)

8A区から9B区の方向(N-50°-E)へやや弧を描きながら延びる溝である。8B10で近～現代の溝に切られる。断面形は台形状を呈し、壁面には水流で抉られたような細かな凹凸が多い。幅は0.42～1.3mと一定しない。深さは約50cm、底面標高は北東端で3.08m、南西端で2.85mと南西に向かって下降する。覆土は7層に分けた。遺物は出土していない。

SD205(図版13・18・51)

9C～9E区に位置し、造構方位はN-66°-Wを指す。西側は近～現代の溝に切られて消滅する。断面形は箱状を呈する。規模は全長15m以上、幅0.34～0.54m、深さ約0.3mである。底面標高は東端で3.27m、西端で3.21mと西に向かってわずかに下降する。覆土は灰黄色粘土の単層で、SD208・SD209と同質である。遺物は溝底付近から古墳時代中期の高杯(31)、珠洲擂鉢(23)、青磁碗、白磁小碗などが出土した。

SD208・SD209(図版13・18・51)

8B区に位置する。約3.2mの間隔で平行し、両者は一対のものであろう。全長は5m以上である。削平により造構の大部分は失われており、溝底の一部がかろうじて残存するのみである。造構方位はN-35°-Wを指す。溝底の標高は3.4m弱と、ほかの溝と比べて浅い。覆土はSD205と同質である。遺物は出土していない。

SD212(図版13・51)

7C～8C1区に位置する。平成17年度調査[小村ほか2006]で検出されたSD002の延長とみられるが、本遺跡では確認面上に土質の粘土化というかたちでその痕跡を残すのみで、造構自体は削平により消滅し

ている。遺構方位はN - 25° - E、全長はSD002を含め23m以上、幅は約40~50cmである。

5) ピット (図版14・15・24・52・53)

検出したピットのうち、建物の抽出に至らなかったものは142基を数える。ピットの直径は10~60cmと規模に聞きがあるが、20~30cmのものが大半を占める。これらは11E・F区に濃密な分布を示し、次いで獨立柱建物と井戸を多数検出した11・13・14C区にやや集中する。11E・F区には深さが20cmを超えるものも多い。平面分布も考え合わせると、東西方向に軸線をもつ建物の存在が窺えるが、抽出には至らなかった。遺物はP45に柱根が残存するほかは、P101から木質が失われ漆の塗膜だけが残った漆器が出土したのみである。各ピットの詳細については遺構一覧表を参照されたい。

6) 性格不明遺構

S X 2 0 3 (図版13・16・53)

7E区に位置し、SX207に切られる。開墾掘削中にまず木材が出土し、調査区外に延伸する部分は調査範囲を拡張して調査した。遺構の平面形は主軸方向に長い梢円形を呈し、主軸方位はN - 19° - E、規模は全長7.28m、幅0.96~1.3mである。断面形は弧状を呈し、底面標高は2.87~2.9mとは水平である。覆土はVI層を基本とするもので基盤層とはほとんど見分けがつかない。底面からは大型の木材(59)が出土した。樹種はケヤキである。放射性炭素年代測定では、 $2,250 \pm 30$ BP、曆年校正結果BC385-231という年代が算出されており(第IV章4参照)、弥生時代前期頃の遺物であることが判明した。遺物の性格については、木製品に使う材を採取した残り(端材)と思われる¹⁾。

S X 2 0 7 (図版13・17・53)

7E区に位置する。SX203と直交方向に重複し、これを切る。平面形は不整形を呈し、主軸方位はN - 79° - Wを指す。規模は全長2.6m、幅0.72~1.0mである。断面形は弧状を呈し、全体に緩く凸凹がみられる。底面標高は2.94~3.12mである。遺構底面は被熱により硬化しており、特に西側の円形に並んだ部分は赤化する。底面からは多量の木炭が出土した。直径20cm程度の自然木か丸太材を燃やしたもので、樹皮が原形を留めるかたちで検出している。覆土はVI層に炭化物や焼土粒子・灰などを含んだもので、特に3層は被熱により硬化する。こうした点から、本跡は焚火的な用途に使用された遺構と考えた。遺物は出土していない。

7) 近世墓

S K 1 3 1 (図版14・24・53・54)

11E区に位置する木棺墓である。掘乱により北側が破壊されている。掘り方の平面形は隅丸方形と推定する。主軸方位はN - 19° - E、規模は全長1.2m以上、幅1.23mである。断面形は台形状を呈し、深さ60cm(底面標高2.94m)である。覆土は13層に分けた。11~14層は裏込めと考えるが、しまりはやや弱い。4・5層は東側から底面近くまで流入しており、埋葬時の埋土とは考えがたい。改葬が行われた際の埋め戻しか、墓内の空洞化によって落ち込んだか、いずれかに起因する土壤であろう。後者の場合、蓋の存在が前提となるが、蓋の痕跡は確認できなかった。

1) 首都大学東京教授 山田昌久氏からご教示を受けた。

木棺は、以下に述べる構造的特徴をもつ。すなわち、底面に直径3cm前後の横木（スルデ属）を2本、遺構主軸に対し直交方向に30cmの間隔で置く事と、樹皮（樹種不明）を敷く事で遺体と地面を隔て、その後、全長1.2m以上、幅約60cmの規模で方形あるいは長方形に側板（マツ属）を巡らす構造となっている。樹皮と横木は本来重複していた可能性があるが、重複部分は樹皮が腐って失われていたため、上下関係は確認できなかった。このような底面構造から、遺体を収容して運ぶ事は不可能であり、埋葬時にはじめて供せられたものである事がわかる。東側の側板は放射性炭素年代測定を行い、 340 ± 40 BP、曆年較正結果 AD1488-1633という年代が算出されている（第Ⅳ章4参照）が、後述する副葬品の年代から遺構の構築年代は17世紀後半以降である。出土遺物としては、北側の横木上から漆器碗が1点、正位の状態で出土し、副葬品の寛永通寶5枚・永樂通寶1枚がその下から出土している。このほか、白歯が1本、遺構底面上から出土している。

3 遺 物

A 概 要

出土した遺物は土器・陶磁器類がコンテナ1/2箱分、木製品がコンテナ1箱分、石製品2点、金属製品2点、錢貨6枚と少量で、その大半は小片である。遺物の約6割は遺構から、残る4割は近世～現代の耕作土（I・II層）から出土している。土器・陶磁器類は古代の須恵器（杯・壺）、土師器（杯）、中世の舶載陶磁器（青磁・白磁）、国産陶器（瀬戸・珠洲・備前製品）を中心に、近世～現代の国産陶磁器が少量、古墳時代中期と考えた土師器高杯の小片1点などが出土しており、古代は8世紀代、中世は舶載陶磁器に羅倉時代のものがみられるものの、国産陶器は15～16世紀代のものである。木製品には漆器碗・曲物・曲物や桶などに使われる組材と考えた樹皮・用途不明の板状・棒状木製品・建築部材などのほかに、近世墓に伴う木棺がある。

B 各 説

1) 土 器・陶磁器類（図版25・55）

出土点数が少ないため、出土地点別ではなく遺物種毎に古代・中世の順で掲載した。同様の理由で遺構外から出土したものも掲載した。各遺物の器種名・時期の記述については、須恵器は春日氏による編年【春日1999】、珠洲焼は吉岡氏による編年【吉岡1994】、中世土師器（かわらけ）は品田氏による論考【品田1997】、舶載陶磁器は森田氏による編年【横田・森田1978・森田1982】に準拠している。なお、出土地点・法量などについては、巻末の出土遺物観察表を参照されたい。以下、説明を記す。

1～5は須恵器杯、6～9は須恵器壺である。胎土は黒色・灰白色微粒子をわずかに含むもので、9には海綿状骨針が確認できる。1は無台杯、2は有台杯と推測する小片で、いずれも口径12cmを測る。法量や側面観から判断して8世紀代（V周か）のものと考える。須恵器にはほかに杯蓋や横瓶と推測する破片をI層や搅乱から採取したが、小片のため図化できなかった。

10～30は中世の遺物である。10は京都系の手づくね成形土師器である。皿状の側面観を有することから越後国に再度、京都系土師器が姿を現す16世紀代のものであろう。11～19は舶載陶磁器で、11は白磁、12～19は青磁である。11は碗か皿で、幅広の高台上部まで白濁色の釉がかかっている。15世紀代と考える。

12は高台付の皿であろうか。非常に薄く丁寧な造作で、底部外面は露胎である。素地や着色の具合は中世前期の青磁と変化ないが、攪乱から出土しており、新しいものかも知れない。13は皿、14～19は碗である。16は内面底部に型押しによる草花文が施される。19は内面底部外周に沈線が巡る。20～29は珠洲製品で、20～25は鉢（片口鉢）、26～29は甕である。胎土はいずれも灰白色微粒子をわずかに含み、20・22～28には海綿状骨針が確認できる。小窓がやや目立つ少っぽい胎土である。20～24は鉢し目に入る。20・21は面取りされた口縁部がやや内傾するもので、珠洲V期の製品であろう。口縁部の波状文は9条（あるいはそれ以上）一単位の櫛歯状具が用いられる。22は口縁部の面取り部分が内部に肥厚せず、後をもって体部に至る形状で、珠洲V～VI期の製品であろう。鉢し目は6条一単位の櫛歯状具を用い、右から左方向へ施している。内面口縁部には8条（あるいはそれ以上）一単位の櫛歯状具で波状文が施される。25は捏鉢として使用されたもので、内面は摩耗してつるつるする。甕はいずれも胴部小片で全体形は見えない。内面の調整はいずれも板状具によりナデが施されており、胴部下半の破片であろう。30は備前焼と推測する擂鉢である。口縁部の形態から中世末～近世初頭の製品であろう。胎土は砂礫をわずかに含むものの、比較的精製されており、硬く焼き締まって造作はシャープである。

土器類には上に述べたもののはかに古墳時代中期と考えた高杯脚部片（31）と、時期不明の円形土製品が2点（32・33）出土している。円形土製品は型による成形と推測され、表面は滑らかな割に調整痕がなく、端部の屈曲は鋭角である。非常に硬く焼き締まっており、近世以降のものである可能性も考えられる。

2) 木製品（図版26～28・56～58）

小片も含めた出土点数は43点で、図示したものは24点である。出土地点は大半が井戸で、特にSE4・SE145・SE168に集中する。土器・陶磁器類同様、出土点数が少ないため、器種別に掲載した。

34～41は曲物の部材である。34・35は側板、36～41は底板である。34は片面に4～10mmと不等間隔でケビキが施され、上下端には矢印状のケビキも付く。底板はいずれも厚手である。37は梢円形曲物の底板で、釘穴が3孔穿たれる。38は側面に木釘穴が2孔穿たれる。40は周縁に側板との結合釘穴が1孔穿たれるほか、平面にも1孔存在する。41の周縁には縫縫の残欠が2か所みられる（図の▼）。断面には結合用の木釘穴が4孔穿たれ、そのうちの一つには木釘が残る。42は曲物の縫縫に用いた桙と推測される樹皮で、3重巻きの状態で出土した。

43は棒状、44・45は薄板状の製品である。43は枝の付け根に斜位の切削痕があるほか、表面には刃痕がいくつも確認できる。44・45は曲物側板の可能性があり、45には両側縁に合計4孔の釘穴が穿たれる。

46は舟を舳先から縦に製いたような形態を呈する厚板状の製品である。住吉遺跡〔高橋保晃2006〕SE2022では井戸側に丸木舟の転用材が用いられているが、46はこれを1/2～1/3に小型化したような形態を呈する。外面先端は炭化する。47は厚板の転用と考えられる切材である。表面には手斧やノミの痕跡が確認できる。図の下端が切断面であるが、切断具の痕跡は摩耗により不明である。

48・49は杭で、48は削材、49は芯持丸太材が用いられる。49は火災に遭った材を転用したものか、全面が焼け焦げた材の先端を尖らせて杭としている。

50、51はSE149から出土している。50は白で、材にはマツ属が用いられる（第Ⅳ章4参照）。「日本民俗大辞典」〔吉川弘文館1999〕によれば、餅搗きに使われる胴臼に対しく述べて白と呼ばれるもので、弥生時代以降、伝統的に用いられてきたものである。中央部は段をもって狭まり、上端からは30cm弱の深さをもつ。このような形態は製粉用とされるが〔前掲〕、穀類の脱穀・精白・製粉など〔奈良国立文化財研究

所 1993】広義に解釈した方が良いだろう。51は陽物であろうか。粗製と表現できるような造作で、先端部のみ炭化する。臼の近くから出土している。

52はSK131から出土した漆器碗である。高台以外は黒漆の上から朱漆が重ね塗りされている。漆器はほかにSE4・SE127・P101でも出土したが、漆の塗膜が残存するのみであり、図示し得なかった。53～57は木棺の部材である。板材はマツ属、横木材はスルデ近似種が用いられている(第IV章4参照)。58はザルの一部であろう。縦方向に間隔をおいて幅広の材を用い、横方向には細い材を交互にくぐらせて密着させて編んでおり(ゴザ目編み)。現代ではザルに最も広く用いられる編み方とされる【柳1985】。59はSX203から出土した自然木(端材)である。首都大学の山田氏に伺ったところ、板目でミカン割りした材を年輪界にそってクサビ入れたもので、製品そのものではなく、製品に使う材を取った残り(端材)の可能性を考えられるとのご教示を受けた。もっともよく残る痕跡から、クサビの有効幅は約7cmと推定できる。側面には木と平行にクサビ痕がみられるが、摩耗により痕跡は不明瞭である。また、表裏面には木が輻方向に断続した痕跡がみられ、クサビが当たった痕跡も数か所みられる。年輪の観察から、やはり木取りは板目でミカン割りしたものであることがわかった。年輪はほとんど弧を描いておらず、原本は大木であったのだろう。

3) 石 製 品 (図版27・58)

砥石と考えた製品1点(60)、蔽磨石1点(61)が出土している。60は花崗岩を用いた製品で、平坦面1面のみが使用される。この部分は全体に摩滅して滑らかな上に、幅0.5～1.5cmの条痕が數条付いている。61は安山岩を用いた製品で、49同様、被磨により全体が焼け焦げた後に、礫の両側縁に敲打痕が付いている。

4) 金 属 製 品

刀子と思われる破片がSE103・SE167から、鉄滓がSE145から出土した。いずれも腐蝕が進んでおり、図示し得なかった。

5) 銭 貨 (図版27・58)

近世墓(SK131)から寛永通寶5枚、永樂通寶1枚が出土している。漆器碗の下から6枚がズレて重なった状態で出土した。いわゆる六道銭(六文銭)である。永樂通寶(初鑄年1411年)は、室町時代に大量に輸入された明銭である。寛永通寶には寛永十三(1636)年～万治二(1659)年鑄造の「古寛永」と、寛文八(1668)年以降に鑄造された「新寛永」があるが、新寛永はさらに背面上部に「文」の字を鏤出す、いわゆる「文銭」(寛文八(1668)年～天和三(1683)年鑄造)がある。文銭は、新寛永としては最初に鑄造されたもので、その後のものは背面無文となる。古寛永と新寛永は「寛」と「寶」の字体の違いで分別が可能だという【永井1998】。以上の点を元に本遺跡出土のものを分別すると、古寛永2枚、新寛永3枚(いずれも文銭)となる。

4 自然科学分析

A はじめに

本稿では、発掘調査成果から課題とされた、1) 動・植物利用、2) 木製品の年代観と木材利用、の2点を検証するため自然科学分析調査を行う。

B 試 料

試料は、木製品9点(近世墓木棺部材(53~57)5点・臼(50)・板状木製品(46)・SX203加工木材(59)・P45柱根(48))及び井戸覆土(SE4・SE66・SE142・SE149・SE162・SE189)の水洗選別(篠い目1mm・3mm・5mm)で抽出し、分類された種実遺体・炭化物・動物遺存体・昆虫遺体など計36試料である。本分析では、木製品すべてについて樹種同定を実施し、このうち木棺横板(55)・臼(50)・加工木材(59)3点を対象に放射性炭素年代測定を実施する。微細遺物は、各試料の観察結果による試料の産状や保存状態、分析目的を考慮し、種実遺体分析・動物遺存体分析を実施する。試料の詳細は、結果とともに表に示す。

C 分析方法

放射性炭素年代測定、樹種同定、種実分析、動物遺存体分析の分析方法などについては、当社の定法に従い実施している。各分析の詳細は、既存の調査報告書（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社2004・2005a・2005bなど）を参照されたい。

D 結 果

1) 放射性炭素年代測定

同位体効果による補正を行った測定結果(第12表)は、木棺横板(55)は 340 ± 40 BP、臼(50)は 710 ± 30 BP、加工木材(59)は $2,250 \pm 30$ BPを示す。暦年校正結果(第13表、測定誤差 σ)は、木棺側板は第12表

第12表 吸納性疾患年代別走詰率

| 遺伝子名 | 形態 | 試料名 | 試料の 性別 | 種類 | 推定年代 (BP) | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) | 測定年代 (BP) | Note No. | 測定機関番号 |
|---------------|----|-----------|-----------|----------|--------------|------------------------------|--------------|----------|------------|
| SK101 (大根) | 木製 | マツ根葉籠笛束東北 | ♀ | 340 ± 40 | -30 ± 7 | -7.3 | 450 ± 40 | 5,092-1 | JAEA-61150 |
| SK102 (大根) | 木製 | マツ根葉籠笛束東北 | ♀ | 710 ± 30 | -26 ± 6 | -5.8 | 710 ± 30 | 5,092-2 | JAEA-60992 |
| SK103 (大根) | 木製 | マツ根葉籠笛束東北 | ♀ | 710 ± 30 | -26 ± 6 | -5.8 | 710 ± 30 | 5,092-3 | JAEA-60993 |

从新开始的你跟上时代的脚步，本刊一岁生日快乐，感谢你的支持。

初期実験では、Lithiumの半減期(300年)を使用。
初期実験では、1断面を基準として何年間で本毛を完成

3) 付記した理由は、上級小を監修として構成者であるかを示す。

第12章 國際化政策

| 道標名 | 器種・式科名 | 修正年代 (BP) | 層年較正年代 (cal) | | | | | | 相對比 | Code No. |
|-------------------|------------|--------------|--------------|----------------|----------------|--------------|---------|--------|-----|----------|
| | | | σ | cal AD 1,488 | - cal AD 1,524 | cal BP 462 | - 423 | 0.338 | | |
| SK131 木棺檻板(55) | 709 ± 40 | σ | cal AD 1,553 | - cal AD 1,604 | cal BP 397 | - 346 | 0.441 | 9392-1 | | |
| | | | cal AD 1,607 | - cal AD 1,653 | cal BP 343 | - 317 | 0.221 | | | |
| | | | 2σ | cal AD 463 | - cal AD 1,642 | cal BP 488 | - 308 | 1.000 | | |
| SE149 木製臼(30) | 709 ± 31 | σ | cal AD 1,265 | - cal AD 1,294 | cal BP 682 | - 656 | 1.000 | 9392-2 | | |
| | | | 2σ | cal AD 1,256 | - cal AD 1,309 | cal BP 694 | - 641 | 0.865 | | |
| | | | cal AD 1,361 | - cal AD 1,386 | cal BP 589 | - 564 | 0.135 | | | |
| SX203 加工木材(59) | 2,247 ± 31 | σ | cal BC 385 | - cal BC 354 | cal BP 2,335 | - 2,304 | 0.354 | 9392-3 | | |
| | | | cal BC 260 | - cal BC 231 | cal BP 2,240 | - 2,181 | 0.646 | | | |
| | | | 2σ | cal BC 392 | - cal BC 347 | cal BP 2,342 | - 2,297 | 0.317 | | |
| | | | cal BC 320 | - cal BC 206 | cal BP 2,270 | - 2,156 | 0.683 | | | |

EDUCATIONAL TECHNOLOGY DOCUMENTATION PROGRAM CALLED RETHINKING. Copyright 1999-2000 © Starver and PJ Neisser. All rights reserved.

3) 記入をためめるのが慣例だが、当年報正直率や前年修正プログラムが改正された場合の改訂書類等は計算が古いやうに、1冊目をためめていい。

4)統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である

5)相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に

calAD 1,488-1,633、白は calAD L268-1,294、加工木材は calBC 385-231 である。なお、歴年較正については第Ⅲ章 4 で詳述している。

2) 樹種同定

結果を第 14 表に示す。木製品は、針葉樹 1 種類（マツ属複数管束茎）と広葉樹 3 種類（ケヤキ・カツラ・スルデ近似種）に同定された。

3) 種実分析

遺構別種実検出状況

結果を第 15 表に示す。井戸覆土から抽出された種実遺体試料からは、裸子植物 1 分類群 8 個、被子植物 55 分類群 6716 個、不明種実 51 個、計 6775 個の種実が検出された。なお、栽培植物では、モモ 4 個・イネの胚乳 1015 個・穎 309 個・アワ近似種 11 個・アワヒエ 81 個・ヒエ近似種 24 個・オオムギ 76 個・コムギ 3278 個・アサ 140 個・ソバ 19 個・マメ類 51 個・エゴマ 529 個・メロン類 30 個・ヒヨウタン類 9 個の計 5576 個が確認され、全検出個数の約 85% を占める。以下に、遺構別種実検出状況を記す。

S E 4 (17 層)

栽培植物は、イネの穎 1 個・アワ近似種 2 個・アワヒエ 6 個・ヒエ近似種 8 個・オオムギ 2 個・コムギ 47 個・アサ 17 個・ソバ 1 個・マメ類 1 個・エゴマ 350 個・メロン類 1 個・ヒヨウタン類 2 個の計 438 個が検出され、このうち、イネ・アワ近似種・アワヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・マメ類の計 67 個は炭化が認められた。本試料は、エゴマ主体の種類構成を示す。このほかに、広葉樹 5 分類群（アオツヅラフジ・ウルシ属・ブドウ属・ニワトコ）119 個、草本 9 分類群（エノコログサ属・ホタルイ属・タデ属・アカザ科・ヒユ科・ナデシコ科・セリ科・ナス科・オナモ属）66 個、不明種実 9 個の計 194 個が検出され、ウルシ属（70 個）・ブドウ属（46 個）が多い。

S E 66 (6 層)

栽培植物は、イネ胚乳 893 個・穎 20 個・アワ近似種 1 個・アワヒエ 26 個・ヒエ近似種 5 個・オオムギ 62 個・コムギ 3129 個・マメ類 30 個の計 4166 個が検出され、全て炭化している。コムギ主体でイネ胚乳が次ぐ種類構成を示す。このほかに、広葉樹 3 分類群（アオツヅラフジ・ブドウ属・ニワトコ）9 個、草本 2 分類群（タデ属・アメリカセンダンダングサ）2 個、不明種実 42 個の計 53 個が検出され、このうちアオツヅラフジ・ニワトコ 2 個・不明種実 41 個の計 44 個に炭化が認められた。

S E 142 (8 層)

栽培植物は、モモ 3 個・イネ胚乳 19 個・穎 2 個・アワヒエ 1 個・コムギ 72 個・アサ 2 個・マメ類 3 個・メロン類 1 個の計 103 個が検出され、イネ胚乳・穎 1 個・アワヒエ・コムギ・マメ類・メロン類の計 97 個に炭化が認められた。このほかに、広葉樹 6 分類群（ウルシ属・ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科・タラノキ・ニワトコ）224 個、草本 7 分類群（イネ科・ホタルイ属・ウキヤガラ近似種・カヤツリグサ科・アカザ科・エノキグサ・イスコウジュ属）58 個の計 282 個が検出された。栽培植物ではコムギが主体となるが、全体ではニワトコ（211 個）が主体となる種類構成を示す。

第 14 表 樹種同定結果

| 遺構名 | 部位・法科名 | 木取 | 樹種 |
|-------------|--------|----------|----|
| 木削薄板(53) | 施口 | マツ属複数管束茎 | |
| 木削薄板(54) | 施口 | マツ属複数管束茎 | |
| 木削薄板(55) | 施口 | マツ属複数管束茎 | |
| 木削薄板 | 木取 | 松皮 | |
| 木削薄木(56-57) | 三持丸木 | ヌマズ近似種 | |
| 木削丸木(58) | 三持丸木 | マツ属複数管束茎 | |
| 加工木材(59) | 施口 | ケヤキ | |
| 板状木質品(60) | 施口 | カツラ | |
| 挂置(48) | 三持村 | ケヤキ | |

SE149 (9層)

栽培植物は、イネ胚乳8個・アワーヒエ1個・コムギ3個・アサ1個・マメ類5個の計18個が検出され、アサ以外の分類群(17個)に炭化が認められた。このほかに、草本のウキヤガラ近似種1個が検出された。

SE162

栽培植物は、モモ1個・イネ胚乳30個・穎250個・アワ近似種6個・アワヒエ25個・ヒエ近似種3個・オオムギ9個・コムギ17個・アサ56個・ソバ18個・マメ類12個・エゴマ170個・メロン類27個・ヒヨウタン類7個の計631個が検出され、イネ胚乳・アワ近似種・アワヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・ソバ16個・マメ類の計118個に炭化が認められた。このほかに、針葉樹のマツ属8個・広葉樹11個分類群（マタタビ属・オオツラフジ・アカメガシワ・イスザンショウ属・サンショウ属・ブドウ属・ノブドウ・ブドウ科・ミズキ・タラノキ・ニワトコ）188個、草本25分類群（ミクリ属・ヘラオモダカ・エノコログサ属・イネ科・ホタルイ属・カヤツリグサ科・ツユクサ・イボクサ・カナムグラ・サナエタデ近似種・タデ属・アカサギ・ヒユ科・ナデシコ科・キケマン属・マメ科・カタバミ属・エノキグサ・アリノトウガサ・スミレ属・ヒルガオ属・イスコウジウ属・

第15表 種実分析結果

トウバナ属・ナス科・キカラスウリ) 458 個の計 654 個が検出された。栽培植物では炭化種実より未炭化の種実が多く (513 個)、イネの穎、エゴマ主体の種類構成を示す。全体では、草本主体 (458 個) であり、次いで木本のニワトコ (164 個) が多いといった種類構成を示す。

SE189 (8層)

栽培植物は、イネ胚乳 65 個、穎 36 個・アワ近似種 2 個・アワーヒエ 22 個・ヒエ近似種 8 個・オオムギ 3 個・コムギ 10 個・アサ 64 個・

エゴマ 9 個・メロン類 1 個、計 220 個が検出され、イネ胚乳・穎 6 個・アワ近似種・アワーヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・エゴマ 4 個の計 120 個に炭化が認められた。当試料は、イネ胚乳とアサ主体の種類構成を示す。

このほかに、広葉樹 2 分類群 (アカメガシワ・ニワトコ) 2 個・草本 9 分類群 (ツユクサ・タデ属・アカザ科・ヒユ科・エノキグサ・トウバナ属・キランソウ属・ナス科・アメリカセンダングサ) 13 個の計 15 個が検出された。

種実の記載

検出された種実は、水洗後の乾燥処理のため表面組織が壊れたものが多く認められるなど保存状態は不良である。また、栽培植物のイネ胚乳・穎 28 個・アワ近似種・アワーヒエ・ヒエ近似種・オオムギ・コムギ・ソバ 16 個・マメ類・エゴマ 4 個・メロン類 1 個と、SE66 (6 層) から確認されたアオツヅラフジ・ニワトコ 2 個・不明種実 41 個の計 4629 個に炭化が認められた。

4) 動物遺存体分析

SE66・SE142 の 2 試料からは、魚類 5 種類 (イワシ類・マイワシ・サケ・マス類・タラ類・スズキ類)、両生類 1 種類 (カエル類) が検出された (第 16・17 表)。

E 考 察

1) 動・植物利用

井戸 6 基のうち SE4 (最下層)・SE66 (6 層)・SE142 (8 層)・SE149 (9 層)・SE189 (8 層) は、覆土最下部 (SE4) あるいは覆土中位 (SE66・SE142・SE149・SE189) に認められた炭層の水洗選別で抽出された微細遺物である。これらの炭層は、調査所見によれば埋戻しの際に形成されたことが指摘されている。

各井戸の種実遺体の検出状況は、SE4 では栽培植物の割合が比較的高いが、未炭化の栽培植物のエゴマが多いため炭化種実の割合は低い。SE66 や SE149 では大部分が栽培植物の炭化種実から構成され、SE66 ではアオツヅラフジなどの食用とは考えられない種実にも炭化が認められた。SE142 では未炭化の落葉低木のニワトコが多く、炭化種実や栽培植物の割合は低いが、栽培植物における炭化種実の割合は高い。SE189 では栽培植物の割合が高く、炭化種実と栽培植物における炭化種実の割合は 5 割程度である。

第16表 検出分類群一覧

| | |
|-----------|--------------------------------|
| 脊椎動物門 | Phylum Vertebrata |
| 硬骨魚綱 | Class Osteichthyes |
| 柔鱗底鰓綱 | Subclass Actinopterygii |
| ニシン目 | Order Clupeiformes |
| ニシン科 | Family Clupidae |
| イワシ属 | Gen. et. sp. indet. |
| ニシン亜科 | Subfamily Clupinae |
| マイワシ | <i>Sardinops melanostictus</i> |
| サケ目 | Order Salmoniformes |
| サケ科 | Family Salmonidae |
| サケ・マス属 | Gen. et. sp. indet. |
| タラ目 | Order Gadiformes |
| タラ科 | Family Gadidae |
| タラ属 | Gen. et. sp. indet. |
| スズキ系 | Series Percormorpha |
| スズキ属 | Gen. et. fam. eadet. |
| 両生綱 | Class Amphibia |
| カエル目(無尾目) | Order Anura |
| カエル属 | Gen. et. gen. indet. |

第17表 骨同定結果

| 試験名 | 層名 | 種類 | 部位 | 左右 | 部分 | 数量 |
|-------|----|--------|------|----|-----|------|
| SE66 | 6層 | イワシ類 | 頭骨 | 右 | 椎体 | 11 |
| | | マイワシ | 第1頸椎 | 左 | 椎体 | 1 |
| | | サケ・マス類 | 頭骨 | 右 | 椎体 | 3 |
| | | スズキ類 | 尾・腰骨 | 右 | 椎片 | 1 |
| | | ニシン類 | 頭骨 | 右 | 椎体 | 6 |
| | | カエル類 | 頭骨 | 右 | 椎体 | 4 |
| | | 鳥類 | 頭骨 | 右 | 椎体 | 1 |
| | | | 頭骨 | 右 | 椎化片 | 3 |
| | | | 頭骨 | 左 | 椎片 | 5 |
| | | | 頭骨 | 右 | 椎外 | 38 |
| | | | 不明 | 右 | 椎片 | 9.2g |
| SE142 | 8層 | カエル類 | 内耳 | 左 | 椎片 | 1 |
| | | | 頭骨 | 右 | 椎外 | 1 |
| | | | 尾上部骨 | 左 | 椎片 | 1 |

なお、炭層ではない土層を対象としたSE162では未炭化のイネの穂とエゴマが多く、栽培植物における炭化種実の割合は低い。また、栽培植物以外の分類群(木本・草本)が5割を占め、分類群・個数ともに多く、遺構周辺域の植生を反映している可能性がある。以上の検出状況から、井戸から抽出された種実遺体には栽培植物が多く確認される、遺構間では栽培植物と炭化種実の割合に差異が認められる。炭層以外の土層から検出された種実遺体には、栽培植物以外の種実が多く検出されるといった特徴が挙げられる。

井戸覆土中から検出された栽培植物に由来する種実のうち、モモは、觀賞用のほか、果実が食用、薬用などに広く利用される種類である。イネ(胚乳・穂)やアワ(近似種)・アワーヒエ・ヒエ(近似種)・オオムギ・コムギは胚乳が食用とされ、ソバやマメ類は種子が食用とされる。アサは種子が食用や油料に、繊維が衣料や繩用などに利用され、エゴマは種子が食用や油料に利用される。メロン類は果実が食用とされ、マクワ・シロウリ類とモモルディカメリコン型が確認されたことから、複数の品種が利用されていたことが窺われる。また、ヒヨウタン類は果実が食用や容器などに利用される。これらの栽培植物に由来する種実は、井戸6基より計5576個が確認され、全体の約85%を占める。特に、炭層から検出された種実に限定すると全体の90%となり、炭層中には多量の栽培植物に由来する種実が混入している状況が指摘される。

新潟県内の中世の遺構を対象とした調査事例は、天王前遺跡(神林村)の井戸や溝状遺構(スモモ・モモ・イネ・オオムギ・ソバ・マメ類・ナス科・メロン類・ヒヨウタン類)【パリノ・サーヴェイ株式会社 2002c】、草田遺跡(神林村)の井戸や土坑(イネ・アサ・メロン類)【パリノ・サーヴェイ株式会社 2003】、下前原遺跡(新潟市)の井戸(ウメ・スモモ・モモ・イネ・オオムギ・アサ・マメ類・メロン類・ヒヨウタン類・ベニバナ)【パリノ・サーヴェイ株式会社 2004】、海道遺跡(上越市)の井戸(モモ・イネ・トウガン)【パリノ・サーヴェイ株式会社 2005d; 高橋 2005】、鶴深甲遺跡(阿賀野市)の井戸(モモ・イネ・オオムギ・コムギ・ムギ類・アサ・マメ類・エゴマ・シソ属・メロン類・ヒヨウタン類)【パリノ・サーヴェイ株式会社 2006c】、砂山中道下遺跡(新発田市)の井戸や土坑(イネ・アワーヒエ・オオムギ・コムギ・ムギ類・アサ・マメ類・エゴマ・メロン類)【パリノ・サーヴェイ株式会社 2006d】などが挙げられる。本遺跡の井戸から検出された栽培植物の種実の種類構成は、上記した遺跡の調査結果と調和的であり、当該期にはこれらの栽培植物が普遍的に利用されていたと考えられる。また、これらの栽培植物の可食部である種実が、本遺跡の井戸から多量に検出されたこと、栽培植物の約8割に炭化が認められることから、被熟や廃棄、埋削といった人為的行為が推測される。

SE66やSE142からは魚類5種類(イワシ類・マイワシ・サケ・マス類・タラ類・スズキ類)、両生類1種類(カエル類)が確認された。のことから、これらの魚類が食糧として利用されていたことが推測される。一方、カエル類は、試料の大きさから推定すると小型のカエル類と想定され、遺存状態から焼骨と判断されるが、食糧資源としての利用は考え難い。このほかに認められた魚類は、SE66から検出された試料は遺存状況から焼骨と判断され、利用時或いは利用後に火を受けたことが推測される。

周辺地域では、江添遺跡【パリノ・サーヴェイ株式会社 2005c】、青田遺跡【西本・小林 2004】、道端遺跡【黒澤 2005】、西川内南遺跡【パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b】、反貫目遺跡【沖田 2004】、金曲遺跡【パリノ・サーヴェイ株式会社 2002b】、天王前遺跡【パリノ・サーヴェイ株式会社 2002c】などにおける分析調査から、縄文時代～中世における動物利用が明らかとされつつある。これらの調査成果によれば、サケ・マス類・コイ科・トゲウオ科などの検出が多いことから、内水面漁労(内陸河川漁労)を主体とする傾向が見出される。本分析結果を考慮すると、当該期にはサケ・マス類のほか、内湾などの海域に棲息するマイワシなどのイワシ類・タラ・スズキなども漁獲対象となっていたことが推測される。また、上記した遺跡の調査事例との差違は、漁労活動や漁獲対象の変化、遺跡の立地状況などを反映している可能性があり、今後の検討課

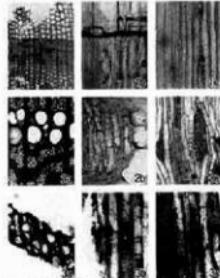
題である。

2) 木 製 品

木製品の年代観

放射性炭素年代測定を実施した近世墓（SK131 木棺横板）は 15 世紀後半～17 世紀（calAD1,488～calAD1,633）、白（SE149）は 13 世紀後半（calAD1,268～calAD1,294）、加工木材（SX203）は約 2,400～2,200 年前（calBC385～calBC231）の年代値を示した。このうち、近世墓や白は、調査所見から想定される年代観と概ね調和する結果と言える。一方、加工木材は、本遺跡の遺構確認面（III 層）より下位の VI 層上部より出土している。近畿の中曾根遺跡や道場遺跡の発掘調査成果によれば、縄文時代後期～弥生時代後期頃の遺構・遺物が確認されるなど、本遺跡周辺で人為的活動のあったことが明らかとされており〔パリノ・サーヴェイ株式会社 2006a；株式会社パレオ・ラボ 2006〕、本遺跡でも当時の試料の可能性もある。現段階では、用途や由来などは不明であることから、調査所見とともに出土層位の堆積環境や形成された年代などと合せて評価することが望まれる。

第23図 桜林遺跡の木材 (1)



1. マツ属樹皮付材直板 (SK131: 木棺横板)
2. ケヤキ (SX203: 加工木製品)
3. カエデ (SE149: 加工木製品)
- a: 木口, b: 番目, c: 番目

第25図 桜林遺跡の種実 (栽培植物)



1. ナシ (1-2, 7-12) 2. ナツメ (3-6, 13) 3. ハス (14-16)

4. ミズナ (17-19) 5. ハス (20-22) 6. ハス (23-25)

7. ハス (26-28) 8. ハス (29-31) 9. ハス (32-34)

10. ハス (35-37) 11. ハス (38-40) 12. ハス (41-43)

13. ハス (44-46) 14. ハス (47-49) 15. ハス (50-52)

16. ハス (53-55) 17. ハス (56-58) 18. ハス (59-61)

19. ハス (62-64) 20. ハス (65-67) 21. ハス (68-70)

22. ハス (71-73) 23. ハス (74-76) 24. ハス (77-79)

25. ハス (80-82) 26. ハス (83-85) 27. ハス (86-88)

28. ハス (89-91) 29. ハス (92-94) 30. ハス (95-97)

31. ハス (98-100) 32. ハス (101-103) 33. ハス (104-106)

34. ハス (107-109) 35. ハス (110-112) 36. ハス (113-115)

37. ハス (116-118) 38. ハス (119-121) 39. ハス (122-124)

40. ハス (125-127) 41. ハス (128-130) 42. ハス (131-133)

43. ハス (134-136) 44. ハス (137-139) 45. ハス (140-142)

46. ハス (143-145) 47. ハス (146-148) 48. ハス (149-151)

49. ハス (152-154) 50. ハス (155-157) 51. ハス (158-160)

52. ハス (161-163) 53. ハス (164-166) 54. ハス (167-169)

55. ハス (170-172) 56. ハス (173-175) 57. ハス (176-178)

58. ハス (179-181) 59. ハス (182-184) 60. ハス (185-187)

61. ハス (188-190) 62. ハス (191-193) 63. ハス (194-196)

64. ハス (197-199) 65. ハス (200-202) 66. ハス (203-205)

67. ハス (206-208) 68. ハス (209-211) 69. ハス (212-214)

70. ハス (215-217) 71. ハス (218-220) 72. ハス (221-223)

73. ハス (224-226) 74. ハス (227-229) 75. ハス (230-232)

76. ハス (233-235) 77. ハス (236-238) 78. ハス (239-241)

79. ハス (242-244) 80. ハス (245-247) 81. ハス (248-250)

82. ハス (251-253) 83. ハス (254-256) 84. ハス (257-259)

86. ハス (260-262) 87. ハス (263-265) 88. ハス (266-268)

89. ハス (269-271) 90. ハス (272-274) 91. ハス (275-277)

92. ハス (278-280) 93. ハス (281-283) 94. ハス (284-286)

95. ハス (287-289) 96. ハス (290-292) 97. ハス (293-295)

98. ハス (296-298) 99. ハス (299-301) 100. ハス (302-304)

101. ハス (305-307) 102. ハス (308-310) 103. ハス (311-313)

104. ハス (314-316) 105. ハス (317-319) 106. ハス (320-322)

107. ハス (323-325) 108. ハス (326-328) 109. ハス (329-331)

110. ハス (332-334) 111. ハス (335-337) 112. ハス (338-340)

113. ハス (341-343) 114. ハス (344-346) 115. ハス (347-349)

116. ハス (350-352) 117. ハス (353-355) 118. ハス (356-358)

119. ハス (359-361) 120. ハス (362-364) 121. ハス (365-367)

122. ハス (368-370) 123. ハス (371-373) 124. ハス (374-376)

125. ハス (377-379) 126. ハス (380-382) 127. ハス (383-385)

128. ハス (386-388) 129. ハス (389-391) 130. ハス (392-394)

131. ハス (395-397) 132. ハス (398-400) 133. ハス (401-403)

134. ハス (404-406) 135. ハス (407-409) 136. ハス (410-412)

137. ハス (413-415) 138. ハス (416-418) 139. ハス (419-421)

140. ハス (422-424) 141. ハス (425-427) 142. ハス (428-430)

143. ハス (431-433) 144. ハス (434-436) 145. ハス (437-439)

146. ハス (440-442) 147. ハス (443-445) 148. ハス (446-448)

149. ハス (449-451) 150. ハス (452-454) 151. ハス (455-457)

152. ハス (458-460) 153. ハス (461-463) 154. ハス (464-466)

155. ハス (467-469) 156. ハス (470-472) 157. ハス (473-475)

158. ハス (476-478) 159. ハス (479-481) 160. ハス (482-484)

161. ハス (485-487) 162. ハス (488-490) 163. ハス (491-493)

164. ハス (494-496) 165. ハス (497-499) 166. ハス (500-502)

167. ハス (503-505) 168. ハス (506-508) 169. ハス (509-511)

170. ハス (512-514) 171. ハス (515-517) 172. ハス (518-520)

173. ハス (521-523) 174. ハス (524-526) 175. ハス (527-529)

176. ハス (530-532) 177. ハス (533-535) 178. ハス (536-538)

179. ハス (539-541) 180. ハス (542-544) 181. ハス (545-547)

182. ハス (548-550) 183. ハス (551-553) 184. ハス (554-556)

185. ハス (557-559) 186. ハス (560-562) 187. ハス (563-565)

188. ハス (566-568) 189. ハス (569-571) 190. ハス (572-574)

191. ハス (575-577) 192. ハス (578-580) 193. ハス (581-583)

194. ハス (584-586) 195. ハス (587-589) 196. ハス (590-592)

197. ハス (593-595) 198. ハス (596-598) 199. ハス (599-601)

200. ハス (602-604) 201. ハス (605-607) 202. ハス (608-610)

203. ハス (611-613) 204. ハス (614-616) 205. ハス (617-619)

206. ハス (620-622) 207. ハス (623-625) 208. ハス (626-628)

209. ハス (629-631) 210. ハス (632-634) 211. ハス (635-637)

212. ハス (638-640) 213. ハス (641-643) 214. ハス (644-646)

215. ハス (647-649) 216. ハス (650-652) 217. ハス (653-655)

218. ハス (656-658) 219. ハス (659-661) 220. ハス (662-664)

221. ハス (665-667) 222. ハス (668-670) 223. ハス (671-673)

224. ハス (674-676) 225. ハス (677-679) 226. ハス (680-682)

227. ハス (683-685) 228. ハス (686-688) 229. ハス (689-691)

230. ハス (692-694) 231. ハス (695-697) 232. ハス (698-700)

233. ハス (701-703) 234. ハス (704-706) 235. ハス (707-709)

236. ハス (710-712) 237. ハス (713-715) 238. ハス (716-718)

239. ハス (719-721) 240. ハス (722-724) 241. ハス (725-727)

242. ハス (728-730) 243. ハス (731-733) 244. ハス (734-736)

245. ハス (737-739) 246. ハス (740-742) 247. ハス (743-745)

248. ハス (746-748) 249. ハス (749-751) 250. ハス (752-754)

251. ハス (755-757) 252. ハス (758-760) 253. ハス (761-763)

254. ハス (764-766) 255. ハス (767-769) 256. ハス (770-772)

257. ハス (773-775) 258. ハス (776-778) 259. ハス (779-781)

260. ハス (782-784) 261. ハス (785-787) 262. ハス (788-790)

263. ハス (791-793) 264. ハス (794-796) 265. ハス (797-799)

266. ハス (800-802) 267. ハス (803-805) 268. ハス (806-808)

269. ハス (809-811) 270. ハス (812-814) 271. ハス (815-817)

272. ハス (818-820) 273. ハス (821-823) 274. ハス (824-826)

275. ハス (827-829) 276. ハス (830-832) 277. ハス (833-835)

278. ハス (836-838) 279. ハス (839-841) 280. ハス (842-844)

281. ハス (845-847) 282. ハス (848-850) 283. ハス (851-853)

284. ハス (856-858) 285. ハス (859-861) 286. ハス (862-864)

287. ハス (865-867) 288. ハス (868-870) 289. ハス (871-873)

290. ハス (874-876) 291. ハス (877-879) 292. ハス (880-882)

293. ハス (883-885) 294. ハス (886-888) 295. ハス (889-891)

296. ハス (892-894) 297. ハス (895-897) 298. ハス (898-900)

299. ハス (901-903) 300. ハス (904-906) 301. ハス (907-909)

302. ハス (910-912) 303. ハス (913-915) 304. ハス (916-918)

305. ハス (919-921) 306. ハス (922-924) 307. ハス (925-927)

308. ハス (928-930) 309. ハス (931-933) 310. ハス (934-936)

311. ハス (937-939) 312. ハス (940-942) 313. ハス (943-945)

314. ハス (946-948) 315. ハス (949-951) 316. ハス (952-954)

317. ハス (955-957) 318. ハス (958-959) 319. ハス (960-961)

320. ハス (962-963) 321. ハス (964-965) 322. ハス (966-967)

323. ハス (968-969) 324. ハス (970-971) 325. ハス (972-973)

326. ハス (974-975) 327. ハス (976-977) 328. ハス (978-979)

329. ハス (980-981) 330. ハス (982-983) 331. ハス (984-985)

332. ハス (986-987) 333. ハス (988-989) 334. ハス (990-991)

335. ハス (992-993) 336. ハス (994-995) 337. ハス (996-997)

338. ハス (998-999) 339. ハス (1000-1001) 340. ハス (1002-1003)

341. ハス (1004-1005) 342. ハス (1006-1007) 343. ハス (1008-1009)

344. ハス (1010-1011) 345. ハス (1012-1013) 346. ハス (1014-1015)

347. ハス (1016-1017) 348. ハス (1018-1019) 349. ハス (1020-1021)

350. ハス (1022-1023) 351. ハス (1024-1025) 352. ハス (1026-1027)

353. ハス (1028-1029) 354. ハス (1030-1031) 355. ハス (1032-1033)

356. ハス (1034-1035) 357. ハス (1036-1037) 358. ハス (1038-1039)

359. ハス (1040-1041) 360. ハス (1042-1043) 361. ハス (1044-1045)

362. ハス (1046-1047) 363. ハス (1048-1049) 364. ハス (1050-1051)

365. ハス (1052-1053) 366. ハス (1054-1055) 367. ハス (1056-1057)

368. ハス (1058-1059) 369. ハス (1060-1061) 370. ハス (1062-1063)

371. ハス (1064-1065) 372. ハス (1066-1067) 373. ハス (1068-1069)

374. ハス (1070-1071) 375. ハス (1072-1073) 376. ハス (1074-1075)

377. ハス (1076-1077) 378. ハス (1078-1079) 379. ハス (1080-1081)

380. ハス (1082-1083) 381. ハス (1084-1085) 382. ハス (1086-1087)

383. ハス (1088-1089) 384. ハス (1090-1091) 385. ハス (1092-1093)

386. ハス (1094-1095) 387. ハス (1096-1097) 388. ハス (1098-1099)

389. ハス (1091-1092) 390. ハス (1093-1094) 391. ハス (1095-1096)

392. ハス (1097-1098) 393. ハス (1099-1100) 394. ハス (1101-1102)

395. ハス (1103-1104) 396. ハス (1105-1106) 397. ハス (1107-1108)

398. ハス (1109-1110) 399. ハス (1111-1112) 400. ハス (1113-1114)

401. ハス (1115-1116) 402. ハス (1117-1118) 403. ハス (1119-1120)

404. ハス (1121-1122) 405. ハス (1123-1124) 406. ハス (1125-1126)

407. ハス (1127-1128) 408. ハス (1129-1130) 409. ハス (1131-1132)

木材利用

近世墓の木棺は、横板を長方形に組んで、底に樹皮と横木を置いた状態で検出されている。このうち、横板は全てマツ属複雜管束亞属、横木はヌルデ近似種であった。試料採取時の観察では、横板は枝の痕跡などが良く似た部材であったことから、同一個体より板材を作製している可能性もある。新潟県内における木棺の調査事例では、東原町遺跡（柏崎市）で戦国～江戸時代前半の棺桶タイプの棺材にスギの利用【パリノ・サーヴェイ株式会社 2005a】、田屋道遺跡（神林村）から検出された墓ではマツ属複雜管束亞属、アスナロの利用が認められている【未公表資料】が、本地域では調査事例が少ないとから、木材利用の傾向については今後の課題である。

芯持丸木を加工し、製作されている臼（SE149）は、マツ属複雜管束亞属であった。マツ属複雜管束亞属の木材は、比較的強度が高い部類に入るが、松脂を多く含むことから、臼としてはあまり適材とはいえない。新潟県内ではほかに臼を対象とした調査事例ではなく、木材利用状況は不明である。柱根（P45）はケヤキであった。ケヤキは、強度・耐朽性に優れていることから、柱材としては適材である。本地域におけるケヤキを柱材に利用した事例では、藏ノ坪遺跡（胎内市）の古代の柱材【パリノ・サーヴェイ株式会社 2002a】や城田遺跡（神林村）の中一近世の鳥居の柱材【パリノ・サーヴェイ株式会社 2001】に1例ずつ認められているのみである。

加工木材（SX203）は、ケヤキに同定された。木材は長さ約45mの大型の部材で、全面に楔による加工痕が認められる。本製品に使う部材を採取した残りとされている。ケヤキは上述したように重硬で強度・耐朽性が高いことから建築部材などに有用であり、製品は何らかの部材として利用されたのであろう。一方、SE145から出土した板状木製品はカツラであった。カツラは本理が直線で均質であり、加工も容易であることから、今回の製品のような加工にも適材といえる。遺跡周辺における橋や舟形木製品の調査事例では、青田遺跡（加治川村）の弥生早・前期～平安時代の橋（ケヤキ）や西川内南遺跡の舟形木製品（スギ）などが挙げられる【鈴木ほか 2004；パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b】が、当該期の類例やカツラの利用例が認められないことから、木材利用については不明である。

5 まとめ

A 遺跡の時期

調査では、弥生時代前期頃・古代・中世後期～近世前期の遺構群と遺物を検出した。遺構群は一定範囲に集中する傾向が見え、その間には空閑地が存在する。SD 1・SE41・SE103・SE145・SE161・SE189・SK129・SK133は出土した土器類が古代のもので占められるが、遺物は土器片が数点と非常に少なく、SK129とSD 1以外は覆土の性質が中・近世のものとほぼ同質である。こうした点から、古代に属する可能性があるのはSK129・SD 1、それにSD 1と覆土が同質であるSD31・SK13の合計4基と考えたい。また、SX203・SK131（近世墓）はそれぞれ弥生時代前期・近世前期のものである事が放射性炭素測定で判明している。このほかの遺構は、出土した国産陶磁器類や中世土器類の年代から中世後期（14世紀末～16世紀末）と考えたい。SE149で出土した木製臼については、13世紀後半という年代が放射性炭素測定で得られたが（第IV章）、得られた年代は材の伐採年代を示す事と、遺物が耐久消費財に属する事から、遺構の年代を正確に反映するとはいえない。中世前期に確実に遡る遺物がほかにみられない事から考えても、中世後期に廃棄あるいは埋納したものと考える。

B 中世における遺跡の性格

検出した建物は、ピットの間隔が3.5 m～6.1 mと非常に広い。中世の遺跡で検出された建物をみると、桁行5～7 mに対して3間という柱間が多く、ピットの間隔を2 m前後とする建物が普遍的と考える。この中で唯一、見附市坂井遺跡【小室2006】では本遺跡のものに類似する建物が検出されている。坂井遺跡は沖積平野の微高地に立地する遺跡で、中世（13世紀末～15世紀）の建物は15棟が検出されている。このうちのSB 1～SB 5は、桁行1～2間（3.0～6.6 m）、梁間1間（2.4～3.6 m）の建物で、本遺跡と同じく南北方向に桁行を取る。SB 5以外は本遺跡のSB 3と同じく西側に間柱を1本もつ。坂井遺跡では珠洲焼編年との対比から中世の遺構群を3期に分け、それぞれ珠洲焼IV～VI期に置いている。各期とも、同時期に存在する建物は1～2棟とわずかであり、溝に区画されたこの単位を、報告者は「一戸」と考えている。このように、遺構の時期・遺構配置・建物構造など、本遺跡と坂井遺跡では多くの類似点がある事がわかる。遺跡の性格について、坂井遺跡は畠作と水田經營を生業とする農村の一形態に位置付けており、本遺跡も同様の性格をもつものと考えたい。

C 近世墓について

本遺跡で検出した近世墓（SK131）は、底板（本遺跡では樹皮）・横木・側板が釘により接合されない組み合わせ式の長方形木棺を用いた墓で、年代は17世紀後半以降である。

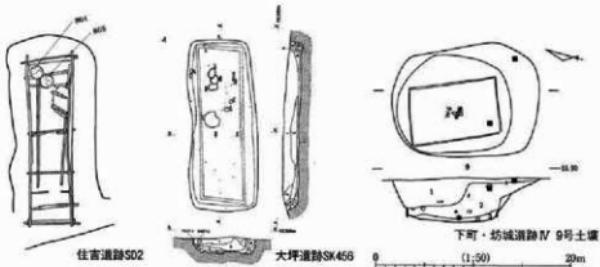
江戸市中の墓では、原則として伸展葬は認められず、遺体は広い意味での「屈葬」で、蹲葬（そんそう=うすくまる姿勢）・座葬・仰臥屈葬・横臥屈葬に大別されるという【小泉2004】。このうち、仰臥屈葬・横臥屈葬は一定以上の棺の大きさが必要であり、江戸市中での埋葬葬例は多いとはいえないらしい。長佐古真也は多摩丘陵とその近接の村落地域を対象に、副葬錢の組み合わせから中世末以降の埋葬形態の変遷を追っている【長佐古1996】。これによると、本遺跡の墓は副葬錢が新寛永文銭までの銀貨で構成されるⅢ期に位置付けられる。多摩丘陵の事例では、副葬錢が渡来銭のみで構成されるⅠ期には側臥屈葬で直葬

であったものが、古寛永を伴うⅡ期になると長方形棺による仰臥屈葬という葬法が出現し、Ⅲ期にはさらに方形棺や円形／多角形棺による座葬がみられるようになるという。本遺跡のものは、墓坑や木棺側板の高さなどから仰臥あるいは側臥屈葬と考えられ、この時期の普通的な埋葬形態と理解できる。ただし、本遺跡の墓は単独で存在するという点で多摩丘陵の事例とは大きく異なる。上に引用したように、村落部では17世紀後半の段階で直葬から木棺葬へと葬法が変化する可能性が指摘されているが、木棺墓そのものは中世にも存在しており、県内では胎内市下町坊城遺跡B地点〔水澤2000〕・新発田市ニツ割遺跡〔宮内ほか2004〕・新発田市住吉遺跡〔高橋2006〕・阿賀野市大坪遺跡〔荒川ほか2006〕・五泉市茨塚遺跡〔小島治1999〕などで木棺墓が検出されている。下町坊城遺跡が15～16世紀の密教寺院、ニツ割遺跡が13世紀の加地家閑連遺跡、住吉遺跡が13～14世紀前半の有力農民層以上の居住者が想定できる集落、大坪遺跡が11～12世紀の有力者の居館とされている。茨塚遺跡は古代（9～10世紀初頭）の遺跡とされているが、形態の類似性から中世の可能性を示唆する見解もある〔荒川ほか2006〕。このうち、大坪遺跡・住吉遺跡・ニツ割遺跡のものは建物との関連や居住者の性格などから「屋敷墓」と考えられている〔荒川ほか2006；高橋2006〕。これらは漆器碗が伴う点が共通するほか、ニツ割遺跡・住吉遺跡・茨塚遺跡では墓が単独で存在する。木棺の形態については、屋敷墓とされたものがいずれも伸展葬に合う形態を有し、中世前期あるいはさらに遅い時期のものであるのに対し、中世後期に属する下町坊城遺跡のものは屈葬が想定される形態をもつ。遺跡の性格が違うので断定し得ないが、中世のある段階で伸展葬から屈葬へ埋葬形態が変化するのかもしれない。また、下町坊城遺跡B地点第9号土壇では、木棺のほぼ中央で出土した漆器碗の下に銭が置かれ、さらに蓋のようなものが散かれていたといふ。こうした状況からみて、本遺跡の墓は中世墓の系譜を引くものとみて差し支えないと思う。粗末な木棺でありながらも単独で営まれるという状況は、より低い階層から、有力者たる人物が登場してきたとも想定できる。

| | No.421 | No.423 | No.213 | No.235 | No.1 | 中戸戸 | 日向山 | 御殿山 | 高橋 | 北九郎 | 守衛所 |
|-----|--------|--------|--------|--------|------|-----|-----|-----|----|-----|-----|
| I | ■ | | | | | | | | | | |
| II | | | | | | | | | | | |
| III | ■ | | | | | | | | | | |
| IV | | ■ | ■ | ■ | | | | | | | |
| V | | | | | ■ | | | | | | |
| VI | | | ■ | ■ | | | | | | | |

■ 直葬
● 伸展葬・直葬
△ 伸展葬・長方形棺
○ 伸展葬・長方形棺
□ 屈葬・方形容
◎ 屈葬・円形容
◆ 屈葬・多角形容
▲ 伸展葬・
△ 伸展葬(反)

第18表 多摩丘陵の遺跡における埋葬形態の変遷
(住吉1996より引用)



第29図 新潟県における中世の木棺墓

要 約

中部北遺跡

- 1 中部北遺跡は、新潟県岩船郡神林村大字牛屋字中部 1048 ほかに所在する。
- 2 遺跡は荒川右岸の沖積地に立地する。古代の遺構確認面の標高は約 2.5 m、縄文時代の遺構確認面の標高は 1.7 ~ 2.2 m である。
- 3 発掘調査は日沿道の建設に伴い、平成 18 年 4 月 3 日 ~ 8 月 24 日にかけて行った。調査面積は 3,620 m² である。
- 4 検出した遺構は、古代の杭 1 本と縄文時代の土坑 7 基、炭化物集中 1 か所、ピット 4 基である。縄文時代の遺構はすべて自然流路北岸に形成された自然堤防上に設けられている。
- 5 自然流路は遺跡を南北に横断する形で検出した。縄文時代を通じて流れる河川で、新旧 2 つの流路が北岸を共有して重複する。
- 6 出土遺物は古代の土師器・須恵器各数点と、縄文時代中期前業～後期中葉の土器及び石器である。遺物の主体は縄文時代の土器・石器であり、自然流路北岸の微高地から流路にかけて集中する。
- 7 縄文土器には、大木 7 b 式・大木 9 ~ 10 式・三十稻場式・南三十稻場式・加曾利 B 1 式などがある。刺突文のみで施す、類例をみないものが 1 個体ある。出自は不明ながら三十稻場式・南三十稻場式との関係が窺える。
- 8 石器には、石錐・不定形石器・石鍤・敲磨石・打製石斧・その他の石器などがあり、石錐や石鍤といった狩猟・漁労具が主体をなしている。不定形石器は剥片の接合状況から、本遺跡で製作されたものと考える。
- 9 本遺跡は縄文時代の狩猟・漁労などをを行う食糧採集の場であったと考える。

桜林遺跡

- 1 桜林遺跡は、新潟県岩船郡荒川町大字金星字桜林 1372 ほかに所在する。
- 2 遺跡は荒川左岸の沖積地に立地する。遺構確認面の標高は約 3.5 m である。
- 3 発掘調査は日沿道の建設に伴い、平成 18 年 8 月 25 日 ~ 11 月 16 日にかけて行った。調査面積は 3,263 m² である。
- 4 検出した遺構は、獨立柱建物 6 棟・井戸 20 基・土坑 10 基・溝 10 条・ピット 142 基・性格不明遺構 2 基、近世墓 1 基である。遺構の大半は中世後期（14 世紀末 ~ 16 世紀末）のものである。
- 5 出土遺物は古代の土師器・須恵器・中世の舶載陶磁器・国産陶磁器・土師質土器・木製品・錢貨・鉄製品・石製品などである。重要遺物としては、中世前期の木製搗臼・弥生時代前期頃の大型加工木材がある。臼は粗製の陶物形木製品と共に井戸から出土した。弥生時代の大型木材は製品に使う材を取った残りとされる全長約 4.5 m のケヤキ材で、表面にはクサビの痕跡が確認できる。この時期の木材加工技術を知る上で貴重な遺物である。
- 6 近世墓は単独での検出である。長方形の木棺墓で、漆器椀・六道鏡（寛永通寶 5 枚・永樂通寶 1 枚）などの副葬品を伴う。他地域の例から、農民層が木棺による埋葬を行なう始めた時期にあたり、単独で墓が存在する事から、被葬者は有力者であった可能性がある。
- 7 本遺跡の主体となる性格は中世後期の農村である。

参考・引用文献

- 相原淳一^{著者} 1988「大槻川遺跡・小槻川遺跡」七ヶ宿ダム関連遺跡調査報告書N 宮城県教育委員会
- 青山宏夫 2004「第2編第5章 荘園の境界と紛争」「中条町史」通史編 中条町史編纂委員会
- 阿部友晴・高橋優 2002「石器」「アチヤ平遺跡上段」朝日村文化財報告書第21集
- 阿部洋輔 1987「序章第1節 越後中世の舞台」「新潟県史」通史編2 中世
- 荒川隆史^{著者} 2006「大坪遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第153集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」「東北地理」42
- 池田 亨 1987「梅古新田下原A遺跡」大和町文化財調査報告第2号 大和町教育委員会
- 池田 亨 1988「石器」「万條寺林遺跡」塙沢町文化財調査報告書第7号 塙沢町教育委員会
- 池田 亨・細矢菊治 1990「水上遺跡」大和町文化財発掘調査報告第4号 大和町教育委員会
- 池谷信之 1988「東北地方における縄文時代中期末葉土器の変遷と後期土器の成立」「沼津市博物館紀要」12 沼津市歴史民俗博物館
- 石川茂雄 1994『原色日本植物種子写真図鑑』石川茂雄図鑑刊行委員会
- 石川智哲^{著者} 2002「追端遺跡 I」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第112集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 伊東隆夫 1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載I」「木材研究・資料31」京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載II」「木材研究・資料32」京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載III」「木材研究・資料33」京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載IV」「木材研究・資料34」京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載V」「木材研究・資料35」京都大学木質科学研究所
- 伊藤恒彦 1985「石器」「刈羽大平・小丸山」柏崎市埋蔵文化財調査報告書第5 柏崎市教育委員会
- 伊藤良永・堀内誠志 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」「珪藻学会誌」6
- 岡本都栄 1986「序説 自然環境」「新潟県史」通史編1 原始・古代 新潟県
- 岡本 勇 1967「大貝遺跡の調査」「新潟県新井市における考古学的調査」立教大学博物館学研究室調査報告6 立教大学考古学研究会
- 岡安光彦 2005「第2章 遺跡の位置と環境」「六斗新遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沖田絵麻 2004「動物遺存体」「反貫口遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第135集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荻野正博 1986「第6章第2節 荘園と国府領」「新潟県史」通史編1 原始・古代 新潟県
- 小沢一弘・長谷川巖 1977「石器」「神ノ原遺跡発掘調査報告書」津南町文化財調査報告書No.12 津南町教育委員会
- 小田由美子 2006「板井遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第169集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 折井 敦^{著者} 2005「豊塚遺跡 I」「江添遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999「土器断面と地域性」「新潟県の考古学」新潟県考古学会編 高志書院
- 加藤学^{著者} 2006「用言寺遺跡 I」「新潟県埋蔵文化財調査報告書第159集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 株式会社古環境研究所 2005「自然科学分析」「沢田遺跡・一杯田遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第144集新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 株式会社パレオ・ラボ 2006「自然科学分析」「中曾根遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第168集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

- 川上貞雄 1984『馬下橋遺跡発掘調査報告書』五泉市教育委員会
- 黒澤一男 2005『道端遺跡出土骨片の同定』『道端遺跡Ⅳ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第145集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小泉 弘 2004『近世墓研究の課題と展望』『幕と埋葬と江戸時代』江戸遺跡研究会編 吉川弘文館
- 小鍛治快弘 1999『安塚遺跡』村松町埋蔵文化財調査報告書第6集 村松町教育委員会
- 小林晴生 2005『石器』『祭壇遺跡I・江添遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鈴形敏朗 1994『南原遺跡』長岡市教育委員会
- 小村正之ほか 2006『足立遺跡Ⅱ・桜林遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第161集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 近藤謙三 1982『Plane opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究』『昭和56年度科学研究費(一般研究C)研究成果報告書』
- 近藤謙三 1988『植物珪酸体(Opal Phytolith)からみた土壌と年代』『ペトロジスト』32
- 近藤謙三 2004『植物ケイ酸体研究』『ペトロジスト』48
- 齊藤基生・高橋恭子 1974『石器』『春ノ山遺跡調査報告』中里村教育委員会
- 齊藤基生 1982『石器』『利黒遺跡』見附市教育委員会
- 齊藤基生 1984『石器』『八反田遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書No.14 津南町教育委員会
- 品田高志 1997『第5章第2節 越後国における土師器の変遷と諸相』『中・近世の北陸』北陸中世土器研究会編 桂書房
- 島地謙・伊東隆夫 1982『國説木材組織』地球社
- 島田靖久 1977『石器』『反里口遺跡発掘調査報告書』津南町文化財調査報告書No.13 津南町教育委員会
- 菅沼 亘 1998『石器』『佐山遺跡発掘調査報告書』十日町市埋蔵文化財発掘調査報告書第14集 十日町市教育委員会
- 菅原哲文 1999『山形県における縄文時代中期の土器様相ー中期後半の編年を中心としてー』『山形考古』第6巻第3号 山形考古学会
- 移山真二・藤原宏志 1986『機動細胞珪酸体の形態によるタケア科植物の同定ー古環境推定の基礎資料としてー』『考古学と自然科学』19
- 鎌木郁夫 2004『序説 中条町の自然』『中条町史』通史編 中条町史編纂委員会
- 鎌木三男・小川とみ・能城修一 2004『青田遺跡出土木材の樹種』『青田遺跡』関連諸科学・写真図版編 新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鎌木俊成 1996『清水上II遺跡(本文編)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 鎌木俊成 1999『第2章第5節第2項 早期から晩期の石器組成』『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 鎌木道之助 1981『回鋸式石器の基礎知識』柏書房
- 鎌木道之助 1983『石器』『縄文文化の研究 第7巻 道具と技術』雄山閣出版
- 高橋 保 2005『井戸に廻せられた種について』『海道遺跡・大坂遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第150集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋 保 2006『住吉遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第157集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄 1992『石器類』『五丁歩遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集 新潟県教育委員会
- 高橋保雄 2002『石器』『元祖遺跡II(上段)』朝日村文化財報告書第22集
- 高橋保雄 2005『北野遺跡II(上層)』新潟県埋蔵文化財調査報告書第141集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 滝沢規則 2002『元屋敷遺跡II(上段)』朝日村文化財報告書第22集 新潟県朝日村教育委員会
- 田中耕作ほか 1999『第2章第2節第5項後期』『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 田中 靖 1991『石器』『城之堀遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会
- 田辺早苗 1994『八幡山遺跡』神林村埋蔵文化財報告第5 神林村教育委員会

- 田辺早苗・近江屋成陽 1998 「飯岡山崎遺跡・石川Ⅱ遺跡」神林村埋蔵文化財報告第7 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・大貫健・長谷川一郎 2001 「城田遺跡」神林村埋蔵文化財報告第10 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・大貫健 2002 「山里遺跡群」神林村埋蔵文化財報告第15 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田辺早苗・大貫健 2003 「櫛渡遺跡・櫛下遺跡」神林村埋蔵文化財報告第18 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- 田村 哲 1987 「序章第2節 古代の中世」『新潟県史』通史編2中世 新潟県
- 宮根秀之ほか 1991 「下クボ遺跡」朝日村文化財報告第6集 新潟県朝日村教育委員会
- 宮根秀之ほか 2002 「アチャヤ平遺跡上段」朝日村文化財報告書第21集 新潟県朝日村教育委員会
- 戸根与三郎 1999 「第5章第1節1中世」『新潟県の考古学』新潟県考古学会
- 永井久美男 1998 「近世の出土銭II・分類図版編」兵庫埋蔵文化財調査会
- 長佐古真也 1996 「発掘事例による多摩丘陵の墓制」『江戸時代の墓と墓制』江戸遺跡研究会第9回大会発表要旨 江戸遺跡研究会
- 中村孝三郎・中島肇一 1975 「岸沢・八幡平遺跡緊急調査報告書」下田村教育委員会
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志 2000 「日本植物種子図鑑」東北大出版会
- 奈良国立文化財研究所 1993 「木器集成図録 近畿原始期(解説)」奈良国立文化財研究所 史料第36編
- 南木勝彦 1991 「栽培植物」『古墳時代の研究4 生産と流通I』越山編
- 南木勝彦・中川治美 2000 「大型植物遺体」『栗津湖底遺跡 自然道路(栗津湖底遺跡Ⅲ)』琵琶湖開発事業関連埋蔵文化財発掘調査報告書3-2 滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会
- 新潟砂丘グループ 1974 「新潟砂丘と人類遺跡・新潟砂丘の形成史I-1」「第四紀研究」第13巻第2号
- 西本豊弘・小林丽子 2004 「吉田遺跡出土の動物遺体」『吉田遺跡』関連諸科学・写真図版編 新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 丹羽 茂 1989 「中期大土器様式」『绳文土器大観I 草創期・早期・前期』小学館
- 林 昭三 1991 「日本産木材 調査報告集」京都大学木質科学研究所
- 原口和夫・三友清史・小林弘 1998 「埼玉の藻類 珊瑚類」埼玉県植物誌・埼玉県教育委員会
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2001 「城田遺跡の自然科学分析」『城田遺跡(本文編)』神林村埋蔵文化財報告第10 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2002a 「龍ノ坪遺跡から出土した木材の樹種」「歲ノ坪遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第115集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2002b 「金曲遺跡の自然学分析」「金曲遺跡」神林村埋蔵文化財報告第14 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2002c 「山里遺跡群の自然学分析」「山里遺跡群 前坪遺跡・銅鉄遺跡・フケ田遺跡・天王前遺跡・水口沢遺跡」神林村埋蔵文化財報告第15 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2003 「桃川遺跡群の自然学分析」「桃川遺跡群 石川遺跡・草田遺跡・桃川板碑・堤下瓦窯跡」神林村埋蔵文化財報告第19 神林村教育委員会・山武考古学研究所
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2004 「井戸出土種実遺体の自然学分析」「下前川原遺跡」豊栄市教育委員会・豊栄市博物館
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005a 「木製品の樹種同定及び鉄滓成分分析」「東原町遺跡・下沖北遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第140集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005b 「自然科学分析」「西川内北遺跡・西川内南遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第146集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005c 「自然科学分析」「延塚遺跡I・江派遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第147集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2005d 「自然科学分析」「海道遺跡・大塚遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第150集 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
- パリノ・サーヴェイ株式会社 2006a 「自然科学分析」「道端遺跡V」新潟県埋蔵文化財調査報告書第162集 新潟県教

- 育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社 2006b「自然科学研究」「想深遺跡Ⅱ」新潟県埋蔵文化財調査報告書第167集 新潟県
教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社 2006c「自然科学研究」「想深甲遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第172集 新潟県
教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
パリノ・サーヴェイ株式会社 2006d「自然科学研究」「野中土手付遺跡・砂山中道下遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書
第164集 新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
藤下典之 1984「出土遺体よりみたウリ科植物の種類と変遷とその利用法」「古文化財の自然科学的研究」古文化財編
集委員会編 同朋舎
藤巻正信(著) 1991「城下町遺跡」新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集 新潟県教育委員会
本間信昭 1976「石器」「兼保遺跡」妙高高原町文化財調査報告書第1集 妙高高原町教育委員会
本間信昭 1995「純文時代」「新潟市史」通史編I 原始古代・中世・近世(上) 新潟市
本間嘉晴・羽生吉はか 1981「垣内遺跡発掘調査報告」新潟県新発町教育委員会
前山耕明 1987「考古資料図録 上ノ原遺跡」巻町郷土資料館目録9 巷町郷土資料館
前山耕明 1988「巻町豈原遺跡の調査」「巻町史研究」IV 巷町
前山耕明 1990「大沢遺跡」巻町教育委員会
松井健・近藤鳴雄 1992「土の地理学 -世界の土・日本の土-」朝倉書店
松谷曉子 1980「十勝太若月遺跡出土炭化物の識別について」「浦幌町郷土博物館報告」16
松谷曉子 2000「植物遺残の識別と保存について」「Ouroboros 東京大学総合研究博物館ニュース」5
水澤幸一 2000「下町・坊城遺跡Ⅳ」中条町埋蔵文化財調査報告第20集 中条町教育委員会
宮内信雄(著) 2004「二ヶ削遺跡・中住古遺跡」猪苗町埋蔵文化財調査報告第3集 猪苗町教育委員会
宮脇 昭(編著) 1985「日本種生氏」中部 至文堂
村上市史編纂委員会 2000「村上市史」別編 絵図・地図・年表 村上市
森田 慶 1982「14~16世紀の白磁の分類と編年」「貿易陶磁研究」No.2 日本貿易陶磁研究会
安田喜憲 1987「文明は線を食べる」読光新聞社
柳宗理(著) 1985「木竹工芸の事典」朝倉書店
矢野 栄 2002「遺跡から出土した小型豆のDNA分析」「DNA考古学 Newsletter」3
山本恒文 1974「上羅 往古より織成時代まで」「荒川町郷土史」新潟県荒川町
横田賢二郎・森田勉 1978「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」「九州歴史資料館研究論集」4 九州歴史資料館
吉井雅勇 1994「古谷地遺跡B・寺田遺跡・赤井遺跡」荒川町埋蔵文化財調査報告第2集 新潟県荒川町教育委員会
吉井雅勇 1998「馬場館跡・屋敷添遺跡」荒川町埋蔵文化財調査報告第4集 荒川町教育委員会
吉井雅勇 2003「馬場館跡Ⅰ」荒川町埋蔵文化財調査報告第9集 荒川町教育委員会
吉井雅勇 2004「馬場館跡Ⅱ」荒川町埋蔵文化財調査報告第11集 荒川町教育委員会
吉井雅勇 2006「坂町宮ノ腰D遺跡Ⅱ」荒川町埋蔵文化財調査報告第13集 荒川町教育委員会
吉岡康暢 1994「第二部 珠洲および珠洲系陶器の研究」「中世須恵器の研究」吉川弘文館
吉川弘文館 1999「日本民俗大辞典」
吉崎昌一 1992「古代埴輪の検出」「考古学ジャーナル」355 ニューサイエンス社
寄藤昌・大矢雅彦 1988「荒川と肱内川における扇状地発達の相違について」「東北地理」Vol.40 東北地理学会
渡辺仁治 2005「淡水珪藻生態圈図 群集解析に基づく汚濁指數 DALPO, pH 耐性能」内田老舗圖
Asai, K. & Watanabe, T. 1995「Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa」[Diatom] 10
Witkowski, A., Lange-Bertalot, H. & Metzeltin, D. 2000「Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast I. A.R.G.Gantner Verlag K.G.」
Krammer, K. 1992「PINNULARIAeine Monographie der europäischen Taxa.BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND26」J.CRAMER

- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1986 [Bacillariophyceae.1.Teil: Naviculaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/1] Gustav Fischer Verlag
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1988 [Bacillariophyceae.2.Teil: Epithemiaceae, Bacillariaceae, Surirellaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/2] Gustav Fischer Verlag
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991a [Bacillariophyceae.3.Teil: Centrales, Fragilariae, Eunotiaceae. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/3] Gustav Fischer Verlag
- Krammer, K. & Lange-Bertalot, H. 1991b [Bacillariophyceae.4.Teil: Achmanthaceae, Kritsche, Ergänzungen zu Navicula(Lineolatae) und Gomphonema. In: Suesswasserflora von Mitteleuropa.Band2/4] Gustav Fischer Verlag
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E(編) 1998 「広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」海青社
- Round, F. E., Crawford, R. M. & Mann, D. G. 1990 [The diatoms. Biology & morphology of the genera] Cambridge University Press, Cambridge
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E(編) 2006 「針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト」海青社
- Lowe, R.L. 1974 [Environmental Requirements and pollution Tolerance of Fresh-water Diatoms] In Environmental Monitoring Ser.EPA Report 670/4-74-005. Nat. Environmental Res. Center Office of Res. Develop., U.S. Environ. Protect. Agency, Cincinnati.

造構計測表（土坑）

| 造構No | 位置 | 方位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|------|----------------|---------|------|-----------|--------|--------|----------|
| SK1 | 11B11-16 | N-23°-E | 荀円形 | 0.87×0.3 | 弧状 | 0.09 | 1.89 |
| SK2 | 11A25-11B5 | N-62°-W | 荀円形 | 0.74×0.56 | 弧状 | 0.09 | 1.86 |
| SK3 | 10A18 | N-58°-E | 開丸方形 | 0.4×0.3 | 凹凸状 | 0.06 | 1.85 |
| SK4 | 10A18 | N-48°-E | 開丸方形 | 0.32×0.24 | 弧状 | 0.04 | 1.86 |
| SK5 | 11B12-17 | N-64°-E | 円形 | 0.84×0.82 | 弧状 | 0.06 | 1.84 |
| SK10 | 11B6-11 | N-65°-W | 荀円形 | 0.64×0.54 | 弧状 | 0.11 | 1.86 |
| SK16 | 11C19-20-24-25 | N-65°-W | 荀内形 | 3.45×1.86 | 弧状(長軸) | 0.45 | 1.61 |

造構計測表（炭化物集中）

| 造構No | 位置 | 方位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|-------|--------|---------|-----|-----------|-----|--------|----------|
| SC101 | 13C1-2 | N-50°-W | 荀円形 | 1.58×1.14 | 弧状 | 0.13 | 1.79 |

造構計測表（ビット）

| 造構No | 位置 | 位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|------|-------|---|-----|-----------|-----|--------|----------|
| P5 | 10A23 | 無 | 円形 | 0.1×0.1 | 弧状 | 0.03 | 1.92 |
| P6 | 10A23 | 無 | 荀円形 | 0.16×0.08 | 弧状 | 0.03 | 1.91 |
| P7 | 10A21 | 無 | 荀円形 | 0.31×0.13 | 弧状 | 0.03 | 1.92 |
| P8 | 11B18 | 無 | 荀円形 | 0.18×0.08 | 弧状 | 0.04 | 1.914 |

造構計測表（杭）

| 造構No | 位置 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|------|------|-----|----------|-----|--------|----------|
| 杭1 | 7D14 | 円形 | 0.12 | U字状 | 0.55 | 1.93 |

造構計測表（渡路）

| 造構No | 位置 | 方位 | 全长 (m) | 幅 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) | 流下方向 |
|------|------------|---------|--------|-----------|-----|---------|----------|------|
| 渡路1 | 10A16-11B1 | N-68°-W | 35.5+ | 2.9-5.8 | 弧状 | 0.8-1.2 | 0.8-1.1 | 東→西 |
| 渡路2 | 9A22-10E3 | N-63°-W | 33+ | 12.0-12.4 | 弧状 | 0.9-1.2 | 0.4-0.7 | 東→西 |

九則

色調「樹皮・樹葉・木場」[小山竹原 1994]による

地物 石石地、雲 宮谷地、斜 その他の地物

| 番号 | 出土地点 | 地種 | 層位 | 岩種 | 口径 | 地性 | 層厚 | 位置 (cm) | 色調 | 被化物 | | 土質 | 外因 | 内因 | 調査 説文 | 備考 |
|---------------|--------|------|-----|----|------|-----|------|---------|-------|-----|----|-------|---------|----|------------------------|----|
| | | | | | | | | | | 外因 | 内因 | | | | | |
| 1 11011 | (浅井) 7 | 泥炭 | 口耕地 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲・砂 | ○ | ○ | 1.5kg | 土壤・新規成立 | ○ | 大約 10.0m 高度と 1.5kg の土量 | |
| 2 11011 | 泥炭 7 | 不明 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 3 11016 | 泥炭 7 | 不明 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 4 11024 | 泥炭 10 | 不明 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲・砂 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 5 11021 | 泥炭 7 | 不明 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲・砂 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 6 11021 | 泥炭 7 | 不明 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 7 10013 | 泥炭 7 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 8 10014 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 9 10018 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 10 1004-8-9 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 11 10013 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 12 1004 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 13 1009 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 14 10038 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 15 10023 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 16 1002-20-24 | 泥炭 10 | 泥炭 | 灰岩 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 17 1004 | 泥炭 10 | (泥炭) | 口耕地 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 18 1004 | 泥炭 10 | 不明 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 19 10023 | 泥炭 10 | 泥炭 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 20 10023 | 泥炭 10 | 泥炭 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 21 10023 | 泥炭 10 | 泥炭 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 石・雲 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 22 10023-24 | 泥炭 10 | 不明 | 遠忌 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 23 1104-14 | Vb-Vc | 泥炭 | 口耕地 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 灰岩 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 24 104-11 | Vb-Vc | 泥炭 | 淺水 | 淺水 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 25 11047 | Vc | (泥炭) | 口耕地 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 灰岩 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 26 1104-5 | Vc | (泥炭) | 口耕地 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 灰岩 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 27 11012-17 | Vb-Vc | 泥炭 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | 灰岩 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 28 11020 | Vb | 泥炭 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |
| 29 1104 | Vb | 泥炭 | 体部 | 灰岩 | 10cm | 冲積地 | 10cm | に云ふ地帶 | 石・雲 | ○ | ○ | 1.5kg | 未分化地質 | ○ | 未分化地質 | |

例 調査「新版 燃費土色帳」[小山・竹原 1994]による。

| 学名 | 日本学名 | タガヤフ | 種類 | 部位 | 部位 | 内側 | 外側 | 葉面 | | 開花期 | 果実 | 果 |
|------------|------------|-----------|----|-------|-------|----|----|-----------|----------|-------|-------|-------|
| | | | | | | 口端 | 底端 | 内側 | 外側 | | | |
| 30. 3136 | 30. 3136 | Vib. | 瓦棒 | 全体 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・茎・葉・白色子 | 石・根・茎・粉多 | 5月~6月 | 大粒~中粒 | 大粒~中粒 |
| 31. 3135 | 31. 3135 | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・茎・粉多 | 被毛 | 5月~6月 | 細長い葉子 | 細長い葉子 |
| 32. 11109 | 32. 11109 | Vib. | 瓦棒 | 全体+一部 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 被毛 | 被毛 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 33. 11M4 | 33. 11M4 | Vib + M.c | 瓦棒 | 口~底部 | 口部 | 被毛 | 被毛 | 被毛 | 被毛 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 34. 11M5 | 34. 11M5 | Vib | 瓦棒 | 口部 | 口部 | 被毛 | 被毛 | 石・茎・葉・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 35. 11M18 | 35. 11M18 | Vib | 瓦棒 | 口部 | 口部 | 被毛 | 被毛 | 石・茎・葉・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 36. 11M21 | 36. 11M21 | Vib | 瓦棒 | 口部 | 口部 | 被毛 | 被毛 | 石・茎・葉・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 37. 11M21 | 37. 11M21 | Vib | 瓦棒 | 口部 | 口部 | 被毛 | 被毛 | 石・茎・葉・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 38. 12M6 | 38. 12M6 | Vib + U.b | 瓦棒 | 口端~底部 | 口端~底部 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 39. 10M24 | 39. 10M24 | Vib + M.b | 瓦棒 | 上部~底部 | 上部~底部 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 40. 11M7 | 40. 11M7 | Vib | 瓦棒 | 全体 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 41. 11M7.5 | 41. 11M7.5 | Vib | 瓦棒 | 全体 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 42. 11M21 | 42. 11M21 | Vib + M.c | 瓦棒 | 全体 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 43. 12M5 | 43. 12M5 | Vib | 瓦棒 | 口端~底部 | 口端~底部 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 44. 11B12 | 44. 11B12 | Vib + W.b | 瓦棒 | 口端~底部 | 口端~底部 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 45. 12M20 | 45. 12M20 | Vib | 瓦棒 | 全体 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 46. CL14 | 46. CL14 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 47. 11D5 | 47. 11D5 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 48. 11H8 | 48. 11H8 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 49. 12X5 | 49. 12X5 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 50. 11B23 | 50. 11B23 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 51. 11B19 | 51. 11B19 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 52. 11B20 | 52. 11B20 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 53. 11E3 | 53. 11E3 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 54. 11B14 | 54. 11B14 | Vib | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 55. 20T | 55. 20T | 瓦棒 | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |
| 56. 2T | 56. 2T | 瓦棒 | 不明 | 瓦棒 | 全体 | 被毛 | 被毛 | 石・根・粉多 | 石・根・粉少 | 5月~6月 | 被毛 | 被毛 |

中部北道遺物観察表

石 墓

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 分類 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 遺存状態 | 備 考 |
|-----|----------|------|----|-------|-------|-------|------|------|------|----------------------------|
| 57 | 流路2 | B | A | 25 | 16 | 6 | 2 | 珪質板岩 | 基部欠 | |
| 58 | 11B20 | Vla' | A | 25 | 13.5 | 5 | 0.9 | 珪質板岩 | 完形 | 黒色付着物あり。 |
| 59 | SC14 | Vlc | A | 15.5 | 10.5 | 4 | 0.5 | チャート | 完形 | |
| 60 | 11B12 | Vlb | B | 27.5 | 14 | 4 | 0.8 | 珪質頁岩 | 片側欠 | 基部色付着物あり。尖頭部から右側縁部に絞状剥離あり。 |
| 61 | 12B11 | Vla | C | 26.5 | 15 | 6 | 1.1 | 珪質頁岩 | 完形 | 正面中央基部に2点、黒色付着物あり。 |
| 62 | 11B11 | Vlb | C | 27 | 13 | 4 | 0.7 | 珪質頁岩 | 完形 | 黒色付着物あり。 |
| 63 | 8017 | Vlb | C | 22 | 13 | 5 | 1.1 | 珪質頁岩 | 中塗欠 | 背面中央基部に黒色付着物あり。 |
| 64 | 12C21 | Vla' | C | 45 | 14 | 6 | 2.8 | 珪質頁岩 | 完形 | 黒色付着物あり。 |

不定形石器

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 分類 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 使用歴 | 備 考 |
|-----|----------|------|----|-------|-------|-------|------|------|--------|-------|
| 65 | 流路2 | 10 | A | 50.5 | 52 | 26 | 47.4 | 珪質頁岩 | | 10018 |
| 66 | 12C21 | Vlb | B | 58 | 57 | 24 | 66.9 | 珪質頁岩 | | |
| 67 | 11B9 | Vlc | A | 55 | 52 | 30 | 56.3 | 珪質頁岩 | | |
| 68 | 12B2 | Vlc | A | 42 | 50 | 21 | 38.1 | 珪質頁岩 | | |
| 69 | 流路2 | S | A | 59 | 32 | 21 | 30.3 | 珪質頁岩 | | 10C23 |
| 70 | 流路1 | 4 | B | 39 | 33 | 7.5 | 6.1 | 珪質頁岩 | | 11021 |
| 71 | 12C21 | Vlc | B | 49.5 | 38 | 13 | 18 | 珪質頁岩 | 右側縁部下位 | |
| 72 | 10B4 | Vl | B | 36 | 22 | 7 | 4.3 | 珪質頁岩 | 右側縁部 | |
| 73 | 12D1 | Vlb | B | 37 | 34 | 14 | 13.2 | 珪質頁岩 | | |
| 74 | 11D7 | Vlb | B | 30 | 41 | 10 | 9.5 | 珪質頁岩 | 下端部 | |
| 75 | 11C25 | Vlc | B | 54 | 55 | 19 | 41.9 | 珪質頁岩 | | |
| 76 | 11C5 | Vlc | B | 69 | 46 | 19 | 53.8 | 珪質頁岩 | 両側縁部 | |
| 77 | 11C11 | Vla' | B | 32 | 36 | 9 | 11.6 | 珪質頁岩 | | |

石 鋸

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 分類 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 遺存状態 | 備 考 |
|-----|----------|------|----|-------|-------|-------|-------|-----|------|------------|
| 78 | 成路1 | 9 | A | 94 | 83 | 22 | 256.7 | 花崗岩 | 完形品 | 10B19 |
| 79 | 10B15 | Vlc | A | 83 | 73 | 27 | 240.8 | 花崗岩 | 完形品 | 片端面かけ部にツブシ |
| 80 | 10B25 | Vlc | A | 96 | 82 | 27 | 324.7 | 花崗岩 | 完形品 | |
| 81 | 10B25 | Vla' | A | 100 | 86 | 30 | 367.4 | 花崗岩 | 完形品 | |
| 82 | 10B25 | Vlb | A | 118 | 90 | 22 | 275.4 | 花崗岩 | 完形品 | |
| 83 | 11B21 | Vlc | A | 90 | 79 | 27 | 227.9 | レキガ | 完形品 | |
| 84 | 11C1 | Vlc | A | 96 | 87 | 22 | 258.4 | 花崗岩 | 完形品 | |
| 85 | 11C4 | Vlc | A | 101 | 85 | 23 | 258 | 安山岩 | 完形品 | |
| 86 | 10B25 | Vlc | A | 91 | 87 | 22 | 272.5 | 閃緑岩 | 完形品 | |
| 87 | 11B21 | Vlc | A | 91 | 95 | 17 | 257.2 | 花崗岩 | 完形品 | |
| 88 | 11C1 | Vla' | A | 88 | 89 | 24 | 272.5 | 安成岩 | 完形品 | |
| 89 | 成路1 | 12 | B | 131 | 66 | 29 | 119.2 | 閃緑岩 | 完形品 | 10B13 |
| 90 | 12C22 | Vlc | B | 76 | 72 | 34 | 272.4 | 安成岩 | 完形品 | 花崗岩面 |
| 91 | 11B8 | Vlc | B | 62 | 44 | 21 | 85.2 | 矽灰岩 | 完形品 | |

敲 石

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 分類 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 遺存状態 | 備 考 |
|-----|----------|-----|----|-------|-------|-------|-------|-----|------|-------|
| 92 | 11C20 | Vlb | A | 92 | 39 | 36 | 206.3 | 安山岩 | | |
| 93 | 11D6 | Vlb | A | 109 | 90 | 33 | 429.5 | 安山岩 | | |
| 94 | 11B8 | Vlc | A | 90+ | 55 | 33 | 282 | 安山岩 | 折れ | |
| 95 | 流路2 | 7 | B | 82 | 44 | 26 | 145.2 | 花崗岩 | | 10C24 |
| 96 | 流路2 | 10 | B | 62 | 27 | 16 | 37.2 | 花崗岩 | | 10D24 |

打製石斧

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 遺存状態 | 備 考 |
|-----|----------|-----|-------|-------|-------|-------|-----|------|---------|
| 97 | 11B16 | Vlc | 156 | 64 | 20 | 206.3 | 頁岩 | 完形品 | 刃部内部済耗耗 |

その他の石器

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 備 考 |
|-----|----------|------|-------|-------|-------|-------|--------|----------|
| 98 | 321 | Vla' | 130+ | 120 | 26 | 258.5 | 矽酸鉄凝灰岩 | 破損、試掘摩耗済 |
| 99 | 8821 | Vlc | 118.5 | 102.5 | 29 | 515.2 | 花崗岩 | 風化激しい |
| 100 | 11D7 | Vlb | 165 | 66 | 30 | 517.6 | 花崗岩 | 風化あり |

接合資料

| No. | グリッド・遺物名 | 層位 | 器種 | 長(mm) | 幅(mm) | 厚(mm) | 重(g) | 石 材 | 備 考 |
|-----|------------------------------|------------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------------|
| 101 | 11C2 - 12B2 | Vlc | 複合骨壺1 | -46 | 93 | 14.5 | 25.5 | 珪質頁岩 | |
| 102 | 12C16 - 21 | Vla' - Vlc | 複合骨壺2 | 58 | 92.5 | 13 | 41.2 | 珪質頁岩 | 試掘BAT出土調査有り |
| 103 | 11C20 - 12C21 | Vlb | 複合骨壺4 | 72 | 79 | 31.5 | 108.4 | 珪質頁岩 | |
| 104 | 11C2 - 3 | Vlc | 複合骨壺3 | 62 | 39 | 17 | 9.5 | 珪質頁岩 | |
| 105 | 11C9 - 15 - 12C21 - 12B1 - 3 | Vlb - Vlc | 複合骨壺5 | 78 | 64 | 76 | 180.2 | 珪質頁岩 | |

桜林遺跡遺構一覧表（掘立柱建物）

| 遺構No. | 方位(航行) | 構造 | 床面積 | 航行 | 梁間 |
|-------|---------|--------------|--------------------|-----------------|---------------------|
| S81 | N-25°-E | 1面×1面 側柱式 | 12.2m ² | 北 4.80m 南 5.40m | 東 2.45m 西 2.45m |
| 構成部品 | 位置 柱 | 平面形 平面規模 (m) | 断面形 深さ (m) | 底面標高 (m) | ピット間隔 (m) |
| P173 | 17822 | 無 椎円形 | 0.33×0.26 | U字状 0.22 | 3.19 P173-P114 3.45 |
| P114 | 1771 | 無 円形 | 0.24×0.22 | U字状 0.15 | 3.13 P114-P173 5.40 |
| P113 | 1774 | 無 円形 | 0.25×0.24 | U字状 0.22 | 3.26 P113-P170 2.40 |
| P170 | 17824 | 無 椎円形 | 0.6×0.45 | U字状 0.29 | 3.24 P170-P173 4.80 |

| 遺構No. | 方位(航行) | 構造 | 床面積 | 航行 | 梁間 |
|-------|---------|--------------|--------------------|-----------------|---------------------|
| S82 | N-14°-E | 1面×1面 側柱式 | 11.2m ² | 北 5.04m 南 4.90m | 東 2.22m 西 2.28m |
| 構成部品 | 位置 柱 | 平面形 平面規模 (m) | 断面形 深さ (m) | 底面標高 (m) | ピット間隔 (m) |
| P184 | 11B23 | 無 円形 | 0.17×0.17 | U字状 0.14 | 3.25 P184-P92 2.28 |
| P92 | 11B3 | 無 椎円形 | 0.31×0.26 | 西凸状 0.25 | 3.33 P92-P146 4.90 |
| P146 | 11B5 | 無 椎円形 | 0.31×0.22 | U字状 0.23 | 3.29 P146-P147 2.22 |
| P147 | 11B25 | 無 円形 | 0.2×0.19 | U字状 0.08 | 3.38 P147-P184 5.04 |

| 遺構No. | 方位(航行) | 構造 | 床面積 | 航行 | 梁間 |
|-------|---------|--------------|--------------------|-----------------|---------------------|
| S83 | S-25°-E | 2面×1面 側柱式 | 18.6m ² | 北 6.12m 南 5.12m | 東 2.96m 西 3.12m |
| 構成部品 | 位置 柱 | 平面形 平面規模 (m) | 断面形 深さ (m) | 底面標高 (m) | ピット間隔 (m) |
| P110 | 17911 | 無 椎円形 | 0.12×0.1 | 弧状 0.05 | 3.27 P110-P195 3.68 |
| P195 | 16014 | 無 円形 | 0.22×0.22 | 弧状 0.07 | 3.27 P195-P111 2.44 |
| P111 | 16013 | 無 椎円形 | 0.16×0.13 | 弧状 0.04 | 3.10 P111-P112 3.12 |
| P112 | 16018 | 無 椎円形 | 0.41×0.3 | 西凸状 0.16 | 3.18 P112-P188 6.12 |
| P188 | 17016 | 無 不定形 | 0.38×0.13 | 扁平状 0.35 | 3.08 P188-P110 2.96 |

| 遺構No. | 方位(航行) | 構造 | 床面積 | 航行 | 梁間 |
|-------|---------|--------------|--------------------|-----------------|---------------------|
| S84 | S-35°-E | 1面×1面 側柱式 | 10.1m ² | 北 3.76m 南 3.70m | 東 2.70m 西 2.71m |
| 構成部品 | 位置 柱 | 平面形 平面規模 (m) | 断面形 深さ (m) | 底面標高 (m) | ピット間隔 (m) |
| P123 | 1401 | 無 円形 | 0.19×0.18 | U字状 0.38 | 3.02 P123-P081 3.70 |
| P181 | 1403 | 無 円形 | 0.17×0.17 | 扁平状 0.2 | 3.23 P181-P027 2.79 |
| P027 | 14C23 | 無 椎円形 | 0.18×0.16 | U字状 0.22 | 3.24 P027-P022 3.76 |
| P202 | 14C21 | 無 円形 | 0.18×0.18 | U字状 0.16 | 3.26 P202-P123 2.71 |

| 遺構No. | 方位(航行) | 構造 | 床面積 | 航行 | 梁間 |
|-------|---------|--------------|--------------------|-----------------|---------------------|
| S85 | S-40°-E | 1面×1面 側柱式 | 11.3m ² | 北 4.56m 南 4.80m | 東 2.45m 西 2.35m |
| 構成部品 | 位置 柱 | 平面形 平面規模 (m) | 断面形 深さ (m) | 底面標高 (m) | ピット間隔 (m) |
| P187 | 1401 | 無 円形 | 0.35×0.35 | 盛状 0.3 | 3.05 P187-P140 4.89 |
| P140 | 1408 | 無 椎円形 | 0.31×0.28 | U字状 0.3 | 3.10 P140-P121 2.43 |
| P121 | 1403 | 無 椎円形 | 0.21×0.19 | U字状 0.25 | 3.20 P121-P017 4.36 |
| P017 | 14C21 | 無 円形 | 0.4×0.33 | U字状 0.43 | 3.02 P017-P187 2.35 |

| 遺構No. | 方位(航行) | 構造 | 床面積 | 航行 | 梁間 |
|-------|------------|--------------|--------------------|-----------------|---------------------|
| S86 | N-15°-E | 1面×1面 側柱式 | 12.1m ² | 北 3.70m 南 3.58m | 東 3.20m 西 3.20m |
| 構成部品 | 位置 柱 | 平面形 平面規模 (m) | 断面形 深さ (m) | 底面標高 (m) | ピット間隔 (m) |
| P125 | 1406 | 無 東方形 | 0.22×0.2 | U字状 0.36 | 3.07 P125-P126 3.88 |
| P126 | 14B2-3-7-8 | 無 椎円形 | 0.23×0.2 | V字状 0.38 | 3.04 P126-P019 3.20 |
| P019 | 14C22 | 無 円形 | 0.27×0.25 | 凸状 0.25 | 3.28 P019-P166 3.70 |
| P166 | 13C25 | 無 椎円形 | 0.21×0.19 | U字状 0.39 | 3.04 P166-P125 3.20 |

桜林道路構造観察表

造構計測表（井戸）

| 造構No | 位置 | 方位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|-------|-------------------|---------|-----|------------|-----|--------|----------|
| SE003 | 13F8-9 | N-8°-E | 扇円形 | 1.36×1.21 | U字状 | 1.86 | 1.61 |
| SE004 | 13F18-19-23-24 | N-6°-E | 扇円形 | 1.31×1.14 | U字状 | 2.60 | 0.86 |
| SE026 | 14C24 | N-6°-E | 扇円形 | 1.35×1.2 | U字状 | 1.61 | 1.86 |
| SE041 | 11F10-15 | 不明 | 不明 | 0.94× | U字状 | 1.58 | 1.92 |
| SE066 | 11F4 | N-8°-E | 扇円形 | 1.16×0.9 | U字状 | 1.86 | 1.70 |
| SE102 | 13F15-20-14F11-16 | N-17°-E | 扇円形 | 1.09×0.74 | U字状 | 1.35 | 2.09 |
| SE103 | 14G14-15 | N-6°-E | 扇円形 | 1.22×1.0 | 台形状 | 1.26 | 1.65 |
| SE127 | 14C18 | N-33°-E | 円形 | 1.85×1.7 | 扇状 | 1.63 | 1.80 |
| SE130 | 13E15-20-14C11-16 | N-13°-E | 扇円形 | 1.72×1.44 | 台形状 | 1.34 | 2.18 |
| SE141 | 14C11-16 | N-6°-E | 扇円形 | 1.60×1.45 | 扇状 | 2.12 | 1.32 |
| SE142 | 12D6 | 不明 | 扇円形 | 0.9×0.45+ | U字状 | 1.39 | 1.96 |
| SE145 | 14C16-17 | N-19°-E | 扇円形 | 1.85×1.65 | U字状 | 1.95 | 1.81 |
| SE149 | 11D9-14 | N-54°-E | 円形 | 0.68×0.51+ | U字状 | 1.52 | 1.95 |
| SE161 | 17C23-24-17D3-4 | N-17°-E | 円形 | 1.66×1.6 | U字状 | 1.41 | 2.05 |
| SE162 | 14D1-22 | N-20°-E | 円形 | 1.37×1.31 | 扇状 | 1.32 | 1.94 |
| SE167 | 14C11-12-16-17 | N-33°-E | 扇円形 | 1.74×1.45 | U字状 | 1.49 | 1.97 |
| SE168 | 14D18-19 | N-5°-E | 扇円形 | 1.72×1.51 | U字状 | 2.5 | 0.92 |
| SE169 | 14D25 | N-74°-E | 円形 | 1.3×1.19 | U字状 | 1.02 | 2.44 |
| SE189 | 14D9-10 | N-25°-E | 扇円形 | 1.05×0.83 | U字状 | 1.4 | 1.8 |
| SE191 | 12B11-12 | N-11°-E | 扇円形 | 1.37×0.8 | U字状 | 2.25 | 0.91 |

造構計測表（溝）

| 造構No | 位置 | 方位 | 全长 (m) | 幅 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) | 底下方向 |
|-------|--------------|---------|--------|-----------|-----|-----------|-----------|-------|
| SD001 | 12C-F | N-69°-W | 34.32+ | 0.45-1.5 | 半円状 | 0.23 | 3.05-3.35 | 南東→北西 |
| SD002 | 13E21-13F1 | N-65°-W | 1.57 | 0.38 | 四凸状 | 0.09 | 3.36-3.41 | 南東→北西 |
| SD031 | 12C-9 | N-69°-W | 18.9+ | 0.38+ | 半円状 | 0.14 | 3.02-3.17 | 南東→北西 |
| SD148 | 11H15-20-25 | N-76°-W | 5.86 | 0.21-0.42 | 弧状 | 0.04 | 3.39-3.48 | 南東→北西 |
| SD178 | 17F-F | N-69°-W | 19.74 | 0.35-0.64 | U字状 | 0.34 | 3.11-3.33 | 北西→南東 |
| SD204 | 8A22-9E13 | N-62°-E | 13.03+ | 0.43-1.3 | 台形状 | 0.48 | 2.85-3.08 | 北東→南西 |
| SD205 | 9E23-9E13 | N-66°-W | 14.88+ | 0.34-0.54 | 台形状 | 0.32 | 3.21-3.27 | 南東→北西 |
| SD206 | 8B9-13-14 | N-35°-W | 2.06+ | 0.25-0.5 | 弧状 | 0.06 | 3.34-3.41 | 南東→北西 |
| SD209 | 8E7-11-12-16 | N-35°-W | 3.3+ | 0.22-0.7 | 四凸状 | 0.06-0.13 | 3.38-3.34 | 南東→北西 |
| SD212 | 7C3-8C1 | N-25°-E | 6.36+ | 0.21-0.55 | -- | -- | -- | -- |

造構計測表（土坑）

| 造構No | 位置 | 方位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|-------|-----------------|---------|-----|-----------|-----|--------|----------|
| SK013 | 12D25 | N-23°-W | 不定形 | 0.65×0.33 | 弧状 | 0.07 | 3.35 |
| SK128 | 13C30-25 | N-6°-E | 円形 | 1.21×1.15 | 弧状 | 0.38 | 3.04 |
| SK129 | 17F8-12-13 | N-14°-E | 扇円形 | 1.45×1.0 | 半円状 | 0.45 | 2.98 |
| SK132 | 14F6 | N-68°-E | 扇円形 | 0.85×0.76 | 台形状 | 0.39 | 3.08 |
| SK133 | 15G21 | N-65°-E | 円形 | 0.81×0.77 | U字状 | 0.54 | 2.94 |
| SK134 | 14E21-22-14E1-2 | N-69°-E | 扇円形 | 1.05×0.92 | 扇状 | 0.43 | 3.03 |
| SK144 | 14E22-14D2 | N-S | 扇円形 | 0.8×0.71 | U字状 | 0.74 | 2.67 |
| SK186 | 13D23 | N-48°-E | 扇円形 | 0.8×0.7 | 弧状 | 0.03 | 3.37 |
| SK210 | 13B8-14D3 | N-12°-E | 扇円形 | 0.73×0.61 | 扇状 | 0.46 | 3.00 |

造構計測表（性格不明造構）

| 造構No | 位置 | 方位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|-------|-----------|---------|--------|---------------|-----|-----------|-----------|
| SK203 | 7D1-4-6-9 | N-19°-E | 不整格凹田字 | 7.28×0.96-1.3 | 弧状 | 0.25-0.53 | 2.87-2.9 |
| SK207 | 7D3-4-8-9 | N-79°-E | 不整格凹田字 | 2.6×0.72-1.0 | 弧状 | 0.16-0.23 | 3.94-3.12 |

造構計測表（墓坑）

| 造構No | 位置 | 方位 | 平面形 | 平面規模 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|-------|-------|---------|-----|-----------|-----|--------|----------|
| SK311 | 11E28 | N-19°-E | 不明 | 1.23×1.2+ | 台形状 | 0.60 | 2.94 |

遺構計測表(ピット)

| Pit No. | 位置 | 柱 | 平面形 | 平面面積(m) | 断面形 | 諸寸(m) | 底面標高(m) |
|---------|-------|---|-----|-----------|-----|-------|---------|
| P005 | 13017 | 無 | 円形 | 0.17×0.16 | U字状 | 0.11 | 3.26 |
| P006 | 13017 | 無 | 円形 | 0.2×0.19 | 台形状 | 0.06 | 3.33 |
| P007 | 13019 | 無 | 円形 | 0.21×0.2 | 弧状 | 0.04 | 3.36 |
| P008 | 1309 | 無 | 楕円形 | 0.21×0.16 | 弧状 | 0.04 | 3.27 |
| P009 | 13C23 | 無 | 円形 | 0.12×0.11 | 半円状 | 0.05 | 3.25 |
| P010 | 13C23 | 無 | 楕円形 | 0.18×0.16 | 半円状 | 0.12 | 3.21 |
| P011 | 13C19 | 無 | 円形 | 0.21×0.2 | U字状 | 0.28 | 3.14 |
| P012 | 13C19 | 無 | 楕円形 | 0.14×0.1 | U字状 | 0.12 | 3.28 |
| P014 | 13C25 | 無 | 円形 | 0.23×0.22 | 弧状 | 0.05 | 3.39 |
| P015 | 13C20 | 無 | 円形 | 0.22×0.2 | 台形状 | 0.17 | 3.28 |
| P016 | 14C21 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.18 | U字状 | 0.18 | 3.26 |
| P018 | 14C16 | 無 | 円形 | 0.11×0.1 | U字状 | 0.18 | 3.26 |
| P020 | 14C17 | 無 | 楕円形 | 0.32×0.27 | 弧状 | 0.14 | 3.30 |
| P021 | 14C13 | 無 | 円形 | 0.2×0.2 | U字状 | 0.18 | 3.26 |
| P022 | 14C14 | 無 | 楕円形 | 0.31×0.25 | U字状 | 0.15 | 3.29 |
| P023 | 14C23 | 無 | 円形 | 0.23×0.21 | U字状 | 0.20 | 3.25 |
| P024 | 14C23 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.18 | U字状 | 0.17 | 3.26 |
| P025 | 14C24 | 無 | 円形 | 0.17×0.17 | 半円状 | 0.09 | 3.26 |
| P028 | 13C8 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.16 | U字状 | 0.19 | 3.20 |
| P029 | 13C8 | 無 | 円形 | 0.25×0.23 | 半円状 | 0.14 | 3.23 |
| P030 | 14C6 | 無 | 楕円形 | 0.19×0.15 | U字状 | 0.14 | 3.32 |
| P032 | 13C14 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.15 | 半円状 | 0.09 | 3.29 |
| P033 | 11F14 | 無 | 楕円形 | 0.4×0.22 | U字状 | 0.20 | 3.33 |
| P034 | 11F14 | 無 | 円形 | 0.13×0.12 | 半円状 | 0.08 | 3.43 |
| P035 | 11F14 | 無 | 楕円形 | 0.16×0.11 | U字状 | 0.11 | 3.41 |
| P036 | 11F14 | 無 | 楕円形 | 0.27×0.23 | U字状 | 0.18 | 3.33 |
| P037 | 11F14 | 無 | 楕円形 | 0.27×0.23 | U字状 | 0.19 | 3.21 |
| P038 | 11F15 | 無 | 不定形 | 0.55×0.22 | 弧状 | 0.18 | 3.3 |
| P039 | 11F15 | 無 | 楕円形 | 0.33×0.18 | 半円状 | 0.26 | 3.30 |
| P040 | 11F15 | 無 | 楕円形 | 0.21×0.15 | U字状 | 0.14 | 3.33 |
| P042 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.33×0.23 | U字状 | 0.41 | 3.09 |
| P043 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.23×0.18 | 弧状 | 0.09 | 3.42 |
| P044 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.12×0.1 | 半円状 | 0.05 | 3.45 |
| P045 | 11F9 | 有 | 楕円形 | 0.5×0.34 | 半円状 | 0.51 | 2.94 |
| P046 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.31×0.28 | 弧状 | 0.12 | 3.4 |
| P047 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.32×0.26 | 半円状 | 0.21 | 3.32 |
| P048 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.25×0.18 | 弧状 | 0.09 | 3.32 |
| P049 | 11F9 | 無 | 円形 | 0.17×0.16 | 半円状 | 0.17 | 3.36 |
| P050 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.22×0.15 | U字状 | 0.18 | 3.29 |
| P051 | 11F4 | 無 | 円形 | 0.5×0.46 | U字状 | 0.54 | 2.94 |
| P052 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.41×0.36 | 半円状 | 0.24 | 3.25 |
| P053 | 11F8 | 無 | 楕円形 | 0.48×0.35 | 台形状 | 0.50 | 3.19 |
| P054 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.15×0.13 | 弧状 | 0.03 | 3.45 |
| P055 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.3×0.26 | 半円状 | 0.17 | 3.33 |
| P056 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.19×0.15 | U字状 | 0.16 | 3.37 |
| P057 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.36×0.35 | 弧状 | 0.07 | 3.27 |
| P058 | 11F3 | 無 | 楕円形 | 0.28×0.31 | U字状 | 0.30 | 3.25 |
| P059 | 11F8 | 無 | 楕円形 | 0.15×0.11 | 弧状 | 0.03 | 3.50 |
| P060 | 11F8 | 無 | 楕円形 | 0.17×0.12 | 弧状 | 0.04 | 3.50 |
| P061 | 11F8 | 無 | 楕円形 | 0.17×0.15 | 半円状 | 0.10 | 3.43 |
| P062 | 11E24 | 無 | 楕円形 | 0.29×0.21 | 弧状 | 0.09 | 3.41 |
| P063 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.1×0.08 | 弧状 | 0.02 | 3.52 |
| P064 | 11F9 | 無 | 楕円形 | 0.27×0.14 | 弧状 | 0.09 | 3.42 |
| P065 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.42×0.36 | 半円状 | 0.17 | 3.31 |
| P067 | 11F3 | 無 | 楕円形 | 0.31×0.21 | 弧状 | 0.17 | 3.40 |

| Pit No. | 位置 | 柱 | 平面形 | 平面面積(m) | 断面形 | 諸寸(m) | 底面標高(m) |
|---------|-------|---|-----|-----------|-----|-------|---------|
| P068 | 11F4 | 無 | 円形 | 0.15×0.15 | 弧状 | 0.02 | 3.35 |
| P069 | 11F4 | 無 | 円形 | 1.5×1.5 | U字状 | 0.15 | 3.30 |
| P070 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.18×0.16 | U字状 | 0.27 | 3.22 |
| P071 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.16×0.14 | U字状 | 0.32 | 3.18 |
| P072 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.33×0.22 | 弧状 | 0.11 | 3.41 |
| P073 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.23×0.2 | 半円状 | 0.14 | 3.34 |
| P074 | 11F4 | 無 | 円形 | 0.16×0.16 | 弧状 | 0.05 | 3.44 |
| P075 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.25×0.13 | 弧状 | 0.05 | 3.43 |
| P076 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.41×0.34 | 半円状 | 0.38 | 3.13 |
| P077 | 11F4 | 無 | 楕円形 | 0.42×0.35 | 半円状 | 0.44 | 3.08 |
| P078 | 11E24 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.18 | U字状 | 0.27 | 3.23 |
| P079 | 11E23 | 無 | 楕円形 | 0.17×0.09 | 半円状 | 0.16 | 3.37 |
| P080 | 11E24 | 無 | 楕円形 | 0.33×0.25 | 半円状 | 0.15 | 3.35 |
| P081 | 11E24 | 無 | 楕円形 | 0.28×0.34 | U字状 | 0.25 | 3.25 |
| P082 | 11E23 | 無 | 円形 | 0.39×0.35 | 弧状 | 0.15 | 3.35 |
| P083 | 11E23 | 無 | 楕円形 | 0.16×0.14 | 弧状 | 0.06 | 3.46 |
| P084 | 11E18 | 無 | 円形 | 0.4×0.38 | U字状 | 0.48 | 3.07 |
| P085 | 11E24 | 無 | 楕円形 | 0.31×0.25 | U字状 | 0.50 | 2.95 |
| P086 | 11E19 | 無 | 楕円形 | 0.25×0.18 | U字状 | 0.15 | 3.39 |
| P087 | 11E14 | 無 | 円形 | 0.29×0.28 | U字状 | 0.50 | 3.04 |
| P088 | 11E18 | 無 | 楕円形 | 0.19×0.17 | 半円状 | 0.16 | 3.4 |
| P089 | 11E13 | 無 | 円形 | 0.19×0.18 | 弧状 | 0.06 | 3.49 |
| P090 | 11E13 | 無 | 楕円形 | 0.3×0.35 | 潜伏状 | 0.39 | 3.17 |
| P091 | 11E13 | 無 | 円形 | 0.29×0.28 | 台形状 | 0.25 | 3.30 |
| P093 | 11D8 | 無 | 楕円形 | 0.24×0.12 | U字状 | 0.30 | 3.28 |
| P094 | 11F9 | 無 | 円形 | 0.29×0.22 | U字状 | 0.33 | 3.04 |
| P095 | 11F4 | 無 | 円形 | 0.23×0.22 | 弧状 | 0.06 | 3.29 |
| P096 | 11F5 | 無 | 楕円形 | 0.24×0.14 | 半円状 | 0.11 | 3.43 |
| P097 | 11P9 | 無 | 楕円形 | 0.11×0.09 | U字状 | 0.17 | 3.33 |
| P098 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.13×0.09 | 半円状 | 0.08 | 3.40 |
| P099 | 11F14 | 無 | 楕円形 | 0.16×0.13 | U字状 | 0.07 | 3.43 |
| P100 | 11E18 | 無 | 楕円形 | 0.32×0.35 | 台形状 | 0.13 | 3.4 |
| P101 | 13C2 | 無 | 楕円形 | 0.25×0.22 | U字状 | 0.25 | 3.18 |
| P104 | 13C13 | 無 | 円形 | 0.22×0.21 | U字状 | 0.24 | 3.16 |
| P105 | 18C2 | 無 | 楕円形 | 0.27×0.21 | U字状 | 0.17 | 3.27 |
| P106 | 18C16 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.16 | U字状 | 0.21 | 3.22 |
| P107 | 17C25 | 無 | 楕円形 | 0.17×0.17 | 台形状 | 0.09 | 3.32 |
| P108 | 17C24 | 無 | 楕円形 | 0.13×0.11 | 半円状 | 0.07 | 3.37 |
| P109 | 18C16 | 無 | 楕円形 | 0.37×0.26 | 弧状 | 0.08 | 3.32 |
| P115 | 14F1 | 無 | 円形 | 0.24×0.22 | 弧状 | 0.08 | 3.35 |
| P117 | 14F1 | 無 | 楕円形 | 0.16×0.1 | U字状 | 0.20 | 3.2 |
| P118 | 13F5 | 無 | 円形 | 0.2×0.2 | U字状 | 0.10 | 3.32 |
| P119 | 14F11 | 無 | 円形 | 0.15×0.15 | 弧状 | 0.05 | 3.36 |
| P120 | 14E16 | 無 | 楕円形 | 0.25×0.21 | U字状 | 0.12 | 3.3 |
| P122 | 14G16 | 無 | 楕円形 | 0.35×0.28 | U字状 | 0.15 | 3.30 |
| P124 | 13C4 | 無 | 円形 | 0.18×0.17 | U字状 | 0.10 | 3.23 |
| P135 | 11F10 | 無 | 楕円形 | 0.20×0.17 | U字状 | 0.10 | 3.30 |
| P136 | 14G16 | 無 | 円形 | 0.22×0.2 | U字状 | 0.19 | 3.24 |
| P137 | 14G17 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.15 | U字状 | 0.12 | 3.22 |
| P139 | 14G2 | 無 | 円形 | 0.2×0.19 | U字状 | 0.23 | 3.18 |
| P143 | 14G16 | 無 | 楕円形 | 0.2×0.16 | 弧状 | 0.04 | 3.37 |
| P150 | 11H10 | 無 | 楕円形 | 0.12×0.1 | U字状 | 0.10 | 3.39 |
| P151 | 11H10 | 無 | 楕円形 | 0.17×0.15 | U字状 | 0.18 | 3.21 |
| P152 | 11H9 | 無 | 楕円形 | 0.21×0.14 | 弧状 | 0.04 | 3.36 |
| P153 | 11H6 | 無 | 楕円形 | 0.15×0.11 | U字状 | 0.09 | 3.29 |

遺構計測表(ピット)

| Pit No. | 柱 | 平面形状 | 平面範囲 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) | Pit No. | 柱 | 平面形状 | 平面範囲 (m) | 断面形 | 深さ (m) | 底面標高 (m) |
|---------|-------|------|----------|-----------|--------|----------|---------|---|------|----------|-----|--------|----------|
| P154 | IIC19 | 無 | 円形 | 0.36×0.21 | U字状 | 0.22 | 3.2 | | | | | | |
| P155 | IIC19 | 無 | 円形 | 0.23×0.19 | U字状 | 0.23 | 3.22 | | | | | | |
| P156 | IIC19 | 無 | 円形 | 0.18×0.17 | U字状 | 0.09 | 3.36 | | | | | | |
| P157 | IIC19 | 無 | 円形 | 0.22×0.16 | U字状 | 0.20 | 3.26 | | | | | | |
| P158 | IIC19 | 無 | 円形 | 0.34×0.21 | U字状 | 0.42 | 3.14 | | | | | | |
| P159 | IID15 | 無 | 円形 | 0.23×0.18 | 弧状 | 0.06 | 3.41 | | | | | | |
| P160 | IID15 | 無 | 円形 | 0.21×0.16 | 弧状 | 0.08 | 3.43 | | | | | | |
| P162 | IIC22 | 無 | 円形 | 0.21×0.16 | U字状 | 0.14 | 3.29 | | | | | | |
| P164 | IID13 | 無 | 円形 | 0.15×0.14 | U字状 | 0.19 | 3.27 | | | | | | |
| P165 | IID13 | 無 | 円形 | 0.24×0.21 | 弧状 | 0.08 | 3.20 | | | | | | |
| P171 | IIF10 | 無 | 円形 | 0.23×0.14 | 弧状 | 0.04 | 3.25 | | | | | | |
| P172 | IIF15 | 無 | 円形 | 0.31×0.28 | 半円状 | 0.18 | 3.22 | | | | | | |
| P174 | IID4 | 無 | 円形 | 0.28×0.28 | U字状 | 0.39 | 3.14 | | | | | | |
| P175 | IID4 | 無 | 円形 | 0.28×0.24 | U字状 | 0.40 | 3.14 | | | | | | |
| P176 | IID5 | 無 | 円形 | 0.24×0.14 | U字状 | 0.20 | 3.2 | | | | | | |
| P177 | IID5 | 無 | 円形 | 0.16×0.11 | U字状 | 0.10 | 3.31 | | | | | | |

木製品観察表

| 報告番号 | 出土位置 | 層位 | 既存部断面 (cm) | | 断面形 | 既存状況 | 未取り | 層位 | 備考 |
|-------------|-------|------|------------|-------|------|----------|------|-------|---------------|
| | | | 底 | 幅 | | | | | |
| 34.I3024 | SK4 | 不明 | 18.5 | 2.4 | 0.5 | 曲物側板 | 破片 | 底目 | 矢印状のケイキ縫 |
| 35.I3024 | SK4 | 不明 | 11.3 | 5.8 | 0.4 | 曲物・横等タガか | 破片 | 底目 | 5孔の水封穴あり・表面鉄化 |
| 36.I4018 | SE168 | 25 | 6.9 | 4.0 | 0.3 | 板状木製品 | 破片 | 底目 | |
| 37.IC16-17 | SE145 | 19 | 12.9 | 5.1 | 0.4 | 曲物・横等底板 | 破片 | 底目 | 側板との結合釘穴3孔あり |
| 38.IC16-17 | SE145 | 19 | 21.1 | 5.7 | 0.5 | 曲物・横等底板 | 破片 | 底目 | 底面に2孔の水封穴あり |
| 39.I4018 | SE168 | 25 | 9.6 | 3.7 | 0.6 | 曲物・横等底板か | 1/2欠 | 底目 | |
| 40.I4018 | SE168 | 25 | 11.9 | 2.6 | 1.1 | 曲物・横等底板か | 破片 | 底目 | 側面に2孔の水封穴あり |
| 41.I4018 | SE168 | 25 | 12.8 | 20.3 | 1.0 | 曲物・横等底板か | 1/2欠 | 底目 | 側面に4孔の水封穴あり |
| 42.I2G11-12 | SK191 | 3 | 10 | 6.1 | 3.9 | 蝶形状状 | 変形 | サクタ柵底 | 三重巻き |
| 43.IC16-17 | SE145 | 19 | 34.7 | 2.1 | 2.4 | 棒状木製品 | 上端部欠 | 丸材 | |
| 44.I4C16-17 | SE145 | 19 | 27.0 | 5.7 | 0.3 | 板状木製品 | 破片 | 底目 | 曲物底板か |
| 45.IC16-17 | SE145 | 19 | 32.9 | 5.5 | 0.4 | 曲物側板か | 破片 | 底目 | 4孔の木封穴あり |
| 46.IC16-17 | SE145 | 19 | 39.5 | 12.6 | 2.2 | 舟形羽根材 | 破片 | 底目 | 上部加鉄化・舟形羽根か |
| 47.I4C11 | SE141 | 16 | 21.0 | 29.5 | 4.3 | 厚板状木製品 | 破片 | 削材 | |
| 48.II79 | P45 | 1 | 25.7 | 6.6 | 6.4 | 板 | 上端部欠 | 芯材材 | ケヤキ |
| 49.I4018 | SE168 | 20 | 31.8 | 2.9 | 3.4 | 板 | 上端部欠 | 芯材丸太材 | 全面鉄化 |
| 50.III04 | SK49 | 9-12 | 9.2 | 8.6 | 2 | 白 | ぼぼ穴 | 芯材丸太材 | マツ属 |
| 51.III04 | SK49 | 9 | 11.2 | 2.5 | 1.5 | 薄物状木製品 | ぼぼ穴 | 丸材 | 椎葉 |
| 52.II620 | SK131 | 底板上 | 5.0 | (2.7) | 2.7 | 漆器・側 | 1/3欠 | | 高台以外黒漆後漆象嵌 |
| 53.II620 | SK131 | 5.2 | 29.8 | 0.9 | 0.5 | 木箱表面側板 | 下部欠 | 板目 | マツ属 |
| 54.II620 | SK131 | 68.0 | 17.2 | 1.2 | 0.5 | 木箱表面側板 | 破片 | 板目 | マツ属 |
| 55.II620 | SK131 | 76.2 | 26.4 | 1.7 | 0.5 | 木箱表面側板 | 破片 | 板目 | マツ属 |
| 56.II620 | SK131 | 29.1 | 3.6 | 3.2 | 0.5 | 木箱部材 | 破片 | 芯材丸太材 | スルガ近似種 |
| 57.II620 | SK131 | 45.2 | 2.0 | 1.8 | 0.5 | 木箱部材 | 破片 | 芯材丸太材 | スルガ近似種 |
| 58.I3024 | SE4 | 23.5 | 29.4 | サ | ササ | 一部残 | | | ゴザ目組み |
| 59.III-4 | SK203 | 底板上 | 44.6 | 40.5 | 14.2 | 漆器 | 完形 | 板目 | ケヤキ |
| | | | | | | | | | 表面に加工跡あり(タキビ) |

金寶瓶型表

| 報告番号 | 出土位置 | 既存 | 名 | 初期年 | 王朝名 | 法度 | | | 備考 |
|----------|-------|-----|-------|------|-----|-------|-------|------|---------|
| | | | | | | 長(cm) | 厚(cm) | 重(g) | |
| 62.II620 | SK131 | 帆板上 | 朱墨寶寶 | 1411 | 明 | 2.4 | 0.15 | 2.2 | |
| 63.II620 | SK131 | 帆板上 | 寛永朱墨寶 | 1636 | | 2.4 | 0.12 | 3.0 | 古寛永 |
| 64.II620 | SK131 | 帆板上 | 寛永朱墨寶 | 1636 | | 2.5 | 0.13 | 4.6 | 古寛永 |
| 65.II620 | SK131 | 帆板上 | 寛永朱墨寶 | 1668 | | 2.5 | 0.12 | 3.5 | 新寛永(文政) |
| 66.II620 | SK131 | 帆板上 | 寛永朱墨寶 | 1668 | | 2.5 | 0.12 | 3.2 | 新寛永(文政) |
| 67.II620 | SK131 | 帆板上 | 寛永朱墨寶 | 1668 | | 2.5 | 0.20 | 4.0 | 新寛永(文政) |

石製品観察表

| 報告番号 | 出土位置 | 種別 | 石材 | 法度 | | | | 備考 |
|----------|-------|----|-----|-------|-------|-------|------|-------|
| | | | | 長(cm) | 幅(cm) | 厚(cm) | 重(g) | |
| 60.17F13 | SK129 | 2 | 底石 | 花崗岩 | 7.0+ | 6.0 | 5.2 | 354.8 |
| 61.14018 | SE168 | 不明 | 磁器石 | 安山岩 | 12.1 | 8.1 | 4.7 | 541.8 |

土器調査表

丸岡 西部山 口述遺跡及び発掘の現存件数をしめされた。

| 番号 | 出土位置 No. ダリヤ # | 種類 | 時代 | 範囲 | | 焼付 | 表面 | 底面 | 地質 | 測量 | | 備考 |
|-----------|-------------------|-----|--------|------|--------|-------------|----|----|----|------|-------------|----|
| | | | | 口径 | 底径 | | | | | 底面 | 内面 | |
| 1. 14620 | SE033 5 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (11.8) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 2. 15521 | SE033 5 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (11.8) | 底白 | 底白 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 3. 1704 | SE061 6 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (7.0) (1.2) | 底白 | 底白 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 4. 12224 | SE061 1 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (9.6) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 5. 14146 | SE061 1 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (11.0) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 6. 14620 | SE063 6 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (9.6) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 7. 15521 | SE063 2 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (9.6) | 底白 | 底白 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 8. 15521 | SE069 9 - 10 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (12.6) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 9. 14206 | SE069 8 | 新出器 | 新石器 | 底付 | 底付 | (4.6) (2.0) | 底白 | 底白 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 11. 1339 | SE03 1 | 台輪 | 鐵 | 底付 | 底付 | (4.6) | 底白 | 底白 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 12. 98. | 鏡丸 | 斧頭 | 合符直小柄足 | 底付 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 13. 13225 | 鏡丸 | 斧頭 | 直小 | 底付 | 底付 | (13.8) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 14. 14021 | SE062 7 | 骨鏡 | 環状鏡 | 口一長盛 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 15. 14209 | SE06 16 | 骨鏡 | 環状鏡 | 口一短盛 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 16. 1114 | SE06 4 | 骨鏡 | 環状鏡 | 底付 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 17. 14025 | SE069 30 | 骨鏡 | 底付 | 底付 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 18. 17172 | SE076 1 | 骨鏡 | 底付 | 底付 | 底付 | (6.2) (3.2) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 19. 73 | 三 | 骨鏡 | 底付 | 底付 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 20. 1393 | SE3 2 | 馬蹄形 | 蓋付 | 口付蓋 | 不明 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 21. 14625 | SE069 7 | 馬蹄形 | 蓋付 | 口付蓋 | (37.0) | (11.5) | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 22. 14018 | 1 - 8a - 10 - 12 | 馬蹄形 | 蓋付 | 口一付蓋 | (36.2) | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 23. 9013 | SE005 1 | 馬蹄形 | 蓋付 | 底付 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 24. 1114 | 三 | 馬蹄形 | 蓋付 | 底付 | 底付 | 底 | 底 | 底 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |
| 25. 116 | 鏡 | 目鏡付 | 底付 | 底付 | 底付 | (14.0) | 底白 | 底白 | 良好 | 微細少量 | 灰白色・黒色斑子ややか | ナデ |

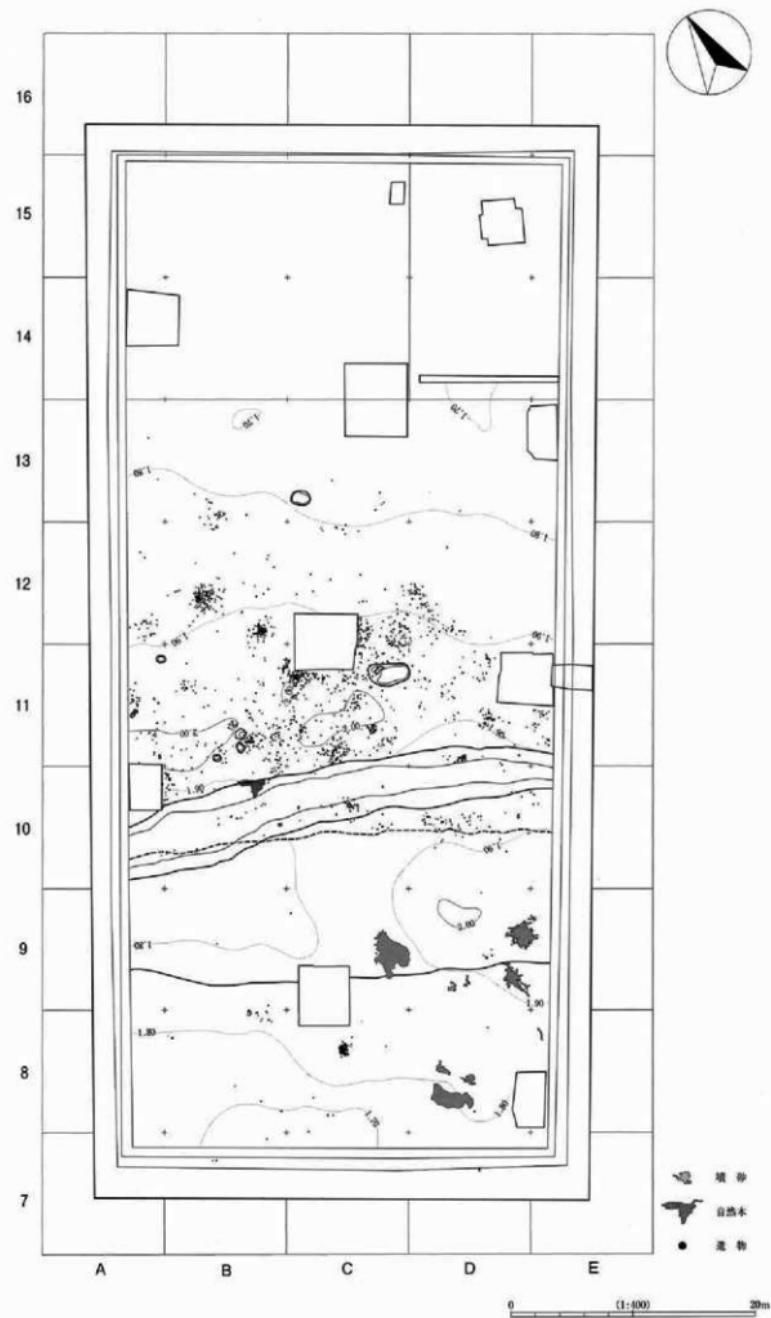
土器觀察表

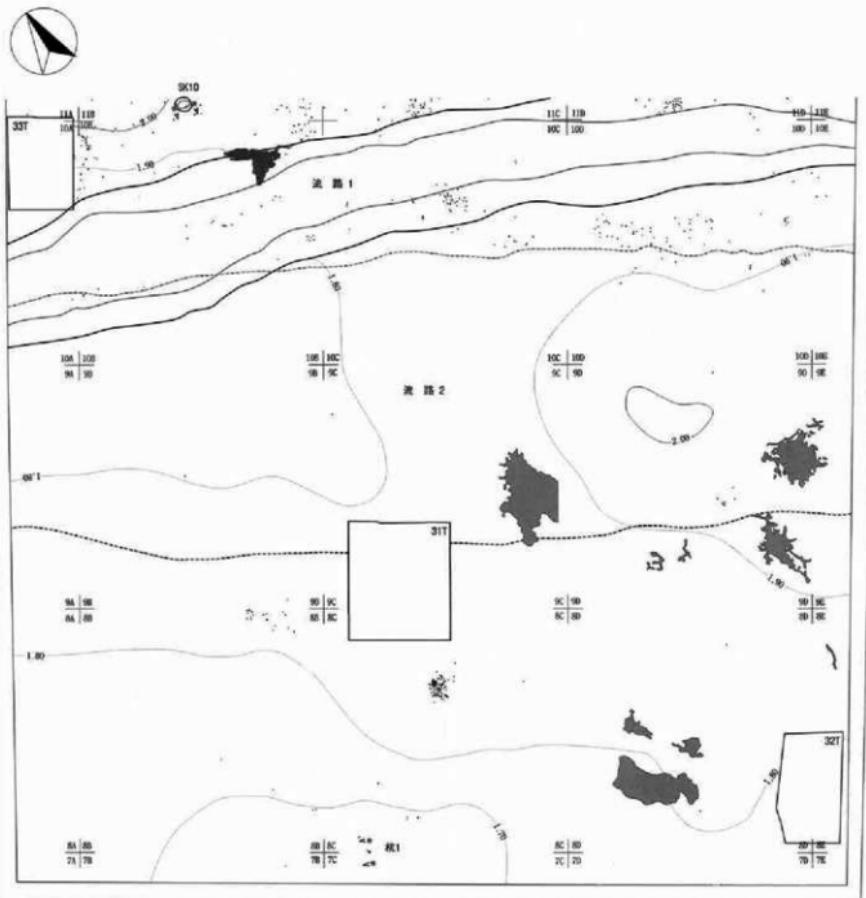
九所

県名：山形県及び福島県の東北手をV字で奥した

| 番号 No. | 出土地名 アーチナルド | 地質 地層 | 種別 断面 | 形状 断面 | 泥炭 泥炭 | | 泥炭 泥炭 | 色調 色調 | 状況 状況 | 土壌 土壌 | 外因 外因 | 内因 内因 | 備考 備考 |
|-----------|----------------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|----------|------------------------------|----------|-------------------|
| | | | | | 口径 径幅 | 底径 底幅 | | | | | | | |
| 261326 | SH102 | 5 | 角溝窓 | 窓 | 削形 | | 灰 | 灰 | 灰 | 良好 | 今今根・灰白色泥炭子少量 白苔少量 | クタキ | ヘラナデ |
| 271320 | SH102 | 5 | 角溝窓 | 窓 | 削形 | | 灰 | 灰 | 灰 | 良好 | 今今根・灰白色泥炭子少量 白苔少量 | クタキ | ヘラナデ |
| 281304 | SH4 | 3 | 角溝窓 | 窓 | 圓形 | | 灰 | 灰 | 灰 | 良好 | 白苔泥炭少量 | クタキ | ナガハヘラナデ |
| 291428 | SH27 | 6-8 | 角溝窓 | 窓 | 削形 | | 灰 | 灰 | 灰 | 良好 | 白苔泥炭少量 | クタキ | ナガヘラナデ |
| 30170 | 1 | 輪廻窓 | | 輪廻窓 | | | 灰 | 灰 | 灰 | 良好 | 無泥・部分少量 | | 輪廻泥炭少 外因泥炭二重構造 |
| 311013 | SH205 | 1 | 土輪窓 | 窓 | 削形 | | 灰白 | 灰白 | 黄褐色 | 良好 | 泥質・石質・酸性など少量 泥質・石質・酸性など少量 | ヘタケズリ | 古墳 |
| 32116 | | | 滑足 | 円形・直線形 | 完形 | 4.0 | 4.4 | 1.1 | 削形 | 良好 | 泥色泥炭少すか・白苔 泥色泥炭少すか・白苔 | | |
| 33116 | | | 滑足 | 円形・直線形 | 完形 | 4.1 | 4.6 | 1.1 | 削形 | 良好 | 泥色泥炭少すか・白苔 泥色泥炭少すか・白苔 | | |
| | | | | | | | | | | | 外因はヘラナデ又はヘタケズリ | | |

図 版





分割概念図

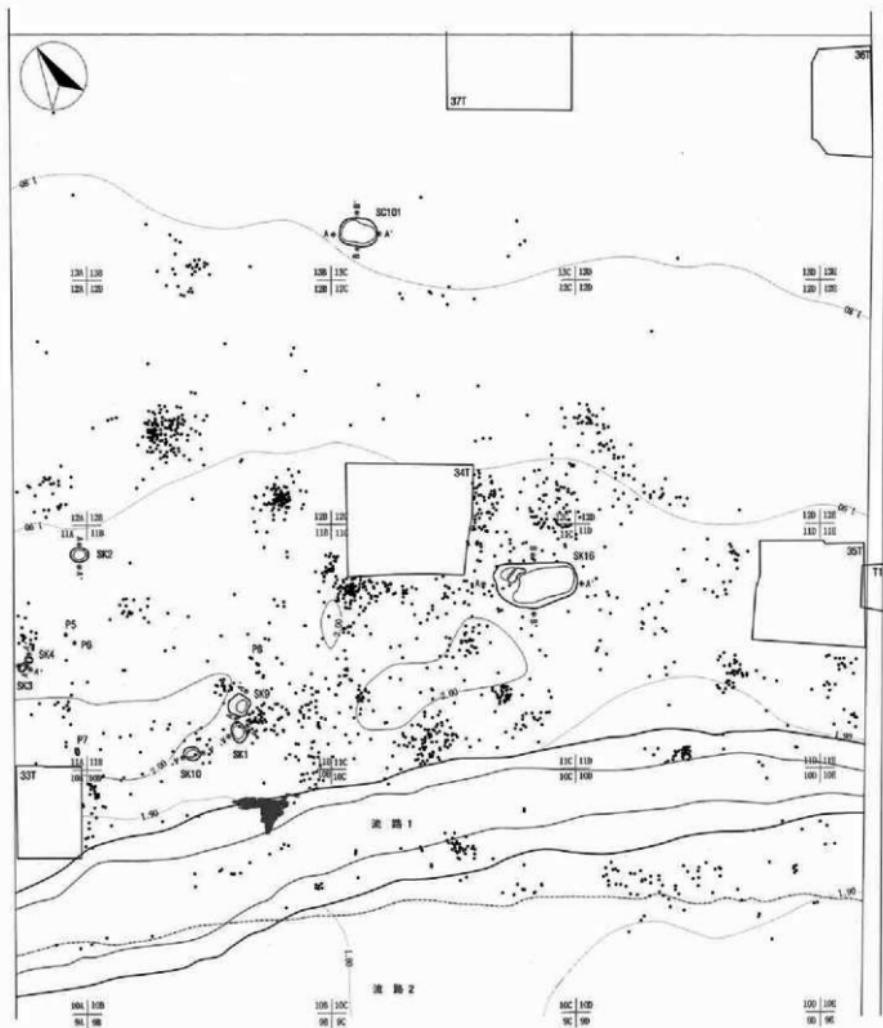


- 填砂 (Filled sand)
- ▲ 自然木 (Natural wood)
- 灰 (Ash)

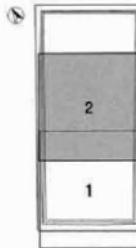
0 (1:200) 10m

中部北遺跡造構分割図 (2)

圖 版 3

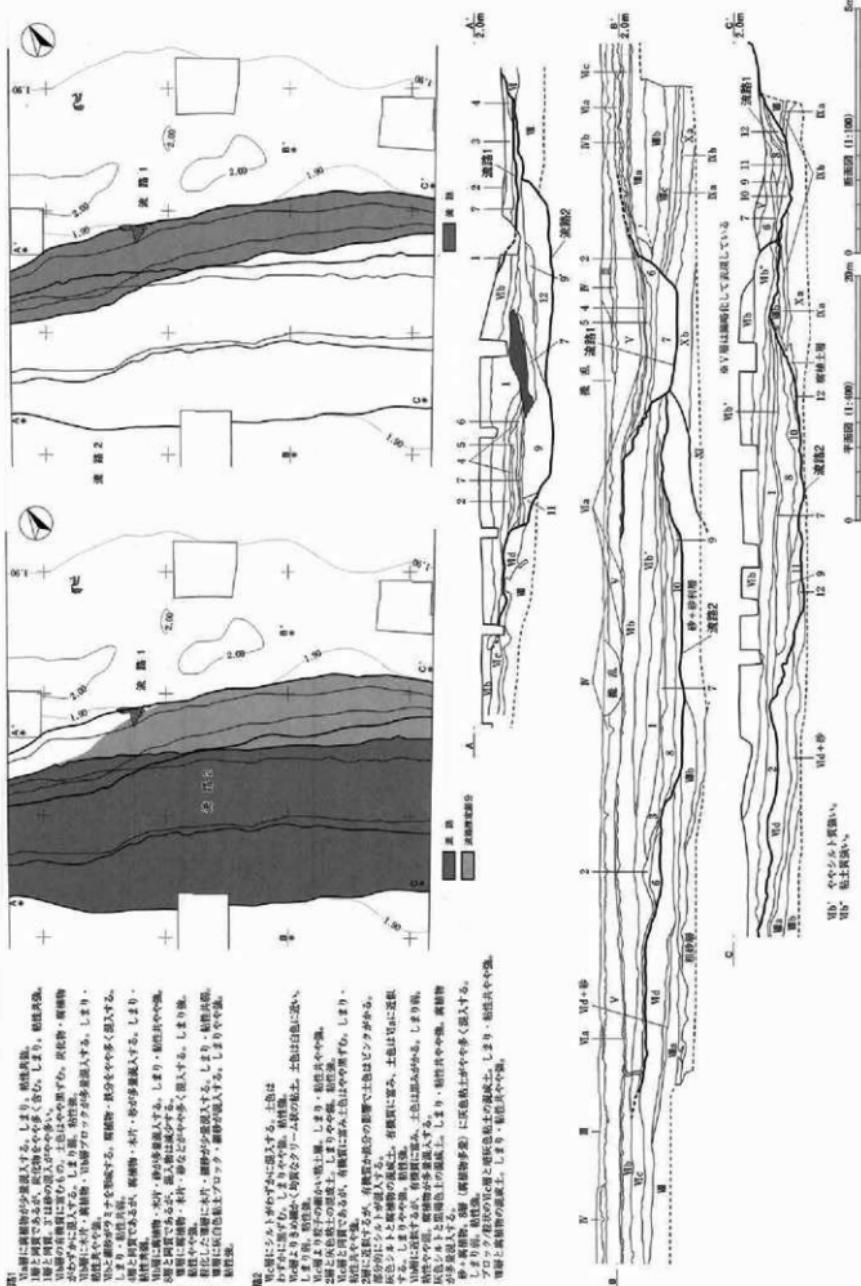


分割概念图



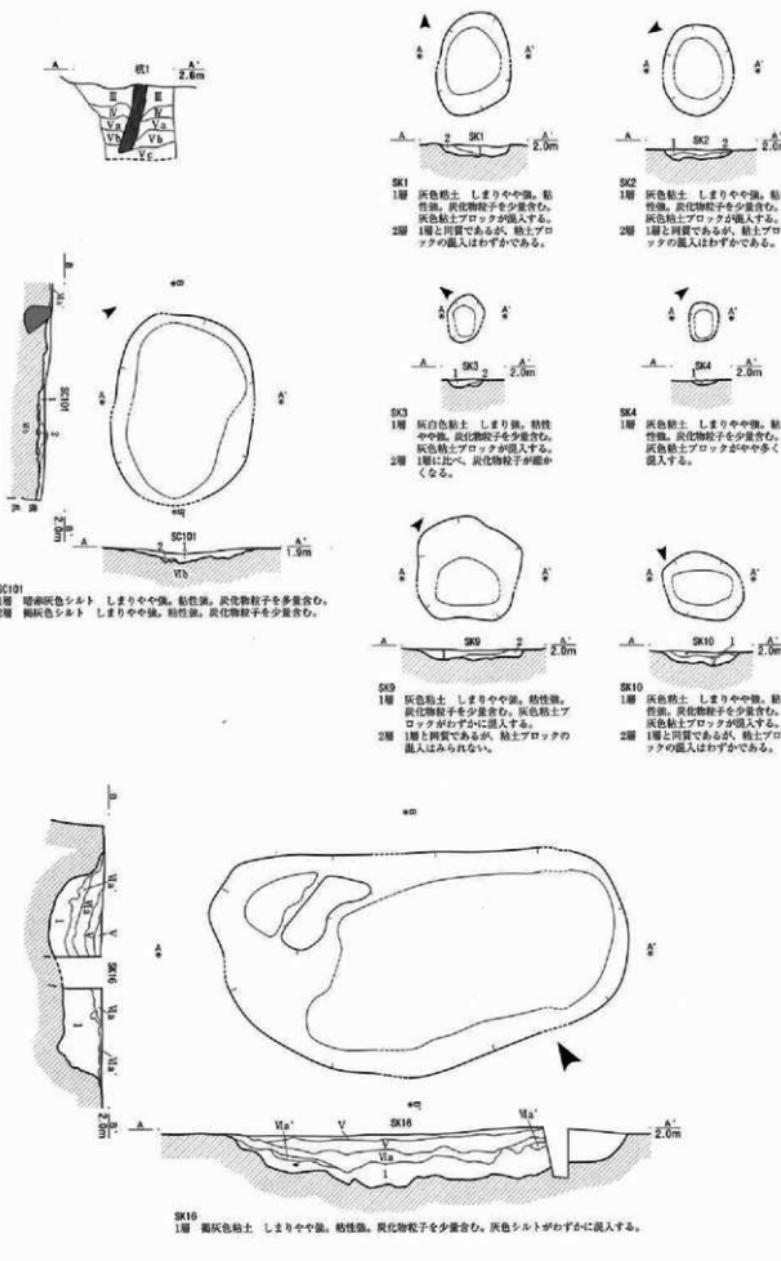
填
自然
造

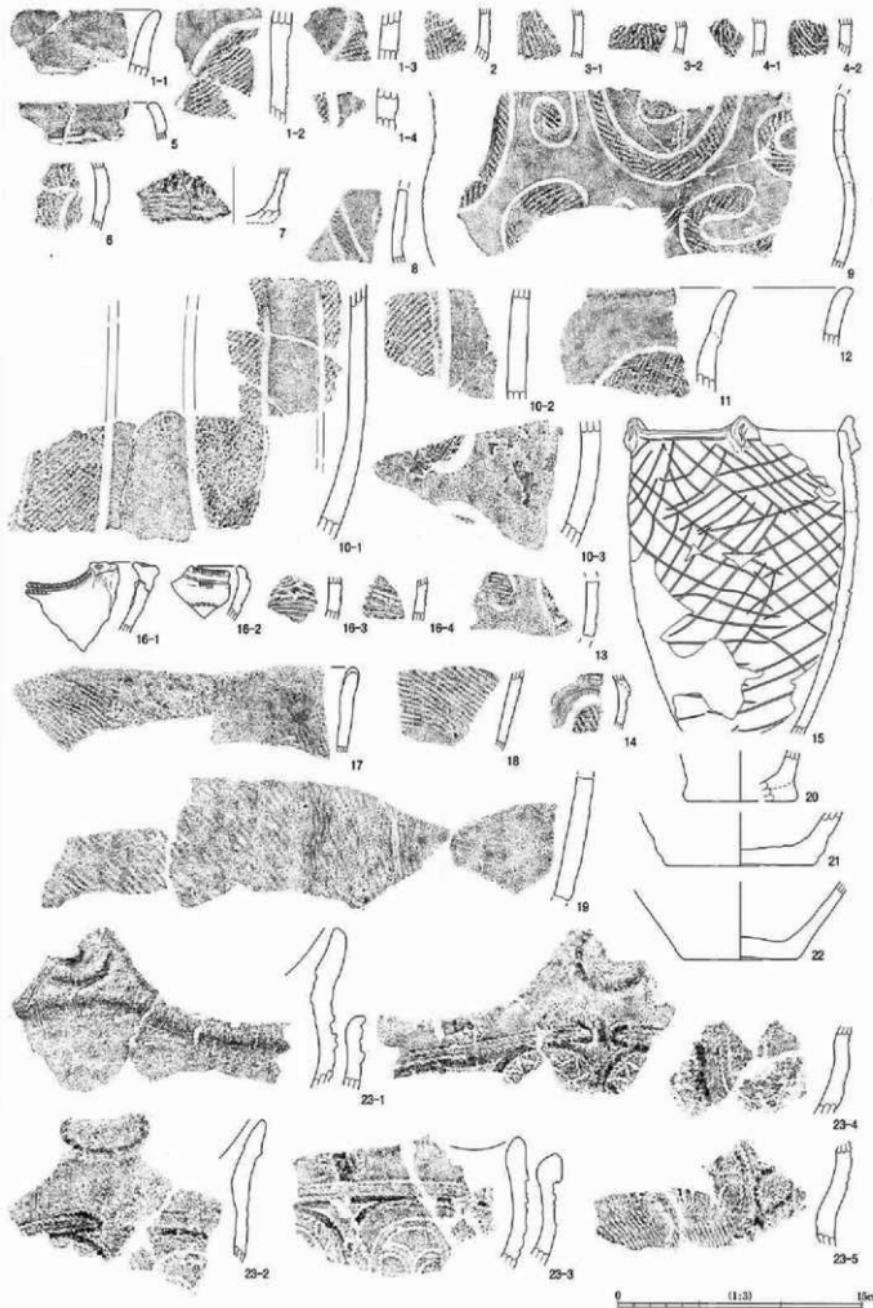
(1 : 200)

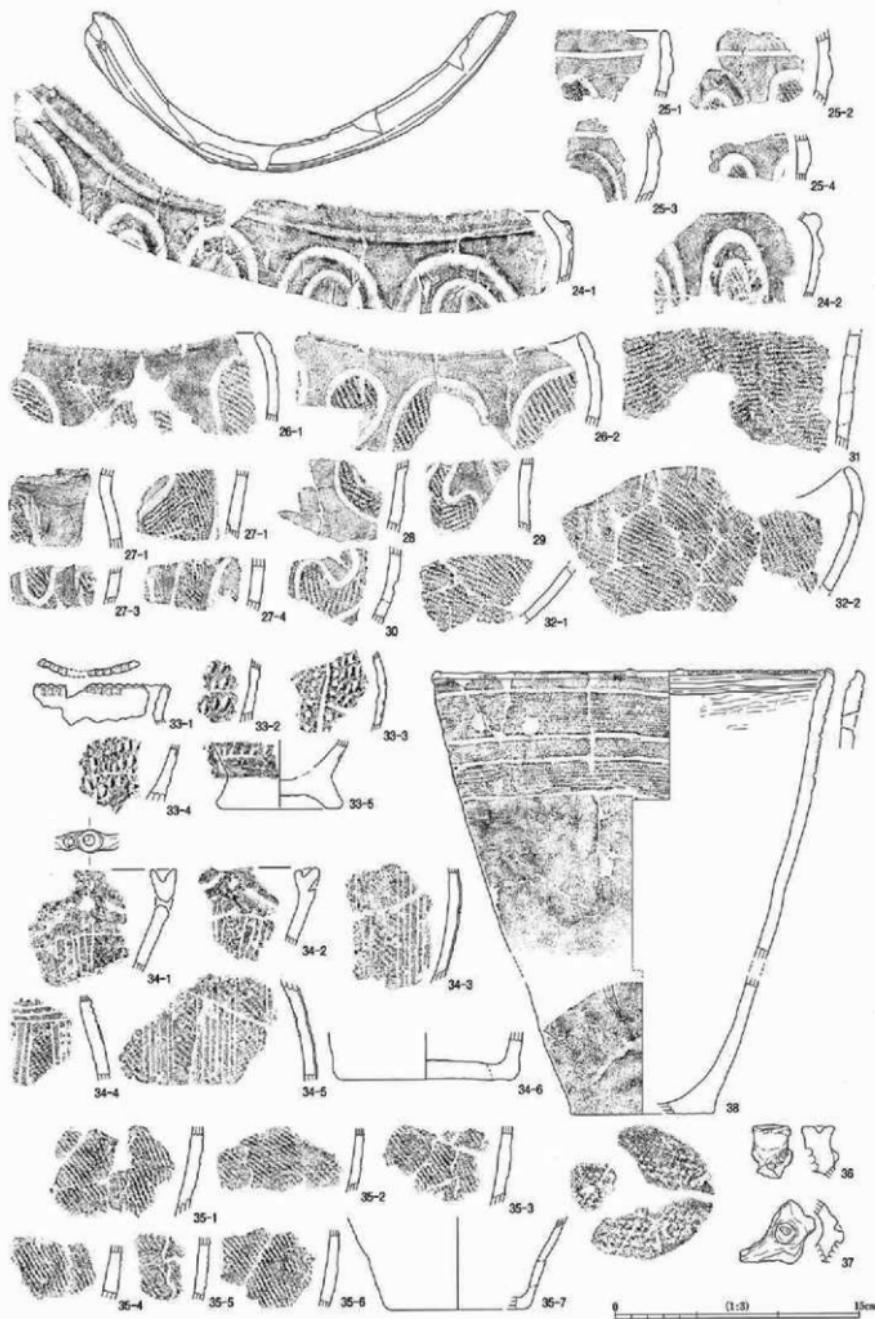


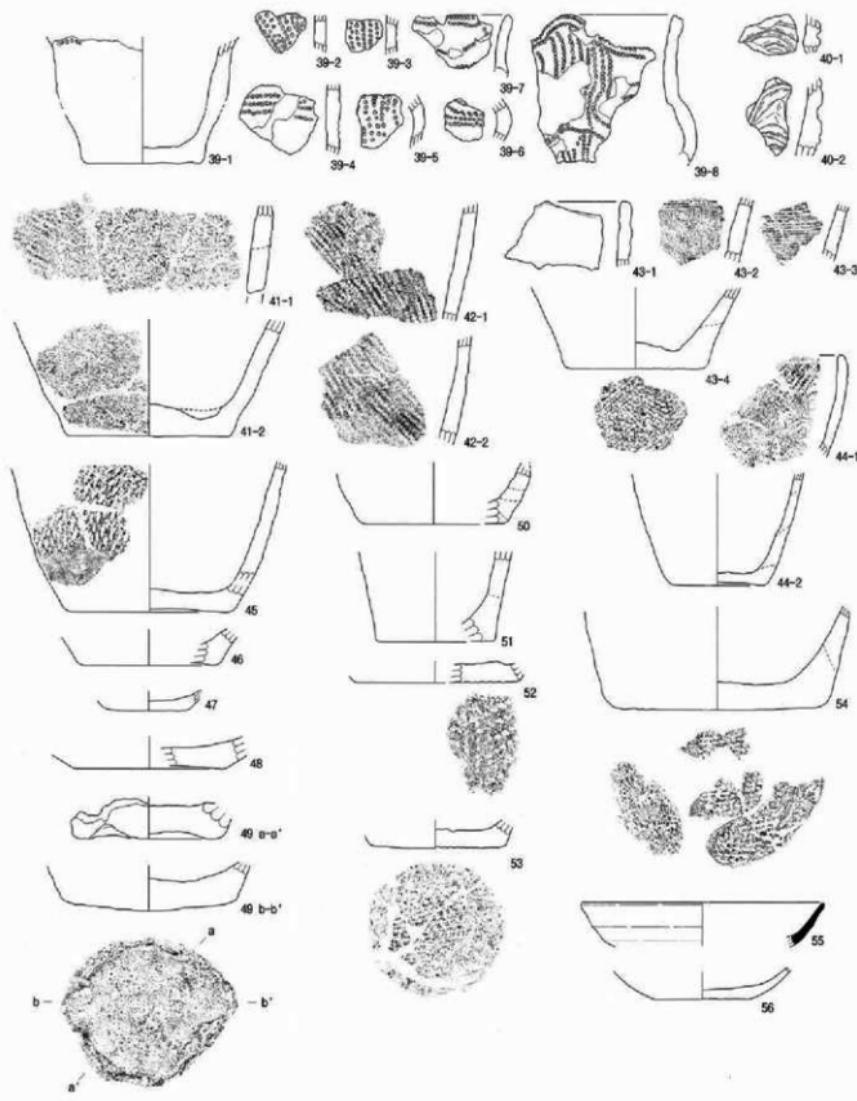
中部北遺跡遺構個別図 杭1・SK1・SK2・SK3・SK4・SK9・SK10・SK16・SC101

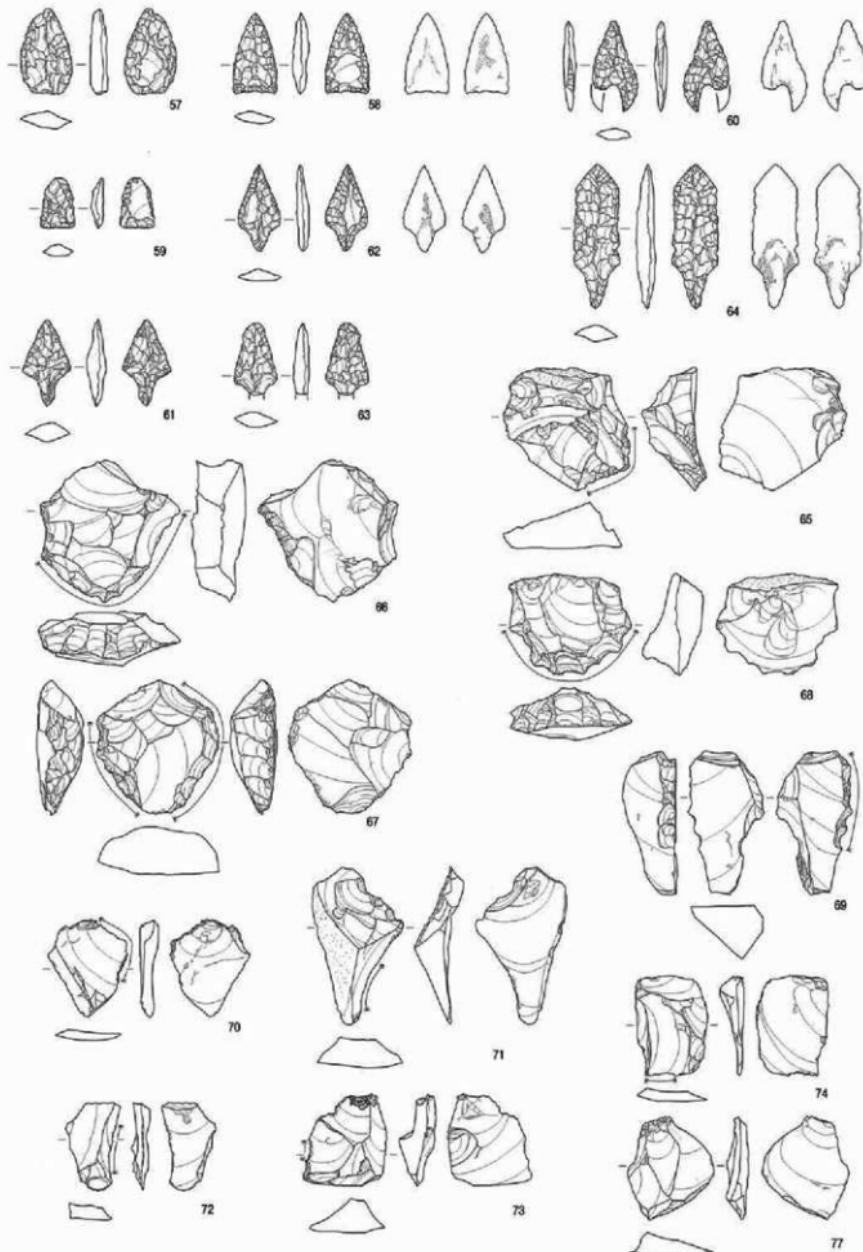
圖 版 5



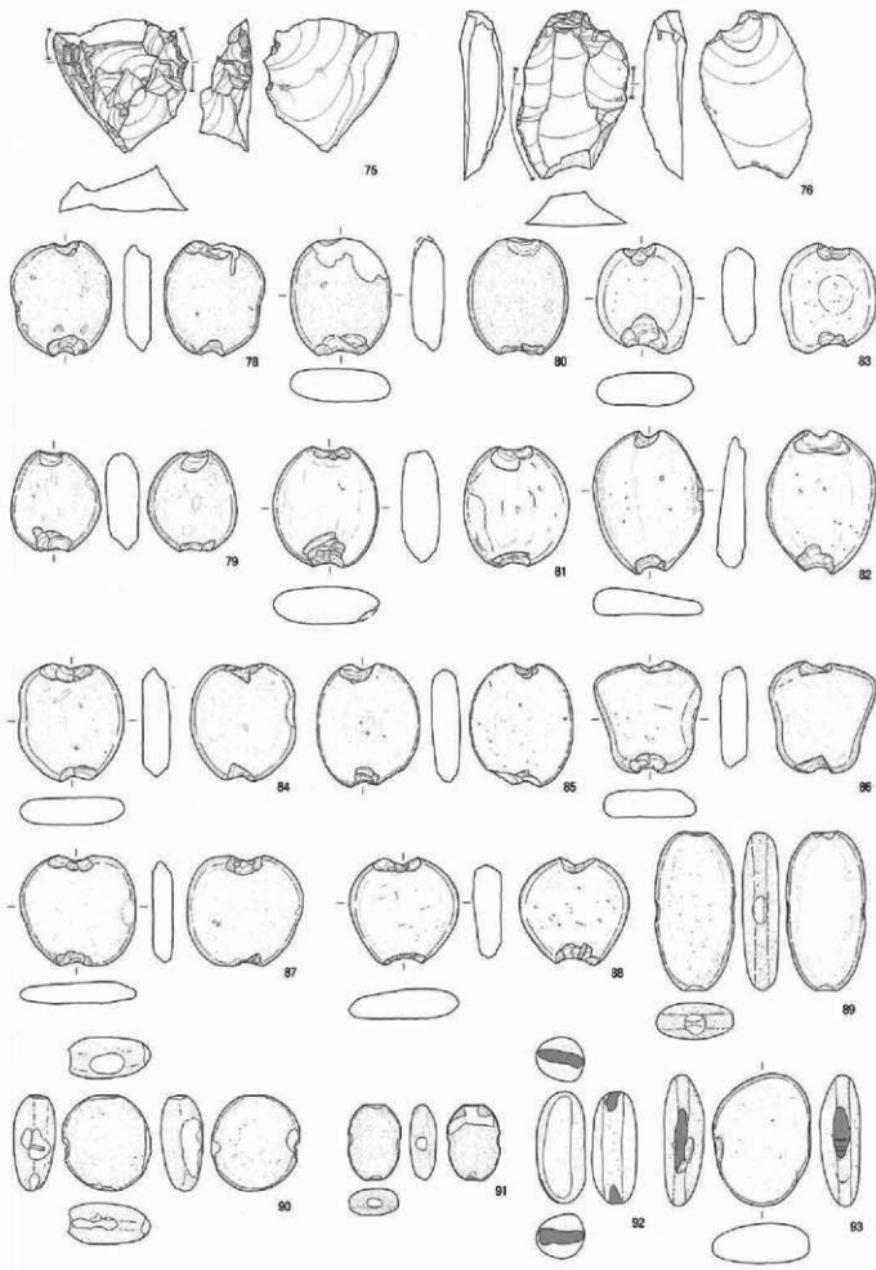








0 57~64 (2:3) 6cm 0 65~74·77 (1:2) 10cm

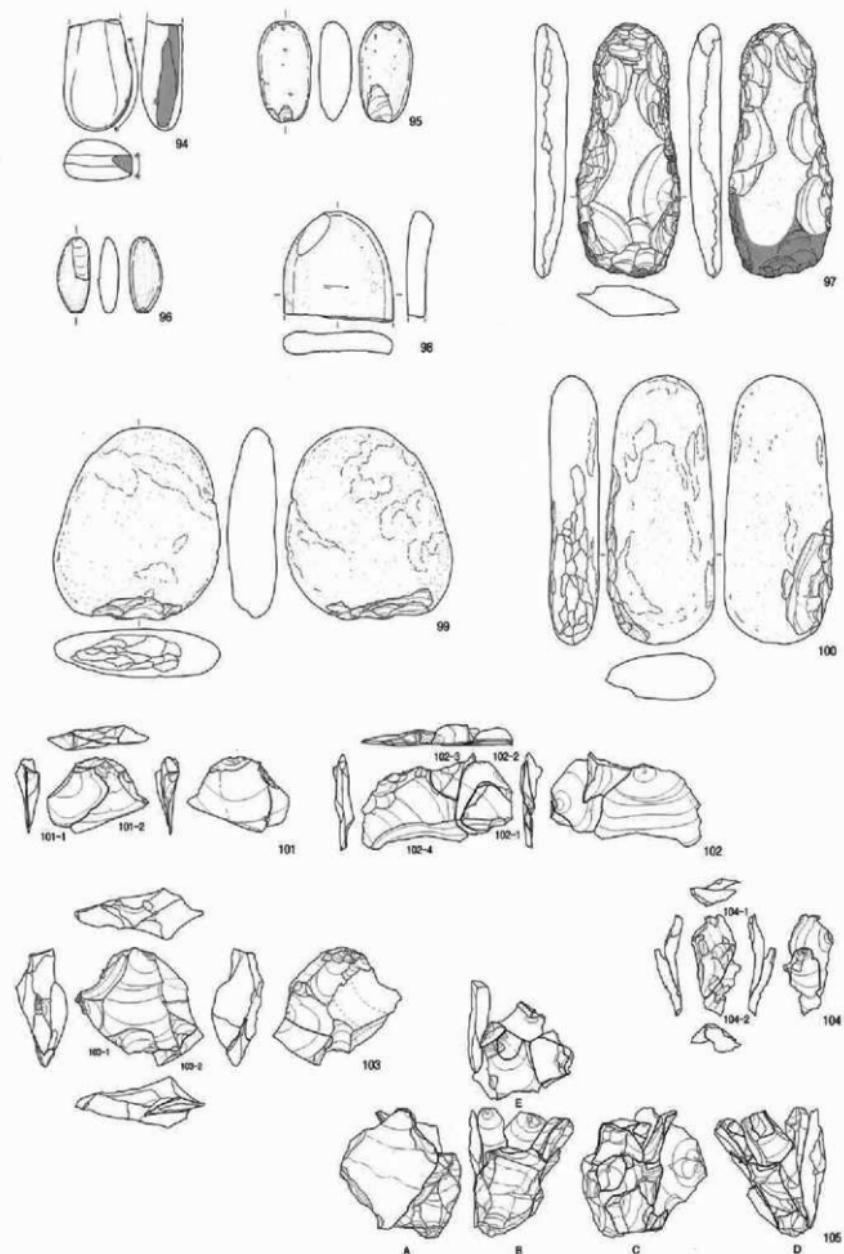


75 - 76 (1:2)

10cm

78 - 93 (1:4)

10cm

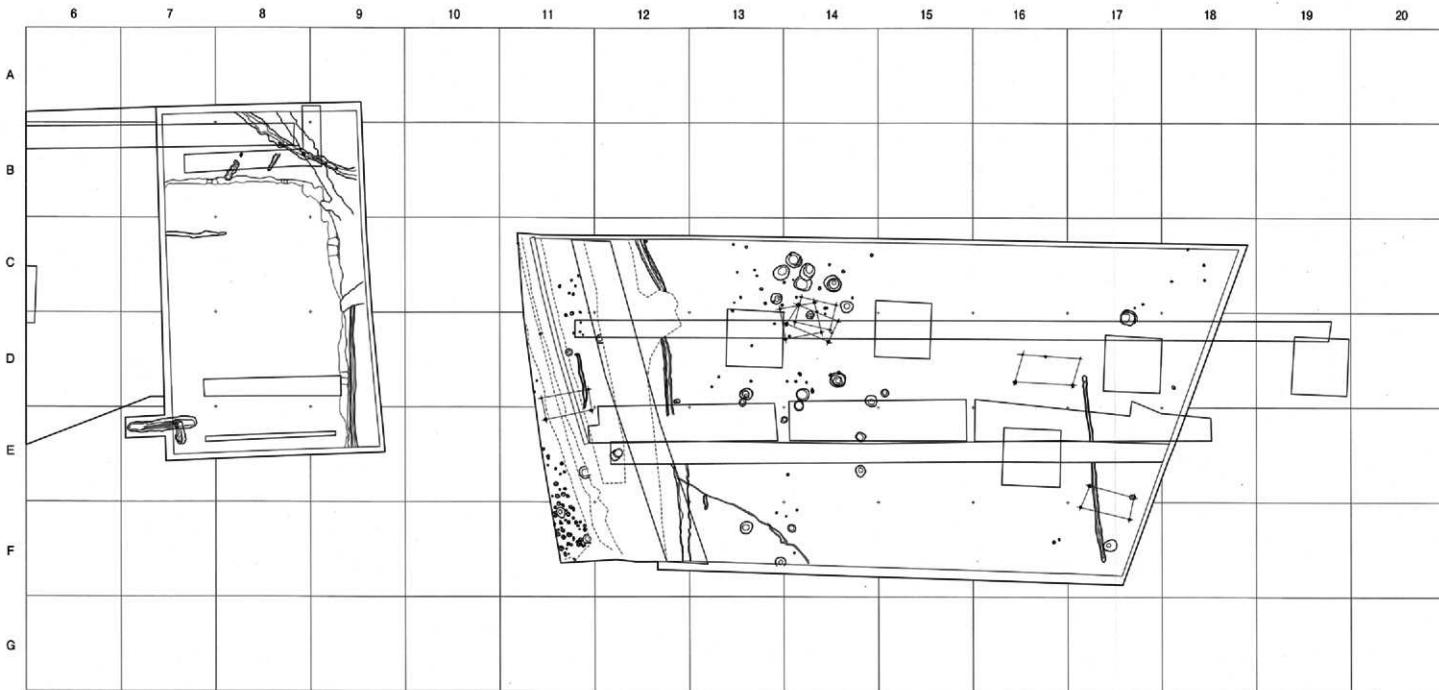


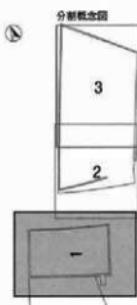
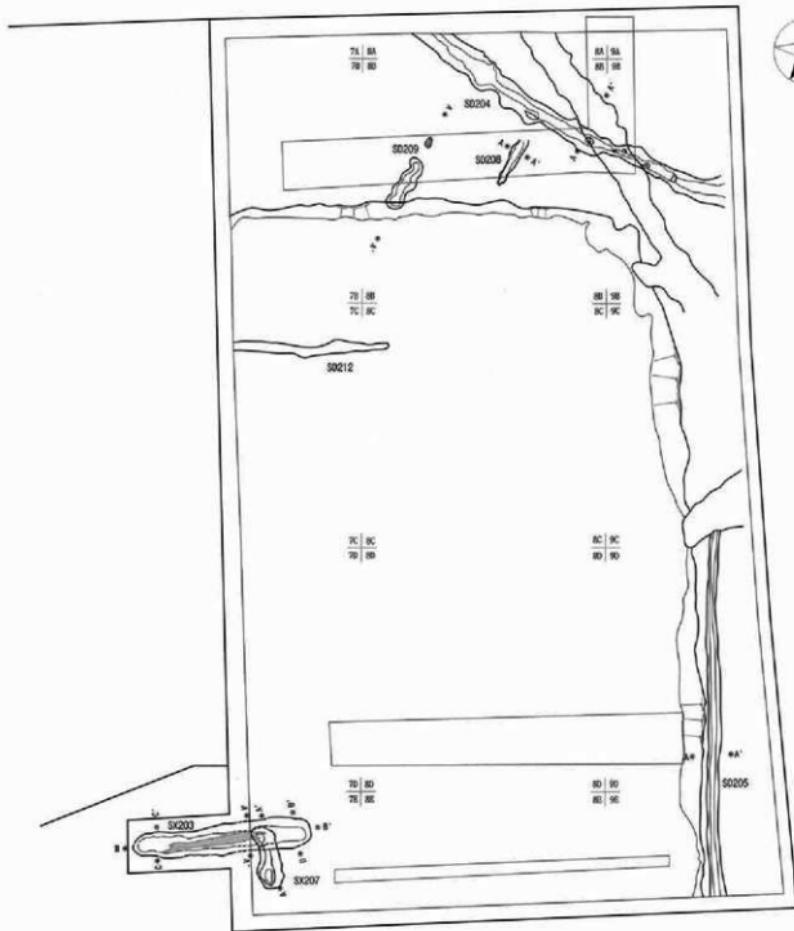
94~100 (1:4)

30cm

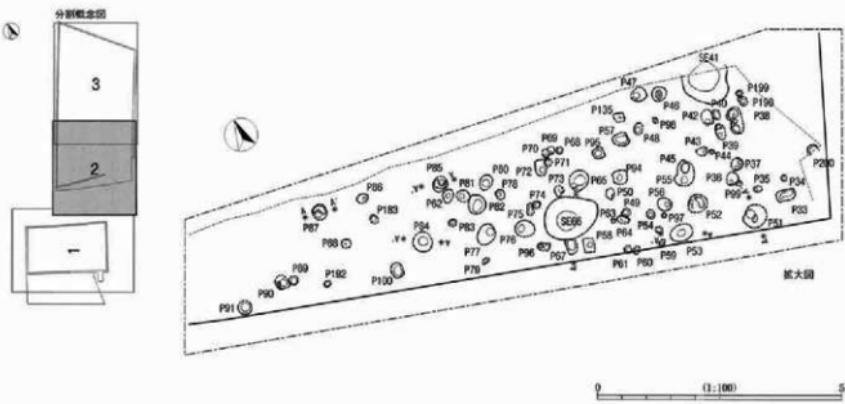
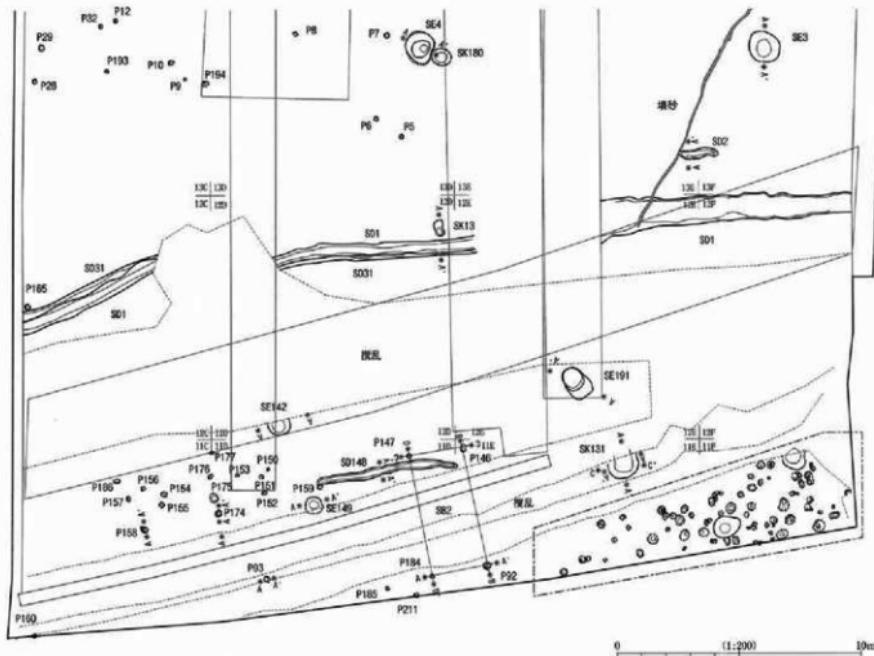
101~105 (1:3)

15cm



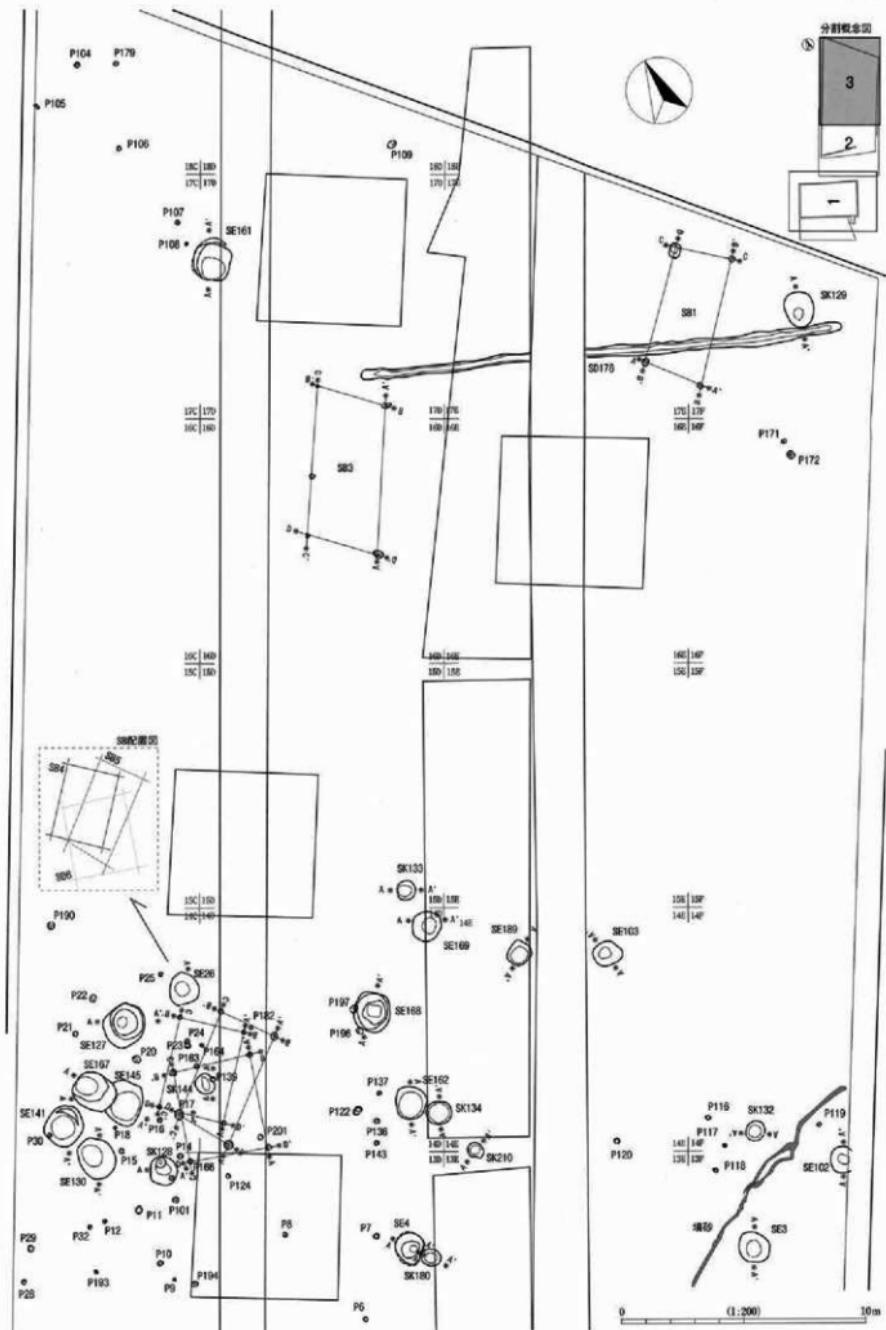


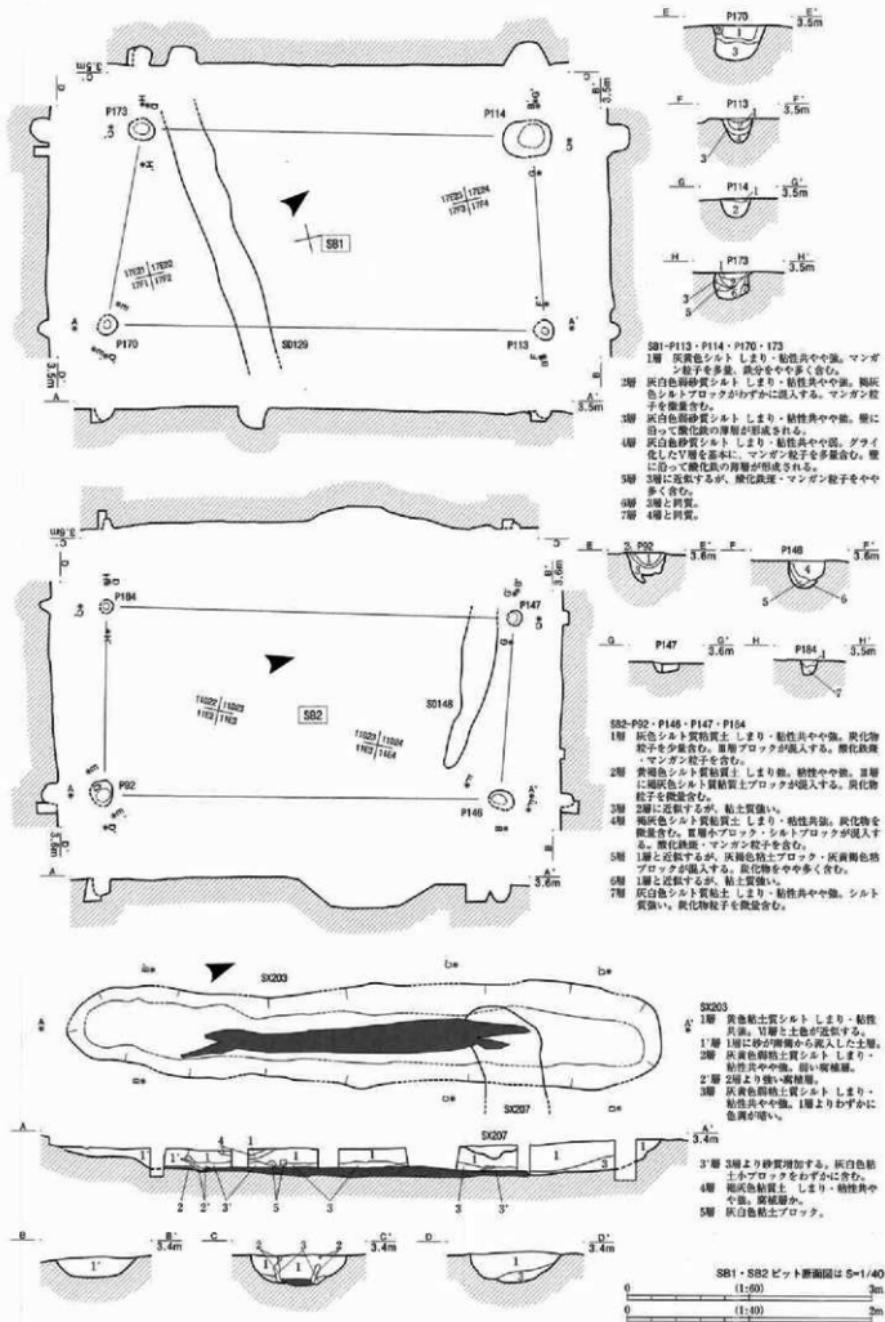
0 (1:200) 10m



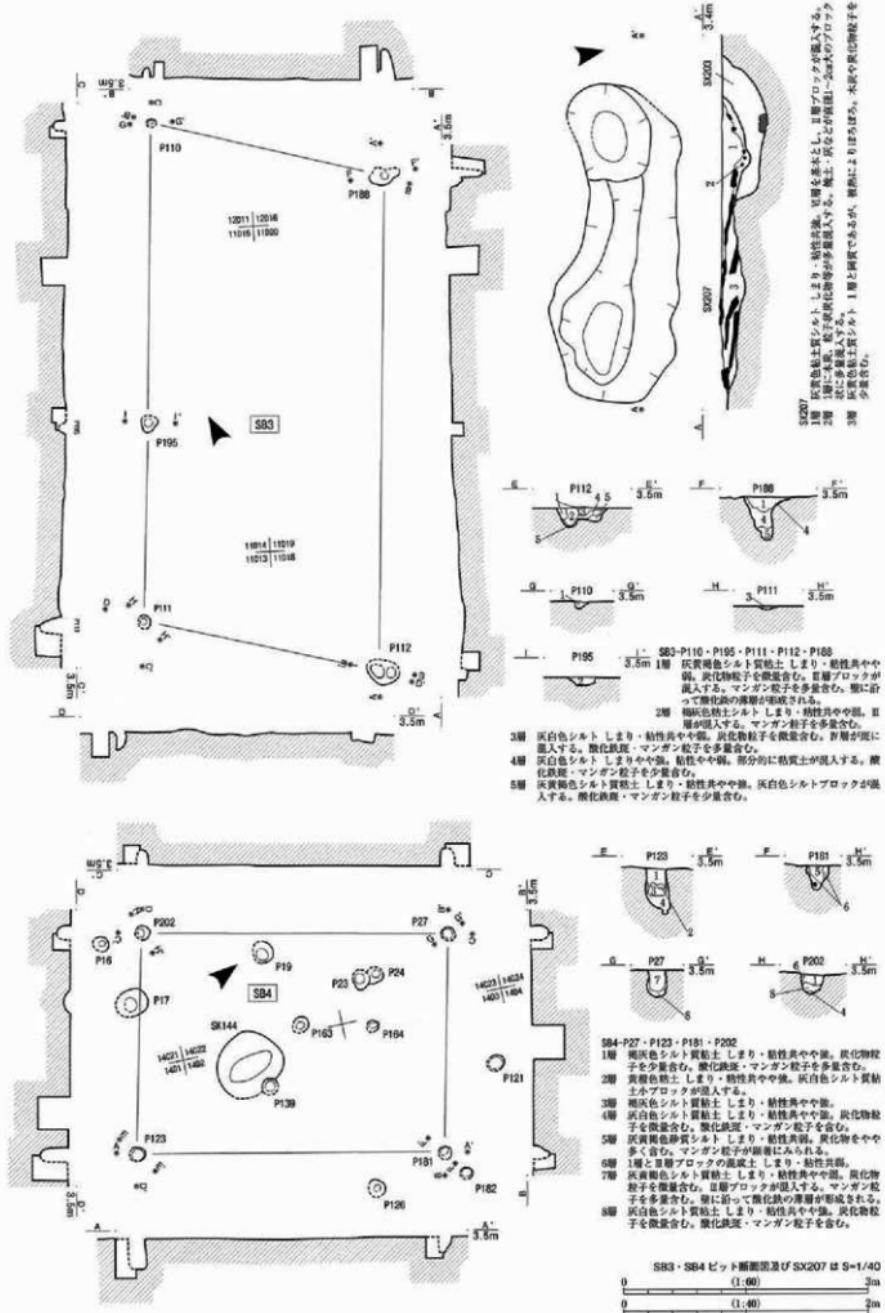
桜林遺跡造構分割図 (3)

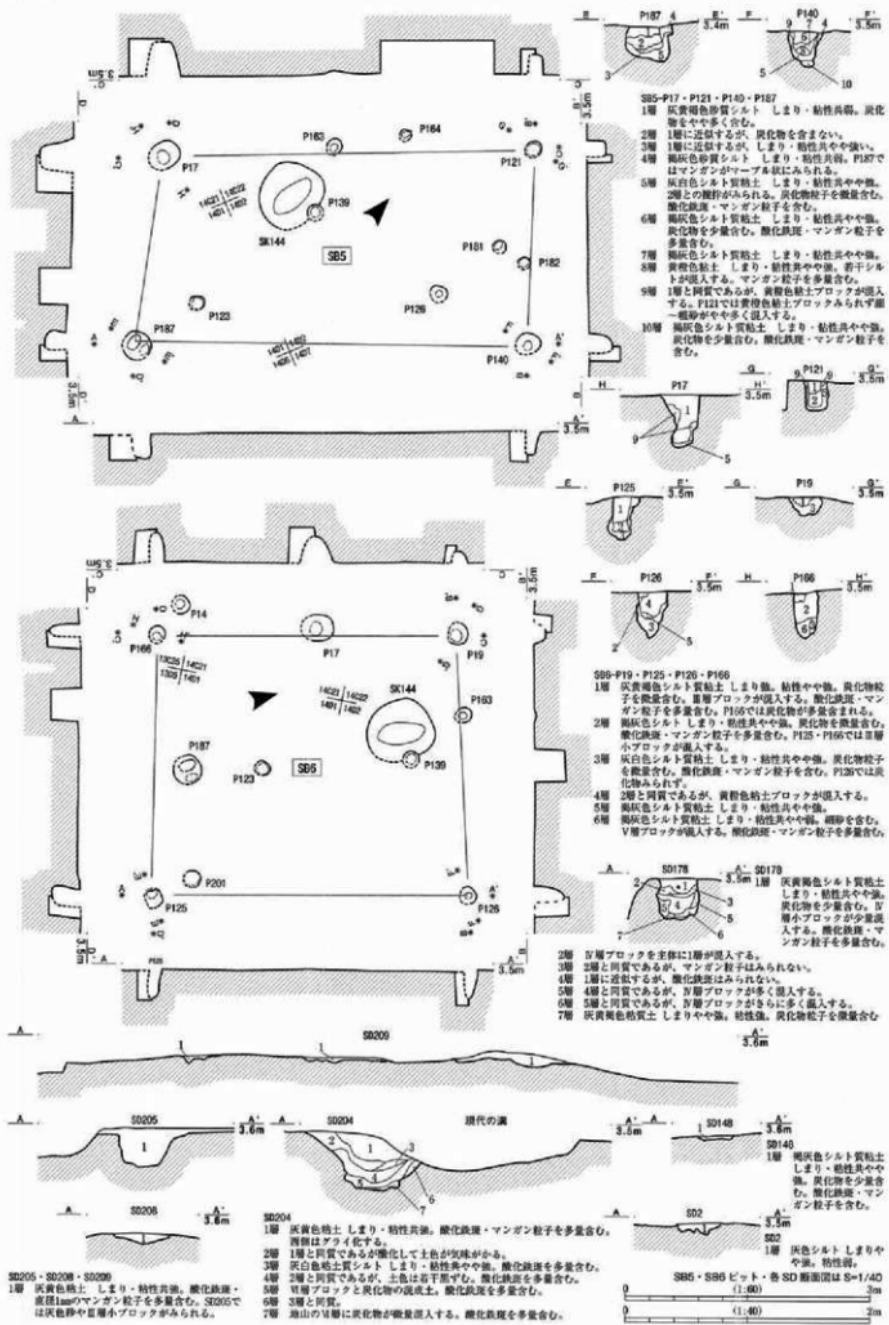
図版15



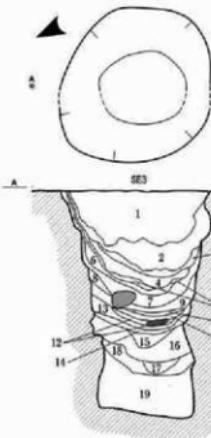


桜林遺跡遺構個別図 (2) SB3・SB4・SX207

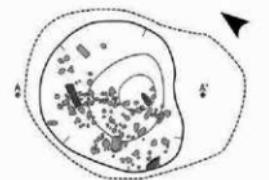




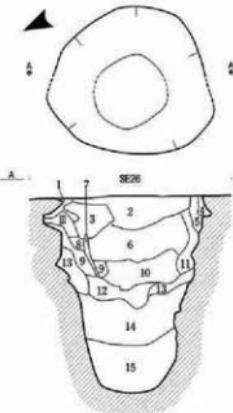
桜林道跡遺跡個別図 (4) SE3・SE4・SE26・SE41・SE66



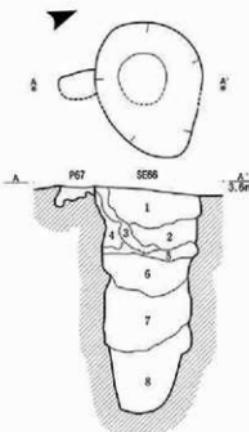
- SE3**
- 1層 黄褐色シルト 莖原底。粘性弱。更層ブロックが少量混入する。液化鉄道・マンガン粒子をやや多く含む。
 - 2層 1層と同質であるが、直層大ブロックが多量混入する。
 - 3層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似する土を基本に、液化鉄道・マンガン粒子を含む。
 - 4層 黄褐色シルト 莖原底。粘性弱。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 5層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。粘性弱。
 - 6層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物を混入する。
 - 7層 液化物を少量含む。粘性共やや強。他の層面によるものでくらべて砂粘土化した面で構成される。
 - 8層 黄褐色粘土質シルト 莖原底。粘性共やや強。液化物を多量含む。
 - 9層 落葉粘土 莖原底。1層と近似するが、液化物をやや多く含む。
 - 10層 8層と同質。
 - 11層 8層に近似するが、液化物をやや多く含む。
 - 12層 液化物を少量含む。粘性共やや強。直径3cmの大ブロックと砂粒子を含む。
 - 13層 液化物を少量含む。粘性共やや強。直径3cmの大ブロックと砂粒子を含む。
 - 14層 黒褐色粘土質シルト 莖原底。液化鉄道・マンガン粒子を含む。
 - 15層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。粘性共やや強。液化物を少量含む。
 - 16層 13層と同質。
 - 17層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。下部は液化した面。
 - 18層 液化物を少量含む。粘性共やや強。
 - 19層 液化物を少量含む。粘性共やや強。外縁部に液化物が形成される。下部は液化した面。



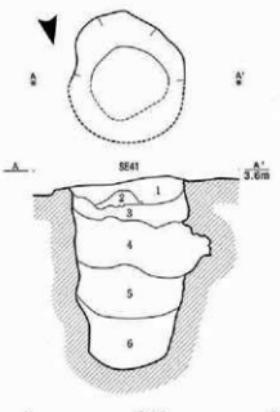
- SE4**
- 1層 黄褐色シルト 莖原底。粘性共やや強。液化物を少量含む。
 - 2層 黄褐色シルト 莖原底。直層大ブロックが少量混入する。直層ブロックは西端で多くみられ、直層した土壌の可能性がある。
 - 3層 黄褐色シルト 莖原底。粘性共やや強。液化物をやや多く含む。
 - 4層 3層に近似し、外縁部に液化鉄道・マンガン粒子を含む。
 - 5層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。粘性共やや強。液化物を少量含む。
 - 6層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。粘性共やや強。
 - 7層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。
 - 8層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。
 - 9層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。
 - 10層 8層と同質。
 - 11層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。
 - 12層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。
 - 13層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。
 - 14層 13層と同質。
 - 15層 13層と同質。
 - 16層 13層と同質。
 - 17層 黑褐色粘土質シルト 莖原底。1層と近似するが、外縁部に液化物が形成される。

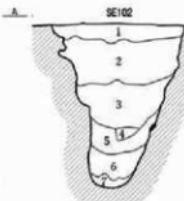


- SE26**
- 1層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 2層 1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 3層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 4層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 5層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 6層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 7層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 8層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 9層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 10層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 11層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 12層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 13層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 14層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。
 - 15層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。



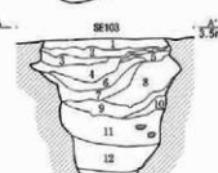
- SE66**
- 1層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。
 - 2層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。
 - 3層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。
 - 4層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。
 - 5層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。
 - 6層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。
 - 7層 黄褐色シルト 莖原底。1層と近似するが、直層大ブロックが混入する。液化鉄道・マンガン粒子を少々含む。液化物を少量含む。





SE103

- 1層 黄褐色砂質シルト しまり強。粘性やや弱。炭化物粒子をわずかに含む。
- 2層 厚さ約2cmでなるが、底が多量混入する。
- 3層 黄褐色シルト
- 4層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層ブロックが少量混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
- 5層 黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。Ⅱ層が多量に混入する。
- 6層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや弱。Ⅲ・Ⅳ層粒子をわずかに含む。マンガン粒子をやや多く含む。
- 7層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層ブロックが多量混入する。
- 8層 黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。Ⅲ・Ⅳ層粒子をやや多く含む。
- 9層 黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。Ⅲ層ブロックが多量混入する。マンガン粒子をやや多く含む。
- 10層 黄褐色シルト しまり弱。粘性やや強。炭化物粒子を底に多く混入する。
- 11層 黄褐色砂質シルト しまりやや弱。粘性やや強。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 12層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや強。薄層状に炭化物の混入がみられる。粘性が多量土。
- 13層 黄褐色砂質シルト しまり弱。粘性やや強。下部に炭化物塊が形成される。

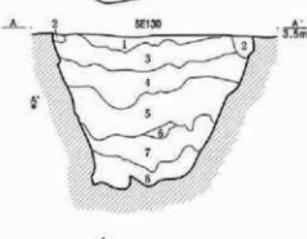
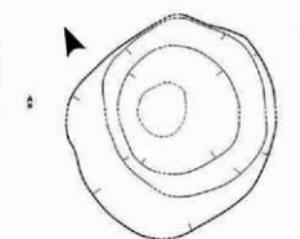


SE102

- 1層 黄褐色シルト しまり強。粘性弱。Ⅲ層ブロックが底に入する。
- 2層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性弱。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 3層 黄褐色砂質シルト しまり・マンガン粒子などやや多く含む。
- 4層 黄褐色粘土 しまり・粘性共やや強。有機質を含む。
- 5層 黄褐色粘土 しまり弱。粘性強。泥炭が発達したものか。Ⅲ層ブロックで埋められた上層。
- 6層 黄褐色シルト粘土 しまり・粘性共やや強。Ⅴ層小ブロックが少量混入する。
- 7層 2層と同質。

SE130

- 1層 黄褐色砂質シルト しまり強。粘性やや弱。炭化物粒子・灰・炭化物下部に多量混入。Ⅲ層ブロックが底に入する。マンガン粒子をやや多く含む。
- 2層 厚層した土質土。
- 3層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭色をやや多く、炭化物粒子を若干含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。マンガン粒子を多量含む。
- 4層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を若干含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 5層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭色シルトと灰色シルトの複合土。炭化物粒子をわずかに含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 6層 黄褐色粘土 しまり弱。粘性強。Ⅲ層ブロックがわずかに混入する。
- 7層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性強。Ⅲ層に底土が少しがざぎざに入する。粘性が多量土。
- 8層 黄褐色粘土 しまりやや強。粘性強。Ⅲ層の炭化物粒子を含む。

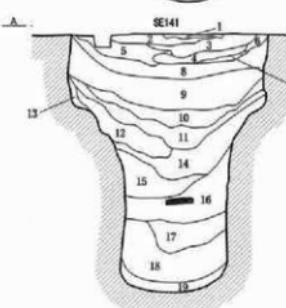
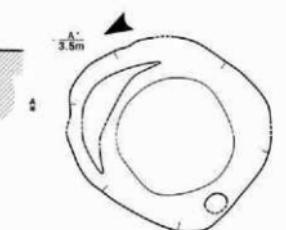


SE141

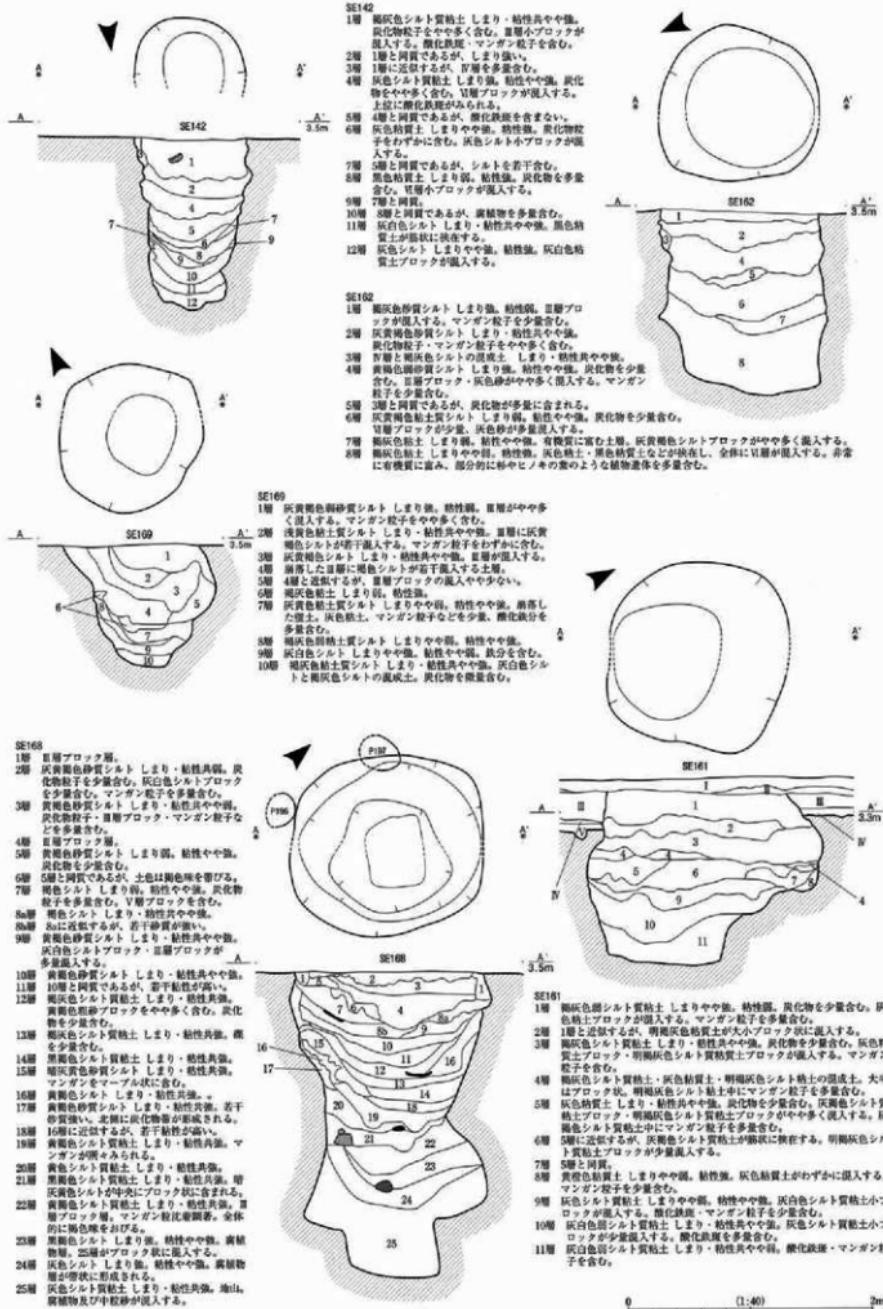
- 1層 Ⅲ層ブロック層 しまり弱。粘性やや強。
- 2層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが多量混入する。マンガン粒子を多量含む。
- 3層 黄褐色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。炭化物粒子を少量含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 4層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。
- 5層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 6層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。Ⅲ層の炭化物粒子が混入する。
- 7層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 8層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 9層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。Ⅲ層の炭化物粒子が混入する。
- 10層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物粒子を含む。Ⅲ層の炭化物粒子が混入する。
- 11層 黄褐色砂質シルト しまり強。粘性やや強。炭化物粒子を少量含む。10層の炭化物粒子が混入される。
- 12層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。Ⅶ層に近似した土質がなだらか込む。11層の大ブロックが少量混入する。
- 13層 黄褐色砂質シルト しまり強。粘性やや弱。Ⅶ層に近似するが、土質が若干、褐色色をおびる。Ⅸ層に近似するが、土質が若干、褐色色をおびる。
- 14層 黄褐色シルト しまり強。粘性やや強。浅黄色シルトを斑状に混入する。炭化物粒子を少量含む。
- 15層 黄褐色シルト 粘土質土。しまり強。粘性やや強。炭土と同様では張りがちくい。
- 16層 黄褐色シルト 粘土質土。しまり強。粘性やや強。Ⅺ層に近似するが、粘性が少し強。
- 17層 黄褐色シルト しまり・粘性共強。黒褐色シルトブロックが少量混入する。
- 18層 黄褐色粘土 しまり・粘性共強。黒褐色シルトブロックが量多く入る。
- 19層 黄褐色粘土 しまり・粘性共強。ほぼ均質な土層。既述の灰岩底層に入られる土層と逆位する。

SE127

- 1層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性強。マンガン粒子をやや多く含む。
- 2層 黄褐色シルト しまりやや強。粘性強。炭化物をわずか含む。Ⅲ層ブロックが少量混入する。マンガ粒子をやや多く含む。
- 3層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや強。2層に近似するが、Ⅲ層ブロックが多量混入する。
- 4層 1層に近似するが、2層が僅量混入する。
- 5層 2層に近似するが、炭化物がやや多く含まれる。土色は黄土色やや強。
- 6層 しまりやや強。粘性強。2層に近似するが、炭化物の混入がある。Ⅲ層ブロックが少量混入する。
- 7層 黄褐色シルト しまり・粘性共やや強。2層に近似するが、炭化物を含む。
- 8層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。2層に近似するが、炭化物がやや多く含まれる。
- 9層 黄褐色砂質シルト しまり・粘性共強。
- 10層 黄褐色砂質シルト しまりやや強。炭化物を含む。

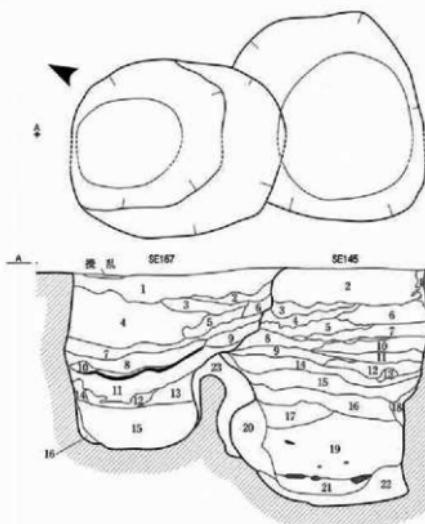


桜林遺跡遺構個別図 (6) SE142・SE161・SE162・SE168・SE169



0 [1:40] 2m

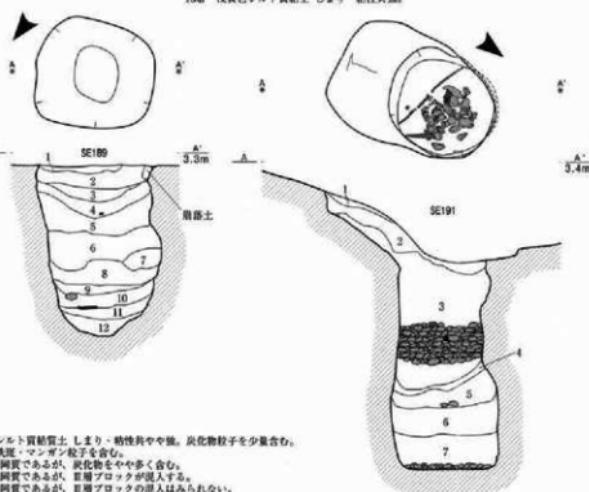
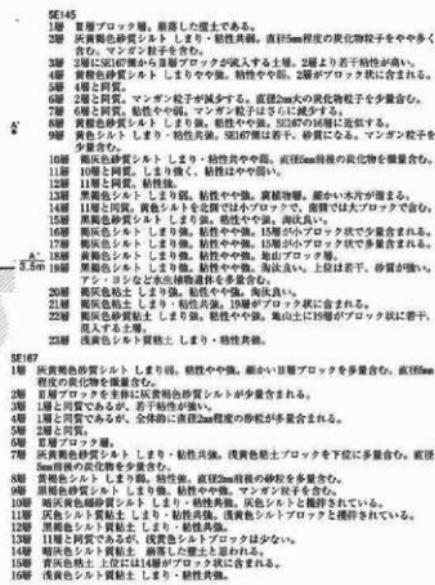
桜林遺跡遺構個別図 (7) SE145・SE149・SE167・SE189・SE191



- | | |
|-------|---|
| SE189 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 2周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 3周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 4周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 5周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 6周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 7周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 8周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。ミクロラックが少額入る。 風化度低。 |
| 9周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。熱風乾燥。 |
| 10周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。熱風乾燥。 |
| 11周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。熱風乾燥。 |
| 12周 | 灰褐色シトウ質粘土。しまり、粘性共やや高。 炭化物を多く含む。熱風乾燥が全くされぬ。 |



- | SE149 | 灰白色シルト質粘土土 しまり・粘性糞やや強。炭化物粒子を少量含む。混成糞底。 |
|-------|---|
| 1層 | 灰白色シルト質粘土土 しまり・粘性糞やや強。炭化物粒子を少量含む。 |
| 2層 | 1層と同質であるが、糞物塊をやや多く含む。 |
| 3層 | 1層と同質であるが、糞ブロックが混入する。 |
| 4層 | 3層と同質であるが、糞ブロックの混入はみられない。 |
| 5層 | 3層と同質。糞塊がレンズ状に分布する。糞塊（硬便か）が粘土。 |
| 6層 | 6層と同質であるが、糞塊はわらかで柔軟。 |
| 7層 | 糞塊は黒色ト質粘土土 しまり・粘性糞やや強。糞化物粒子を少量含む。糞ブロックが少く混入する。 |
| 8層 | 7層と同化物の構成もしまり・粘性糞やや強。糞化物粒子を少しがある。 |
| 9層 | 7層と同化物の構成もしまり・粘性糞やや強。糞白色粘土土ブロックが混入する。 |
| 10層 | 9層と同質。糞白色粘土土 しまり・粘性糞やや強。糞化物粒子を少しがある。糞化物ブロックが少く混入する。 |
| 11層 | 10層と同質であるが、糞化物粒子を多め含む。糞小屋ワゴンで運搬する人。 |
| 12層 | 糞褐色シルト質粘土土 しまり・粘性糞やや強。外側に酸化鉄筋が形成される。 |
| 13層 | 9層と同質。 |
| 14層 | 灰褐色シルト質粘土土 しまりやや強。粘性糞。褐灰色シルト質粘土土ブロックが少く混入する。 |
| 15層 | 14層と同質であるが、糞物ブロックは混入しない。 |
| 16層 | 15層と同質。 |



- 1番 地面色砂質シルト しまりやや強。粘性やや弱。炭化物・鉄・錆を少し含む。

2番 黒褐色砂質シルト しまり強。粘性やや弱。炭化物・鉄・錆を少し含む。

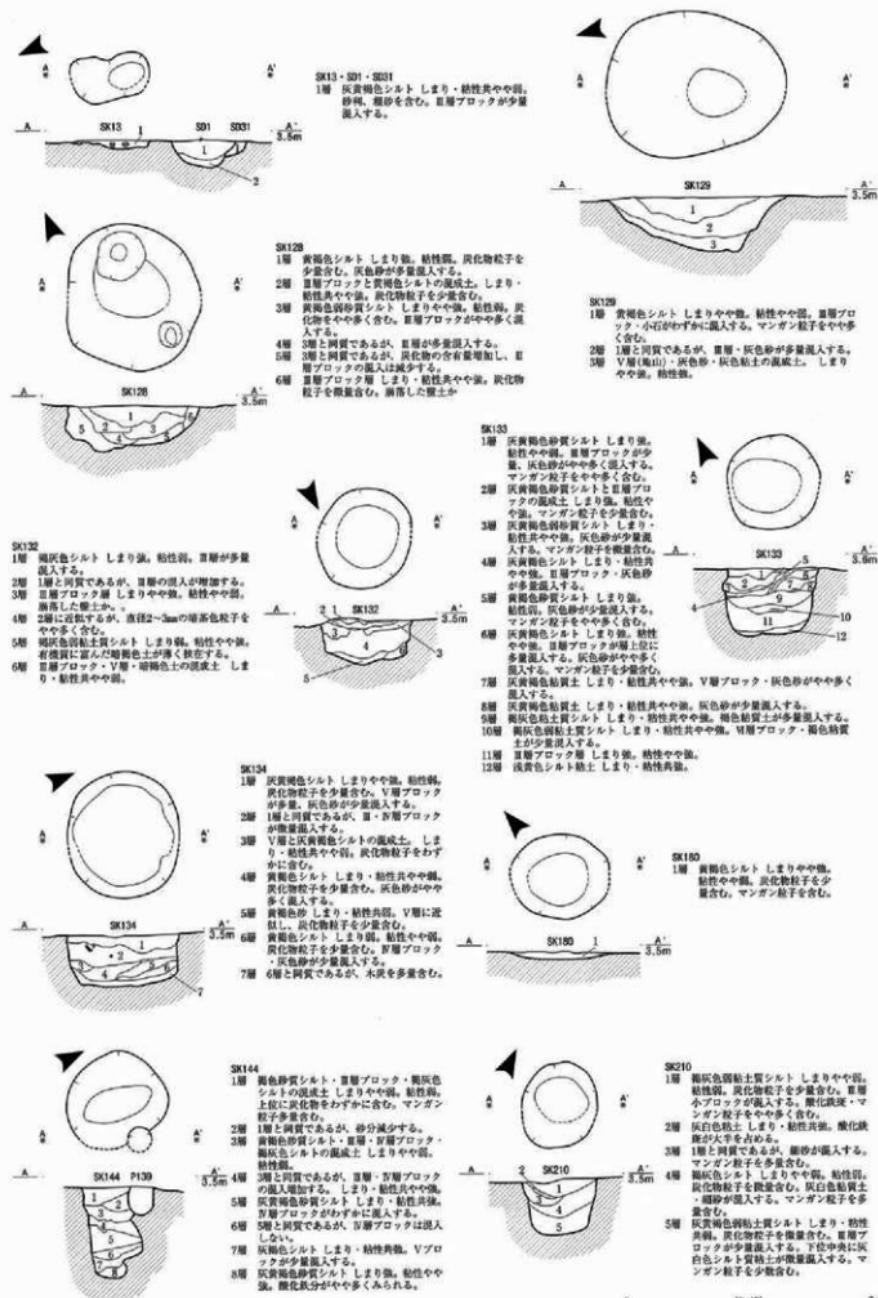
3番 黑褐色砂質シルト しまり・粘性共やや強。炭化物鉄・錆を少し含む。

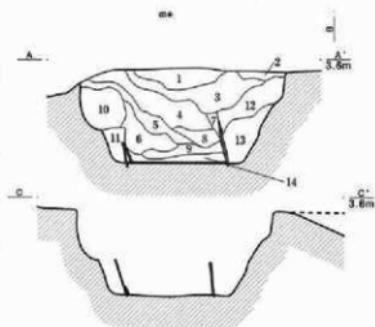
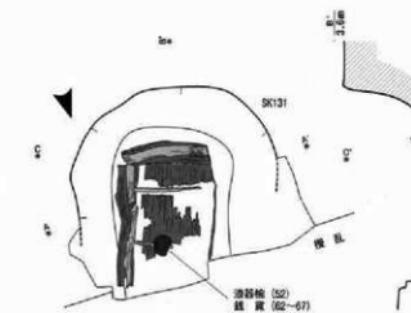
4番 黒褐色砂質シルト しまり弱。粘性やや強。炭化物を微含む。

5番 黑褐色砂質シルト しまり弱。粘性やや弱。細胞を多く含み、4種小ブロックが見隠す。元に礫化物風土に形成される。

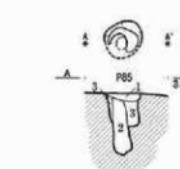
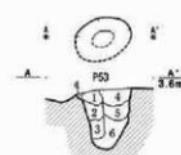
6番 黑褐色砂質シルト しまり強。粘性共やや強。砂質分とシルトが混在する。

7番 黑褐色砂質シルト しまり強。粘性共やや強。砂質分。層内に黒褐色風化泥を多く含む。





SK131
1層 桜林灰色砂質シルト しまり・粘性共やや弱。
2層 厚さ約2cmであるが、Ⅲ層ブロックが少含まれ。
3層 桜林灰色砂質シルト しまりやや強。粘性共やや強。
4層 桜林灰色シルト しまりやや強。Ⅲ層ブロックが少含まれ。
5層 桜林灰色砂質土質シルト しまりやや強。粘性共やや強。
6層 4層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混入ない。
7層 桜林灰色砂質土質シルト しまりやや強。Ⅲ層ブロックが少含まれ。
8層 桜林灰色砂質土質シルト しまりやや強。粘性共やや強。
9層 6層に近似するが、Ⅲ層ブロックの混入は少ず。
10層 桜林灰色砂質土質シルト しまりやや強。粘性共やや強。
11層 桜林灰色砂質土質シルト しまりやや強。粘性共やや強。
12層 桜林灰色砂質土質シルト しまりやや強。粘性共やや強。
13層 10層と同質。13層の後に桜林灰色土質が混入するため分層。
14層 10層に近似する。12層との間に桜林灰色土質が混入するため分層。



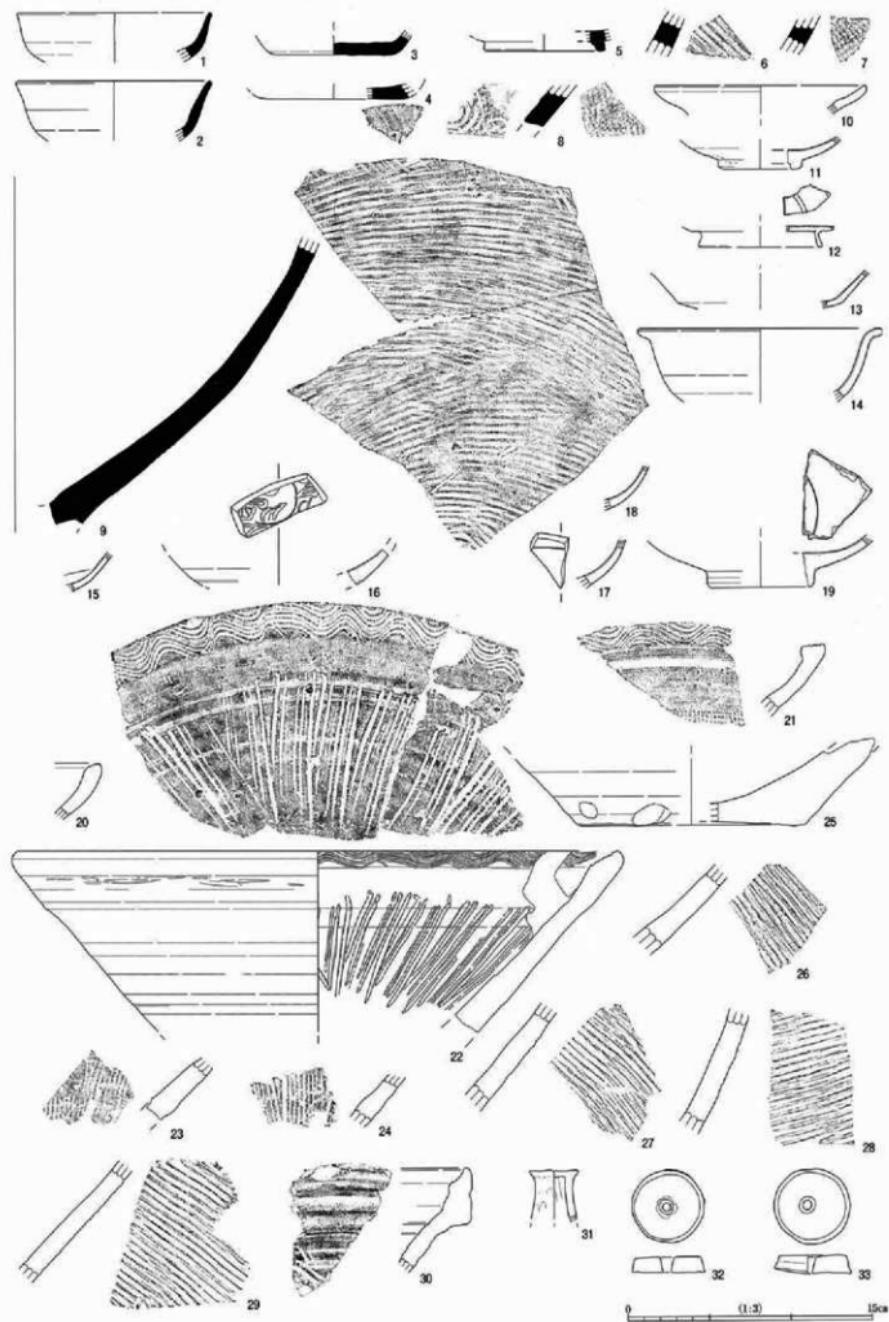
P53
1層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘性共やや強。軟化鉄錆・マンガ粒子を少含む。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが少く入る。
3層 1層に近似するが、粘性強。軟化鉄錆
粒子を多量含む。
4層 1層と同質である。
5層 1層と同質であるが、軟化鉄錆・マンガ
ン粒子を多量含む。
6層 1層と同質であるが、粘性強。

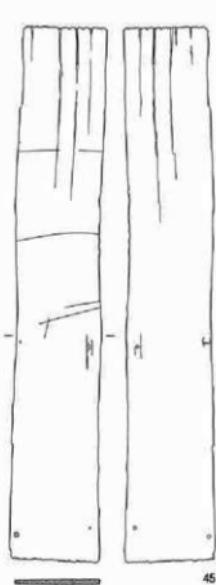
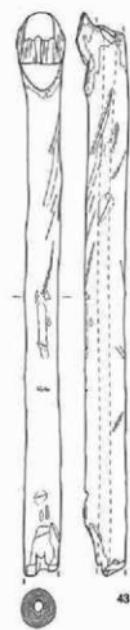
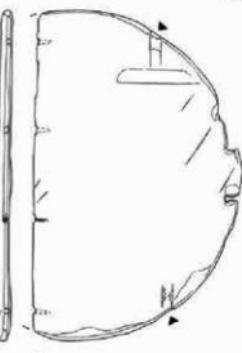
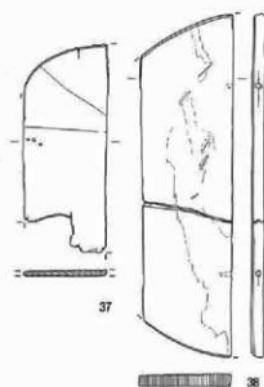
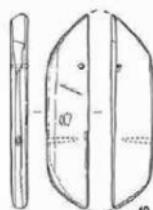
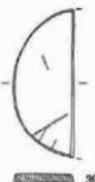
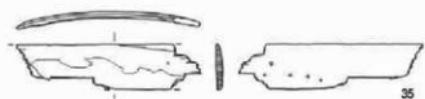
P84
1層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘
性共やや強。軟化鉄錆・マンガ粒子を少含む。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが少
量含む。
3層 1層と同質であるが、軟化鉄錆を多量含む。
4層 1層と同質である。
5層 1層に近似するが、Ⅲ層ブロックの混
入は少く。
6層 6層と同質であるが、粘性は強い。

P85
1層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘
性共やや強。軟化鉄錆・マンガ粒子を少含む。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混
入は少く。
3層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混
入はみられない。

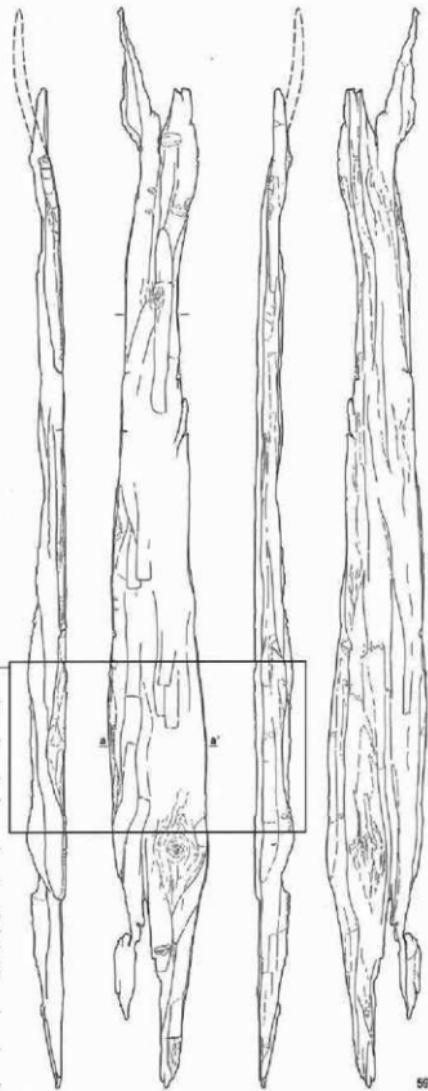
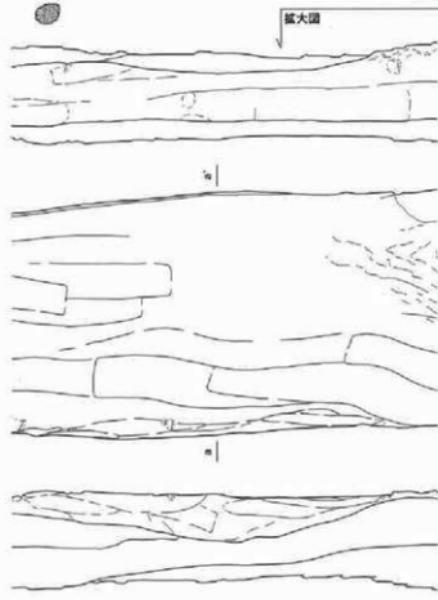
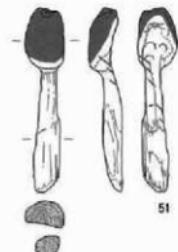
P158
1層 桜林シルト質粘土質 しまり・粘性共
やや強。軟化鉄錆・マンガ粒子を少含む。
2層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが多
量混入する。
3層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘性共
やや強。1層より土色暗い。
4層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘
性共やや強。軟化鉄錆を多量含む。Ⅲ層
ブロックが多量混入する。壁に沿
って軟化鉄錆の薄層が形成される。

P174
1層 桜林シルト質粘土質 しまり・粘性共やや強。
2層 軟化鉄錆・マンガ粒子などをやや多く含む。
3層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックが少含む。
4層 1層と同質であるが、Ⅲ層ブロックの混入は減
少し。わずかである。
5層 1層と同質である。
6層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘性共やや強。
7層 桜林白色シルト質粘土質 しまり・粘性共
やや強。

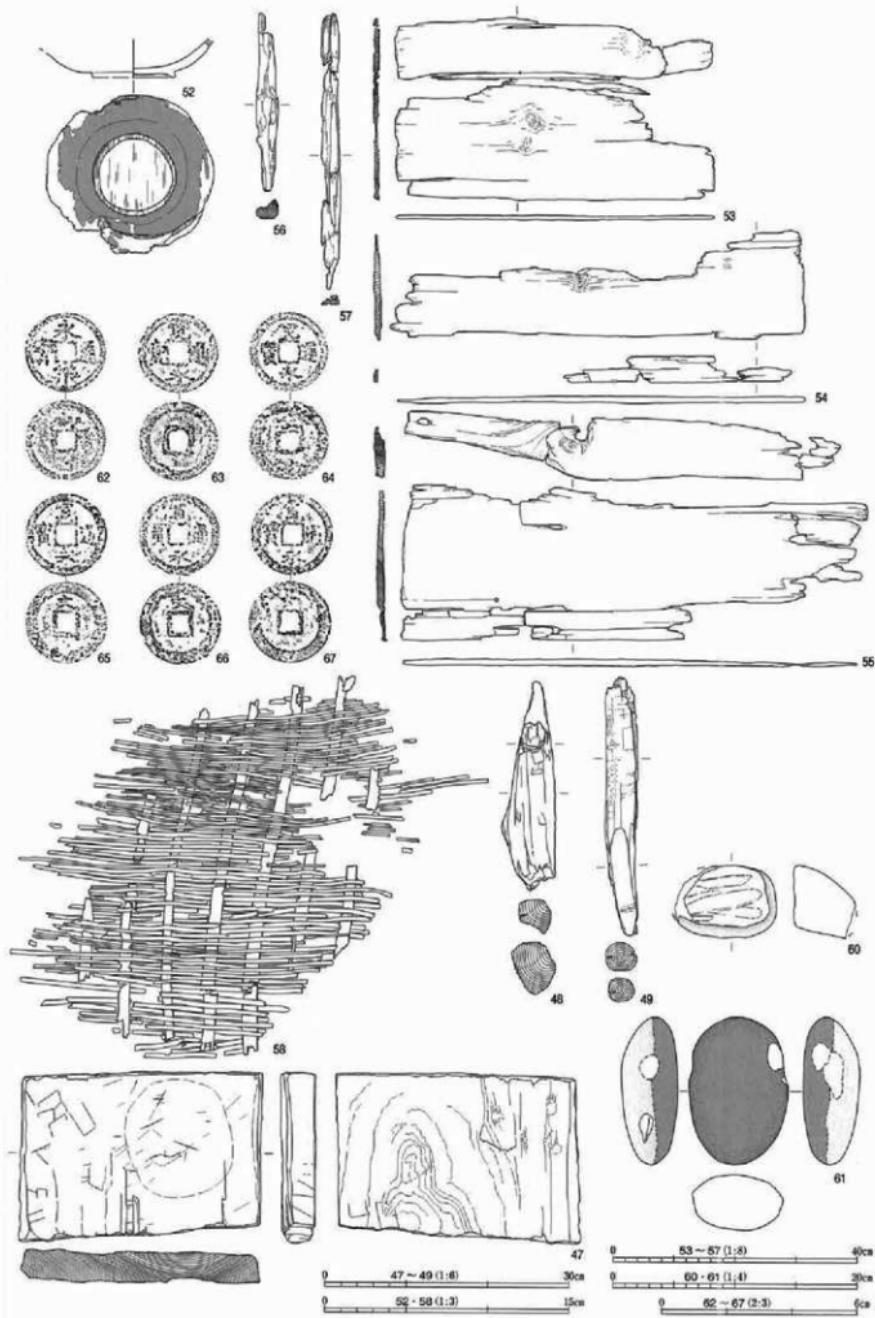




0 34~45 (1:3) 15cm 0 46 (1:6) 30cm



0 50 (1:6) 30cm
0 51 (1:3) 15cm
0 59 (1:20) 1m
0 59 延長・拡大図 (1:6) 40cm





自然道路・遺物出土状況（西から）



遺跡近景（南から）



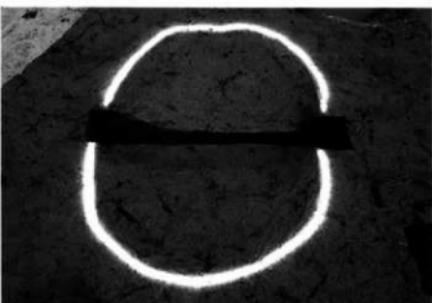
基本層序 (T2・西から)



杭1 検出状況 (東から)



SK1 断面 (南から)



SK1 完掘 (南から)



SK2 断面 (西から)



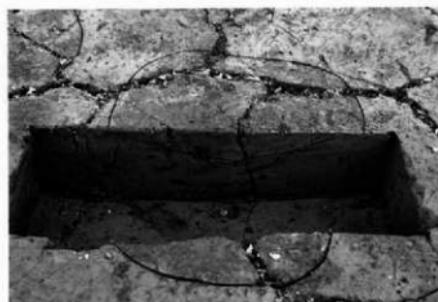
SK2 完掘 (西から)



SK3 断面 (南から)



SK3 完掘 (南から)



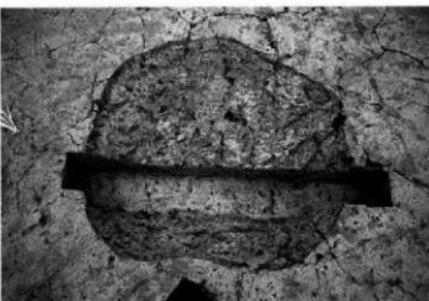
SK4 剖面 (東から)



SK4 実掘 (東から)



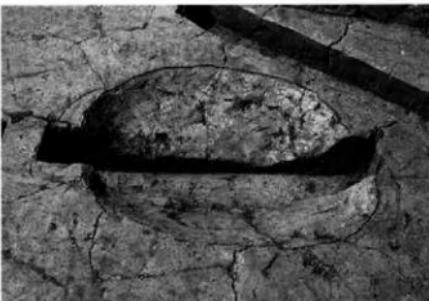
SK9 剖面 (南東から)



SK9 実掘 (南東から)



SK10 剖面 (北から)



SK10 実掘 (北から)



SK16 剖面 (南から)



SK16 実掘 (南から)



SC101 断面 (南から)



SC101 完成 (南から)



流路1と北岸遺物検出状況 (東から)



流路1断面 (B-B'・東から)



流路2断面 (A-A'・東から)



流路1・2断面 (B-B'・東から)



流路2断面 (C-C'・西から)



流路2断面 (C-C'・西から)



流路1 完掘（西から）



流路2 完掘（西から）



流路 2 遺物出土状況（東から）



流路 2 遺物出土状況（東から）



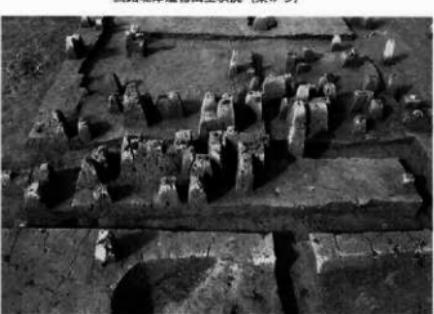
流路 2 遺物（15）出土状況（東から）



流路北岸 遺物出土状況（東から）



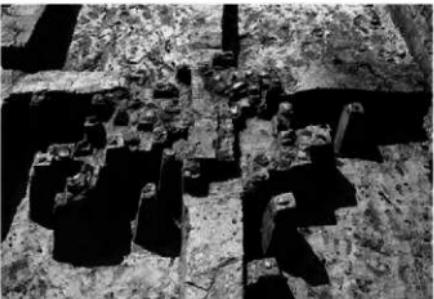
流路北岸（11C + 12D）遺物出土状況（東から）



流路北岸（11C）遺物出土状況（東から）

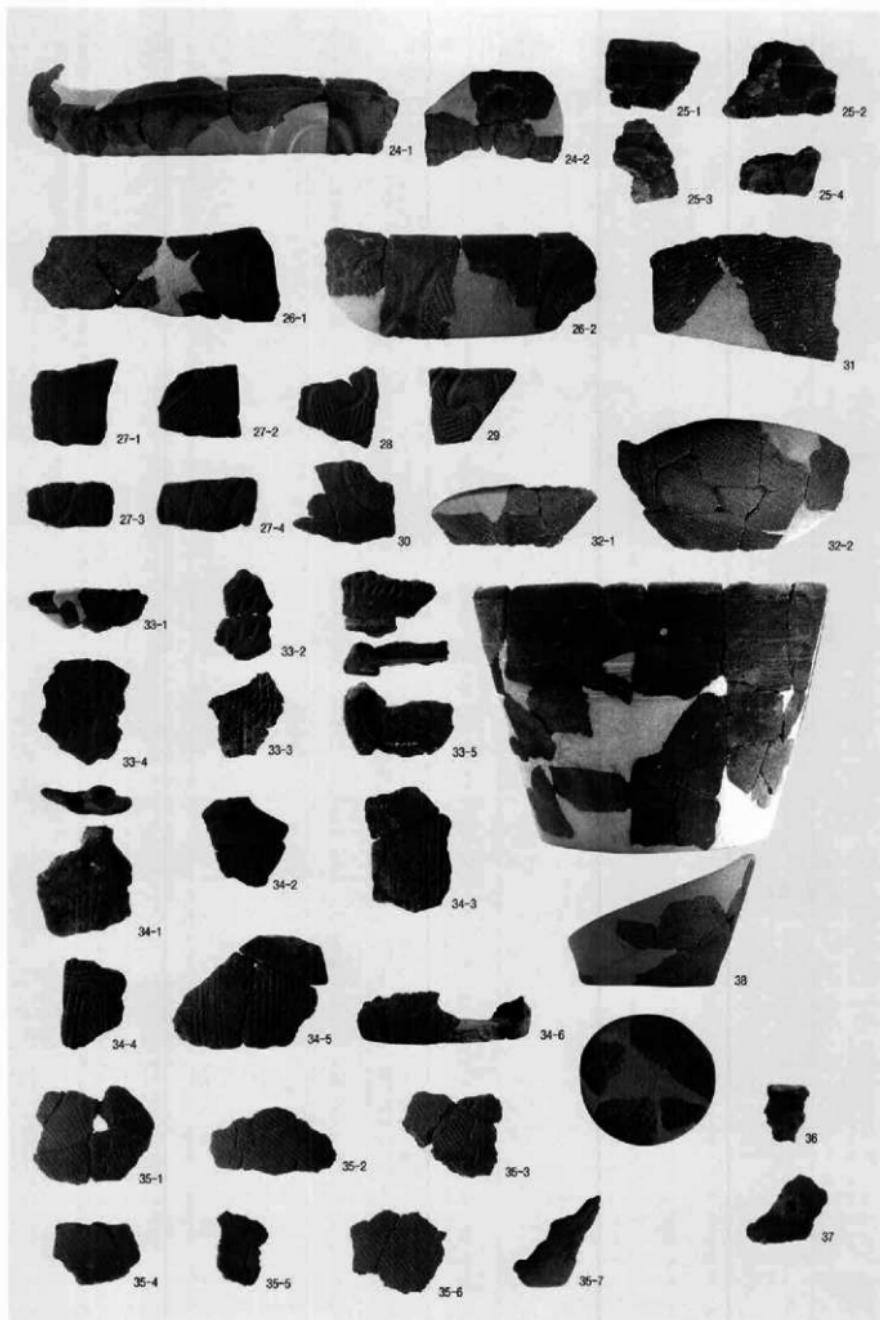


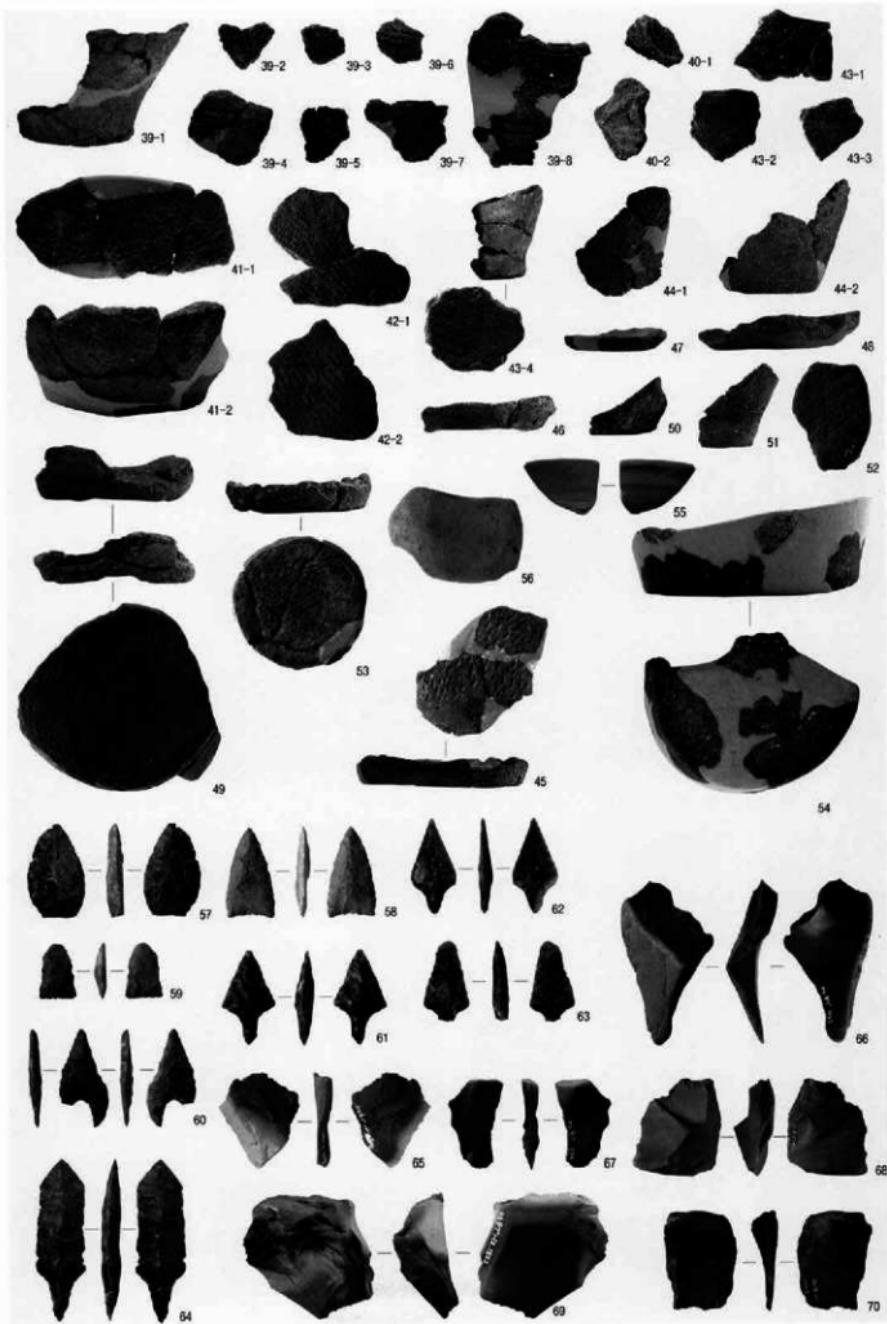
流路北岸（11B）遺物出土状況（西から）

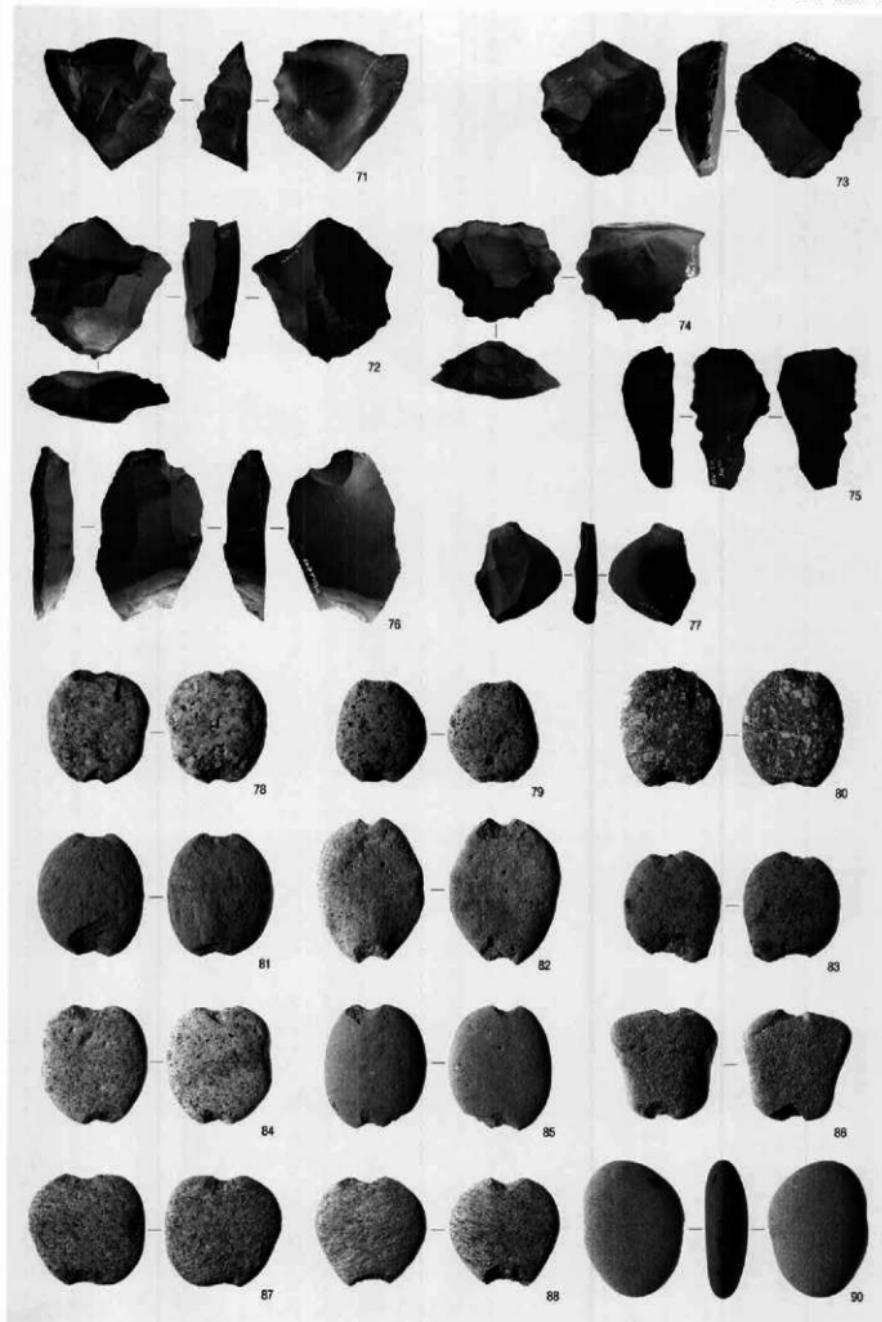


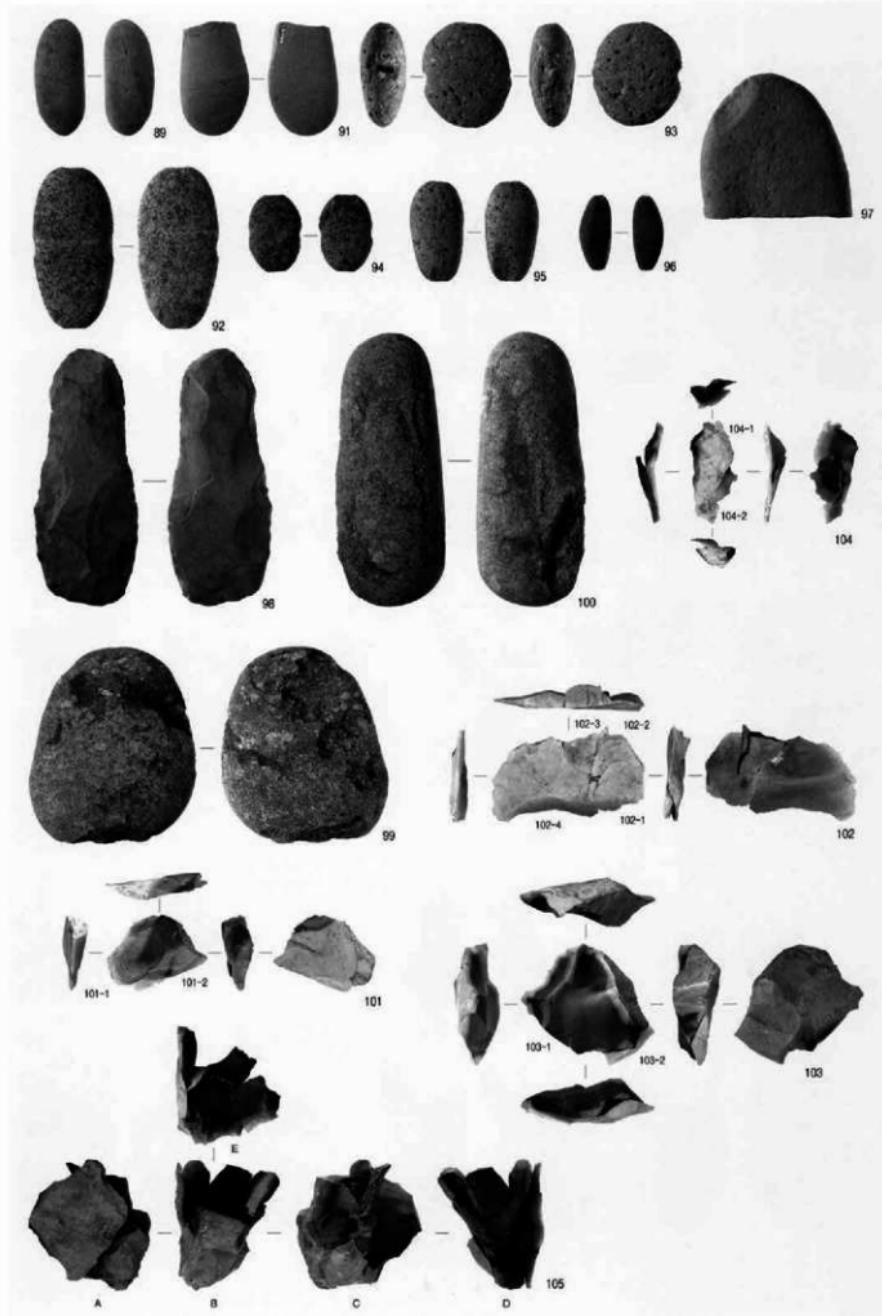
流路南岸（8B）遺物出土状況（東から）

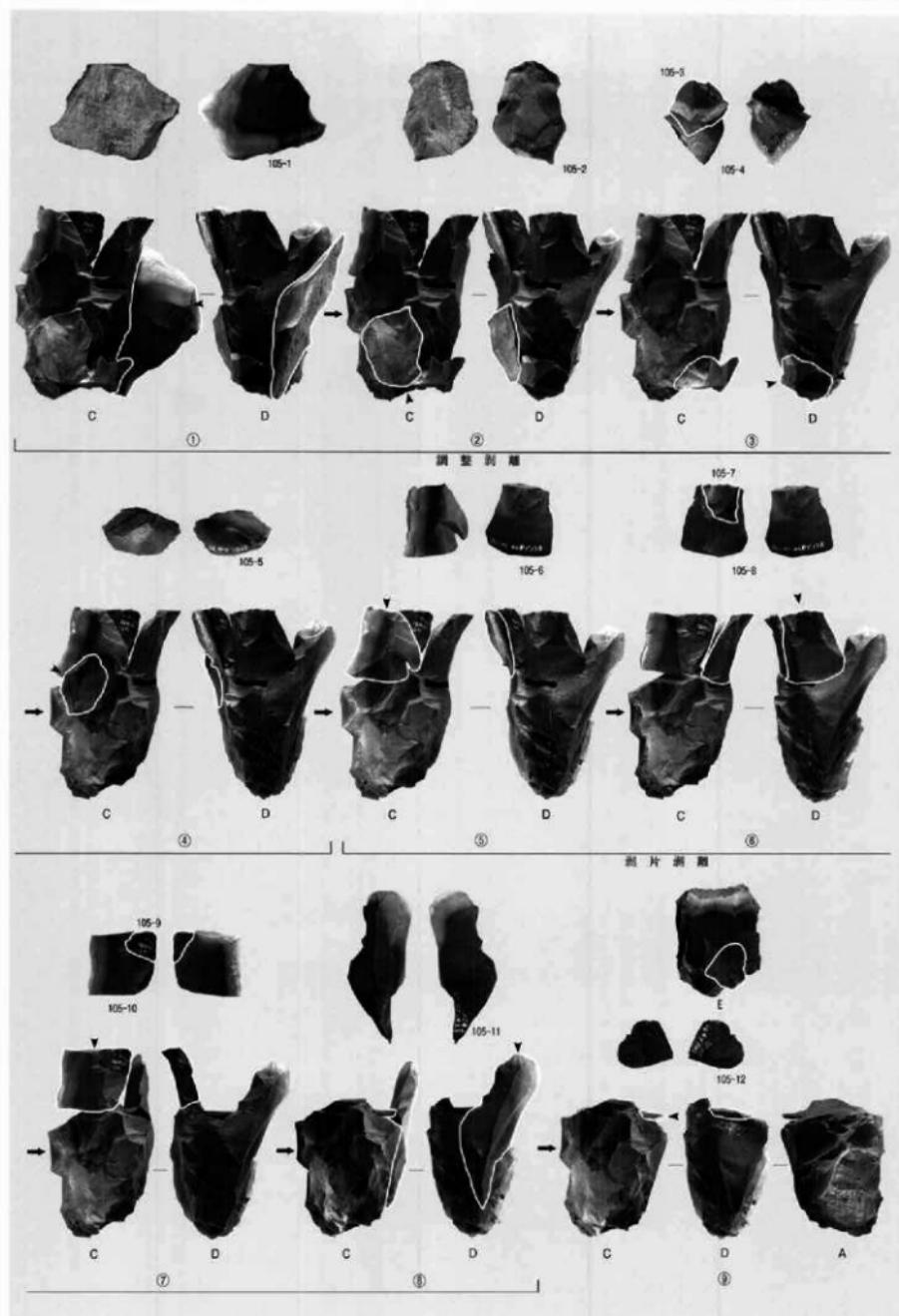










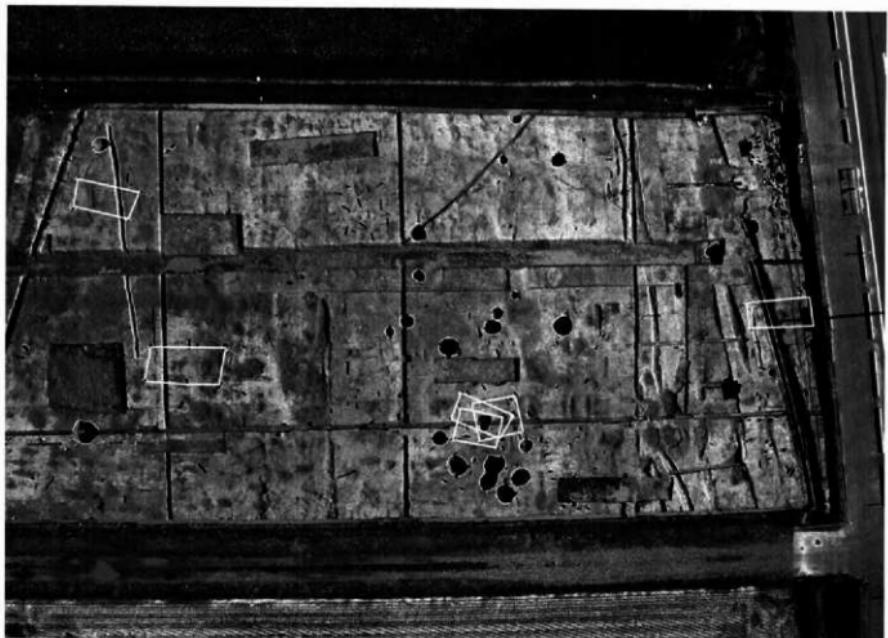




道路近景（南東から）



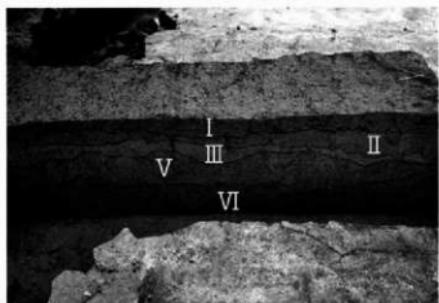
道路近景（北から）



北区遺構分布状況（上空から）



桜林遺跡と金屋集落（西から）



基本層序 (14C10・南から)



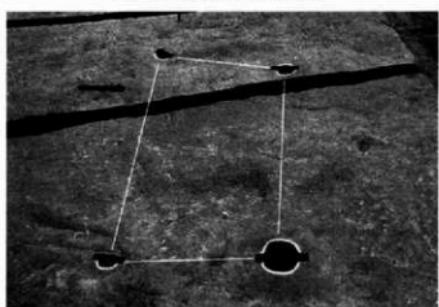
北区南端遺構完掘状況 (北から)



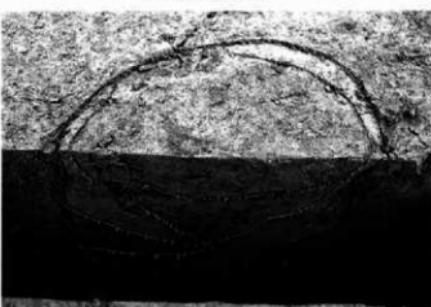
SB4～6周辺遺構完掘状況 (西から)



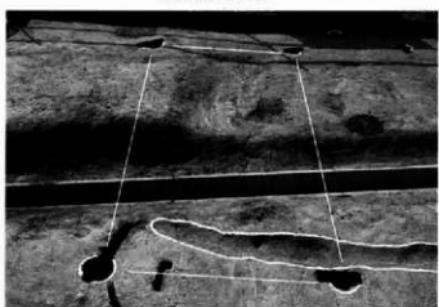
遺構掘削風景 (井戸)



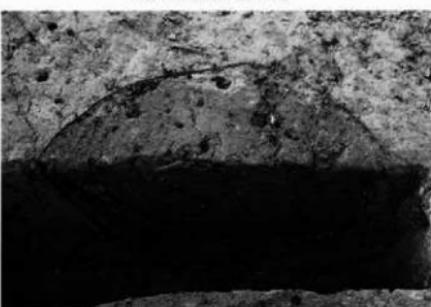
SB1 完掘 (北から)



SB1・P173断面 (南から)



SB2 完掘 (北から)



SB2・P146断面 (東から)



SB3 完掘 (西から)



SB3・P188 断面 (北から)



SB4・P27 断面 (東から)



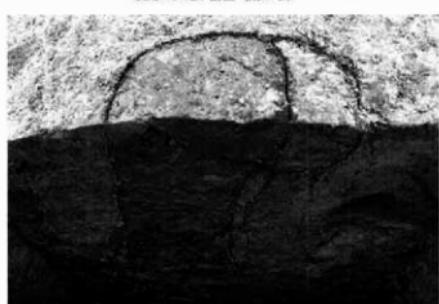
SB4・P27 完掘 (東から)



SB5・P121 断面 (南から)



SB5・P121 完掘 (南から)



SB6・P125 断面 (南から)



SB6・P125 完掘 (南から)



SE3 断面（西から）



SE3 完掘（西から）



SE4 完掘（西から）



SE26 完掘（西から）



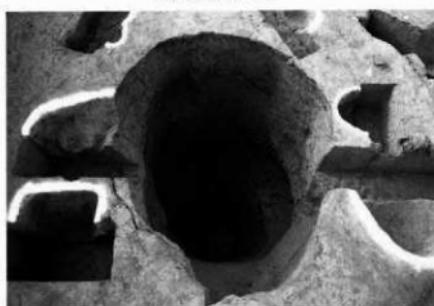
SE41 断面（南から）



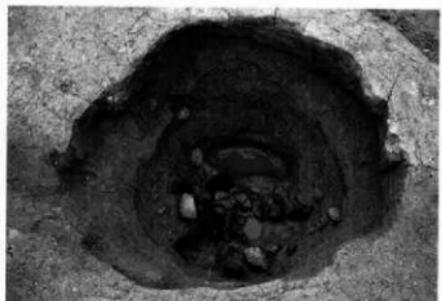
SE41 完掘（南から）



SE66 断面（東から）



SE66 完掘（東から）



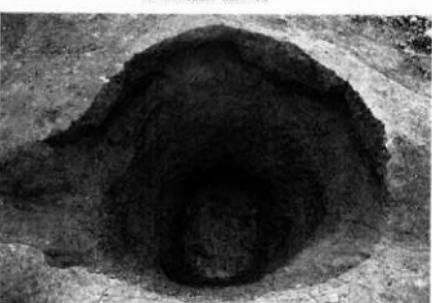
SE102 烧却出土状況（東から）



SE102 完掘（東から）



SE103 烧却出土状況（東から）



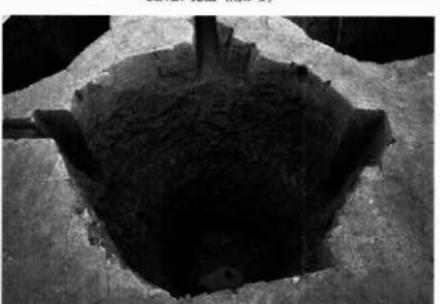
SE103 完掘（東から）



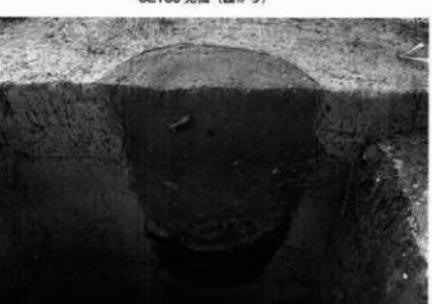
SE127 完掘（南から）



SE130 完掘（西から）



SE141 完掘（西から）



SE142 完掘（北から）



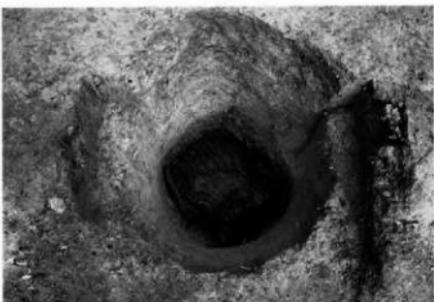
SE142 実掘（北から）



SE145 実掘（南から）



SE149 大型櫻出土状況（南から）



SE149 木製曰出土状況（南から）



SE149 実掘（南から）



SE161 実掘（東から）



SE162 断面（西から）



SE167 断面（南から）



SE167 完掘（南から）



SE168 完掘（東から）



SE169 完掘（南から）



SE189 断面（西から）



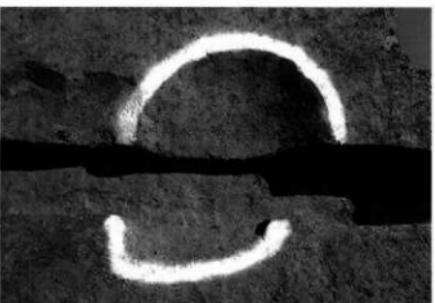
SE189 完掘（西から）



SE191 断面（北から）



SE191 墓出土状況断面（西から）



SK13 完掘（西から）



SK128 完掘 (南から)



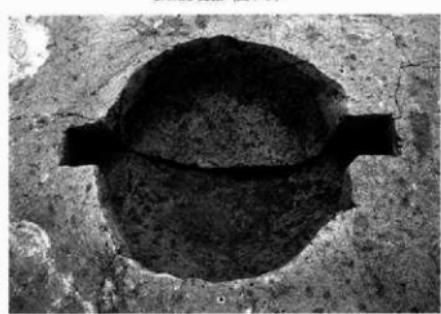
SK129 断面 (西から)



SK129 完掘 (西から)



SK132 断面 (北から)



SK132 完掘 (北から)



SK133 断面 (南から)



SK133 完掘 (南から)



SK134 完掘 (東から)



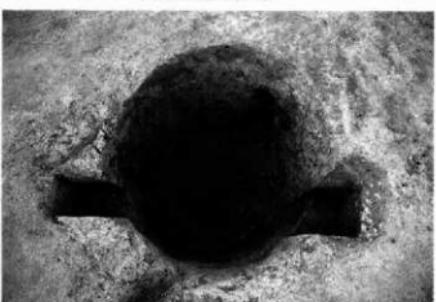
SK144 完掘（東から）



SK180 完掘（南から）



SK210 断面（南から）



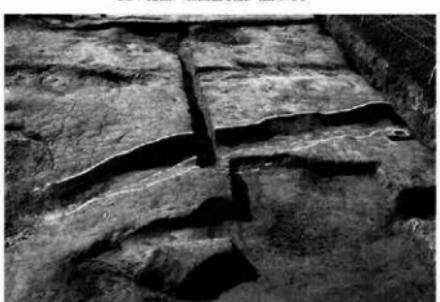
SK210 完掘（南から）



SD1 完掘・SD31 完掘（西から）



SD1 断面（西から）



SD1・SD31 完掘（北から）



SD2 完掘（南から）



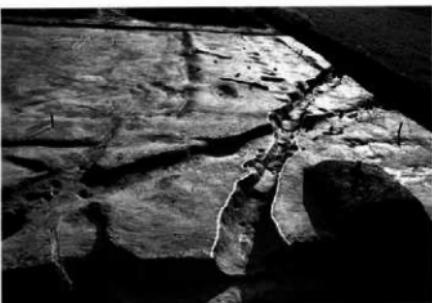
SD148 完掘 (北から)



SS179 完掘 (西から)



SD178 断面 (西から)



SD204 完掘 (北から)



SD204 断面 (北から)



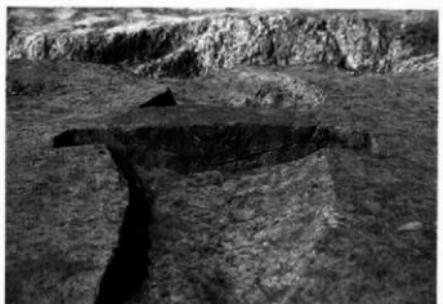
SD205 完掘 (東から)



SD205 断面 (東から)



SD208・SD209 完掘 (東から)



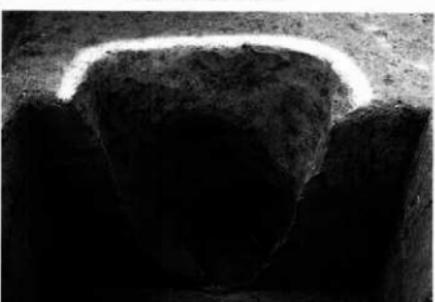
SD208 剖面 (東から)



SD212 棟出状況 (北から)



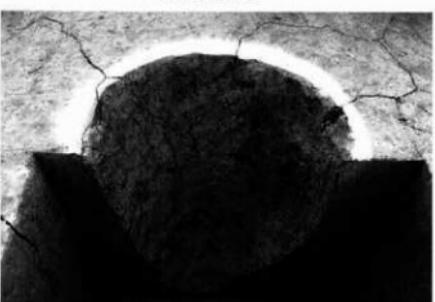
P45 完掘 (北から)



P51 完掘 (東から)



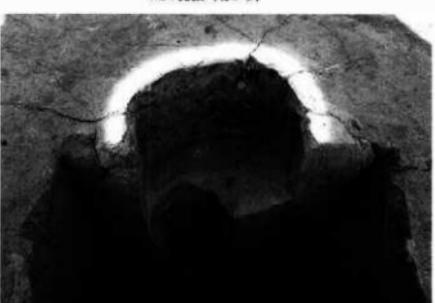
P53 完掘 (北から)



P84 完掘 (北から)



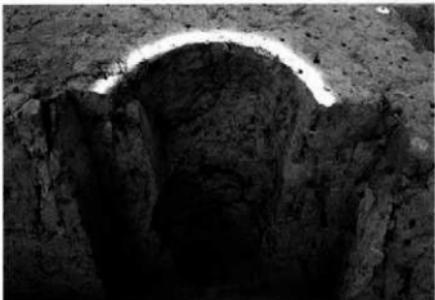
P85 完掘 (北から)



P87 完掘 (南から)



P158 実掘 (東から)



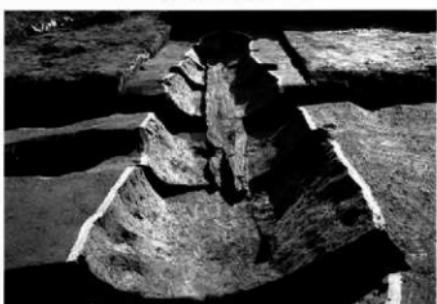
P174 実掘 (東から)



SX203 加工木出土状況 (北から)



SX203 断面 (南から)



SX203 加工木棟出状況 (北から)



SX207 実掘 (東から)



SX207 断面 (北から)



近世墓 木棺棟出状況 (北から)



近世墓断面（北から）



近世墓 漆器碗出土状況（東から）



近世墓 銭寶検出状況（北から）



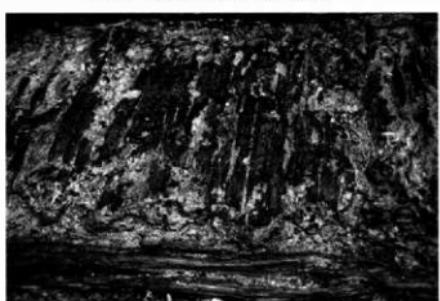
近世墓 底面出土銭寶（北から）



近世墓 木棺構造（横木と側板・西から）



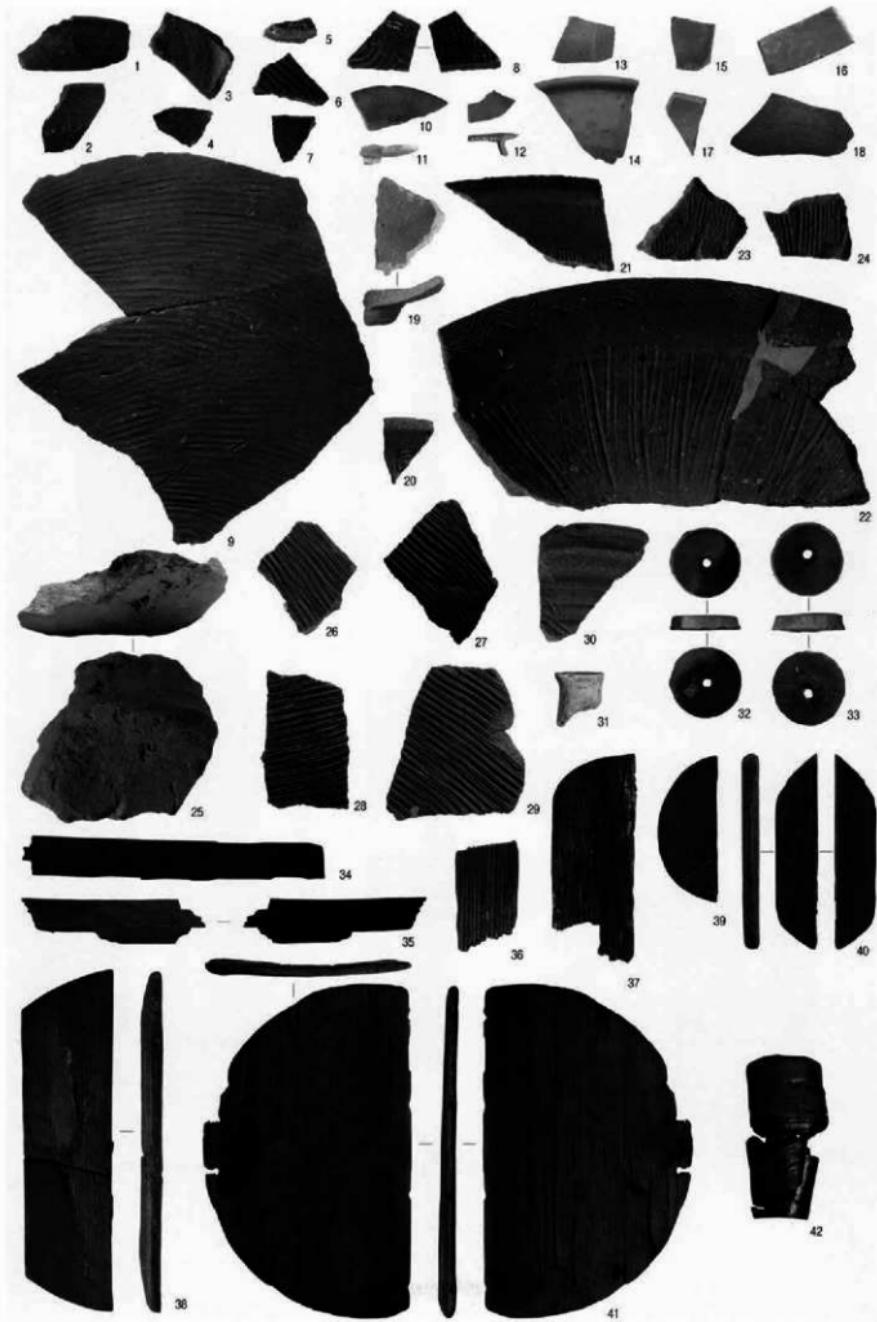
近世墓 木棺構造（側板と横木・西から）



近世墓 底面の樹皮状織維質（北から）



近世墓 実掘（北から）





43



50



44



46



51



56.



54.



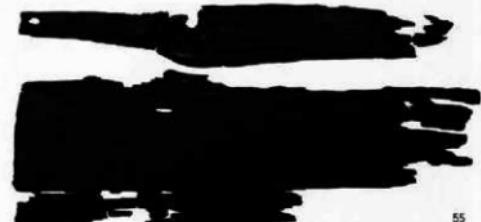
53.



52.



52.



55.



52.



55.



52.



55.



52.



55.



52.



55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.



55.



52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

52.

55.

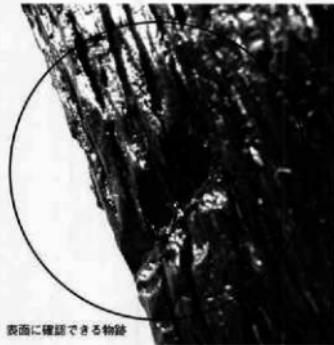
52.



1



59



表面に確認できる物跡

報告書抄録

| ふりがな | ちゅうぶきたいせき・さくらばやしいせき | | | | | | |
|--------------|--|--|---|--|--|---|-------------------------------|
| 書名 | 中部北遺跡・桜林遺跡Ⅱ | | | | | | |
| 調書名 | 日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 | | | | | | |
| 巻次 | X XV | | | | | | |
| シリーズ名 | 新潟県埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第179集 | | | | | | |
| 編著者名 | 石川智記(財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団) 繼 実 松井 智 山本友紀(株式会社 吉田建設) | | | | | | |
| 編集機関 | 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団・株式会社 吉田建設 | | | | | | |
| 所在地 | 〒956-0845 新潟県新潟市秋葉区金津93番地1 TEL 0250(25)3981 | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2008(平成20)年3月31日 | | | | | | |
| ふりがな 所収遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 15583 | 北緯 224 | 東経 38度 09分 23秒 | 調査期間 139度 26分 18秒 20060403～ 20060824 | 調査面積 m ² 3,620m ² | 調査原因 日本海沿岸東 北自動車道 建設 |
| 中部北遺跡 | 新潟県岩船郡都心林 村大字牛屋字中部 1048ほか | | | | | | |
| 桜林遺跡 | 新潟県岩船郡都心林 町大字金屋字桜林 1372ほか | 15582 | 77 | 38度 08分 04秒 | 139度 25分 13秒 20060825～ 20061116 | 3,263m ² | 日本海沿岸東 北自動車道 建設 |
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | | | 主な遺物 | 特記事項 |
| 中部北遺跡 | 集落跡 | 縄文時代中期前業 ～後期中業 平安時代(9世紀後半 ～10世紀) | 縄文時代：土坑7基・炭化 物集中1か所・ピット4基・ 自然流路2 平安時代：杭1本 | 縄文時代：土器(大木7b式・ 大木9～10式・三十編場式・ 南三十編場式・加曾利1式 など)・石器(石鏃・不定形石 器・石錐・敲石・打製石斧・ その他の石器・接合資料) 平安時代：須恵器・土師器・ 木製品(杭) | 自然流路北岸の微高 地から出土した石器 から、当時の骨瓢・ 漁労などをを行う食糧 採集の場であったものと 考えられる。 | | |
| 桜林遺跡 | 集落跡 | 中世・近世前期(14 世紀後半～16世紀 末・17世紀後半) 奈良・平安時代(8世 紀代) 弥生時代前期頃 | 中世：掘立柱建物6棟・井 戸20基・土坑8基・溝8条・ ピット142基 近世：木棺墓1基 奈良・平安時代：土坑2基 ・溝2条 弥生時代前期：性格不明 遺構1基 時期不明：性格不明遺構1 基 | 中世：舶載陶磁器(青磁・白 磁)・国産陶磁器(珠洲焼・瀬 戸・備前)・土師器(皿) ・木製品(漆白・陽物形木製品 ・ザル・曲物・継縫用樹皮・ 板状・棒状木製品・杭など)・ 石製品(砥石・敲磨石)・金銀 製品(刀子) 近世：木棺・鉢貨(六道錢)・ 漆器椀 奈良・平安時代：須恵器(杯・ 壺)・土師器(壺) 弥生時代前期：加工木材 古墳時代中期：高杯 時期不明：円形土製品 | 遺跡の主体は中世後 期の農村と考えられ る。 近世の墓は単独で存 在する事から、当地 の有力者の墓と考え られる。 弥生時代前期の加工 木材は、当時の木材 加工技術を伝える貴 重な資料である。 | | |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第179集
日本海沿岸東北自動車道関係発掘調査報告書 X X V
中部北遺跡・桜林遺跡 II

平成20年3月30日印刷
平成20年3月31日発行

発行

新潟県教育委員会
〒950-8570 新潟市中央区新光町4番地1
電話 025 (285) 5511

財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市秋葉区金津93番地1
電話 0250 (25) 3981
FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 株式会社 第一印刷所
〒950-8724 新潟市中央区和合町2-4-18
電話 025 (285) 7161

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第179集『中部北遺跡 桜林遺跡II』正誤表

2021年11月追加

| 頁 | 位置 | 誤 | 正 |
|------|---------|-----|-----|
| 図版37 | 下から 3段目 | 6 6 | 7 1 |
| 図版37 | 下から 2段目 | 6 5 | 7 0 |
| 図版37 | 下から 2段目 | 6 7 | 7 2 |
| 図版37 | 下から 2段目 | 6 8 | 7 3 |
| 図版37 | 下から 1段目 | 6 9 | 6 5 |
| 図版37 | 下から 1段目 | 7 0 | 7 4 |
| 図版38 | 上から 1段目 | 7 1 | 7 5 |
| 図版38 | 上から 1段目 | 7 3 | 6 7 |
| 図版38 | 上から 2段目 | 7 2 | 6 6 |
| 図版38 | 上から 2段目 | 7 4 | 6 8 |
| 図版38 | 上から 3段目 | 7 5 | 6 9 |
| 図版38 | 下から 1段目 | 9 0 | 9 3 |
| 図版39 | 上から 1段目 | 8 9 | 9 2 |
| 図版39 | 上から 1段目 | 9 1 | 9 4 |
| 図版39 | 上から 1段目 | 9 3 | 9 0 |
| 図版39 | 上から 1段目 | 9 7 | 9 8 |
| 図版39 | 上から 2段目 | 9 2 | 8 9 |
| 図版39 | 上から 2段目 | 9 4 | 9 1 |
| 図版39 | 上から 3段目 | 9 8 | 9 7 |